新潟県埋蔵文化財調査報告書　第246集

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅶ

剣 野 沢 遺 跡

２０１４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道８号

柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅶ

剣野沢遺跡

２０１４

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道８号は新潟市を起点とし、日本海沿いに北陸地方を縦断し、京都市に至る総距離 561.2km の主要幹線道路です。新潟県と北陸地方及び京阪神地方を結ぶとともに、新潟県の産業・経済・文化の交流発展に大きな役割を果たしています。

しかし、現在の柏崎市域では、市街化の進展及び交通需要の増加に伴い、慢性的な交通混雑を引き起こしているのが現状です。柏崎バイパス建設事業は、このような問題を解決し、広域地域との交流の促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画されました。

本書は、この柏崎バイパスの建設に先立ち、2008 年度に実施した剣野沢遺跡の発掘調査報告書です。

剣野沢遺跡は縄文時代の大遺跡である剣野Ｂ遺跡の西側谷部に立地しています。この剣野Ｂ遺跡に関連する縄文時代の遺構、遺物を検出しました。剣野Ｂ遺跡の人たちの活動範囲と捉えることができます。また、古代・中世にも山裾に集落が営まれました。特に中世では、祭祀具や塔婆等もあり、一般集落とは異なった性格の遺跡の可能性もあります。

発掘調査で得られた資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されるものと期待しています。

最後に、この発掘調査で多大なご協力とご理解をいただいた柏崎市教育委員会、柏崎市都市整備部八号バイパス事業室、並びに地元の方々、また発掘調査から本書の作成まで、格別なご配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局長岡国道事務所に対して厚くお礼申し上げます。

2014 年 3 月

新潟県教育委員会

教育長　高　井　盛　雄

例　　言

1　本書は、新潟県柏崎市剣野字鎌田 998-1 ほかに所在する剣野沢遺跡の発掘調査記録である。

2　発掘調査は一般国道 8 号柏崎バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したものである。

3　発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に依頼した。

4　埋文事業団は、掘削作業等を株式会社イビソクに委託して発掘調査を実施した。

5　整理作業及び報告書作成に係る作業は、2012 年度に埋文事業団が県教委から受託し、これにあたった。

6　出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記は、調査年（西暦下 2 桁）＋剣野沢遺跡の略記号「ケンノ」とし、出土地点や層位等を併記した。

7　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。

8　本書に掲載した遺物番号は、上層・下層ごとに種別に係りなく通し番号とし、本文及び挿図・遺物観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。

9　引用・参考文献は、著者及び発行年（西暦）を本文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。本文中の敬称は略した。

10　調査成果の一部は、広報紙「埋文にいがた」、「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」、遺跡発掘調査報告会等で公表しているが、本書の記述をもって正式な報告とする。

11　遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、有限会社不二出版に委託して、デジタルトレースと DTP ソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。また、石器の実測及びトレースは株式会社アルカに委託した。

12　本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団　専門調査員）、實川順一・長澤展生（株式会社イビソク　調査員）、鹿又喜隆（株式会社加速器分析研究所）、斉藤崇人・高橋敦・馬場健司（パリノ・サーヴェイ株式会社）があたり、編集は石川が担当した。執筆分担は以下のとおりである。なお、石川以外の執筆者は 2009 年 3 月末に脱稿したが、その後の整理の進展に伴い、石川が一部加筆・修正を行った。

第Ⅰ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章 1、第Ⅵ章 1、2A、B1）・2）、3、第Ⅴ章 1A、B1）・7）、2、第Ⅶ章……石川

第Ⅱ章 1……實川

第Ⅱ章 2……長澤

第Ⅳ章 2B3）～ 7）、第Ⅴ章 1B2）～ 6）……實川、長澤

第Ⅵ章 1……鹿又喜隆

第Ⅵ章 2……斉藤崇人・高橋敦・馬場健司

13　遺物執筆にあたり、縄文土器（中期）については新潟市寺﨑裕助嘱託員、縄文土器（後・晩期）については当財団渡邊裕之課長代理（現新潟県教育庁文化行政課）、中世陶器については胎内市教育委員会水澤幸一氏から指導をいただいた。また、木簡の解読については、新潟県立歴史博物館の前島敏主任研究員にお願いし、報告書に反映させた。

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼を申し上げる。（敬称略　五十音順）

金子拓男　　小泉信吾　　斎藤　準　　関　雅之

柏崎市教育委員会　　剣野川ホタル保存会　　剣野町町内会

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調 査 経 過 …… 2

A　試掘確認調査 …… 2

B　本発掘調査 …… 3

3　調 査 体 制 …… 5

A　試掘確認調査 …… 5

B　本発掘調査 …… 5

4　整理作業と整理体制 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7

1　地理的環境 …… 7

2　歴史的環境 …… 10

A　鵜川流域の遺跡 …… 10

B　文献からみた古代・中世の柏崎 …… 12

第Ⅲ章　調査の概要 …… 14

1　グリッドの設定 …… 14

2　基 本 層 序 …… 14

第Ⅳ章　上層の調査 …… 16

1　記述の方法と遺構の分類 …… 16

A　基 本 方 針 …… 16

B　遺構番号の表記方法 …… 16

C　遺構の形態分類 …… 16

2　上層の遺構 …… 17

A　概　　要 …… 17

B　遺 構 各 説 …… 17

3　上層の遺物 …… 25

A　概　　観 …… 25

B　土器・陶磁器 …… 28

C　土　製　品 …… 35

D　木器・木製品 …… 35

E　石　製　品 …… 37

F　金属製品・銭貨 …… 37

第Ⅴ章　下層の調査 …… 39
1　下層の遺構 …… 39
A　概　　要 …… 39
B　遺構各説 …… 39
2　下層の遺物 …… 44
A　概　　観 …… 44
B　縄文土器 …… 44
C　土　製　品 …… 50
D　石器・石製品 …… 51
E　木　製　品 …… 54
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 55
1　放射性炭素年代測定 …… 55
2　花粉分析・植物珪酸体分析 …… 58
第Ⅶ章　ま　と　め …… 68
《引用・参考文献》…… 70
《観　察　表》…… 73

挿図目次

第 1 図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置 …… 1
第 2 図　剣野沢遺跡の調査範囲とトレンチの位置 … 2
第 3 図　柏崎周辺の地形 …… 8
第 4 図　剣野沢遺跡周辺の地形 …… 9
第 5 図　周辺の遺跡分布図 …… 11
第 6 図　剣野沢遺跡の基本層序 …… 15
第 7 図　遺構の形態分類図 …… 16
第 8 図　掘立柱建物の模式図と柱間計測値 …… 18
第 9 図　須恵器の重量分布図 …… 26
第 10 図　土師器の重量分布図 …… 26
第 11 図　珠洲焼の重量分布図 …… 27
第 12 図　土師質土器の重量分布図 …… 27
第 13 図　土師質土器の分類 …… 29
第 14 図　木取り及び木材一般の部分名称 …… 35
第 15 図　木取りの分類 …… 35
第 16 図　鉄滓関連の重量分布図 …… 38
第 17 図　縄文土器の重量分布図 …… 45
第 18 図　剣野沢遺跡の花粉化石群集の層位分布図 … 61
第 19 図　剣野沢遺跡の植物珪酸体含量 …… 62
第 20 図　剣野沢遺跡で検出された花粉化石 …… 65
第 21 図　剣野沢遺跡で検出された植物珪酸体 …… 66
第 22 図　中世の集落配置 …… 68

表　目　次

第 1 表　周辺の遺跡一覧表 …… 11
第 2 表　遺構の形態分類表 …… 16
第 3 表　石器・石製品類一覧表 …… 51
第 4 表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 … 56
第 5 表　剣野沢遺跡の花粉分析結果一覧 …… 60
第 6 表　剣野沢遺跡の植物珪酸体含量 …… 62

図 版 目 次

【図面図版】
図版 1　上層遺構全体図
図版 2　上層遺構分割図（1）
図版 3　上層遺構分割図（2）
図版 4　上層遺構分割図（3）
図版 5　上層遺構分割図（4）
図版 6　上層遺構分割図（5）
図版 7　上層遺構個別図（1）
図版 8　上層遺構個別図（2）
図版 9　上層遺構個別図（3）
図版 10　上層遺構個別図（4）
図版 11　上層遺構個別図（5）
図版 12　上層遺構個別図（6）
図版 13　上層遺構個別図（7）
図版 14　上層遺構個別図（8）
図版 15　上層遺構個別図（9）
図版 16　剣野 B 遺跡と剣野沢遺跡全体図
図版 17　下層遺構全体図
図版 18　下層遺構分割図（1）
図版 19　下層遺構分割図（2）
図版 20　下層遺構分割図（3）
図版 21　下層遺構分割図（4）
図版 22　下層遺構分割図（5）
図版 23　下層遺構分割図（6）
図版 24　下層遺構個別図（1）
図版 25　下層遺構個別図（2）
図版 26　下層遺構個別図（3）
図版 27　下層遺構個別図（4）
図版 28　25 ラインベルト断面図（1）
図版 29　25 ラインベルト断面図（2）
図版 30　上層の土器（1）
図版 31　上層の土器（2）
図版 32　上層の土器（3）
図版 33　上層の土器（4）
図版 34　上層の土器（5）
図版 35　上層の木製品（1）
図版 36　上層の木製品（2）・土製品・石製品
図版 37　上層の金属製品・銭貨
図版 38　下層の土器（1）
図版 39　下層の土器（2）
図版 40　下層の土器（3）
図版 41　下層の土器（4）
図版 42　下層の土器（5）
図版 43　下層の土器（6）
図版 44　下層の土器（7）
図版 45　下層の土器（8）
図版 46　下層の土器（9）
図版 47　下層の石器・石製品（1）
図版 48　下層の石器・石製品（2）
図版 49　下層の石器・石製品（3）
図版 50　下層の石器・石製品（4）
図版 51　下層の石器・石製品（5）
図版 52　下層の土製品・木製品
【写真図版】
図版 53　遺跡遠景
図版 54　上層完掘
図版 55　上層完掘・SD1
図版 56　下層完掘・SB7
図版 57　下層埋設土器・土坑
図版 58　下層完掘・遺物出土状況
図版 59　遺跡土層断面
図版 60　遺跡土層断面
図版 61　遺跡付近空中写真
図版 62　上層遺構（1）
図版 63　上層遺構（2）
図版 64　上層遺構（3）
図版 65　上層遺構（4）
図版 66　上層遺構（5）
図版 67　上層遺構（6）
図版 68　下層遺構（1）
図版 69　下層遺構（2）
図版 70　下層遺構（3）
図版 71　下層遺構（4）
図版 72　下層遺構（5）
図版 73　上層の土器（1）
図版 74　上層の土器（2）
図版 75　上層の土器（3）
図版 76　上層の木製品（1）
図版 77　上層の木製品（2）・土製品・石製品・金属製品・銭貨
図版 78　下層の土器（1）
図版 79　下層の土器（2）
図版 80　下層の土器（3）
図版 81　下層の土器（4）
図版 82　下層の土器（5）
図版 83　下層の土器（6）
図版 84　下層の石器・石製品（1）
図版 85　下層の石器・石製品（2）
図版 86　下層の石器・石製品（3）
図版 87　下層の土製品・木製品

第Ⅰ章　序　　説

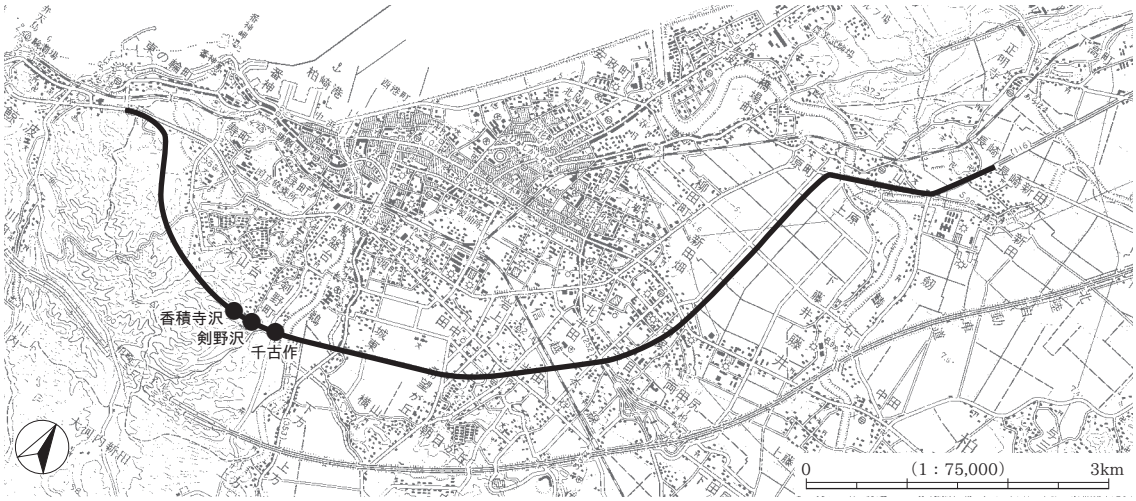
1　調査に至る経緯

「一般国道８号　柏崎バイパス」は、柏崎市長崎を起点に、同市鯨波に至る延長 11.0km の幹線道路である。交通混雑の解消、広域地域との交流の促進、都市交通の円滑化、都市機能の活性化などを目的に計画され、1987（昭和 62）年度に事業化された。1991（平成３）年度から用地買収、1993（平成５）年度から工事着手して整備が進められている。これを受けて、建設省（現国土交通省、以下、「国交省」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、事業用地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

柏崎市元城町字宮川（横山川）～剣野字香積寺沢間の分布調査は、県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が 2000（平成 12）年 12 月に実施した。調査によって、道路法線上には周知遺跡である剣野Ｂ遺跡・剣野沢遺跡・香積寺沢遺跡が存在することが判明した。また、沖積地の広範囲で平安時代～中世の遺物が採集でき、埋没した自然堤防上に遺跡が存在する可能性があることから、ほぼ全域について試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

剣野沢遺跡に係る確認調査は、埋文事業団が 2004（平成 16）年８月に実施した。住宅団地の造成から取り残されていた範囲のほぼ全域から、縄文時代を主体とした遺物が多量に出土し、遺構も検出された。そのため、この範囲の 4,500m^2 について本発掘調査が必要と判断した。

2008（平成 20）年度の本発掘調査か所は、ほかの公共事業との調整もあり、最終的に 2008 年３月に決定した。工事内容による取り扱い協議の結果、千古作遺跡 740m^2、香積寺沢遺跡 630m^2、剣野沢遺跡 3,030m^2 が本発掘調査対象となった。国交省から調査を受託した県教委は、埋文事業団に実施を依頼した。埋文事業団は千古作遺跡の調査終了後、香積寺沢遺跡、剣野沢遺跡の順に着手することとし、４月 28 日から調査を開始した。なお剣野沢遺跡の本格的な調査は、７月 11 日から開始した。



第１図　柏崎バイパスの法線と遺跡の位置
（国土地理院「柏崎」「岡野町」1：50,000 を縮小）

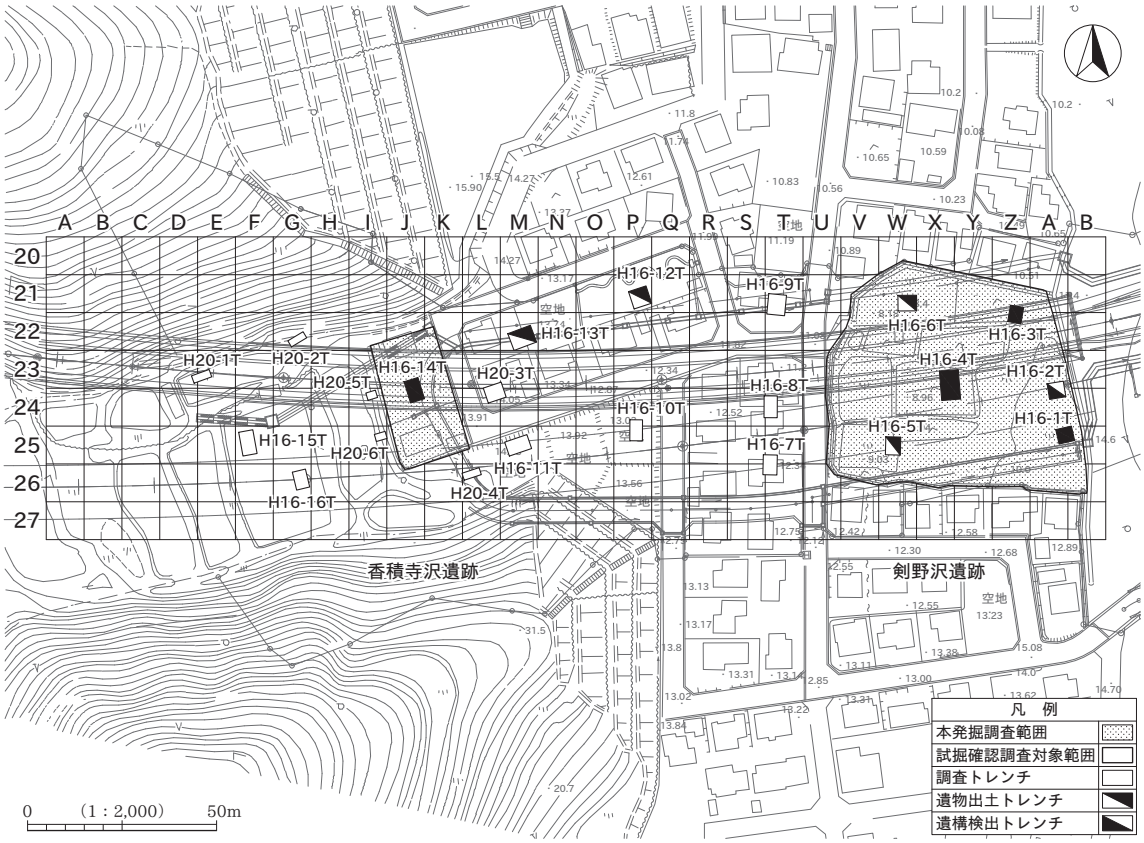
2 調 査 経 過

A 試掘確認調査

周知の剣野沢遺跡及び香積寺沢遺跡に係る試掘確認調査は、2004（平成16）年8月16日～24日に実施した。

柏崎バイパス用地約13,000m^{2}を対象に、16か所のトレンチ（以下、「T」と略す場合もあり）を設定し、約335m^{2}を調査した。調査対象地の現況は、住宅団地（盛土造成範囲）と荒廃地（旧、畑・ため池）である。東側は住宅団地の造成から取り残されており、周囲から一段低くなっている。

剣野沢遺跡の本発掘調査（以下、本調査）範囲に係るトレンチは1～6Tであり、上記の住宅団地より一段低い部分を中心とする。2Tを除く各トレンチで縄文土器が、1Tで須恵器・珠洲焼、1・3・4Tで土師器が出土した。他に木製品が数点出土している。縄文土器は5Tが最も多く、トチ・クルミ残骸等も含まれていた。このトレンチは本調査時の自然流路（SR1）部分に該当する。遺構は1Tでピット3基、2Tで土坑1基・ピット1基、3Tでピット1基、4Tで土坑1基・ピット1基を検出した。1Tのピットはほぼ等間隔で南北に連なることから、掘立柱建物の柱穴が想定された。遺構の半割の結果、4Tの土坑から縄文土器が出土したのみで、その他の遺構は時代が不明であった。また、1・2Tと3・4Tの遺構確認面が異なっていることが指摘されている。5・6Tの西側、7～9Tでは遺構・遺物は検出できなかった。住宅地の盛土が厚く、十分な調査が出来なかった可能性はあるが、その7～9Tを結ぶラインより東側の4,500m^{2}が、剣野沢遺跡の本調査が必要であると判断した。



第2図 剣野沢遺跡の調査範囲とトレンチの位置

B　本発掘調査

剣野沢遺跡及び香積寺沢遺跡周辺は、住宅地であり、またホタルの生息域でもあったことから、事前準備・調査は慎重に行う必要があった。剣野沢遺跡は、西側の香積寺沢遺跡方向から流れる水路の下流部に位置する。水量は多く、水路は調査区内西側のコンクリート擁壁に沿って流れ、調査区北東端でさらに北側に流れ抜けていく。調査時にはこの用水等に濁水が流れ込まないように十分留意する必要があった。剣野沢遺跡は暗渠施工の予定であったことから、調査区内の排水はすべて暗渠に入れることにした。調査区北東側に暗渠の集水部を設け、ポンプで汲み上げ、さらに沈澱槽（ノッチタンク）を経由してから水路に排水するように考えた。5月25日に地元の剣野川ホタル保存会事務局に、香積寺沢遺跡も含めた調査行程・排水対策等を説明し、了解を得た。また6月24日には、国交省と協力して、道路法線内の水路からホタル幼虫の餌となるカワニナの移動を行った。

前述の確認調査の結果では、剣野沢遺跡の本調査対象範囲は4,500m^{2}であったが、2008（平成20）年度に依頼を受けた範囲（以下、掘削対象範囲）は3,030m^{2}である。これは本調査対象範囲の西端に、現在使用中の道路が存在すること、3m以上の住宅地の盛土があること等から、当初は宅地造成されていない一段低い部分に限定されたためである。この2008年度調査の結果によって、西端1,470m^{2}の取扱いを判断することにした。次に実際にどの範囲まで掘削が可能かの検討に入った。掘削対象範囲は周囲から3m以上低い部分で、東側は丘陵、西側は盛土された道路、南側と北側は盛土された住宅地に囲まれている。0.4t級の重機が乗り入れるルートが無かったことから、掘削対象範囲ではあったが、南西端に進入用スロープの造成を計画し、国交省の了解も得た。スロープの造成土は、香積寺沢遺跡上の盛土及び表土掘削土をパックに詰めて運搬して利用し、土を被せたのちに鉄板を上に敷設した。次に南～西側の擁壁からは、重機が通れる幅の約3m以上離して掘削するようにした。これは前年度（2007年度）の7月に発生した中越沖地震による亀裂が、擁壁の随所に観察できたためである。本調査時に不測の事態が生じた場合には重機で対応できるように考えた。また北側の既存の水路からも十分な距離をとるようにした。本調査が可能な範囲は、最終的に掘削対象範囲よりかなり面積が縮小する結果となった。以上のように2008年度の調査範囲はほぼ確定したが、次に排土処理の問題が生じた。国交省側からは、本調査終了後に排土を利用して埋め戻すように依頼されていた。しかし調査区近隣に十分な排土置場は確保できず、また周辺が住宅地であったことから大型ダンプ等の頻繁な往来は控えざるを得なかった。そこで調査区を東西で二分するようにし、調査区内に排土を仮置きして、片側の調査終了後にその範囲（東側）の埋め戻しを行い、その後残りの範囲（西側）を調査するようにした。ただし、仮置きによって未調査範囲に影響がでないように、盛土高が3mを越えることが予想された場合は、その分を場外へ搬出するようにした。

香積寺沢遺跡の本調査と並行して、剣野沢遺跡の準備を進めた。進入用スロープの造成後、7月11日から24日にかけて暗渠を施工した。暗渠の掘削にあたっては、調査員1名、作業員2名が立ち会い、遺物の出土傾向（範囲や層位等）を把握し、なるべく遺物の回収に努めるようにした。確認調査の報告とも照合した結果、調査区西側には自然流路が存在し、その中にも多くの遺物が含まれていることが判明した。

調査は東側から着手した。重機による表土掘削を7月28日から8月8日にかけて行った。遺物包含層（基本層序のⅡ・Ⅲ層）は厚く堆積する部分もあるため、遺物の出土状態を考慮しながら、可能な限り遺構検出面付近まで慎重に掘削し、作業の効率化を図った。8月4日から作業員を入れ、土層観察用に残したベルト（23ラインベルト・25ラインベルト・Yラインベルト・Aラインベルト）の清掃や、その脇にトレンチを掘

るなどして層序を早めに把握するようにした。その結果、遺構・遺物が上下２層に分かれることが懸念された。人力による包含層の掘削は８月 18 日から開始し、南東側から着手した。９月１日から包含層掘削と並行して遺構検出を開始したが、予想より多くの遺構が南東側に集中していることが判明した。その検出面や出土遺物の状況から、当初想定された縄文時代の遺構ではなく、古代・中世の遺構であることが確実となった。遺構集中区のピットには方向性があることや、隣接する溝（SD1）に遺物が多く含まれること等から、区画溝に囲まれた集落の様相が推定された。包含層掘削・遺構検出と並行して、９月 10 日から遺構掘削を開始した。一方、区画溝の外側は遺物が極端に少なくなる傾向にはあったが、その範囲から木簡・五輪塔形・将棋駒など小型木製品が出土し始めていたことから、その包含層の掘削にも時間を要した。９月 23 日から 10 月４日にかけて土層観察ベルトを除去し、下層の遺構・遺物を把握するためにトレンチ調査も行った。遺構掘削を 10 月６日に終了し、全体の清掃作業にかかり、10 月９日にラジコンヘリによる東側上層の完掘写真を撮影した。

上層の完掘写真の仕上がりをデジタルカメラデータで確認し、翌日の 10 月 10 日から下層（縄文時代）の包含層掘削に着手した。当初は全て人力で掘削する予定であったが、事前のトレンチ調査の結果も踏まえ、部分的に重機による掘削も行った。10 月下旬から遺構検出を開始したが、天候が不順な日が続き、調査は難航した。埋土の色調が明瞭な遺構は少なく、遺構の可能性があるものを検出したらすぐにサブトレンチを入れて真偽を判断するようにした。ただし、遺構の断面や完掘写真は、可能な限り条件が良い時に撮影するように努めた。11 月 25 日に下層の包含層掘削、遺構掘削を終了し、11 月 26 日に高所作業車による東側下層の完掘写真を撮影した。東側の調査が終了したので、翌日の 11 月 27 日から西側に仮置きしていた排土を使い、埋め戻しを開始した。

西側の調査に着手するにあたって、既に時期が 11 月下旬であること、西側の下層には自然流路が存在し、遺物も多く含まれるため調査に手間がかかること、調査費の大幅な増額が見込まれることなどを理由に、西側の調査は来年度以降に見送る案を示したが、理解は得られなかった。これは、上層の遺物が希薄な可能性が高いこと、下層の大半が自然流路であれば、遺構検出・掘削のような手間がかからないことが予想されたためである。そこで西側調査区を 23 ラインベルト、25 ラインベルトで３分割（北から地点 A・B・C）し、以下の作業方針で調査することにした。

※ バックホー２台（①包含層掘削＋排土積込み、②排土受け手）とクローラー１台（運搬）の体制を常時組む。

※ 重機の掘削サイクル毎に調査員１名と作業員３名が遺物を探す。

※ 重機がある程度離れた時点で作業員が遺構検出面を精査する。排土は重機の作業範囲まで人力で順次運搬する。重機の掘削速度に間に合わない場合は、一輪車により届く範囲まで運搬する。

※ 上記同様に、調査区壁面と土層観察ベルトの清掃も済ませていく。

※ 重機はその場に留まり、表土＋中世包含層＋縄文包含層＋河川層の全てを掘り抜いてから移動する。

※ 重機が対象範囲（地点Ａ～Ｃ、上下層毎）の掘削が終わるのとほぼ同時に全体写真（完掘写真）を撮影する。撮影は最終掘削面のみとする。

※ メインベルトは線引き（分層）後、写真撮影し、写真測量とする。土層観察ベルトは隣接地点を掘削する際に同時に掘る。

※ 地形測量も掘削の最終面（地点Ａ～Ｃの下層面）のみ行う。

以上のような作業方針で、東側の埋め戻しが終了した後の、12 月１日から作業に着手した。天候も比較的穏やかであったことから作業は順調に進み、地点Ａ（西側北区）・Ｂ（西側中央区）の掘削を 12 月 19

日までに終了させた。12 月 22 日に地点Ａ・Ｂの完掘撮影を高所作業車により行った。同日、文化行政課の終了確認を受け、残りの地点Ｃ（西側南区）の終了見込みと、依頼された調査面積よりも、縮小した面積で調査終了してもよいかどうか協議した。その結果、未調査区とした範囲は遺構・遺物が極めて希薄なことが予想されること等から、残りの地点Ｃの調査が終了した時点で、剣野沢遺跡全体の調査が終了したものと判断することになった。

12 月 26 日で一旦作業を中断し、1 月 6 日から作業を再開した。地点Ｃの自然流路内は遺物も多く、降雪により作業を休止せざるを得なかった日もあったが、1 月 16 日に掘削作業を終了させた。1 月 19 日に全体の撮影を行い、トレンチで最終確認を行った。その際に、根株と判断していたものが掘立柱建物（SB7）の柱根であることが判明し、その範囲の調査を続行した。それ以外の撮影が終了した範囲は、順次埋め戻し作業を進めた。1 月 20･21 日に SB7 の調査、測量等を行って、調査に関する全ての作業を終了した。1 月 19 日に国交省と埋め戻し、撤収、引き渡しに関する協議を行い、それに従って作業を進めた。1 月 29 日に町内会長等へ挨拶を行い、現地を撤収した。

なお、10 月 18 日に剣野沢遺跡現地事務所で現地説明会を開催し、千古作遺跡・香積寺沢遺跡のスライド説明、遺物展示も行った。近隣の住民を中心に、90 人の参加があった。また職業体験として、7 月 29 日に高校生 3 名、8 月 28 日に中学生 1 名の受け入れを行い、10 月 22 日に中学生 7 名の野外学習に協力している。

3　調　査　体　制

試掘確認調査・本発掘調査は、以下のような期日と体制で行った。

A　試掘確認調査

調査期間	2004（平成 16）年 8 月 16 日～ 24 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　板屋越　麟一）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	黒井　幸一　（事務局長）
管理	長谷川二三夫（総務課長）
庶務	高野　正司　（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信　（調査課長）
調査担当	滝沢　規朗　（調査課班長）
調査職員	片岡　千恵　（調査課嘱託員）

B　本発掘調査

調査期間	2008（平成 20）年 7 月 11 日～ 2009（平成 21）年 1 月 21 日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長　武藤　克己）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村　正昭（事務局長）
管理	斎藤　　栄（総務課長）
庶務	長谷川　靖（総務課班長）
調査総括	藤巻　正信（調査課長）
指導	高橋　保雄（調査課 課長代理）

調 査 担 当	石川　智紀（調査課班長）
支 援 組 織	株式会社イビソク
現場代理人	小林　史尚（文化財計測本部　監理課主任）
調　査　員	實川順一、長澤展生（埋文調査部　遺跡調査課）
整理補助員	今成京子、江尻昭子、貝瀬あゆみ、片山幸恵、可児多津子、河合聖子、川内京子、桑原淳子 久保美由紀、高橋智子、冨沢由美子、広瀬みどり、三島淳子

4　整理作業と整理体制

2008（平成 20）年度の整理作業は、現地作業と併行しながら進めた。遺物の水洗の一部、土壌水洗などを現地事務所で行い、遺物の水洗・注記、接合・復元（一括出土遺物中心）、実測・写真撮影、台帳類の整備、図面類の修正、原稿執筆などを株式会社イビソク南魚沼整理所（南魚沼市）及び埋文事業団（新潟市秋葉区）で実施した。2008 年度の整理体制は本発掘調査の体制と同じで、整理期間は 2008 年 8 月から 2009 年 3 月 31 日までである。支援組織の調査員が中心となって作業を実施したが、現地調査終了後の整理期間が短く、作業途中で終了するものが多かった。原稿（遺構の一部）・遺構台帳・遺物実測図（土器・土製品の一部、木製品）など、この時点までの成果が 3 月に埋文事業団に納品された。

2012（平成 24）年度は、同じく柏崎バイパス関係で調査した山崎遺跡の整理作業が一段落した、6 月下旬から開始した。土器類の遺物量が多く、複数の時代の遺物が混在した状況であったことから、まず時代と種別毎に分類し、小グリッド単位で重量を計測することにした。作業スペースの関係もあり、区切りの良い段階で、接合を行った。その接合をある程度終えた後に、次の地点の分類→計量→接合を繰り返し、8 月下旬に終了した。9 月は上旬に石器・石製品の分類・計量を行い、一部の石器は 9 月下旬までに計測も行った。土器類の復元は､9 月中旬から下旬に並行して行った。10 月～ 11 月上旬に上層土器類の実測･拓本、11 月中旬～ 12 月に下層土器の実測･拓本を行った。1 月は上層木製品や下層土器などのトレース、2 月上旬は遺物撮影を行い、主要な作業が終了した。また、作業時間を考慮し、上層土器類のトレースは有限会社不二出版に、石器・石製品の実測・トレース・撮影を株式会社アルカに委託した。

図版作成・編集全般にかかる作業は、有限会社不二出版に委託し、整理作業当初から順次、入稿・校正を進めた。原稿執筆（支援組織調査員分の加除・訂正含む）や観察表作成に係る作業は、随時行い、2013 年 1 月から 3 月にかけて集中的に実施した。

2012（平成 24）**年度**

整 理 期 間	2012（平成 24）年 4 月 1 日～ 2013（平成 25）年 3 月 29 日
整 理 主 体	新潟県教育委員会（教育長　高井　盛雄）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総　　括	木村　正昭（事務局長）
管　　理	熊倉　宏二（総務課長）
庶　　務	伊藤　　忍（総務課班長）
整 理 総 括	北村　　亮（調査課長）
整 理 指 導	春日　真実（調査課課長代理）
整 理 担 当	石川　智紀（調査課専門調査員）
嘱　託　員	間　栄子、小熊紀子、室塚真弓

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　地 理 的 環 境

柏崎平野の地勢　柏崎平野は、主要河川である鵜川と鯖石川及びその支流の別山川によって形成された臨海沖積平野である。その南と東西の三方は「刈羽三山」を頂点とする山地や東頸城丘陵によって囲まれている。「刈羽三山」とは米山（標高 992.6m）、黒姫山（標高 889.5m）、八石山（標高 518m）を指し、米山・黒姫山山頂付近は大起伏山地に地形区分され、頸城方面との分水嶺をなす。こうした山地・丘陵の縁辺には、沖積地や一部日本海に接して中・高位段丘面が局地的な広がりを見せる。加えて、日本海に接する沿岸部には荒浜砂丘が発達し、その後背には湿地性の沖積地が展開する［鈴木ほか 1988・1989］。

こうした柏崎平野周辺の地形的特徴は、平野を北流する鵜川・鯖石川によって西部・中央部・東部に三分される。東部は鯖石川以東の地域に相当し、丘陵や沖積地・砂丘が発達している。刈羽・三島丘陵などの丘陵地帯と別山川・長鳥川流域の沖積地、さらには日本海岸沿の砂丘が広く展開し、その軸はいずれも北北東－南南西方向を示している。こうした地形的特徴は新第三系以降の地質構造を反映したもので、褶曲構造の向斜・背斜方向と一致している［鈴木ほか 1988・1989、大野・徳間ほか 1990］。

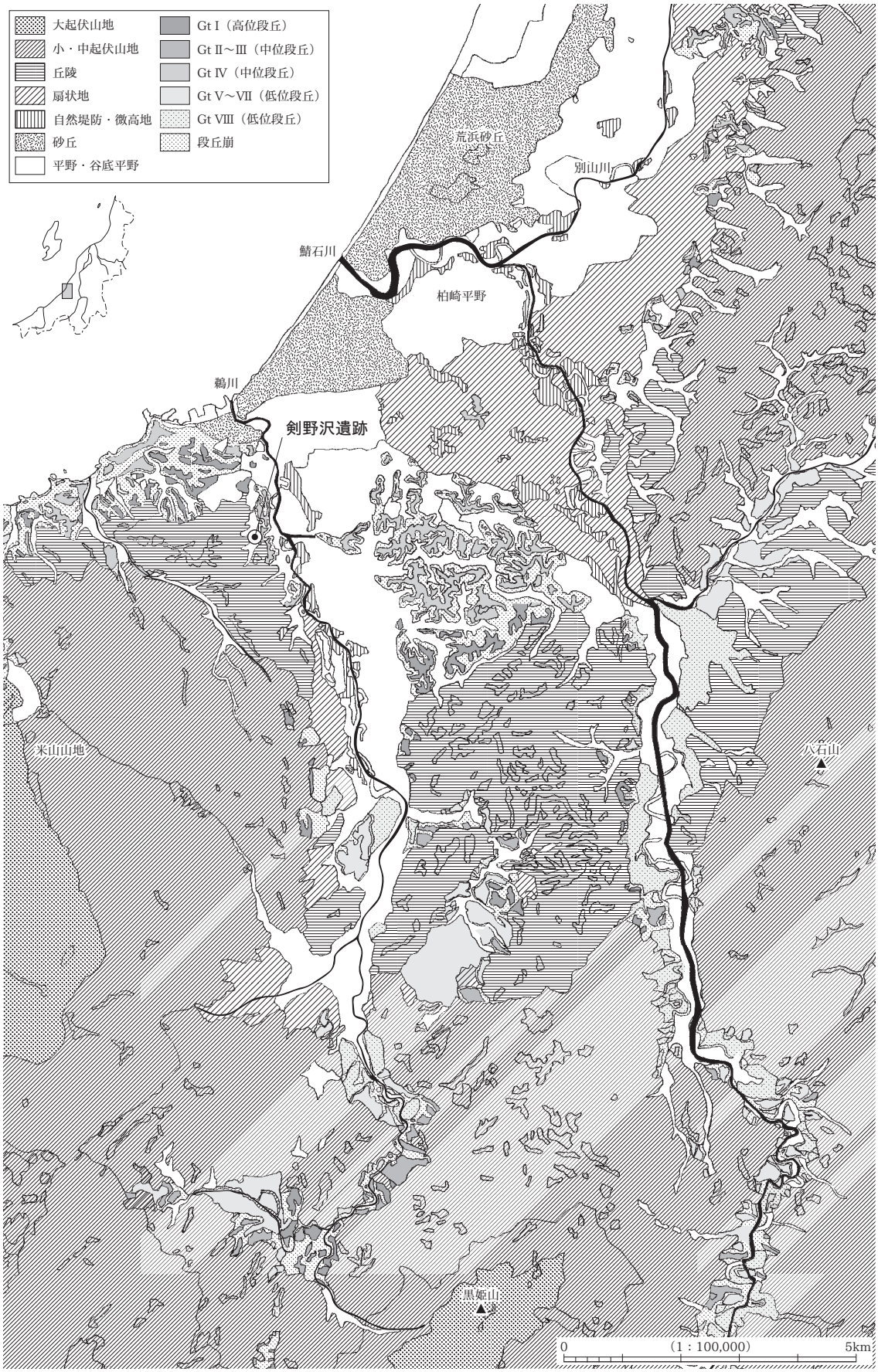
中央部は鵜川・鯖石川流域に沿って黒姫山地や丘陵が南北方向に展開し、その縁辺では中位段丘地帯の発達が顕著である。中位段丘面は著しく樹枝状に開析され鵜川・鯖石川が生成した沖積地に接している。中央部以西では地形の軸が東部に比べて南北方向にずれているが、それは新第三系以降の地質構造の褶曲区の違いに由来するものと推測されている［大野・徳間ほか 1990］。

西部は鵜川左岸地帯一帯を指し、米山から続く山地・丘陵が発達している。当地域では、米山山地が海岸に達して断崖をなし、その東側では狭小な中・高位段丘面を形成している。砂丘や沖積地の形成に乏しい地域であり、広範囲に発達した沖積地や砂丘が展開する東部や中央部とは対照的な様相を示している。

鵜川流域の地形と遺跡の位置　剣野沢遺跡が立地する鵜川流域は、上述のような米山山地や丘陵が発達した柏崎平野西部にある。鵜川流域左岸に相当する米山丘陵では、小規模な開析が進行し、南北方向の狭隘な樹枝谷が深く入り込んでいる。一方、右岸は中・高位段丘（安田丘陵）が展開するとともに、左岸とは対照的に強い湿地性を示す沖積地が広範な広がりをみせている。現在ではわずかな湖沼を残すのみとなっているが、「鏡ヶ沖」なる湖沼の存在が伝承されている区域である。

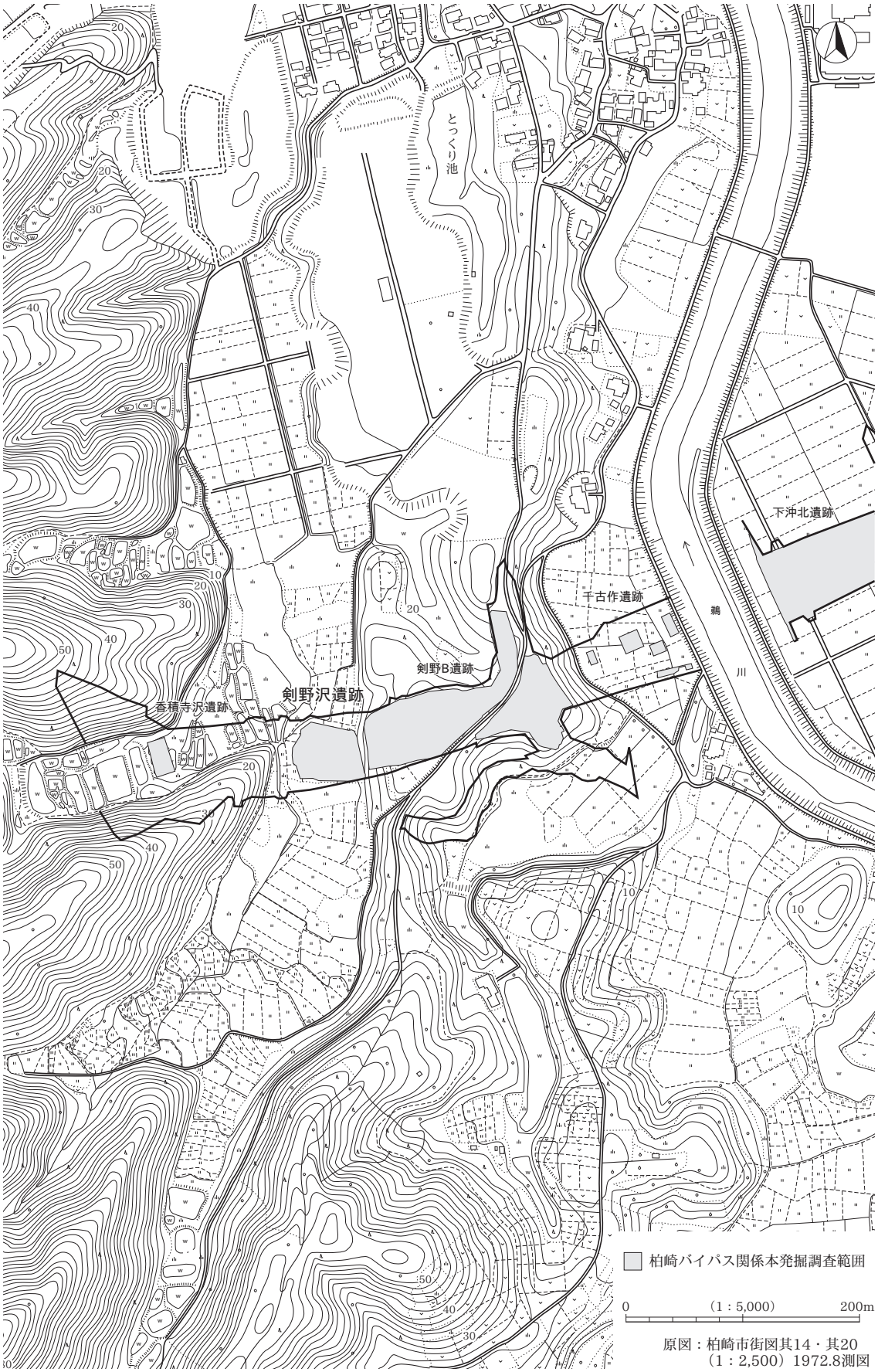
鵜川は流域面積 108.7km^2、流路全長 24.6km の 2 級河川で、柏崎市南部の尾神岳に源を発する。その下流では蛇行を繰り返し、小規模な自然堤防を発達させている。かつてはより複雑な蛇行が見られ、大雨の都度氾濫する水害の歴史を繰り返してきた。その下流域に立地する下沖北遺跡の周辺などでは、旧流路の残痕が地形図から観察できる［品田 1995b、山本・高橋ほか 2003］。このように鵜川流域の氾濫原では、自然堤防などの微高地が古代・中世の遺跡が立地する適地となっている。

剣野沢遺跡はこの鵜川下流域の左岸、米山丘陵と中位段丘（以下、剣野丘陵）に挟まれた、南北に開析された標高 8.2 ～ 10.0m 前後の（沢内）沖積地に立地する。遺跡の東側に隣接する剣野丘陵上には、柏崎市指定遺跡の剣野山縄文遺跡群（剣野 B 遺跡など）が展開し、西側の東西に開析する小規模な谷間には、香積寺沢遺跡［石川ほか 2011］が存在する。



［鈴木郁夫ほか1988・1989］を基に作成

第３図　柏崎周辺の地形



第４図　剣野沢遺跡周辺の地形

2 歴 史 的 環 境

A 鵜川流域の遺跡

縄文時代　鵜川流域を中心とした柏崎平野南部では、既に前期後半以降を主体とする多数の遺跡が周知化されている。縄文時代草創期･早期の遺跡は、現段階では極めて少なく、その様相は明らかでないが、大原遺跡（46）で草創期と考えられる丸鑿形打製石斧が採取されている［宇佐美 1987］。

前期の遺跡には、剣野 A 遺跡（8）、大宮遺跡（35）、屁振坂遺跡（38）、辻の内遺跡（45）などがあり、特に前期後半以降の遺跡形成が明瞭である。大宮遺跡［中野 1998］は該期の中核的集落と目される。

中期は柏崎平野においても遺跡数が増加する時期であり、本県の縄文土器型式の標識遺跡となった剣野 E 遺跡（3）、剣野 B 遺跡（9）がある。ほかに藤橋東遺跡群（41）の京ヶ峰遺跡や、屁振坂遺跡（38）、大沢遺跡（34）、雨池遺跡（37）、辻の内遺跡（45）などが分布している。また鯖石川流域となるが、かつて中期前半の標識遺跡とされた十三仏塚遺跡（70）も近隣に存在する。

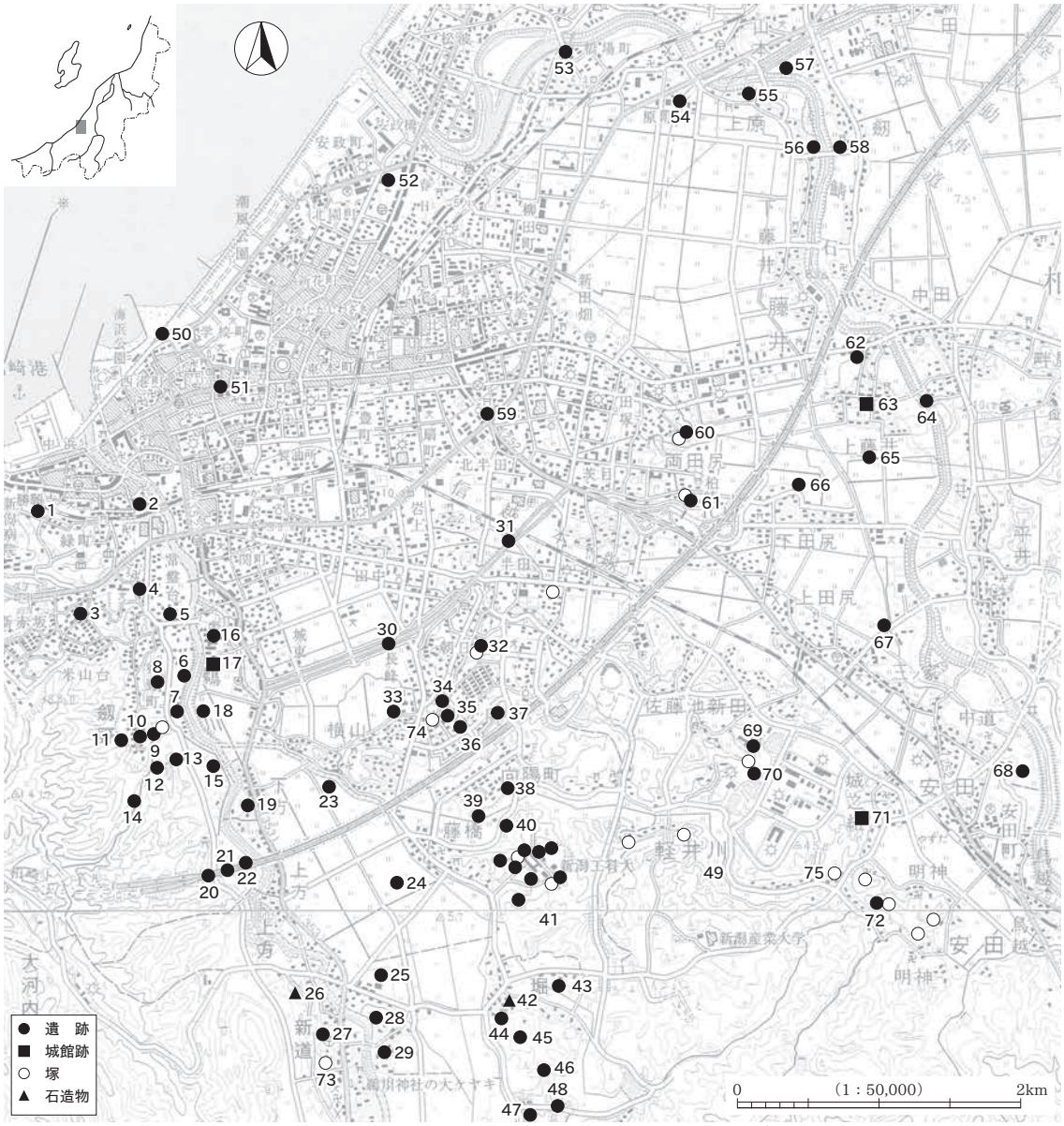
このうち剣野 B 遺跡は、近年の発掘調査によって中期前葉集落の存在が明らかとなり、広場を中心として竪穴住居や柱穴群などが環状に検出されている［品田ほか 2011］。これに対して竪穴住居が検出されず、主に平地式住居で構成される大沢遺跡（34）、屁振坂遺跡（38）、雨池遺跡（37）などの集落遺跡も存在する。こうした当地域での中期前葉を中心とする集落の様相は、検出遺構とその構成や、土器捨て場の形成等の集落構造によって積極的に類型化が試みられている［品田 1996］。

後・晩期の遺跡は、剣野 C 遺跡（12）、剣野 B 遺跡（9）、剣野沢遺跡（10）などがある。前述した中期前葉の中核的集落である剣野 B 遺跡では、後期後葉以降再び環状集落が形成される［品田ほか 2011］。また、周辺の十三本塚北遺跡（69）でも後期前葉の環状集落の存在が明らかにされている［品田・平吹 2001］。鵜川流域では以上の集落のほかに生業関連の遺跡も分布する。藤橋東遺跡群（41）の呑作 A 遺跡［品田・伊藤 1997a］、千古塚遺跡（48）［品田 1990a］などがそれに該当し、陥穴状遺構が多数検出されている。これらの事例は、当地域が集落だけでなく狩猟の領域としても利用されていたことを示すものである。

こうした鵜川流域を中心とした縄文時代の遺跡立地は、その大部分は鵜川や鯖石川流域の中位段丘や丘陵上の平坦面に分布するが、その一方で剣野沢遺跡（後期後葉）のように沖積地上の遺跡も存在している［中野 1995］。また、鵜川上流の高畑遺跡（後期中葉）の立地は自然堤防の可能性も指摘されるなど［品田 1990a］、少なくとも後期中葉以降に沖積地への展開が認められるようになる。

弥生・古墳時代　鵜川下流域では弥生時代～古墳時代の遺跡は少なく、今後の調査事例の増加が待たれる。弥生時代の遺跡には、剣野 A 遺跡（8）、箕輪遺跡（30）、鶴巻田遺跡（22）などがあり、箕輪遺跡では中期後半の遺構・遺物が検出されている［高橋ほか 2002］。ほかは後期の遺物が採取あるいは少量出土しているにとどまる。柏崎平野東部では、中期後半を主体とする下谷地遺跡［高橋ほか 1979］や小丸山遺跡［品田ほか 1985］、後期の西岩野遺跡［品田 1987］などが知られている。これら柏崎平野東部での遺跡の立地傾向は、西岩野遺跡などのように台地上に立地する遺跡もあるが、下谷地遺跡などのように沖積地への遺跡形成が明瞭となっていく。鵜川流域でも剣野 A 遺跡が台地上に存在する以外は沖積地上に分布しており、柏崎平野東部に見られる立地傾向と同様の様相を示している。

古墳時代では、三島神社遺跡（5）や柏崎農業高等学校校庭遺跡（16）が分布するが詳細は明らかでない。柏崎平野東部では、吉井遺跡群の礼坊遺跡［品田 1990b］、行塚遺跡［品田 1985］などの集落遺跡の調査事例があるが、これらは鵜川流域の遺跡と同様に大部分は沖積地上に立地している。



第５図　周辺の遺跡分布図　　［国土地理院「柏崎」「岡野町」2008］

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	赤沢	縄文	20	西田	縄文・中世	38	屁振坂	縄文（前・中期）	57	角田	古墳・中世
2	大久保東	中世	21	桐山	縄文・古代・中世	39	藤橋向山	古代	58	剣下川原	古墳・古代
3	剣野Ｅ	縄文（中期）	22	鶴巻田	縄文・弥生～古墳・平安・中世	40	藤橋	縄文	59	雀森	古墳
4	剣野Ｆ	縄文				41	藤橋東遺跡群	縄文・古代（製鉄関連）・中世	60	田塚山	縄文･弥生･中世（仏堂）
5	三島神社	古墳・古代	23	茅原	古代・中世						
6	渋柿	縄文・古代	24	沢田	古代	42	堀の五輪塔	中世	61	小児石	中世（中世墓地）
7	千古作	中世	25	前掛り	平安・中世	43	堂の前	古代・中世	62	田中久保川原	中世
8	剣野Ａ	縄文・弥生	26	風牧山の五輪塔	中世	44	原	縄文	63	藤井城跡	古代・中世
9	剣野Ｂ	縄文（中期・後期）	27	風牧山	古代・中世	45	辻の内	縄文	64	関野	古墳・平安・中世
10	剣野沢	縄文・古代・中世	28	剣殿	古代	46	大原	縄文	65	前田	中世
11	香積寺沢	縄文・中世	29	小寺島	中世	47	南下御堂尻	中世	66	不退寺	古代・中世
12	剣野Ｃ	縄文（晩期）	30	箕輪	弥生（中期）・平安・中世	48	千古塚	縄文・中世	67	大新田	中世
13	剣野Ｄ	縄文				49	軽井川南遺跡群	古代（製鉄関連）	68	中道	古代・中世
14	剣野水上	製鉄関連	31	小峯	古代	50	裏浜	縄文・弥生	69	十三本塚北	縄文（後期）
15	下沖	古代	32	半田一ッ塚	縄文	51	柏崎町	中・近世	70	十三仏塚	縄文（中期）
16	柏崎農業高等学校校庭	古墳・古代	33	京田	古代	52	桜木町	古代	71	安田城跡	中世
			34	大沢Ａ	縄文（中期）・平安	53	開運橋	縄文・弥生・古代	72	上軽井川	縄文・弥生
17	琵琶島城	中世	35	大宮	縄文（前期）・古代	54	東原町	中世	73	三諦寺の経塚	中世
18	下沖北	平安・中世	36	大沢Ｂ	古代（製鉄関連）	55	上原	古代・中世	74	庚申塚の経塚	中世
19	嶋屋敷	中世	37	雨池・雨池古窯	縄文・平安	56	境川原	中世	75	軽井川の経塚	中世

第１表　周辺の遺跡一覧表

古　　代　古墳時代とは対照的に遺跡数が増加し、9 世紀代を中心とする平安時代の遺跡が数多く存在している。発掘調査も、下沖北遺跡（18）、鶴巻田遺跡（22）、前掛り遺跡（25）、箕輪遺跡（30）などで実施され、該期集落の様相が明らかにされつつある。このうち箕輪遺跡では、これまで柏崎平野では少数であった奈良時代の遺物が出土し、それとともに「駅家村」の記述がある木簡、木製鐙などが伴出し、延喜式の記載に見える「三嶋駅」が周辺に存在する可能性が濃厚となった［岡田 2000］。

また、鵜川右岸の丘陵地帯では、雨池古窯［品田・中野ほか 2000］、藤橋東遺跡群［品田 1995a］、軽井川南遺跡群［品田・平吹ほか 2010］などが調査され、須恵器の窯跡や大規模な製鉄関連遺跡が展開していることが明らかとなった。鵜川左岸の丘陵地帯にも剣野 B 遺跡（9）や剣野水上遺跡（14）などの製鉄関連遺物が採取される遺跡が知られ、鶴巻田遺跡（22）でも炉内滓が多数出土している［藤巻 1988］。

こうした古代の遺跡の立地傾向は、集落遺跡の箕輪遺跡、前掛り遺跡［品田・伊藤 1997b］などのように多数は自然堤防上や丘陵裾部の沖積地に立地し、雨池古窯や軽井川南遺跡群などの須恵器窯や製鉄関連遺跡は丘陵斜面地に局地的に分布する傾向にある［品田 1995b］。

中　　世　中世の遺跡は、剣野沢遺跡（10）、下沖北遺跡（18）、鶴巻田遺跡（22）などがあり、これらはいずれも 13 世紀～ 14 世紀を中心とするものである。このうち下沖北遺跡では方形区画内に掘立柱建物や井戸が集中する該期集落の様相が明らかにされ、道路状遺構や水田跡も検出されている［山本・高橋ほか 2003、山崎ほか 2005］。鶴巻田遺跡でも井戸や貯蔵穴が検出された［藤巻 1988］。

鵜川流域ではこうした集落遺跡の調査のほかに、千古塚遺跡（48）などの墳墓の調査事例がある。同遺跡では仮称「方形基壇墓」の検出があり、該期の墓域が想定されている［品田 1990a］。こうした中世の墓域の事例は、鯖石川流域の小児石遺跡（61）にもある［品田 1991b］。また隣接の田塚山遺跡群（60）では、墳墓や 13 世紀代と推測される仏堂が検出されている［品田・中野ほか 1996］。

15 世紀以降の遺跡は、上記の集落遺跡で遺物などが散見されるほか、15 世紀後半～ 16 世紀の琵琶島城（17）［中野 2003］や柏崎町遺跡（51）［品田・伊藤ほか 2001］の調査事例がある。このうち、中世荘園の比角荘域にある柏崎町遺跡では、遺跡の所在する東本町が 15 世紀には既に開発が及び、17 世紀を画期として市街地の原型が形成されていく過程が明らかにされている。

こうした鵜川流域を中心とした中世の遺跡立地は、13 世紀～ 14 世紀を主体とする集落遺跡が丘陵裾部や自然堤防などの沖積地に分布し、千古塚遺跡などの墳墓が中位段丘などの台地上に立地する傾向が認められている［品田 1995b］。以上のほかに丘陵上には三締寺や庚申塚の経塚（73･74）などの塚が分布し、このうち三締寺経塚にはその奥書に建仁 3 年（1203）の年号が認められる［金子 1987］。

B　文献からみた古代・中世の柏崎

1）古　　代

古代の鵜川流域　剣野沢遺跡が所在する柏崎平野一帯は、奈良・平安時代を通じて越後国に属していた。越後国は、当初、北陸道の出羽までを含む広大な越国に一括されていたが、7 世紀末に三分割されて成立する。その後、越後国は 702（大宝 2）年の越中国 4 郡（頸城・古志・魚沼・蒲原の 4 郡）編入［米沢 1980］、712（和銅 5）年の出羽国の分置を経て、その国域が完成する。越後国には 927（延長 5）年に成立した延喜式によって頸城、古志、三嶋、魚沼など 7 郡の存在が知られ、柏崎平野一帯は三嶋郡の領域であった可能性が高い。三嶋郡は、古志郡から 9 世紀に分置された可能性が指摘されており［米沢 1976・1980］、9 世紀以前では当該地域は古志郡に属していたことが推測される。また、10 世紀前葉に

成立した『倭名類聚抄』には、三島郡に三嶋、高家、多岐の 3 郷が記載され、その所在は三嶋郷が鵜川下流域、高家郷が長鳥川流域と鯖石川中流域、多岐郷が別山川上・中流域にそれぞれ比定されている［金子 1990］。したがって、古代の剣野沢遺跡周辺は少なくとも 10 世紀前葉には三嶋郷の郷域にあったことが推測される。

三島駅と式内社　鵜川下流域には現在、三嶋神社や鵜川神社が存在している。三嶋・鵜川神社は延喜式神名帳に記載された三嶋郡内の式内社であり、両社はその論社である［金子 1990］。また当地域は延喜式が記す北陸道の「三嶋駅」の所在地と目されているが、前述した箕輪遺跡の「駅家村」木簡などによってその周辺が有力候補地となった［相沢・小林 2000、中 2003］。加えて、当地域を通過する北陸道の道筋をめぐっては既に内陸をとる説［新沢 1970、足利 1975 など］があったが、その可能性が高くなった。

2）中　　世

中世荘園の成立　11 世紀後半から 12 世紀にかけて和名抄郷が再編され、各地に荘園や郷・保を単位とする国衙領が成立した。柏崎平野一帯では、鵜河荘、佐橋荘、比角荘などの荘園や、原田保、赤田保などの国衙領の存在が知られている。これらの荘園・国衙領の所在は、現状では鵜河荘などの荘園を柏崎平野南部の鵜川・鯖石川流域に、原田保などの国衙領を主に北部の別山川流域に比定するのが定説化している。このうち剣野沢遺跡が存在する鵜川流域は、鵜河荘の荘域と推測される。

鵜河荘は、『吾妻鏡』の 1186（文治 2）年の『三箇国庄々未進注文』に佐橋荘、比角荘などとともに記され、11 世紀後半から 12 世紀の院政期の成立が想定されている［荻野 1983］。具体的な荘域は根拠となる文献に乏しいが、「鵜河荘安田条上方」（『上杉朝定寄進状』、1341（暦応 4）年）、「鵜川荘内半田村」（『室町幕府奉行人連署奉書』、1501（文亀元）年）のほか、「宇川御庄新堂」（『妙法蓮華経奥書』1203（建仁 3）年）、「鵜河庄内上条今泉村」（『十一面観音胎内墨書銘』、1358（延文 3）年）、「鵜河荘藤井」（『岩井神社鰐口銘』、1442（嘉吉 2）年）などによって、鵜川流域（新道、上条など）のみならず、鯖石川中下流域の左岸地帯（安田、藤井、半田など）までを含むものと推測されている［村山 1990］。

鵜河荘の支配　鵜河荘は、鎌倉時代初期に前述の『三箇国庄々未進注文』によって、本家を前斎院（鳥羽上皇の女頌子内親王）、領家を前治部卿（藤原光隆）とする前斎院領であったとされる［荻野 1983］。南北朝時代には、上杉定朝が丹波国の安国寺（光福寺）に鵜河荘安田条上方を寄進し（『上杉朝定寄進状』、1341（暦応 4）年）、安田条が安国寺領となったことが明らかにされている。しかしながら、既に近隣の佐橋荘南条の地頭職を安堵していた毛利氏は安国寺領であった同条に進出し、長期にわたる争論の結果、ついに鵜河荘安田条の地頭職を獲得し（『室町将軍足利義満下文』、1380（康暦 2）年）、同地を本拠とする毛利安田氏として勢力を振るう［山田 1987、村山 1990］。

こうした、鵜河荘への安田氏の勢力拡大が進められる一方、南北朝時代の 14 世紀に越後国守護上杉氏とともに入部した宇佐美氏が、鵜川下流域の琵琶嶋を本拠とした。さらに室町時代の 15 世紀頃には越後国守護上杉一門の上杉清方が入部し、鵜川中流域の上条を本拠として上条氏を称した［山田 1987］。このように鵜河荘域は少なくとも南北朝時代以降、琵琶嶋の宇佐美氏、上条の上条上杉氏、安田の毛利安田氏らが本拠を構え柏崎平野の中核的な領域を形成した。

戦国時代には、上述の鵜河荘の宇佐美、上条、安田氏も戦乱に巻き込まれ、1564（永禄 7）年に宇佐美定満が失脚すると、琵琶島には琵琶嶋善次郎が入った。1584（天正 12）年の御館の乱の終息後には、桐沢具繁が琵琶嶋と毛利北条氏の遺領（佐橋荘北条）をその所領としている［村山 1990］。

第Ⅲ章　調 査 の 概 要

1　グリッドの設定

剣野沢遺跡の東側に隣接する丘陵上には、柏崎市教育委員会が平成 13 ～ 16 年度に本発掘調査を実施した剣野 B 遺跡（縄文時代主体）が立地している。縄文時代における関連性が想定できたため、同一のグリッドを使用することを考え、南北方向の呼称（算用数字）を一致させた。東西方向の呼称（アルファベット）で、A 列を越える西側の範囲は、新たに西に向かって「Z・Y・X……」と呼称した（第 2 図、図版 16）。

剣野 B 遺跡のグリッド方向と区割りは、国家座標軸（日本測地系）と一致させていた。グリッドは大小 2 種あり、大グリッドは 10m 四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを 2m 四方に 25 等分したものである。大グリッドの名称は、北西隅の杭を基点として東西方向を算用数字、南北方向をアルファベットとし、両者の組合せで表示した。小グリッドは 1 ～ 25 の算用数字で表し、北西隅を 1、南東隅を 25 とし、「24Y13」のように大グリッド表示の後につけて呼称した。また必要に応じて、小グリッドを 1m 四方に細分した。ア～エのカタカナで表し、北西隅をア、南東隅をエとし、「24Y13 イ」のように呼称した。剣野沢遺跡の 24Y 杭の座標値（世界測地系に変換）は、「X=149520.451、Y=4238.927」を示す。

2　基　本　層　序

剣野沢遺跡は、鵜川左岸の米山丘陵と剣野丘陵に挟まれた、剣野丘陵の西を南北に開析する標高 8.2 ～ 10.0m 前後の沖積地にある。調査区周囲は宅地造成により、当時の景観を臨むことは出来ないが、小規模な河岸段丘が発達していたものと考える。宅地造成前（第 4 図・図版 61）までは水田として利用されており、地形全体は南東から北西方向にかけて緩やかな傾斜を示し、いくつかの段を形成している。

基本土層はⅠ～Ⅶ層に大別した（第 6 図）。同一の地層でも土質･色調に多少の差異があり、さらに細別（a ～ d、上～下）が可能な層もある。調査の進行に伴い細分化したが、最終的には調査区を東西に横断するように観察した、25 ラインベルトの層位を基準とした。各層の詳細は、図版 28・29 で記述する。

Ⅲ層は上層（古代・中世）遺物の包含層で、特に中世の遺物を主体的に包含する。Ⅲa・Ⅲb 層は調査区全域で認められるが、Ⅲc・Ⅲd 層は部分的である。古代の遺物がより下位から出土する傾向は認められたが、明確な対応層はない。Ⅲ層とⅣ層の境で凹凸が著しい部分（特にⅢc 層との境）があり、耕作痕跡の可能性も考えたが、分析では積極的に肯定する結果は得られなかった（第Ⅵ章）。Ⅳ層は下層（縄文時代）の遺物包含層で、前期後葉～晩期後葉までの遺物が含まれる。上面から約 20cm の深さまで遺物が多いので、Ⅳa 層が主体となる。それより下層のⅤ～Ⅶ層は、地山である。

Ⅰ　層：表土層および耕作土層。灰黄褐色粘質土を主体とする。

Ⅱ　層：近世以降の水田耕作土と考える。Ⅱa（上）層、Ⅱa（下）層、Ⅱb 層に細分した。

Ⅲa 層：中世の遺物包含層で、近世の遺物も少量混じる。褐灰色粘質土を主体とする層で、色調の違いでⅢa（上）層、Ⅲa（下）層に細分できる。

Ⅲb 層：古代・中世の遺物包含層。黒褐色粘質土が主体で、色調や含有物の違いにより、Ⅲb（上）層、

Ⅲb（中）層、Ⅲb（下）層に細分したが、地点により緩やかに変化しているので、分層は難しい。

Ⅲc 層 ：古代・中世の遺物包含層。黒褐色粘質土が主体で、腐植物を多く含む。

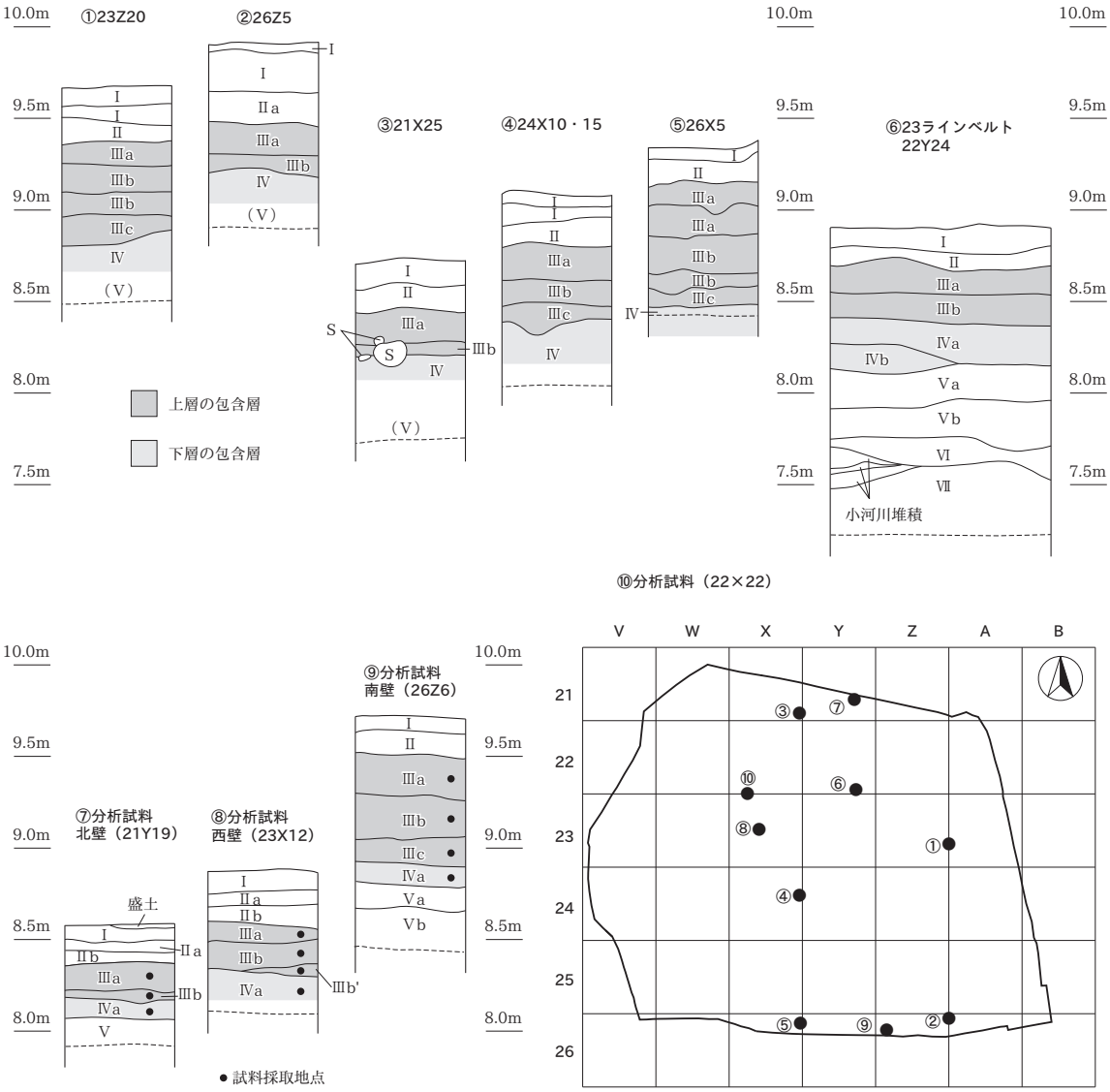
Ⅲd 層 ：褐灰色粘質土が主体で、遺物の出土は少ない。Ⅳ層のブロックを含む。

Ⅳa 層 ：縄文時代の遺物を多く含む包含層で、上面は上層遺構の検出面となる。褐灰色～灰黄褐色粘質土が主体で、丘陵側は粘性が強い。

Ⅳb 層 ：縄文時代の遺物を少量含む包含層。褐色粘質シルト主体で、砂質土を少量含む。丘陵側で黒色が強く、平坦部で色調が薄くなる。

Ⅳc 層 ：自然流路上に堆積する層で、Ⅳa・Ⅳb 層がシルト化した可能性がある。灰黄褐色～にぶい黄褐色を呈する粘質シルトである。

Ⅴ層～Ⅶ層：地山。Ⅴa 層の上面が、下層遺構の検出面となる。にぶい橙色を呈するⅤa 層、灰褐色を呈するⅤb 層に分層できる。Ⅵ層は灰黄褐色～灰色砂質シルトで、河川堆積物の一部と考える。Ⅶ層は黄褐色～にぶい黄褐色の砂礫層で、φ５～18cm 程の中型礫を多量に含む。



第６図　剣野沢遺跡の基本層序

第Ⅳ章　上 層 の 調 査

1　記述の方法と遺構の分類

A　基　本　方　針

遺構の説明は、本文（遺構各説）・観察表・図面図版・写真図版を用いた。全ての遺構について種別・グリッド・出土遺物を記載した表を作成し、主要遺構や掲載遺物出土遺構について、規模等を記載した観察表を作成した。遺構の平面形状及び計測値は、遺構検出面での数値である。特に重要と思われる遺構について、本文・図面図版・写真図版での解説を加えた。写真図版は選択して掲載した。

B　遺構番号の表記方法

剣野沢遺跡の遺構番号（算用数字）は、時代・グリッド・種別に関係なくすべて検出順の通し番号とし、遺構種別の後ろに番号を付した。なお、発掘調査の進行過程で、通し番号に欠番が生じたものもある。ただし、掘立柱建物・柵・杭に関しては、別途に１番から番号を付してある。

遺構種別は略称を用い、掘立柱建物を「SB」、柵を「SA」、井戸を「SE」、土坑を「SK」、溝を「SD」、ピットを「P」、性格不明遺構を「SX」とした。ほかに下層の調査では、埋設土器が伴う遺構について「埋」を用い、自然流路に関しては、別途に「SR1」とした。

平面形態

円　形：	長径が短径の 1.2 倍未満のもの
楕円形：	長径が短径の 1.2 倍以上のもの
方　形：	長軸が短軸の 1.2 倍未満のもの
長方形：	長軸が短軸の 1.2 倍以上のもの
不整形：	凸凹で一定の平面形をもたないもの

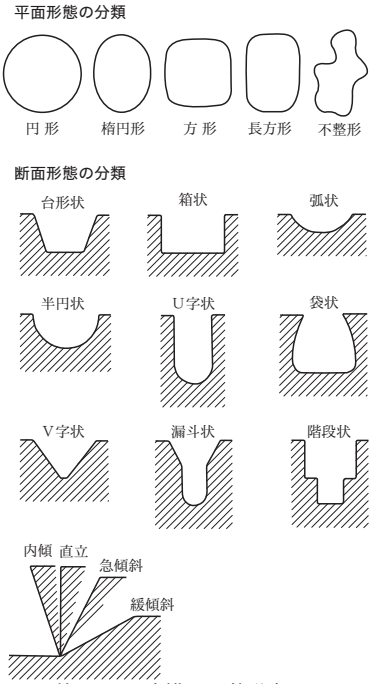
断面形態

台形状：	底部に平坦面をもち、緩やか～急角度に立ち上がるもの
箱　状：	底部に平坦面をもち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
弧　状：	底部に平坦面をもたない皿状で、緩やかに立ち上がるもの
半円状：	底部に平坦面をもたない椀状で、急斜度に立ち上がるもの
U 字状：	確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
袋　状：	確認面の径よりも底部の径が大きく、内傾して立ち上がるもの
V 字状：	点的な底部をもち、急斜度に立ち上がるもの
漏斗状：	下部が U 字状、上部が V 字状の二段構造からなるもの
階段状：	階段状の立ち上がりをもつもの

第２表　遺構の形態分類表

C　遺構の形態分類

遺構の平面及び断面形状の表記は、和泉Ａ遺跡［荒川・加藤ほか 1999］の分類基準（第２表・第７図）に準拠した。平面形の規模は長軸（最大長軸）を計っているが、部分的に極端な張り出しがある場合は、全体の形状を考慮して、残存率が高い位置で計測している。短軸は基本的に長軸と直交する方向の最長部で計測した。本文中で示す深度（深さ）は、遺構検出面の最も高い位置からの最深部を計測した。また観察表には、遺構個別図（断面図作成か所）の深度も併記した。



第７図　遺構の形態分類図

2　上 層 の 遺 構

A　概　　要

古代と中世に属する上層の遺構は、掘立柱建物５棟、柵１列、井戸 15 基、土坑 15 基、溝 14 条、性格不明遺構６基、ピット 307 基（掘立柱建物を構成するものも含む）、杭 105 本を検出した。いずれも基本層序のⅣ層上面で検出したが、土層ベルトの断面観察では、上位から掘り込まれているものもいくつか認められた。掘立柱建物も重複しており、時期差は存在するが、埋土や形態で明確な区別は出来ず、帰属不明なものが多い。ただし、明確に古代と判断できる遺構は無く、大半は中世（鎌倉時代）の遺構と考える。記述は、種別（SB → SA → SE → SK → SD → SX →杭）、遺構番号（小→大）の順で行った。

B　遺　構　各　説

1）掘 立 柱 建 物

24 ～ 26Z・A グリッドを中心に、柱穴と考える多数のピットを検出した。掘立柱建物は５棟図示したが、方位や深さを検討した上で、全て現地で復元したものである。ピットは調査区全体で 305 基検出したが、調査前の暗渠工事などで、欠失したものも多くあったと思われる。整理作業時に規模や埋土などを再精査して図上での復元も試みたが、十分に個々の対応関係を把握することが出来ず、８割以上のピットについては関連が見いだせなかった。

柱間の多い方向を「桁行」（長軸）、少ない方向を「梁間」（短軸）とした。第８図の桁行・梁間の規模は、基本的に数値の大きい面を優先し、床面積はそれを乗じた。またここでは、現代の規模と比較しやすくするため、畳数（1.8 × 0.9=1.62m^2）にも換算して記述する。方位は桁行方向が、北を中心に東西に偏する角度で表した。柱間寸法は復元推定線上で、柱の中心と考える位置同士で測定を行った。なお、平均値±○で数値を示したものは、ここでは一般的な標準偏差ではなく、上限と下限を示している。

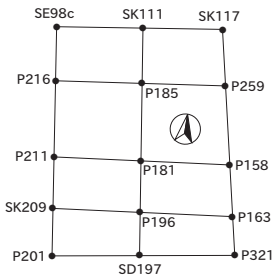
SB1（図版５・７・55）

25･26A グリッドに位置する。桁行４間（西面 6.76m）、梁間２間（南面 5.25m）の総柱建物と推定する。桁行方向 N-10°-W の南北棟の建物で、床面積は 35.49m^2（21.9 畳）である。梁間は北面 4.79m（柱間寸法 2.40 ± 0.08m）、南面 5.25m（柱間寸法 2.63 ± 0.13m）で、やや北面が狭い。桁行の柱間は、北側から２間目が広く、東面 P158 - P259 間で 2.35m、西面 P216 - P211 間で 2.24m を示す。他の桁行の柱間寸法の約 1.5 倍であるが、これは梁間の柱間寸法とほぼ同じ値であることがわかる。この建物のピットの深度は 50cm 以上のものが多く、遺構集中区でもほぼ中央に位置することや、唯一の総柱建物であることなどから、中心的な建物であったと考える。

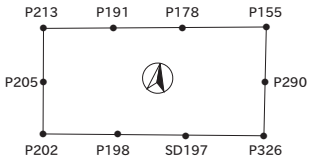
SB2（図版５・７・55）

25・26A グリッドに位置する。調査区の南寄りで検出したので、さらに南側に延びる可能性も残す。現状では桁行３間（6.42m）、梁間２間（3.21m）の建物と推定する。桁行方向 N-80°-E の東西棟の側柱建物で、床面積は 20.61m^2（12.7 畳）である。柱間寸法は、桁行北面が 2.14 ± 0.24m、桁行南面が 2.12 ± 0.18m とほぼ等しく、梁間の柱間寸法 1.6m 前後よりやや広い。SB2 の桁行北面の軸を西側に延長すると、SB5 の桁行北面と一致することから、ほぼ同時期の建物と推定する。SB1 の南面の柱穴と切り合っているが、新旧関係を確認することはできなかった。

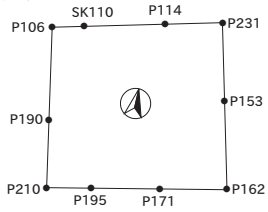
遺構番号	位置	桁行	4間	梁間	2間	床面積	桁行方向		模式図
SB1	25･26A		6.76m		5.25m	35.49㎡	N-10°-W		(図版7)
面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	
北（A-A')	SK117-SK111	2.32	西（D-D')	SE98c-P216	1.64	中（F-F')	P216-P185	2.47	
北（A-A')	SK111-SE98c	2.47	西（D-D')	P216-P211	2.24	中（F-F')	P185-P259	2.43	
東（B-B')	P321-P163	1.17	西（D-D')	P211-SK209	1.50	中（G-G')	P211-P181	2.48	
東（B-B')	P163-P158	1.50	西（D-D')	SK209-P201	1.38	中（G-G')	P181-P158	2.58	
東（B-B')	P158-P259	2.35	中（E-E')	SK111-P185	1.64	中（H-H')	SK209-P196	2.49	
東（B-B')	P259-SK117	1.64	中（E-E')	P185-P181	2.28	中（H-H')	P196-P163	2.67	
南（C-C')	P201-SD197	2.50	中（E-E')	P181-P196	1.50				
南（C-C')	SD197-P321	2.75	中（E-E')	P196-SD197	1.28				



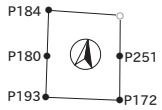
遺構番号	位置	桁行	3間	梁間	2間	床面積	桁行方向		模式図
SB2	25･26A		6.42m		3.21m	20.61㎡	N-80°-E		(図版7)
面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	
北（A-A')	P155-P178	2.38	南（C-C')	P202-P198	2.18				
北（A-A')	P178-P191	1.99	南（C-C')	P198-SD197	1.94				
北（A-A')	P191-P213	2.05	南（C-C')	SD197-P326	2.25				
東（B-B')	P326-P290	1.60	西（D-D')	P213-P205	1.59				
東（B-B')	P290-P155	1.61	西（D-D')	P205-P202	1.51				



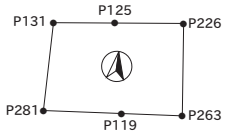
遺構番号	位置	桁行	3間	梁間	2間	床面積	桁行方向		模式図
SB3	25A		5.21m		4.97m	25.89㎡	N-78°-E		(図版8)
面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	
北（A-A')	P231-P114	1.66	南（C-C')	P210-P195	1.32				
北（A-A')	P114-SK110	2.33	南（C-C')	P195-P171	1.94				
北（A-A')	SK110-P106	0.94	南（C-C')	P171-P162	1.95				
東（B-B')	P162-P153	2.68	西（D-D')	P106-P190	2.74				
東（B-B')	P153-P231	2.29	西（D-D')	P190-P210	2.05				



遺構番号	位置	桁行	2間	梁間	1間	床面積	桁行方向		模式図
SB4	25A		2.49m		2.10m	5.23㎡	N-9°-W		(図版8)
面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	
東（A-A')	P172-P251	1.30	西（C-C')	P184-P180	1.32				
南（B-B')	P193-P172	2.10	西（C-C')	P180-P193	1.17				



遺構番号	位置	桁行	2間	梁間	1間	床面積	桁行方向		模式図
SB5	25･26Z･A		4.02m		2.71m	10.89㎡	N-81°-E		(図版8)
面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	面（立面図）	柱間	距離（m）	
北（A-A')	P226-P125	1.89	南（C-C')	P281-P119	2.27				
北（A-A')	P125-P131	1.86	南（C-C')	P119-P263	1.75				
東（B-B')	P263-P226	2.71	西（D-D')	P131-P281	2.60				



第８図　掘立柱建物の模式図と柱間計測値

SB3（図版 5・8・55）

25A グリッドに位置する。桁行 3 間（南面 5.21m、北面 4.93m）、梁間 2 間（東面 4.97m、西面 4.79m）の、ほぼ正方形な建物と推定する。桁行方向 N-78°-E の東西棟の側柱建物で、床面積は 25.89m²（16.0 畳）である。柱間寸法は、桁行・梁間ともに一定していないが、西寄り 1 間がやや狭い構造となる。SB1・2・4 と位置が重複するが、その新旧関係を確認することはできなかった。

SB4（図版 5・8・55）

25A グリッドに位置する。北東隅の柱穴は SE156A と重複し、検出することが出来なかった。現状では桁行 2 間（2.49m）、梁間 1 間（2.10m）の建物と推定する。桁行方向 N-9°-W の南北棟の側柱建物で、床面積は 5.23m²（3.2 畳）とかなり小型の建物である。建物の間仕切りの一部であることも考えたが、軸の延長方向に関連する柱穴を見出すことはできなかった。柱間寸法は、梁間が他の建物とほぼ同規模であるのに対し、桁行は西面で 1.25 ± 0.08m と狭い。SB1 ～ 3 と位置が重複するが、その新旧関係を確認することはできなかった。

SB5（図版 5・6・8）

25・26Z・A グリッドに位置する。調査区の南寄りで検出したので、さらに南側に延びる可能性も残す。現状では桁行 2 間（4.02m）、梁間 1 間（2.71m）の建物と推定する。桁行方向 N-81°-E の東西棟の側柱建物で、床面積は 10.89m²（6.7 畳）である。柱間寸法は、桁行北面が 1.88 ± 0.02m、桁行南面が 2.01 ± 0.26m で、梁間は桁行北面の約 1.5 倍である。SB1 とは桁行方向が異なるが、梁間の柱間寸法が桁行の約 1.5 倍で構成されていることは、共通した特徴である。また、前述のように桁行北面の軸が SB2 と一致することから、ほぼ同時期の建物と推定する。後述する SE244 とは東面が接する位置関係にあることから、その前後の時期に機能していたものと考える。

2）柵

ピットが一定の間隔を持って直列するが、周囲に対応するピットがないものを柵とした。遺構集中区内にもいくつか似たような状況を呈するピット列はあるが、明確には判断できなかった。

SA1（図版 5・8）

25A グリッドに位置する。やや軸が通らないものも含むが、その軸に近接する P76 ～ 79・83・84・89・91 の計 8 基を、柵を構成するピットと推定した。軸方向は N-72°-E で、推定長（P76 - P83 間）は 5.92m である。柵周辺はピット群が疎らであり、この柵を境に、北側と南側でピットの規模などの様相が異なる。南側のピット群は、平面規模が大きく、深度も深いものが多い。また、掘立柱建物を復元こそ出来なかったが、SB1 ～ 5 同様にいくつかは軸方向の合うものが認められた。一方、北側のピット群は平面規模が比較的小型で、深度も浅いものが多い。建物が存在したとしても、長期使用に耐えるものでなかった可能性がある。柵によって利用方法の異なる場が、仕切られていたものと考える。

3）井　　戸

井戸は 15 基を検出した。長軸などの規模が大きいものを井戸または土坑とし、井戸と土坑の区別は、深度が長軸より大きいものを基本的に井戸とした。しかし、深度が浅くても、湧水状況、埋土の堆積状況、遺物出土状況などを考慮して井戸に分類したものもある。なるべく調査時の所見を優先させた。

SE2（図版４・９・62）

23A12 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、底面中央に長軸 0.45m、短軸 0.38m、深さ 0.17m の掘り込み状のくぼみを持ち、断面形は漏斗状に近い。中ほどから垂直に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で６層に分層でき、斜位に堆積するが、６層は南から北に傾斜し、これに対し１～５層は北から南方向に傾斜する。１～４層は地山ブロック、５層は白色粘土粒を含む。このような堆積状況から人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物はない。

SE53（図版５・９・62）

24A21 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、底面中央に浅いくぼみを持つ。断面形はＵ字状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で５層に分層でき、レンズ状堆積が連続するので自然堆積と考える。珠洲焼・土師質土器（4）が出土した。

SE71（図版４・９・62）

24A13・14 グリッドに位置する。平面形は円形で、底面は基本土層第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形は箱状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で２層に分層でき、１層は西から東に傾斜して堆積する。１～２層とも地山ブロックを含むことから人為的に埋め戻された可能性がある。長軸方向はほぼ南北に並行する。土師器や土師質土器（5・6）が出土した。

SE75（図版５・９・62）

25A4 グリッドに位置する。平面形は円形で、底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で３層に分層でき、２層は北から南に傾斜して堆積する。１～２層とも地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。須恵器（22）・土師器・珠洲焼が出土した。

SE81（図版５・９・62）

25A8 グリッドに位置する。平面形は円形で、底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土上部はレンズ状堆積であるが、１・２・４層に地山ブロックを含み、５層にも地山粒子含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。須恵器・土師質土器が出土した。

SE98（図版５・９・62）

25A6・7・11・12 グリッドに位置する。平面形は円形で、断面形は半円状を呈する。深度は 60cm 以下と浅いが、水の浸み出しは多く、素掘り構造の井戸と考える。埋土は粘土質土層で４層に分層でき、２～４層は北から南に傾斜して堆積している。全層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。新旧関係は、SD103・ピット SE98b より古く、ピット SE98a・c・d より新しい。SE98a・b のピットから土師器が出土した。

SE104（図版５・９）

25A11 グリッドに位置する。平面形は南側を暗渠により切られているが、暗渠の対岸で認められないことや、残存の形状からして円形を呈するものと思われる。断面形はＵ字状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で４層に分層でき、レンズ状堆積に似ているので自然堆積と考える。ただし１～２層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性もある。新旧関係は P97 より古い。１層と４層から土師器が出土した。

SE139（図版 5・6・9・62）

25Z4・5 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形はU 字状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で 4 層に分層でき、2 ～ 4 層は北から南に傾斜して堆積する。1 ～ 4 層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。土師質土器（7・8）が出土した。

SE156A（図版 5・10・62・63）

25A14・15・19 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で 4 層に分層でき、1 ～ 3 層は西から東に傾斜して堆積する。4 層に 15cm と 35cm 大の被熱した輝石安山岩が 2 点並んでいた。1 ～ 2 層に黄褐色の地山由来の小礫が含まれ、3 ～ 5 層に灰黄褐粘質シルトブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。新旧関係は SE156B・P285 より新しく、P259・284 より古い。土師器・製塩土器（9）・土師質土器が出土した。

SE156B（図版 5・10・63）

25A13・14 グリッドに位置する。平面形は北側を暗渠、南東を SE156A により切られ、全体の形状は不明である。断面形は不整な台形状を呈する素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で 6 層に分層でき、水平堆積を示す部分もある。1 層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性もある。新旧関係は SE156A より古い。土師器（11・12）・土師質土器（10）が出土した。。

SE233（図版 5・10・63）

24A22、25A2 グリッドに位置する。平面形は不整な方形で、断面形は階段状を呈する。階段は足掛け部分の可能性もある。素掘り構造の井戸で、埋土は粘土質土層で 9 層に分層でき、斜位に堆積する。6 層は南から北に傾斜し、これに対し 2 ～ 7 層は西から東に傾斜して堆積する。9 層以外に地山ブロック含み、人為的に埋め戻された可能性がある。須恵器・土師器のみが出土している。

SE244（図版 5・10・63）

25A21 グリッドに位置し、東側の一部を開渠に切られる。平面形は不整な円形で、深度は浅いが水の浸み出しは多く、底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形は台形状を呈し、素掘り構造の井戸と考える。埋土は粘土質土層で 6 層に分層でき、2・4・5 層は北から南に傾斜して堆積し、1・2・5・6 層は地山ブロックを含む。6 層には未分解の有機物が多く含まれ、黒褐色を呈する。遺物は須恵器（22・23）、土師器、珠洲焼、土師質土器（13 ～ 21）、木製品（196 ～ 202）などが出土した。最下層の 6 層で、木製鉢、被熱した磨石・礫が底面中央部で出土した。6 層上部から漆器の合子・椀・皿や木製品の曲物底板・部材・櫛、土師質土器の皿などが出土し、4 層から土師質土器の小皿・皿、3 層から土師質土器の小皿がそれぞれ出土した。埋土が地山ブロックを含んで斜位の堆積を示すこと、遺物の完存率が高いことなどから、遺物と共に人為的に埋め戻された可能性がある。この 6 層出土の木製鉢に対して放射性炭素年代測定を行った結果、暦年較正年代（1σ暦年代範囲）で AD1,153 ～ 1,211 年（46.2%）を示していることから、12 世紀後半～ 13 世紀初頭に機能していた可能性がある。

SE249（図版 4・10・64）

23A22 グリッドに位置する。平面形は方形で、底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で 4 層に分層でき、1・2 層は西から東に傾斜して堆積する。1 ～ 3 層に地山ブロックを含み、土師器が出土した。

SE304（図版４・11）

24A15 グリッドに位置する。遺構の大半を暗渠で欠失したが、施工時の立会で深度が深いことから井戸とした。全体の形状は不明であるが、残存する上場で 1.4m 以上あり、当遺跡では大型の部類である。

SE360（図版４・11・64）

23A16・21 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面形は箱状を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる素掘り構造の井戸である。埋土は粘土質土層で４層に分層でき、西側の傾斜が緩いのに対し、東側は急角度となる。２層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。土師器・山茶椀（24）・土師質土器（25・26）が出土し、底部から柱根のように底面が加工された丸木材（203）が出土した。

4）土　　坑

土坑 15 基を検出したが、主に長軸などの規模から判断したものが多く、後に掘立柱建物の柱穴（SB1-SK111・117・209、SB3-SK110）と判断したものもある。よって、柱穴に変更となる可能性の低いものについて記述する。土坑は特に集中する地点もなく、調査区内に点在している。

SK13（図版４・11・64）

24A1･2 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面形はＵ字状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で６層に分層でき、１～３層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物はない。

SK51（図版４・11・64）

23A11･16 グリッドに位置する。平面形は不整な方形で、断面形は漏斗状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で５層に分層でき、1･2 層が北から南に傾斜して堆積している。ほぼ中位の５層上面で、炭化した丸木・材が横位の状態で、方形状に検出した。壁際に被熱の痕跡は無く、埋土中に焼土なども認められないことから、炭化後に廃棄されたものと考える。方形状の配置が意図的なものかは分からず、その性格は不明である。ほかに出土遺物はない。

SK70（図版４・11）

24A13・18 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる。出土遺物はない。

SK128（図版５・６・11・64）

25Z19 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、断面形はＵ字状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で４層に分層でき、４層に有機物を多く含む。小枝類は並べられたように向きが揃っており、その下から検出した藁状のものも同様であった。残りは悪いが、束ねたものか、ムシロのような製品であった可能性もある。他に部材（204・205）・板材も数点廃棄されている。１～３層に地山ブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。土師器・土師質土器（28・29）が出土した。

SK135（図版５・６・11・64）

25Z9・10・14・15 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。土坑中央に掘り込みを持つ。埋土は５層に分層でき、レンズ状に堆積する。１・２層から須恵器・土師器が出土した。

SK253（図版 4・11・64）

23Z15・20、23A11・16 グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、西側に階段状の段を持つ。断面形は漏斗状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 4 層に分層でき、レンズ状に堆積する。長軸方向は N-32°-W である。土師器の小片が 1 層から出土した。

SK298（図版 5・11）

24Z25 グリッドに位置する。北側を開渠により欠失する。平面形は不整形で、断面形は半円状に近く、西側が緩やかに、東側が急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 4 層に分層でき、斜位の堆積である。土師器・土師質土器（30・31）が出土した。

SK692（図版 2・11・65）

遺構の集中区から離れた、22W15・20 グリッドに位置する。平面形は不整な長方形で、断面形は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。北側にやや幅広の平坦面を持ち、本来は階段状の遺構であった可能性もある。埋土は粘土質土層で 3 層に分層でき、レンズ状堆積を示すが、礫の数量や被熱状況から人為的な堆積であろう。各層内には 2 ～ 3cm 大の炭化物および輝石安山岩を中心とした礫が計 309 点含まれていた。礫の 92%にあたる 286 点が被熱しているが、埋土に焼土は認められなかった。礫の大きさは、長さ 3.1 ～ 22.8cm、幅 2.1 ～ 16.1cm、厚さ 0.9 ～ 11.3cm、重量 10 ～ 7770g である。その内 60%を占める 184 点は、平均重量 400g の拳大の礫である。また被熱した礫中には角閃石安山岩の磨石が 1 点含まれている。一方被熱していない自然礫は、小形の礫が中心である。

5）溝

溝は 14 条検出した。

SD1（図版 4・5・14・55・66・67）

21 ～ 26Z、21 ～ 23A グリッドに位置し、北側と南側は調査区外に延びている。長軸方向は南半がほぼ南北に一致しており、24Z13 付近で N-12°-E 方向に変えていく。全体の幅は 3.6 ～ 6.1m であるが、西側と東側の一部に一段浅い部分（10cm 弱）が、溝に沿って付随する。その東西の浅い部分を除く、本体部分の幅は 2.2 ～ 3.5m、深さは 0.15 ～ 0.4m である。断面形は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。図版 14 で埋土 1 層としたものは、基本層序のⅢb 層であることから、溝は中世段階でほぼ埋没していたものと考える。ただし、堆積が安定していない場所もあったことから、数度の掘り返しはあったと思われる。調査前の現況で、この溝を境とした東西の段差が残っていたことから、中世以後も耕作などによる大きな地形改変が当該地では行われなかったことが想定できる。溝の東側の丘陵裾部側が、西側に比べて一段高く、溝も直線的ではないことから、小規模な河岸段丘の境に形成された窪地（小川）がそのまま区画溝として利用された可能性が高い。土師質土器を中心に、古代・中世の遺物（34～118, 206～211, 236, 238, 244, 245, 254, 260 など）が多く出土している。

溝の本体部分のほぼ中央で、長軸に沿って多くの杭列（後述の「杭」も参照）を検出した。溝と直交関係となる杭列が認められないことから、堰の可能性は薄い。溝の東側の遺構群と対応するように密に打たれていることから、生垣のような景観が想定できる。

SD52（図版 5・12）

24A16 グリッドに位置する。長軸 1.45m、短軸 0.25m、深さは 0.17m である。断面形は半円状を呈し、急斜度に立ち上がる。長軸方向は N-57°-W で、須恵器・土師器が出土した。

SD103（図版 5・12）

25A6・7 グリッドに位置する。長軸 0.83m と短い溝で、断面形は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N-78°-E である。新旧関係は SE98 よりも古い。出土遺物はない。

SD133（図版 5・6・12）

25Z15 グリッドに位置する。長軸 1.09m で、断面形は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N-82°-E である。土師質土器が出土した。

SD140（図版 5・6・12・65）

24Z19 から 25Z9 グリッドにかけて位置する。長軸 6.52m、短軸 0.82m、深さは 0.09m である。断面形は弧状を呈し、長軸方向は N-87°-E である。須恵器・土師器・土師質土器（120）が出土した。

SD197（図版 5・7・55）

25A23・24、26A3・4 グリッドに位置する。検出面の埋土に特に差が無かったことから溝と判断したが、掘削後の底面の起伏の大きさから、4 基のピットが切り合っていたものと考えた。断面形は U 字状を呈し、急斜度に立ち上る。その内、東寄りの 2 基は、それぞれ SB1・2 を構成する柱穴となる。

SD299（図版 5・6・12）

24Z25、25Z4・5 グリッドに位置する。長軸 1.15m、短軸 0.2m、深さは 0.06m である。断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N-21°-E である。土師質土器が出土した。

SD305（図版 2・12・65）

22X5 から 22Y4 グリッドにかけて位置する。長軸 8.0m、短軸 1.25m、深さは 0.2m である。断面形は台形状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N-89°-W である。土師器が出土した。

SD313（図版 6・12・65）

24X23 から 25X10 グリッドにかけて位置する。長軸 4.85m、短軸 0.72m、深さは 0.08m である。断面形は台形状を呈し、長軸方向は N-36°-W である。須恵器・土師器・土師質土器が出土した。

SD314（図版 6・12・65）

25X14・19・24 グリッドに位置する。長軸 5.54m、短軸 0.62m、深さは 0.07m である。断面形は弧状を呈し、底面は起伏を持つ。立ち上がりは緩やかである。長軸方向は N-1°-W である。

SD628（図版 2・12・65）

21X20 から 21Y17 グリッドにかけて位置する。長軸 5.48m、短軸 0.27m、深さは 0.07m である。断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向はほぼ南北に並行する。長軸方向は N-87°-E である。

SD693（図版 2・12）

22W10 グリッドに位置する。長軸 1.3m、短軸 0.62m、深さは 0.08m である。断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向はほぼ南北に並行する。長軸方向は N-7°-W である。

6）性格不明遺構

性格不明遺構は、SX141・147・250・252・265・270 の 6 基を検出した（図版 2 ～ 4・6・15・67）。その内 2 基（SX141・270）は平面形状が明確でなく、掘り込みも 6cm 弱と浅いことから、上から掘り込まれた遺構の残欠であった可能性がある。他の 4 基（SX147・250・252・265）は、全て SD1 の西側で検出し、東西方向に長軸を持つ。全てⅢ層除去後に検出した。幅が把握できるのは SX250 のみであるが、基本的には長方形を意識した平面形状と考える。SX250 で幅約 1.8m であるが、他の遺構は現状でもそ

れ以上の幅を持つ。遺構の底面は起伏を持っており、深度は深い部分で 20cm 以上に達するが、大半は 10cm 以下と浅い。SX147・252 で北側の掘り込み部を検出できなかったが、これは地形が南側から北側に傾斜する緩傾斜のため、遺構が徐々に浅くなっていたためかもしれない。地形の傾斜方向に直交して構築されていることから、造成痕や耕作痕の可能性が挙げられる。直接この埋土を分析したわけではないが、調査区の数地点において実施した花粉分析と植物珪酸体分析（第Ⅵ章２参照）の結果では、この埋土に近似する層（Ⅲc、Ⅲb' 層）での、「稲作の可能性を支持することは難しい」とされている。現状では、平坦面の作出など、土地の造成にからむ痕跡である可能性が高い。

7）杭

杭は計 105 本を検出した（図版 13・14・66・67 ほか）。SD1 内に 90 本、SD140 内に 4 本（杭 67・68・92・122）が位置する。遺構外では、杭 103・120・121 の 3 本が、SD1 の東側肩際に沿うように存在することから、関連するものと考える。また杭 100 ～ 102・104 の 4 本は、SD140 の延長方向にあることから、同様の性格を有していたものと考える。遺構と関連しないものでは、23A7 グリッドで杭 70・71・96 が SD1 に斜交する方向で列をなし、22X21 グリッドで杭 125 が単独で存在している。SD1 および SD140 で検出した杭は、その多くが溝の長軸方向に沿って列を成すことから、遺構の性格と密接に関わるものであろう。

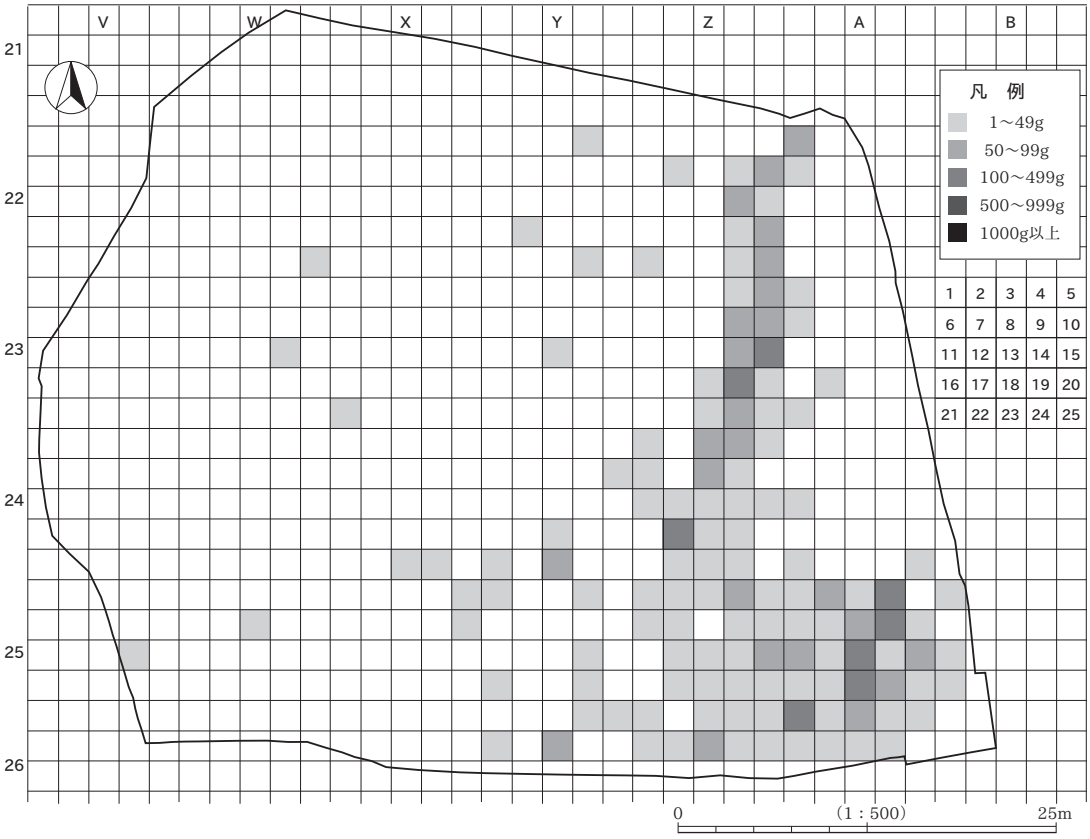
SD1 で検出した 90 本の内、80 本が南半の 24 ～ 26Z グリッドに集中する。半数以上の杭は、SD1 の埋土上面まで頂部が露出していた。杭は底面中央付近に溝筋に沿って打設され、途切れがちではあるが、大きく 2 列が認められる。杭列はさらに細分でき、30 ～ 40cm の間隔で、3 ～ 5 本を小単位とする。その小単位の杭列が 12 か所程あり、約 1.0 ～ 1.5m の間隔を保っている。この個々の杭列が同時に存在したのか、構築の時期差であるのか把握することは出来なかった。ただし、杭は南半の密度が濃く、北半は疎らに打たれている。溝の東側で検出した遺構群の粗密とほぼ対応していることから、大半は中世の遺構群に伴うものと考える。杭の木取りは幹・枝を利用しており、最長のものは 77cm で、直径 8cm ある。長さ 45cm 以下のものは枝が非常に多く、全体の 8 割を占める。なお、24Z8 に位置する杭 40（断面 n-n'）の放射性炭素年代測定を行った結果、1 σ歴年代範囲で AD1,310 ～ 1,360 年（53.7%）の年代値（第Ⅵ章１参照）が得られた。遺物の主体は 13 世紀～ 14 世紀前半であり、年代的な重複が認められる。

3　上 層 の 遺 物

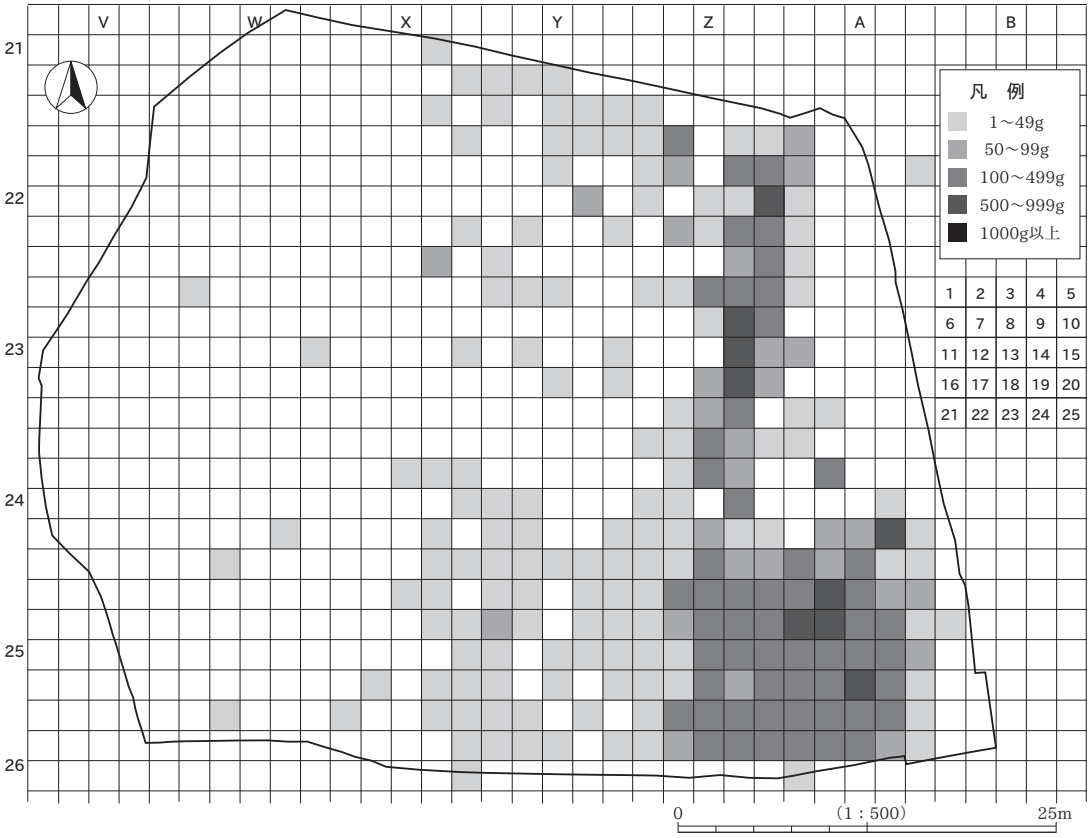
A　概　　観

ここでは遺物の種別ごとに記載する。土器・陶磁器、木器・木製品、土製品、石製品、金属製品の順で行う。また各種別の記述では、遺構出土物を優先し、その次に包含層出土物を説明した。

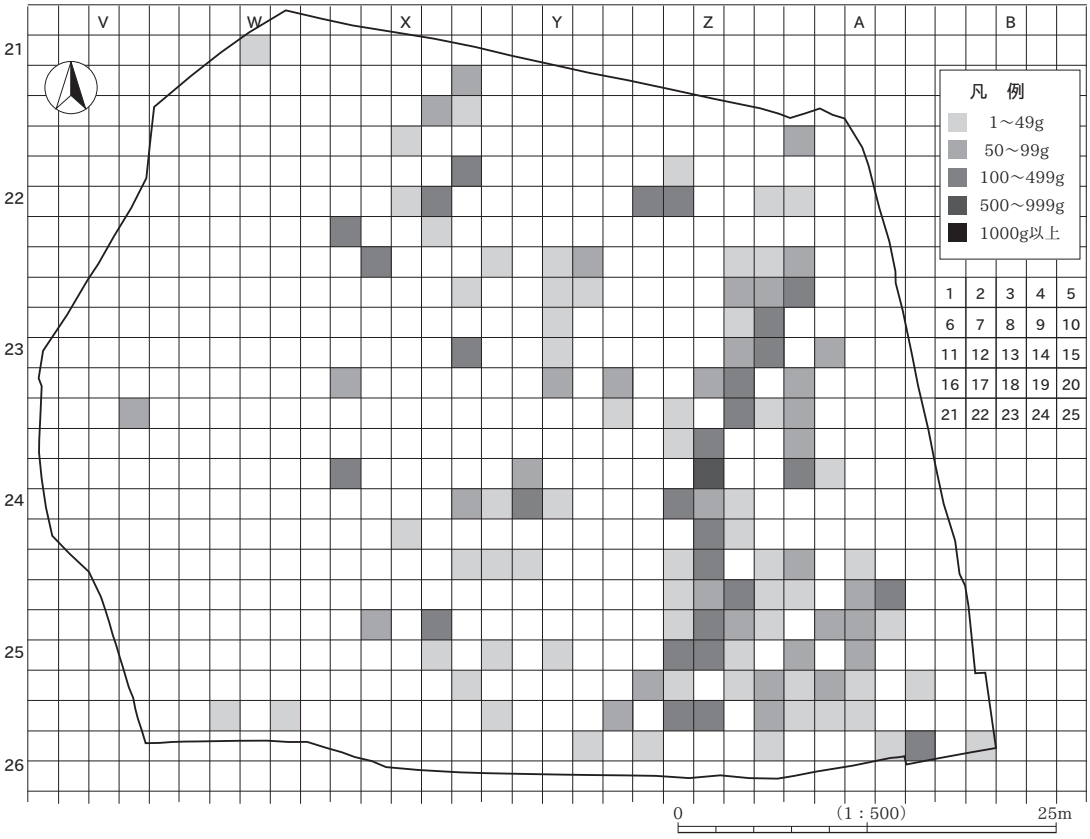
今回の上層の調査においては、古代～近世の土器・陶磁器類、木器・木製品、石製品、金属製品が出土したが、近世の遺物は極少量である。13 世紀～ 14 世紀前半ころの中世の遺物が中心となり、その前段階（平安時代末ごろ）の遺物がその次に多い。土器・陶磁器類は、遺構群や区画溝（SD1）を中心に出土している。古代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼・土師質土器の出土重量分布は、第 9 ～ 12 図の通りである。杭を除く木器・木製品は、井戸および区画溝より西側の包含層から多く出土している。



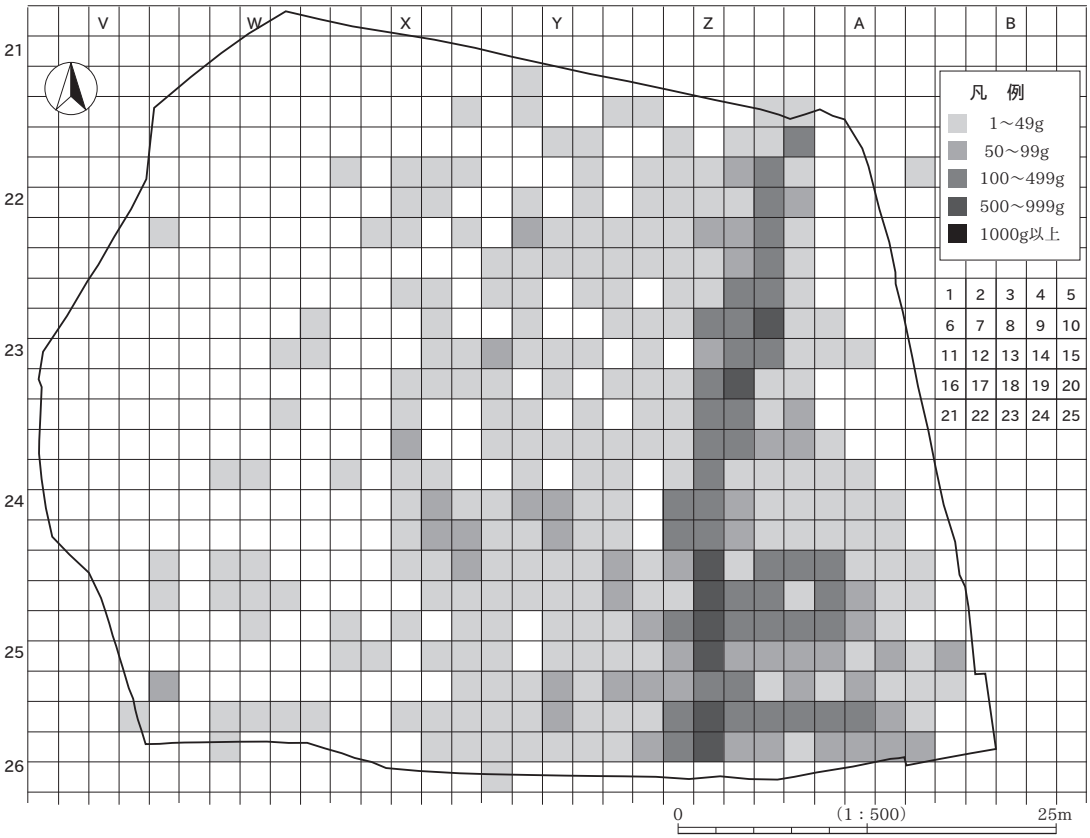
第 9 図　須恵器の重量分布図



第 10 図　土師器の重量分布図



第 11 図　珠洲焼の重量分布図



第 12 図　土師質土器の重量分布図

B 土器・陶磁器

中 世 陶 磁 器

陶磁器の分類・編年及び年代観については、青磁は［上田 1982・山本 2000］、白磁は［森田 1982・山本 2000］、青花は［小野 1982］、瀬戸・美濃焼は［藤澤 2005］、珠洲焼は［吉岡 1994・2003・加賀 1997］をそれぞれ参考にし、「人名＋分類名」で記述した。珠洲焼の年代については、Ⅰ$_1$期（12 世紀中葉）、Ⅰ$_2$期（1160 年～ 1170 年代）、Ⅰ$_3$期（1180 年～ 1190 年代）、Ⅱ期（13 世紀前半）、Ⅲ期（13 世紀中葉～ 1270 年代）、Ⅳ$_1$期（1280 ～ 1310 年代）、Ⅳ$_2$期（1320 ～ 1350 年代）、Ⅳ$_3$期（1360 ～ 1370 年代）、Ⅴ期（1380 ～ 1440 年代）、Ⅵ期（1450 ～ 1470 年代）を目安とし、「珠洲○期」として記述する。

土 師 質 土 器

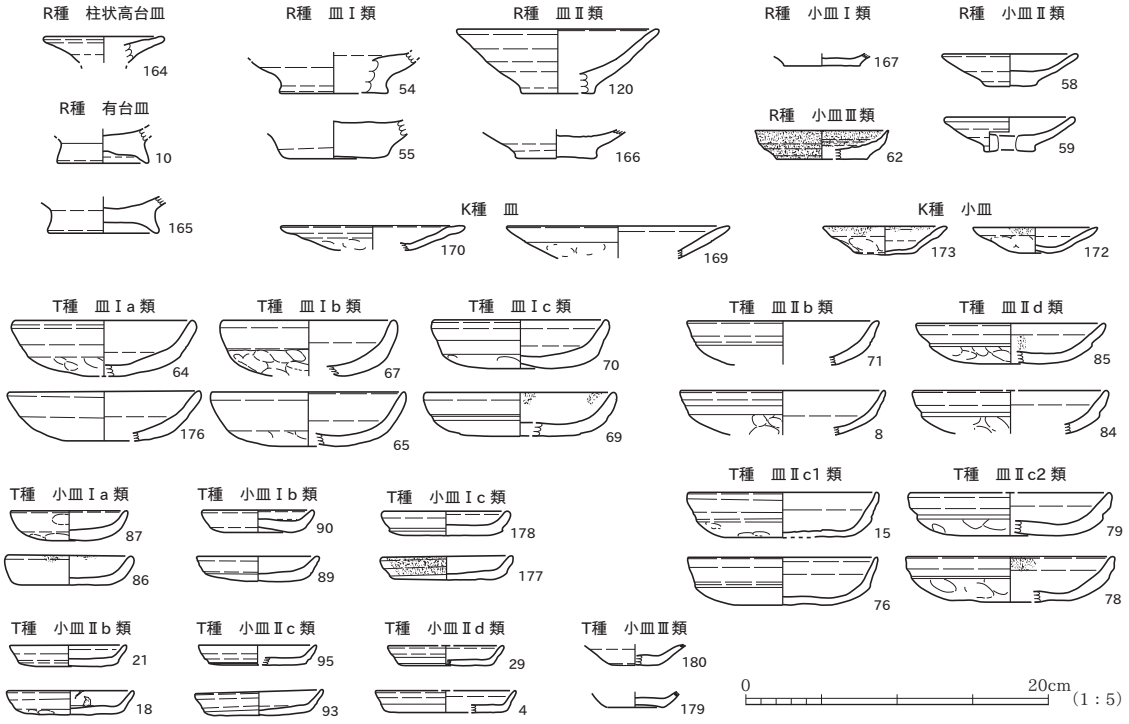
土師質土器は、皿・有台皿・柱状高台皿がある。破片数は多いが、有台皿・柱状高台皿については、全形を把握できるものがなかったことから、細分は行わなかった。土師質土器の皿は、技法・器形・法量などの特徴から数種に分類が可能である。法量の変遷に着目した編年［水澤 2005・2007］、製作技法の型式学的特徴や地域的様相を述べた試案［品田 1997・1999a・1999b］、中世後半～近世初頭の様相を示した編年［伊藤 2006］などを参考にした。

皿は、まず口径の大きさで皿と小皿に分類した。掲載個体の内、口径を計測できたもの（推定含む）が 70 点あり、9.1cm ～ 11.0cm に空白域があったため、この前後で分けた。製作技法的には、手づくね成形のものとロクロ成形のものがある。手づくね成形のものには、在地的なものと、薄手で胎土が精良な、いわゆる京都系と呼ばれるものがあり、それぞれ「T 種」、「K 種」と仮称した。ロクロ成形のものは、観察できる限りでは、全て回転糸切り痕であるが、不明瞭なものもあることから単に「R 種」とした。柱状高台皿や有台皿もこの R 種に含まれる。

ロクロ成形の R 種皿は、古代の土師器無台椀と比較して、底部の器厚が厚いもの（厚底）が多く、また見込みを未調整にしているものも存在する。体部まで接合できた例は少ないが、体部も厚手と想定されるものを皿Ⅰ類、底部厚の約半分以下に厚みを減じて体部が延びると想定されるものを皿Ⅱ類とした。R 種小皿はⅠ～Ⅲ類に分けた。小皿Ⅰ類は形状が土師器無台椀と類似するが、胎土や見込みのロクロナデが土師質土器と類似するものである。数量は少ない。小皿Ⅱ類は厚底で、体部は薄く、皿Ⅱ類と共通する。体部は内弯しながら立ち上り、口縁端部は丸く収まる。59 の端部は、外方がやや面取りされている。小皿Ⅲ類は、体部が小皿Ⅱ類よりも急斜度で立ち上り、口縁端部に向かって先細りとなるものである。

京都系手づくね成形の K 種皿は、数量が少なかったため細分しなかった。口縁端部が直線的なものと、外方に屈曲して受け口状になるものがある。K 種小皿は法量のばらつきが少なく、口径 8.0cm 前後、器高 3.0cm 前後である。細分しなかったが、底部形状が丸底に近いものと平底に近いものがある。また口縁部も、屈曲して受け口状になるもの、体部より肥厚してナデが明瞭なものがある。

その他の手づくね成形の T 種皿・小皿が最も数量的に多く、剣野沢遺跡の主体をなす。口縁部（～体部）の横ナデと底部（～体部）の指オサエ（指頭圧痕）の調整が特徴的に見られる。調整の境界が稜または段を形成しているものが多く、刈羽・三島型［品田 1991a・1997］と呼ばれたものに相当する。調整は、皿・小皿ともに共通する要素が多い。感覚的ではあるが、口縁部から底部まで全体的に厚手で、口縁端部が丸く収まるものをⅠ類、全体的に薄手で、口縁端部が先細り的に収まるものをⅡ類とした。また、調整の程



第 13 図　土師質土器の分類

度によりａ～ｄに細分した。ａ類は横ナデが緩く、指オサエとの境界に稜がほとんど認められず、底部から口縁に至るまで丸く内弯した形状のものである。ｂ類は口縁部が直線的で横ナデが緩く、境界の稜がわずかに認められるものである。ｃ類は横ナデが強く、境界の稜が明瞭なもので、皿は横ナデ部が上下２段で構成される。ｄ類は境界の稜が明瞭で、有段状を呈する。口縁部の横ナデは強く、上下２段あるが、ｃ類よりは明瞭でない。器厚は口縁端部へ向かい先細りが顕著である。皿・小皿ともにこの組合せで記述するが、Ⅰｄ類およびⅡａ類に該当するものはない。また皿Ⅱｃ類については、上下２段の横ナデ幅の違いにより、さらに１・２類に細分できる。１類は口縁端部寄りに段差があり、面取りしたように見えるもので、上の凸部が狭く、下の凹部が広い。２類はほぼ中央から底部寄りに段差があるものである。第 13 図に示すように、Ｔ種皿は７種、Ｔ種小皿は６種に細分した。また、小皿の内、上記に該当しないものをその他として、小皿Ⅲ類とした。

P201（図版 30・73-1）

１は掘立柱建物 SB1 の南西隅の柱穴から出土した、内面黒色の土師器椀である。いずれも小片だが、口縁部と底部がある。推定口径約 14cm と比較的小型で、口縁端部は丸く収まる。

P216（図版 30・73-2）

２は掘立柱建物 SB1 の西面の柱穴から出土した、手づくねの土師質土器小皿で、厚手のⅠｃ類に分類できる。体部はナデにより、緩い稜を持つ。

P184（図版 30・73-3）

３は掘立柱建物 SB4 の北西隅の柱穴から出土した、須恵器横瓶の体部片である。SK14 と SD1 出土の破片と接合し、閉塞部を欠損する。後述する SE244 出土の横瓶と同一個体の可能性もあるが、胴部径が異なるため、別個体とした。外面は平行打圧後のカキ目が認められる。

SE53（図版 30・73-4）

4 は手づくねの土師質土器小皿で、薄手のⅡｄ類に分類できる。平底で、体部は垂直気味に立ち上がり、口縁端部は先細りとなって外側に抜ける。

SE71（図版 30・73-5・6）

土師質土器の小皿２点が出土した。5 はロクロ成形の土師質土器小皿のⅡ類で、底部が 1.2cm と分厚い。6 は手づくねの土師質土器小皿で、全体的に厚く、ナデが緩いためⅠａ類に分類した。

SE139（図版 30・73-7・8）

7・8 は手づくねの土師質土器の皿で、どちらも薄手のⅡｂ類に分類できる。7 の内面には、煤状に黒色化している部分が認められる。

SE156A（図版 30・73-9）

9 は製塩土器の底部と考えた。117・118 の円筒形支脚の可能性もあるが、欠損状況をみると、筒形とはならず、底面がつく可能性が高い。輪積み痕が明瞭に観察でき、体部外面はケズリによって調整され、底面近くに指頭圧痕が認められる。内面は黒色化しており、ナデやハケ目が認められる。

SE156B（図版 30・73-10 ～ 12）

10 は土師質土器の有台皿で、ロクロ成形である。胎土は比較的良質だが、底部の厚みは 1.3cm あり、古代の有台皿とは明らかに異なる。11 は土師器の無台椀で、体部は直線的に開くようである。回転糸切り痕が認められる。12 は土師器の椀または、体部の開き具合から皿の可能性もある。

SE244（図版 30・73-13 ～ 23）

完形に近い手づくね成形の土師質土器が多く出土している。他に木製品（196 ～ 202）も良好に残っており、剣野沢遺跡の中世の基準資料となり得る。13 ～ 17 が土師質土器の皿で、13 ～ 15 がⅡc1 類、16・17 がⅡｄ類に分類できる。18 ～ 21 は土師質土器の小皿で、すべてⅡｂ類である。内面に煤が、14 は広く、15 は一部に認められる。22 は須恵器の横瓶の口縁部と体部である。接合しなかったが、胎土や自然釉の色調およびかかり具合から同一個体として復元した。体部外面は平行タタキ後にカキ目が施され、内面はロクロナデのみである。23 は砥石に転用された須恵器の甕の体部片で、両面および上部の欠損面に磨痕がある。裏面全体に煤が付着するが、表面には認められない。

SE360（図版 30・73-24 ～ 26）

24 は山茶碗の小皿で、自然釉が多く付着し、底面に回転糸切り痕が認められる。SD1 出土の破片と接合したが、山茶碗は遺跡全体でもこの１点しか出土していない。25・26 は手づくね成形の土師質土器の皿で、どちらもヨコナデが明瞭で、口縁部が先細りとなるⅡｄ類に分類できる。

SK11（図版 30・73-27）

27 は須恵器の長胴壺または鉢の底部で、外面ヘラケズリ、内面に縦位のハケ目が明瞭に認められる。底面の切り離し技法は不明であるが、底部と体部の境で割れていることから、非ロクロ成形の接合部と考える。酸化焔焼成のためか、全体的に赤紫色の色調を呈する。

SK128（図版 30・73-28・29）

28・29 は手づくね成形の土師質土器で、28 が皿のⅡｄ類、29 が小皿のⅡｄ類にと小皿で、どちらも薄手のⅡｂ類に分類できる。7 の内面には、煤状に黒色化している部分が認められる。

SK298（図版 30・73-30・31）

手づくね成形の土師質土器小皿が出土している。30 は京都系のもので、口径 7.2cm、器高 1.6cm、底

部は境が不明瞭な丸底である。31 は口縁部寄りにヨコナデが見られるが、稜は弱く、Ⅰａ類に分類できる。30 同様に丸底を呈する。

SK346（図版 30・73-32）

32 は回転ヘラ切りの須恵器の無台杯で、全体的に薄手の造りである。体部は急斜度に立ち上がり、直線的に伸びる。

P168（図版 30・73-33）

33 は回転ヘラ切りの須恵器の無台杯で、全体的に薄手の造りである。32 に比べて開き気味に立ち上がり、体部は緩く湾曲する。黒斑が少量認められる。40m 近く離れた、SD1 の出土片と接合した。

SD1（図版 31・32・73・74-34 ～ 118）

居住域とそれ以外を区画する溝で、最も多く遺物が出土した。繰り返し掘られているためか、出土遺物の時期幅も広い。

輸入陶磁器としては、青磁（34 ～ 37）、青白磁（38）、白磁（39 ～ 44）がある。34 は大ぶりな鎬蓮弁文の椀で、蓮弁は均整がとれている。35 も椀で、外面に櫛歯状沈線、内面に横位の平行沈線が認められる。36 は推定口径 9.4cm と小型な皿の口縁部で、欠損部下端で屈曲している。37 は杯類の底部で、底面にも釉が認められる。38 は合子の身で、内面と外面口縁部に釉がかかるが、他は無釉である。体部は菊花状の凹凸がある。39・40 は形状が異なるが、口縁が玉縁となる白磁椀で、11 世紀第 4 四半期～ 12 世紀前半に位置づけられる。41 は口縁端部が外方へ緩く湾曲し、内面は口禿となる。42 は推定口径 6.2cm の小椀で、先細りの体部は直線的に伸びる。口縁部内面に稜皿のように凹む部分があり、体部内面下方に幅 1mm 弱の沈線が横位に巡る。43 はかなり薄手の皿で、口縁端部で外方へ屈曲する。44 は皿の底部で、高台外面は無釉である。内面の欠損部に沈線が巡っていることから、体部は段をなす。

45 ～ 51 は珠洲焼である。45 は自然釉がかかる甕の頸部～体部で、外面はタタキ（打圧）部とナデ部で明瞭な段を持ち、口縁部はＵ字状に大きく屈曲する。46 は甕の体部片で、砥石に転用されている。正裏側面の磨面は平滑で良く磨られており、正面のタタキ部はほとんど残っていない。47 はタタキ成形の壺または甕で、外面に四筋で枠取りした四方襷文が認められる。欠損部に補修のための漆が厚く付着し、内外面にも飛び散っている。48 ～ 51 は片口鉢で、48・49 は卸目が認められない。48 は口径 20.2cm と小型で、口縁端面は外方を向く。底面に静止糸切り痕と板目状圧痕がつき、欠損部に補修のための漆が付着する。49 は片口部で、口縁端面は上方を向く。50・51 は口縁端面がほぼ水平に、上方に面を持ち、51 はわずかに外方へ引き出される。50 は 1 単位（幅 2.4cm）9 条、51 は 1 単位（幅 1.3cm）5 条以上の卸目が施されている。

52 ～ 97 は土師質土器で、ロクロ成形の有台皿（52・53）・皿（54 ～ 57）・小皿（58 ～ 62）、手づくね成形の皿（63 ～ 85）・小皿（86 ～ 97）に分類できる。細分類については、観察表に記載した。以下、特徴的なものについてここでは述べる。

52･53 は有台皿で、高台は先細りとなって外方へ踏ん張る。底部の厚みは、52 が 1.6cm、53 で 1.2cm ある。52 の内面は、色調は薄いが黒色化しているので、内面黒色土器に類するものかもしれない。ロクロ成形の皿・小皿の内、底面の切り離しが確認できるのは 54・58 ～ 62 で、すべて右回転の糸切り痕が認められる。54・55 は底部が分厚く、柱状高台に近い。全形を把握できるのは 58・59・62 で、58・59 は短めの体部が直線的、または緩く湾曲して浅角度で伸びる。口縁端部はやや面取りされ、全体的に丁寧な造りである。59 は底部のほぼ中央に、径 1.3cm の円孔が穿孔されているが、性格は不明である。

62 の体部は湾曲しながら急斜度で立ち上がり、短く先細りになって収まる。内外面のほぼ全面にタール状付着物が認められ、灯明皿として使用されたことがうかがえる。他の皿類とも形状が異なることから、時期的に新しくなる可能性がある。

63 ～ 97 は手づくね成形の土師質土器で、歪みの大きいものも多い。70・79 のように底面が上げ底状になる（下沖北遺跡では分類の一要素に挙げられている）ものも少量だが含まれる。皿の器形の主体となるのが、73 ～ 81 のような薄手で、横ナデ部が上下 2 段で構成されるⅡc 類である。タール状付着物があるものは少なく、69・78・85・86 などで、口縁部付近を中心にわずかに認められる。84・97 にも黒色化している部分はあるが、灯明の痕跡かは不明である。

98・99 は古代の灰釉陶器皿の底部で、98 の高台部は断面方形を呈し、内端接地する。胎土はきめ細かくないので、猿投産の可能性がある。

100 ～ 114 は須恵器で、杯蓋（100・101）、有台杯（102・103）、無台杯（104 ～ 106）、鉢（107 ～ 109）、長頸壺（110）、長胴壺（111）、横瓶（112）、甕（113・114）に器種分類できる。杯蓋は、返りのある 101 と、返りのない 100 がある。100 はつまみ部をほとんど欠失するが、その残存状況から、天井部の約半分を占める、ボタン状のつまみであったと考える。102・103 の有台杯の高台部は、断面三角形状で共通するが、底面に対し、中心に寄るもの（102）と、外周に寄るもの（103）の 2 種がある。無台杯の底部切り離し技法は、104・105 がロクロ回転ヘラ切りで、106 はロクロ回転糸切りの可能性がある。105 はやや火膨れしている。107 ～ 109 は鉢で、内外面・胎土の色調が灰白色を呈する。107・108 はロクロナデ＋カキ目、108 の外面にはケズリも認められる。109 の底部も 107・108 と調整が共通するので、どちらかと同一個体の可能性がある。110 は底径 4.7cm、小型の長頸壺の体部～底部で、ロクロナデが明瞭である。111 は長胴壺の口縁部～体部とした。甕と比べて器厚は薄く、頸部は「く」の字に屈曲して直線的に口縁部が伸びる。口縁端面はやや凹状を呈する。全面ロクロナデで、体部内面に斜位のハケ目が認められる。112 は横瓶の頸部で、自然釉がかかる。外面平行タタキ＋カキ目、内面円形当て具＋カキ目である。113・114 は甕の体部片で、114 は砥石に転用されている。表面は特に良く磨られており、格子状タタキが薄くなっている。側面に磨痕は認められない。

115 ～ 118 は土師器である。115 は小甕で、内外面ロクロナデ、口縁内面の受け口部のみにコゲが付着する。116 は長胴甕で、口縁部は短く、口縁端面は外方を向く。内外面ロクロナデ＋カキ目である。117・118 は円筒形支脚で、出雲崎町寺前遺跡［高橋保 2008］出土の「円筒器台」に類する。島崎川流域に特徴的なものとし、県内を中心とした集成例では、単に筒状、または円形の透かしがついたものが多く、本遺跡のように上方に抉入部を持つものは無い。117 は口径 7.6cm、底径 8.4cm、器高 8.1cm で、4 段の輪積み痕を明瞭に残す。底面中央～内面下 1 段目にかけて赤色化しており、高熱を受けたことを示す。一方、底面中央～外面下 1 段目は煤等によるものか黒色化している。117 は指オサエのみだが、118 は布等のナデによるものか、非常に器面は平滑である。製作時期や使用法については不明である。

SD56（図版 32・74-119）

119 は底径 6.4cm の土師器無台椀で、底面の調整は摩耗のため不明である。

SD140（図版 32・74-120）

120 はロクロ成形の土師質土器の皿で、底面切り離しは回転糸切りである。底部は 1.3cm の厚みがあり、形状は SD1 出土の 54 と類似する。体部は中程でわずかに屈曲するがほぼ直線的に伸び、口縁端部は丸く収まる。

SX252（図版 32・74-121）

121 はロクロ成形の土師質土器の有台皿で、全体的に摩耗しており、調整等は不明である。高台先端は SD1 出土の 52・53 に類似する。底部は 1.4cm の厚みがある。

SX265（図版 32・74-122）

122 は土師器の小甕の底部で、底径 7.4cm である。器面は被熱のためか、所々剥落している。

包含層（図版 32 ～ 34・74・75-123 ～ 195）

123 ～ 131 は青磁で、椀・小椀（123 ～ 129）、盤（130・131）などの器種がある。123・124 は無文で、123 は緩く湾曲し、口縁部でわずかに外方へ反る。124 は直線的で、浅角度で開く。125・126 は蓮弁文を施文するもので、125 はその器厚の薄さや形状から、小椀の可能性がある。欠損面に漆が付着する。126 は体部が緩く湾曲し、端部は丸く収まる。蓮弁の間隔が空いている。127・128 はやや大型な無文の椀で、体部は湾曲し、口縁部で外方へ反る。時期的には 123 ～ 126 より新しい。129 は椀の底部で、畳付けにも釉が回る。底外面に砂状のものが付着し、その上から漆が付着する。内面体部下半に 1 状の沈線が巡り、明瞭ではないが、見込みに菊花状の暗文が施されている。130 は盤で、釉は薄くかかる。口縁は受け口状を呈し、内面に蓮弁文が施されている。131 は盤または杯で、口縁部は鋭く外反し、上端は平坦面をなす。

132 ～ 137 は白磁で、椀（132）、杯（133）、皿（134 ～ 136）、瓶（137）などの器種がある。132 は玉縁口縁の椀で、推定口径 15.7cm である。133 は高台を持つ底部で、外面はほぼ直線的に接地している。杯または鉢の可能性がある。134 は口径 8.8cm の小型の皿である。135・136 は断面方形の削り出し高台の皿で、高台から底面は無釉となる。137 は体部片で、内面は無釉である。厚みやその傾きなどから瓶と考える。

138・139 は青花で、内外面に文様が施される。138 の皿は高台から外底面が無釉となり、139 の椀は畳付の部分だけ剥ぎ取られている。139 の高台外面には二重圏線が巡り、底面にも文様が描かれる。

140 ～ 145 は天目茶碗で、古瀬戸系である。140 は内外面ともに、黒褐色系の釉と茶褐色系の釉が縞状にかかる。141・143 が内外面に茶褐色系の釉が、142 は内外面に黒褐色系の釉がかかる。142・143 は口縁端部を欠損する。144 は削り出しの輪高台で、底面がやや上げ底となる。茶褐色系の釉である。145 も削り出しの輪高台で、内面が黒褐色系、外面が赤褐色系の釉がかかる。

146 ～ 148 は瀬戸美濃焼で、146 は、平椀である。全面に貫入の多い釉がかかるが、所々剥落している。147 は小鉢で、釉は内面が全面に、外面は口縁部付近を中心にかかる。148 の皿は削り出しの高台で、断面三角形の屈曲部に釉が多く溜まる。釉はガラス質で、貫入が多い。

149 ～ 160 は珠洲焼で、甕（149 ～ 151）、壺（152 ～ 154）、片口鉢（155 ～ 160）がある。149 は短めの断面方頭形の口縁部が鋭く屈曲するもので、14 世紀中ごろの珠洲Ⅳ$_2$ ～Ⅳ$_3$ 期の時期と考える。150 は体部片を砥石に転用したもので、表面中央に広い磨痕を持つ。磨痕は裏面には無く、下側の破片の左側面のみに認められる。これは、砥石として転用後に破損（上部欠損）したが、その後も使用されたことを示す。151・152 は平行タタキが綾杉状を呈することから、珠洲Ⅲ～Ⅳ期と考える。151 のタタキは角が緩いので、Ⅳ期の可能性が高い。153 の壺の口縁部は、端部が短く外方へ引き出される。破損面には補修の漆が厚く付着する。154 はロクロ成形（R 種）の壺の片部で、波状文が横位に施文される。155 の片口鉢は直線的な口縁部～体部で、内面に途切れたような沈線が 1 条認められる。流水的な卸目とすれば、珠洲Ⅱ期の可能性がある。156 ～ 158 は珠洲Ⅲ～Ⅳ期と考えるもので、卸目は 156 が 1 単位（幅 2.9cm）

12 条以上、157 が 1 単位（幅 2.5cm）17 条、158 が 1 単位（幅 3.3cm）11 条以上施されている。158 の外面下端には指頭圧痕が残り、わずかに残る底面は、使用のためか滑らかである。159・160 は口縁端面が内傾するもので、珠洲Ⅵ期と考える。159 の卸目は 1 単位（幅 2.0cm）8 条で、160 の口縁端面には波状文が横位に施される。

161 は越前焼の片口鉢で、体部は緩やかに湾曲し、口縁部で屈曲する。口縁端面は内傾して弧を描き、体部内面同様に良く磨れている。1 単位（幅 2.8cm）10 条の卸目が、間隔を空けて施される。破損面には補修の漆が付着する。

162・163 は甕の体部片の周縁を打ち欠いたもので、研削具として転用されたものと考えるが、使用痕は認められない。162 は産地不明の中世陶器、163 は瀬戸美濃焼の可能性がある。

164 ～ 180 は土師質土器で、ロクロ成形の柱状高台皿（164）、有台皿（165）・皿（166）・小皿（167・168）、手づくね成形の京都系の皿（169・170）・小皿（171 ～ 175）、手づくね成形の皿（176）・小皿（177 ～ 180）に分類できる。細分類については、観察表に記載した。164 は口径 7.6cm の柱状高台皿の口縁部と考える。ナデが明瞭に残る。165 は有台皿の底部で、底部の厚みは 1.0cm ある。見込みはあまり丁寧にナデられていない。166 は回転糸切り痕の残る皿で、見込みにロクロナデが渦巻き状に明瞭に残る。167 は回転糸切り痕が残る小皿で、底部の厚みも無く、土師器椀の可能性もあるが、胎土的には土師質土器に近い。168 も土師器椀の可能性はあるが、底部も厚く、胎土も他の土師質土器と類似している。169 ～ 175 は京都系の土師質土器で、遺構から出土したものは少なく、大半が包含層から出土した。遺構の中心的な時期からやや下った、15 世紀代のものと考える。169 は外面全体が黒色化しているが、使用の結果か不明である。体部外面中央に、ヨコナデの境の筋が明瞭に残る。169 は全体が直線的だが、170 は口縁部がやや受け口状に屈曲する。171 ～ 175 は小皿であるが、口縁部形状にばらつきがある。タール状付着物が無いのは 171 のみで、基本的には灯明皿として使用されたものと考える。171 は指オサエ時の指紋も観察できる。176 ～ 180 は手づくね成形のもので、177 はタール状付着物が認められる。他にも部分的に黒色化（黒変）しているものは見られるが、使用によるものか不明である。180 は口縁部付近で外方へ屈曲し、京都系のものと似るが、胎土は明らかに異なっている。

181 は手づくねの小皿または小椀で、内外面ともに黒色系で、口縁部の形状も異なることから、瓦器と考えた。内面は荒れている。

182 は緑釉陶器の皿で、胎土は軟質である。輪高台を呈し、内面が全面に施釉、外面は体部から高台の上部までが施釉される。他に緑釉陶器は同一個体と考えるものが 1 片あるのみである。183 は緑釉陶器の皿で、造りがシャープで、胎土は硬質できめ細かい。ロクロナデが明徴で、口縁端部は外方へ屈曲する。

184 ～ 190 は須恵器で、杯蓋（184）、無台杯（185）、鉢（186）、長頸壺（187）、甕（188 ～ 190）に器種分類できる。184 は火膨れが目立ち、器形の歪みが大きい。口縁端部の返りは垂直方向に屈曲する。186 は鉢の体部と考えたが、横瓶の可能性もある。調整は、外面上部がナデ（ロクロナデ?）、下部が平行のタタキで、内面は上部がナデ＋カキ目、下部が円形の当て具となっている。187 の底部は、高台を後付けで接合したようには見えず、底面を削り込んだ可能性もあるが、小片のため不明である。188 は甕の口縁部で、口縁端部は嘴状に外方へ引き出される。189 は外面が擬格子のタタキ、内面が平行（部分的に擬格子）の当て具である。190 は外面が平行（擬格子）タタキ、内面が放射状の当て具となっている。

191 ～ 195 は土師器で、無台椀（191 ～ 193）、長甕（194・195）に器種分類できる。191 ～ 193 の無台椀は体部が緩く湾曲し、口縁端部でやや外方に反る。191 は内側に面を持ち、やや深身であることから、

他のものより時期的に古い可能性がある。194・195 の長甕は口縁端部の形状がやや異なり、194 は内側のみに屈曲するのに対し、195 は内外面に引き出され、T 字状を呈する。195 は摩耗で部分的に調整は見えにくいが、ナデ＋カキ目である。接合しなかったが、外面が平行のタタキ、内面がハケ目の長甕の下半が同一グリッドから出土している。

C　土　製　品（図版 36・77）

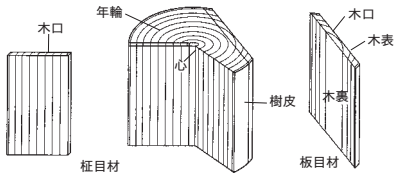
235 は全体的に円錐状を呈し、底面から大きく凹む。つまみ状の頭部には横方向の孔（入口で 2.5mm、中央で 1mm）が貫通しており、吊り下げて使用することがうかがえる。胎土は精良で土師器や土師質土器に類似する。236 は縦 4.8cm、横 3.3cm の土師質土器皿の底部片で、外面から内面方向に穿孔される。2 孔認められ、1 孔は途中で止まるが、破損面にあるもう 1 孔は貫通している。孔には回転による条痕が観察できる。237 は縦方向に幅 3mm 程の抉入部が巡る有溝土錘である。238 ～ 240 は管状土錘であるが、器形や法量に均一性が無い。238・239 には指頭圧痕が残り、238 の貫通孔は中程で狭くなっている。239 の上端面が擦れて滑らかであるが、仕上げ痕か使用痕か不明である。

D　木器・木製品（図版 35・36・76・77）

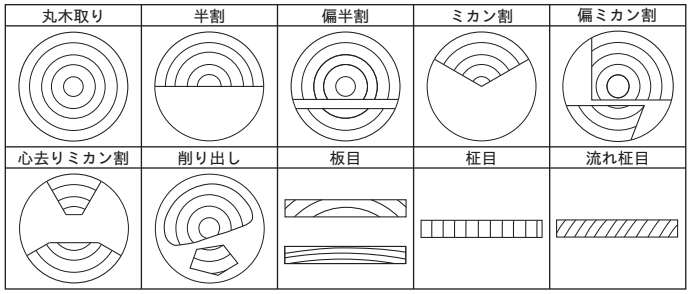
木器・木製品は、古代のものと中世のもの合わせて 39 点図示した。その内訳は、容器 4 点、曲物 4 点、下駄 4 点、糸巻 1 点、祭祀具 5 点、遊戯具 1 点、木簡 5 点（祭祀具・遊戯具のものを足すと 7 点）、部材・材類 15 点である。木取りなどの用語は、青田遺跡［猪狩 2004］に倣い記載した（第 14 図・第 15 図）。

SE244（図版 35・76-196 ～ 202）

196 ～ 198 は内外面黒色漆の漆器で、196 が椀、197 が皿、198 が合子の身である。196・197 の底外面に漆は塗布されていない。破損はしているが、遺存状態は比較的良好で、挽いた際のロクロケズリが明瞭に残る。197・198 は複数の爪痕が観察できる。198 の底外面は、高台に相当する部分が凹状に削られている。199 はほぼ完形の白木の鉢で、刳物である。脆くなっていたため、取り上げ時に破損した。体部と比較して底部は薄い。200・201 は径 1 尺を超える曲物の底板で、複数の刃痕が観察できる。200 は円形に近いが、面取りされたように直線的な部分（左側縁）も持つ。2 ～ 3 の単位にまとまって、計 9 か所の木釘・木釘穴が確認できる。201 は下側面に 1 か所木釘が確認でき、裏面の下端は部分的に炭化している。202 は部材で、長軸方向の片方に枘が付く。枘を中心に付着物が認められ、接着材的なものが使用された可能性がある。すべて遺構最下層からの出土で、他に櫛が出土している。



第 14 図　木取り及び木材一般の部分名称
（［橋本 2003］より転載）



第 15 図　木取りの分類（［猪狩 2004］から転載）

SE360（図版 35・76-203）

203 は径 10.5 ～ 11.0cm の丸木取りの材で、底面が 2 方向から削られている。樹皮が剥がされており、柱根や杭の可能性もある。上部は炭化しており、井戸に意図的に廃棄されたものと考える。

SK128（図版 35・76-204・205）

204・205 は部材である。204 は年輪が密で、面取りされて断面円形状に近くなり、下部が枘状に一段削られている。上部を欠損するが、柄杓などの柄に適している。205 は板状の部材で、隅切りしたような形状や、中央部に結合孔と考える孔（径 2mm）があることから、折敷の底板であった可能性がある。

SD1（図版 35・76-206 ～ 210）

206･207 は薄い板材の木簡である。206 は下方を、207 は上下両端を欠損する。206 は「法阿ミた×」と書かれ、阿弥陀如来に関するものまたは人名の可能性が考えられる。207 は字の一部も欠けているが、「急急如律令」と推測できる。208 は付札木簡にも似るが、表裏面に墨痕は認められなかった。塔婆形の祭祀具の可能性がある。209 は糸巻の部材で、中央に径 12mm の孔があり、両端は枘状に加工される。表面に刃痕が多く、左側縁付近に未貫通の小孔が 2 孔ある。210 は部材で、ほぼ正方形を呈し、径 3mm 程の小孔が 3 個認められる。

SX252（図版 35・76-211・212）

211・212 は小型の板材と角材で、211 は楔の可能性がある。

包含層（図版 35・36・76・77-213 ～ 234）

文字が認められるものが 5 点（213・214・216 ～ 218）ある。213・217 は下方が剣先形に加工された木簡で、213 は 8 文字「六斗五ヵ升ヵ□□□□」が認められる。217 は 213 より細身で、上方を欠損し、「×太郎」と 3 文字以上が書かれている。216 は上方を欠損し、下端が平らである。現状では「×奉　法華経一部」と読める。214 は五輪塔形の祭祀具で、左側縁下方を欠損する。各五輪に対応した「キャ　カ　ラ　バ　ア」の種子真言（しゅじしんごん）が認められる。218 は将棋の駒で、左側縁を欠損するが、全体的に細身の駒である。表面に「金将」と書かれており、裏面に墨痕が認められないことから、中将棋の駒ではない。

215 は上方が剣先形、下方が T 字状に加工されている。祭祀具の塔婆形と考えるが、表面と裏面に墨痕は認められない。219 は径 3cm 程の枝材を利用した、祭祀具（陽物形）と考える。頭部が斜方向になるように抉りを入れ、頭部は複数方向の面取りで半球状を呈する。220 は長さ 49.2cm のやや大型の板材で、全体的には「へ」字状を呈する形状で、屈曲部より下方は、直線的な側縁と湾曲した側縁で構成される。屈曲部に近い位置に貫通孔があるが、懸垂孔の可能性のほかに、何かと組み合わせていた可能性もあり、鳥形かもしれない。

221・222 は破片であるが、湾曲した側縁を持つことから曲物の底板と考える。223 ～ 226 は下駄で、223 が連歯下駄、224 ～ 226 が差歯下駄の歯の部分である。223 は歯の高さが 1.5cm 程と低く、現存幅も 8.7cm と小型である。楕円形状の孔が 5 孔あり、貫通したものが 4 孔、未貫通のものが 1 孔ある。歯の長軸は、台座の長軸に対し、斜方向に成形されている。224 ～ 226 は平面形が台形状を呈する歯部で、台座への差込部も欠損する。歯高は 224 が 8.6cm、225 が 10.5cm である。227 ～ 230 は部材である。227 は両側縁からの切込みがあり、下端の突き出し部に木釘孔が 2 孔ある。228 は板材で、上方と下方に 3 か所ずつ、右側縁にも 3 か所の木釘・孔が認められる。229 も 228 同様の板材で、上方に 2 か所、下方に 1 か所の木釘・孔が認められる。230 は下端がわずかにすぼむ直方体を呈し、右側縁に凹状の部

分を持つ。231 ～ 234 は板材で、231 は刃痕が多く認められ、下端の幅 1cm 程は厚みが一段薄くなる。組み合わせ材であった可能性がある。232・233 は粗いケズリだが、下端が鋭角に加工されており、楔的な用途も考えられる。234 は下端が炭化しており、火つけ木の可能性がある。

E　石　　製　　品（図版 36・77）

古代以降と考える石製品は砥石のみで、23 点中 3 点を図示した。241 は薄くて長い砥石で、断面長方形の厚みほぼ一定である。底面に切り出し時の刃痕が残る。磨痕（擦痕）方向に特に優位性はなく、様々な方向に使用されている。242 は断面方形の砥石で、縦断面は中央部がやや凹み、I 字形を呈する。正裏側面の 4 面が磨面で、磨痕（擦痕）方向はいずれも右下がりが優位である。243 は長さ約 4.1cm、幅約 2.1cm、厚さ約 1.7cm と小型であるが、ほぼ全面に磨痕が認められるため、完形品と考える。断面は方形を呈し、磨痕（擦痕）方向は正面が縦方向で、側面以外は右下がりが優位である。

F　金属製品・銭貨

金属製品と銭貨は、包含層から出土したものが大半で、遺構では、区画溝である SD1 から出土したものしか無い。時期不明のものが大半だが、包含層出土物は、近世以降の遺物を含まないⅢ b 層以下のものが多い。銭貨の内、寛永通寶はすべてⅢ a 層から出土した。

金 属 製 品（図版 37・77-244 ～ 251）

金属製品には鉄製、銅製、金銅製があり、計 23 点出土した。時期不明なものが多く、遺存状態が良いものから選択して 8 点を図示した。247 が銅製で、他は鉄製である。

244 ～ 246 は刀子で、244・245 が SD1 から出土した。全体的に錆化は少ない。244 は先端部で、刃部がやや折れ曲がる。245 は基部で、刀身と茎（なかご）の境が認められる。246 は中程で 3 つに折れ曲がっているが、全体の復元長は 14.8cm である。茎長 2.6cm、刀身長 12.2cm で、刀身は切先に向かって徐々に細く（鋭く）なる。厚さ約 2mm と薄手で、刃部も鋭角な形状を良く残している。247 は小柄（こづか）で、断面形から、図の上方が刃部にあたる。刀身が 3mm 程突き出て残り、片面の中程に径約 9mm の文様が 2 つ陽刻されている。図左側の文様は、「虎」の字に類似するが、不明である。

248 は箸で、横断面は上部が方形、下部が円形に近い。249 は攝子（せっし。ピンセットのようなもの）で、横断面は内側が平坦な半円状を呈する。250 は釘または楔で横断面は長方形を呈する。上部が潰れて折れ曲がっている。251 はやや外側に開く形状の鋏（かすがい）で、断面は長方形を呈する。

銭　貨（図版 37・77-252 ～ 265）

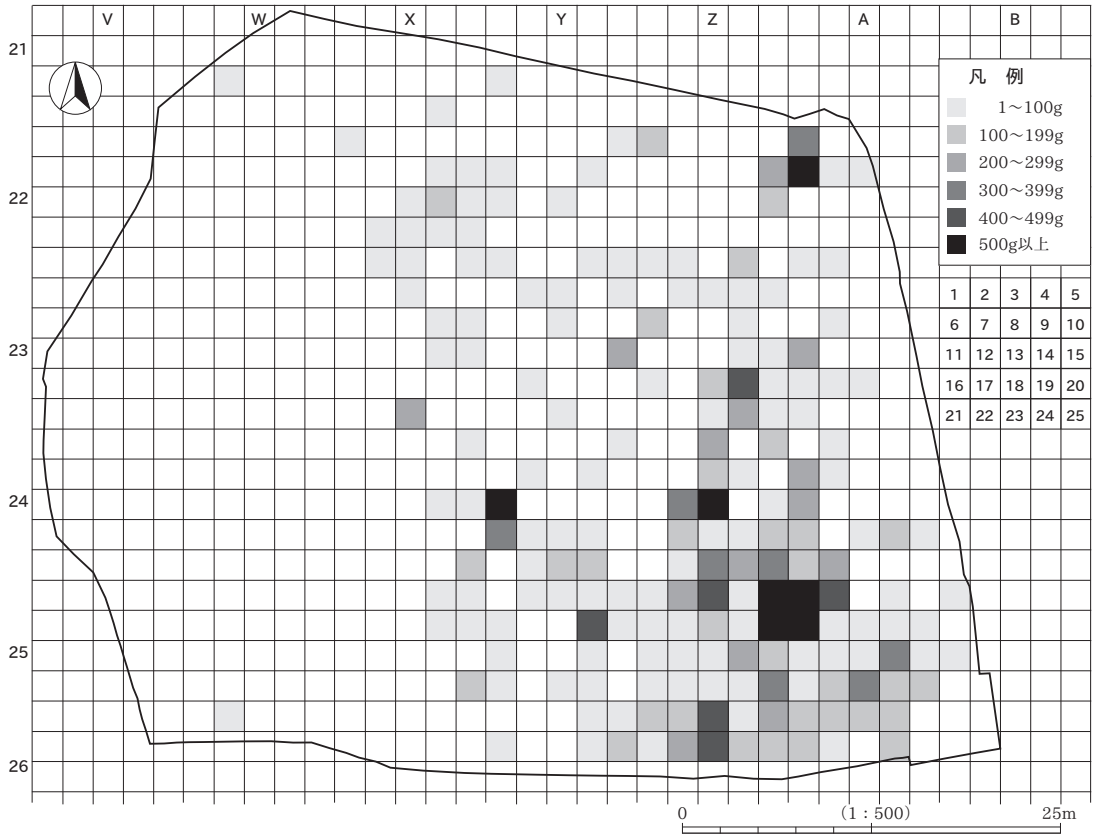
銭貨は 21 枚出土し、銭種不明 3 枚、近世の寛永通寶 4 枚以外の 14 枚を掲載した。銭種不明の 3 枚は中世以前の渡来銭である。寛永通寶には、通称「古寛永」1 枚、通称「新寛永」2 枚、四文銭（11 波の波線）1 枚がある。

掲載した 14 枚の銭種名と法量は観察表に示した。唐銭が 1 枚、北宋銭が 10 枚、明銭が 3 枚である。252 ～ 260 の、初鋳年が 1098 年（元符通寶）以前の銭貨は、Ⅲ b 層以下で出土している。また、明銭はすべて洪武通寶（初鋳年 1368 年）で、永楽通寶（初鋳年 1408 年）が出土していないことも遺跡の動態と調和する。259 ～ 261 の中央の方孔は、緡による擦れのためか、円形に近くなっている。

鉄　滓

鉄滓関連は、整理箱（約 54 × 34 × 10cm）で 3 箱程出土した。出土重量分布は、第 16 図の通りで、

西側を除いたほぼ全域から出土している。居住域である 24Z・A、25Z・A からの出土が多く、特に 25Z5・10、25A1・6 グリッドで集中が認められる。この場所は、掘立柱建物の柱穴群や大型遺構が希薄で、作業空間や、排滓置場としての利用が想定できる。



第 16 図　鉄滓関連の重量分布図

第Ⅴ章　下 層 の 調 査

1　下 層 の 遺 構

A　概　　要

下層の遺構は、南東から自然流路（SR1）に向かって傾斜する緩斜面地に、掘立柱建物３棟、土坑 15 基、溝２条、ピット 156 基（掘立柱建物を構成するものも含む）、性格不明遺構１基、埋設土器３基、自然流路１条、遺物集中区３か所である。

上層の遺構確認面である基本層序のⅣ層が、下層の遺物包含層であるため、大半の遺構はⅤ層上面で検出した。遺構のまとまりは、東側斜面（剣野Ｂ遺跡方面）に近い 25A グリッド付近と、調査区中央の 23・24Y グリッド付近に分かれる。前者の範囲は上層の遺構が集中していた範囲であることから、上層で検出できなかった遺構を下層で検出した可能性を残す。よって遺跡としての中心は、掘立柱建物や土坑などを検出した、後者の位置にあると考える。この範囲は、西側が自然流路（SR1）、東側が谷状地形（丘陵裾部が河川の浸食により削られた部分）に挟まれた、馬の背状の微高地となっている。記述は、種別（SB → P →埋設土器→ SK → SD → SX →自然流路）、遺構番号（小→大）の順で行った。

B　遺　構　各　説

1）掘 立 柱 建 物

22W（北西）～ 25A（南東）グリッドにかけて、柱穴と考える多数のピットを検出した。掘立柱建物は３棟図示したが、方位や深さを検討した上で、全て現地で復元したものである。下層のピットは調査区全体で 156 基検出したが、埋土を識別しがたいものも多くあり、それ以上の数のピットがあったものと考える。整理作業時に規模や埋土などを再精査して図上での復元も試みたが、十分に個々の対応関係を把握することが出来ず、８割以上のピットについて関連が見いだせなかった。

上層の掘立柱建物と同様に、柱間の多い方向を「桁行」（長軸）、少ない方向を「梁間」（短軸）と考えたが、SB6 以外は平面プランが五角形を呈しているため該当しない。柱間寸法は復元推定線上で、柱の中心と考える位置同士で測定を行った。床面積は復元推定線で囲まれた範囲を測定し、現代の規模と比較しやすくするため、畳数（1.8 × 0.9=1.62m²）にも換算して記述した。

SB6（図版 18・19・24・68）

23Y グリッド杭の南東に位置する。柱穴８基で構成された、平面形が亀甲形を呈する棟持柱建物と推定する。桁行長は南東側（P585 - P586 - P588）が 2.61m、北西側（P634 - P617 - P591）が 2.94m で、北西側がやや長い。梁間方向（P634 - P585）が 2.36m、棟持柱間（P632 - P590）が 4.26m で、全体の床面積は 8.56m²（5.28 畳）となるが、P585 - P588 - P591 - P634 を主屋の四隅とした場合、さらに狭くなる。P632 - P590 を通るラインを主軸とすれば、軸の傾きは N-45゜-E である。隣接する剣野Ｂ遺跡では、このような柱配置をとる建物は、楕円形を呈する「竪穴住居跡」に分類され、大半が中期前葉に位置付けられている。しかし、SB6 の内外に炉の痕跡は検出できず、また構成する柱穴からの出土遺物は後期後半のものが大半であることから、後期後半以降の掘立柱建物と考えたい。

柱穴は平面形が不整な円形を呈し、断面形はＵ字状を基本とする。深さは、P585・P588・P634の主屋四隅に相当する柱穴が0.5m前後であるのに対し、他の柱穴は0.21～0.27mと浅く、南西隅のP591は0.14mしかない。断面で柱痕と考えるφ15cm前後の部分を確認したが、その該当する埋土中には小～中礫が含まれているため、柱根は抜き取られた可能性もある。

SB7（図版20・25・56・68・69）

25X・Ｙグリッドに位置し、自然流路（SR1）の南東側の一段高い平坦面に立地する。SR1の埋土である３層を掘削中に柱根の頭を検出したが、掘形などは底面付近まで認識できなかった。３層堆積後に構築された可能性が高いが、建物構築後に掘形の大部分が河川により浸食された可能性も残す。柱穴５基で構成され、３基の柱穴（P706･P707･P710）に柱根が残存した。張り出しの位置に当たるP708の規模が、他の４基と比較して小規模であるが、他に周辺に柱穴が検出できなかったことから、同一の建物を構成するものと考えた。柱間距離は、P707-P709が3.64m、P707-P709が3.64m、P709-P710が3.03m、P710-P708が2.04m、P708-P706が2.16m、P706-P707が3.02mである。P707-P709の中間点とP708を通るラインを主軸とすれば、軸の傾きはN-25°-Wで、この軸を境にほぼ左右対称な平面形を呈する。またP708の突出長は0.99mで、全体の床面積は12.92m²（7.98畳）を示す。

柱穴は平面形が円形または不整な円形を呈し、断面形は台形状を基本とする。検出できた深さは0.09～0.24mと浅いが、底面は砂礫層に達しているため、かなり固く締まっている。P706とP707の２層中には、拳大の輝石安山岩がいくつか配されており、根固めと考えた（図版68参照）。

このような柱配置をとる建物は、隣接する剣野Ｂ遺跡では、「主柱五本形式」の「平地住居」に分類され、主に前期末から中期前半に認められるとしている。SB6同様に内外に炉の痕跡は検出できなかった。P707の柱根を放射性炭素年代測定した結果（第Ⅵ章１参照）では、3,080±30yrBPの年代が得られており、縄文時代後期後葉頃に相当する。柱根径はP706で38.0～42.2cm、P707で42.6～48.9cmとかなり太く、当該期の中心的な建物であったことが窺える。

SB8（図版19・20・22・24）

24Yグリッドに位置し、SB7と同様に柱穴５基で構成されるが、北側に面する柱間が狭くなる点が異なる。P565-P552の中間点とP564を通るラインを主軸とすれば、軸の傾きはN-33°-Eで、この軸を境にほぼ左右対称な平面形を呈する。柱間距離は、P565-P552が1.90m、P552-P559が2.32m、P559-P564が1.24m、P564-P568が1.49m、P568-P565が2.37mである。またP564の突出長は0.48mで、全体の床面積は5.80m²（3.58畳）と、かなり小規模な建物である。柱根や関連する炉跡は検出できなかった。

柱穴の平面形は、P564を除いて円形を呈し、断面形はＵ字状を基本とする。検出できた深さは、0.09～0.52mとばらつきがあるが、対称関係にある２基はほぼ同じ深さを持つ。張り出しにあたるP564が0.09mと最も浅く、北面に位置する柱穴２基が深い傾向にある。

2）ピ　ッ　ト

下層で検出されたピットは、156基である。ここでは柱根を持つものと、これに対応するもの、また覆土が分層できるものを記載する。

P704（図版20・25・69）

25X23グリッドに位置する。平面形は円形で、直軸0.16m、深さは0.25mである。断面形はＵ字状

を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。埋土はシルト質土層で単一層である。柱根は掘形の底面に接した状態で遺存している。

P705（図版 20・25・69）

25X22 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、直軸 0.2m、深さは 0.13m である。断面形は台形状を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は第Ⅷ層の砂礫層まで達している。埋土は砂層混じりの粘質土層で単一層である。柱根は掘形の底面に接した状態で遺存している。

3）埋　設　土　器

埋設 701（図版 18・25・57・69）

22W13 グリッドに位置する。掘り込みの規模は、長軸 0.35m、短軸 0.3m、深さは 0.15m である。平面形は不整円形で、断面形は台形を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層の単一層である。縄文土器は（5）底部を下にして掘り込みの南側寄りに設置されている。長軸方向はほぼ南北に並行する。

埋設 702（図版 19・20・22・23・25・57・69）

24Z16･21 グリッドに位置する。掘り込みの規模は、長軸 0.38m、短軸 0.34m、深さは 0.2m である。平面形は不整円形で、断面形は台形を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 2 層に分層できる。縄文土器（6）は底部を下にして掘り込みのほぼ中央に設置されている。長軸方向は N-33゜-E である。

埋設 703（図版 20・25・57・69）

25Y16・21 グリッドに位置する。2 基の掘り込み（A・B）が確認された。A の規模は、長径 0.68m、短径 0.62m、深さは 0.27m である。平面形は不整円形で、断面形は台形を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 3 層に分層でき、レンズ状に堆積している。内には 2 層下面に底部の欠けた縄文土器(8)が、底部側を下にして掘り込みのほぼ中央に設置されている。土器の周囲には輝石安山岩の礫が囲っている。一方掘り込み B は北側を A に切られているが規模は、長径 1.36m、短径 0.96m、深さは 0.2m である。平面形は不整楕円形で、断面形は台形を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層で 2 層に分層できる。2 基の掘り込みの長軸方向はほぼ南北に並行する。

4）土　　坑

土坑 15 基を検出した。自然流路右岸の川岸、23X24 ～ 24Y11 グリッド付近にかけて、ほぼ同規模の土坑が集中する傾向が認められる。

SK348（図版 19・26・70）

23X24･24X4 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長径 0.87m、短径 0.68m、深さは 0.15m である。断面形は弧状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で単一層である。長軸方向は南北である。長軸方向は N-86゜-W である。伴出は縄文土器・磨石類が上面から出土した。

SK349（図版 19・26・70）

23X25･24X5･23Y21･24Y1 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 1.12m、短軸 0.72m、深さは 0.17m である。中央にピット状の落ち込みを持つ。不整円形で、長軸 0.25m、短軸 0.2m、深さは 0.25m である。断面形は階段状を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層で 3 層に分層でき、ブロック状に堆積している。長軸方向はほぼ南北に並行する。2 層から縄文土器（10）の底部が出土した。

SK350（図版 19・26・70）

24Y16 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 1.02m、短軸 0.86m、深さは 0.33m である。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 3 層に分層でき、レンズ状に堆積している。長軸方向は N-46°-E である。縄文土器が出土した。

SK539（図版 22・23・26・70）

24Z12 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 0.86m、短軸 0.75m、深さは 0.12m である。断面形は台形状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層の単一層である。長軸方向はほぼ東西に並行する。共伴遺物はない。

SK575（図版 19・20・26・70）

24Y11 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 1.0m、深さは 0.3m である中央にピット状の落ち込みを持つ円形で、直径 0.24m、深さは 0.14m である。断面形は階段状を呈し、垂直に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 2 層に分層でき、レンズ状に堆積している。長軸方向はほぼ南北に並行する。縄文土器が出土した。

SK578（図版 20・23・26・71）

25Y14 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸 0.69m、短軸 0.33m、深さは 0.1m である。断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層の単一層である。長軸方向はほぼ東西に並行する。縄文土器が出土した。

SK579（図版 20・23・26・71）

24Y4 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長軸 1.28m、短軸 0.7m、深さは 0.1m である。断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層の単一層である。共伴遺物はない。

SK604（図版 19・26・71）

23X18・19 グリッドに位置する。平面形は方形で、長軸 0.86m、短軸 0.77m、深さは 0.42m である。断面形は台形を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 2 層に分層でき、レンズ状の堆積である。長軸方向は N-67°-E である。1 層下面から縄文土器（11）・輝石安山岩の扁平礫が出土した。

SK605（図版 19・26・71）

23X18・19 グリッドに位置する。北西側は SK604 に切られているが、平面形は不整方形で、長軸 1.14m、短軸 0.83m、深さは 0.33m である。断面形は台形を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層の単一層である。長軸方向は N-47°-E である。縄文土器が出土した。

SK608（図版 19・22・27・57・71）

23Y5・10・23Z1・6 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長軸 2.18m、短軸 1.28m、深さは 0.26m である。断面形は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層で 3 層に分層でき、レンズ状の堆積である。長軸方向は N-77°-E である。縄文土器（13～15 など）・石器（301 など）が出土した。

SK609A（図版 19・22・27・57・71）

23Y10・15・23Z6・11 グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長軸 1.56m、短軸 1.06m、深さは 0. 25m である。断面形は不整形を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層で 2 層に分層でき、レンズ状の堆積である。長軸方向は N-23°-W である。縄文土器・磨石類が出土した。

SK609B（図版 19・22・27・57・71）

23Y10 グリッドに位置する。北側を SK608、南側 SK609A と重複して切られているが、平面形は楕

円形で、長軸 0.98m、短軸 0.77m、深さは 0.24m である。断面形は弧状を呈し、急斜度に立ち上がる。埋土は粘土質土層で 2 層に分層でき、レンズ状の堆積である。長軸方向はほぼ南北に並行する。1 層を中心に縄文土器（16 など）が出土した。

SK622（図版 19・22・27・72）

23Z16 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 0.76m、短軸 0.67m、深さは 0.11 ～ 0.22m である。断面形は台形を呈し、底面中央が SK349・SK575 の小穴のように窪む。埋土は粘土質土層の単一層で、長軸方向は N-15°-W である。縄文土器が出土した。

SK625（図版 19・22・27・72）

23Y9･14 グリッドに位置する。平面形は不整円形で、長軸 0.77m、短軸 0.7m、深さは 0.22m である。底面は凸凹であるが、断面形は階段状を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は粘土質土層の 2 層に分層できる。長軸方向は N-57°-E である。縄文土器と磨石・輝石安山岩の角礫が上面から出土した。

SK641（図版 19・22・27・72）

23Y3･4 グリッドに位置する。平面形は不整方形で、長軸 0.8m、短軸 0.74m、深さは 0.15m である。底面は凸凹であるが、断面形は台形を呈し、緩やか立ち上がる。埋土は粘土質土層の 2 層に分層できる。長軸方向は N-34°-W である。共伴遺物はない。

5）溝

人為的なものか不明だが、溝状のものを 2 条検出した。

SD542（図版 22・25）

24Z7 グリッドに位置する。長さ 1.62m、幅 0.21m、深さは 0.11m である。東側は長さ 1.2m でほぼ直角に屈曲する。断面は弧状を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N-83°-W である。

SD716（図版 20・72）

25X・Y グリッドに位置する。SR1 の東岸に沿って北東～南西方向に走り、25Y6 グリッドで北西に迂回する。25X5 グリッドより南側は調査区外に延びている。長さ 9.5m、幅 0.32 ～ 1.15m、深さは 0.7 ～ 0.18m である。断面は不整形を呈し、緩やかに立ち上がる。長軸方向は N-23°-E である。

6）性格不明遺構

性格不明遺構は、SX711 の 1 基を検出した（図版 20）。25X5・10、25Y1・6 グリッドに位置し、平面的には SB7 と SD716 に重複する。SB7 の内側が大部分を占め、一部が南東方向に抜けている。埋土は炭化物を少量含有した褐色土であるが、不整形な形状を呈し、深度も一定しないことから、SR1 の埋土の一つであった可能性もある。SB7 と SR1 の関係は不明だが、SB7 の構造物が存在していた時に堆積した可能性が高い。縄文土器・石器が出土した。

7）自　然　流　路

SR1（図版 18 ～ 20・29・58・59）

調査区西側の 23・25V、21・22・24・25W、24・25X グリッドにかけて南北に蛇行する流路で、北側、東側、南側とも調査区外に延びている。24･25W、X グリッド付近で検出した流路幅は約 22.0m で、平均的な深さは 0.9 ～ 1.32m である。河床（礫を含まない層の上面）は比較的平坦で、東西の両岸に向かっ

て緩やかに立ち上がる。埋土は 25 ラインベルト付近で大きく 14 層に分層でき、遺物も多く含まれるが、各層毎に遺物を取り上げることは出来なかった。縄文時代後期後半～晩期の土器を中心に、各層からまんべんなく出土した。遺物の中心時期の一つである中期前葉の土器の出土は少量で、下流に流失した可能性もある。土坑群が近接する場所（23X24 ～ 24Y11 グリッド付近）もあることから、水場・水利遺構の存在が想定されたが、材を組んだ痕跡や立杭なども全く検出できなかった。大～小の多量の礫を含む堆積状況や、今回調査した地点が、西側の沢が合流してくる攻撃面に位置していることも関係しているのかもしれない。土石流的な埋土が多く、必ずしも全ての土器が剣野沢遺跡からの廃棄ではなく、上流の遺跡からの流れ込みも考える必要がある。

2 下 層 の 遺 物

A 概　　観

下層は、縄文時代にあたる。遺構としては先述のように掘立柱建物 3 棟と土坑などが確認されているにすぎず、集落を営むに好条件の立地とはいいがたく、すぐ西側丘陵上にある剣野 B 遺跡で確認された集落を営んだ縄文人の活動範囲として捉えることができる。

ここでは遺物の種別ごとに、縄文土器、土製品、石器・石製品、柱根の順で記載する。

縄文土器については、中期以前は比較的少なく、後期後半から晩期が多い傾向にある。また、遺構からの出土は後期後半から晩期の粗製土器がほとんどで、完形に近いものもある。石器は主要器種が認められるが、磨石類、磨製石斧が比較的多いのが特徴で、打製石斧は少ない。石製品では後晩期の石棒なども認められる。土偶も 16 点出土している。柱根は 3 点出土した。

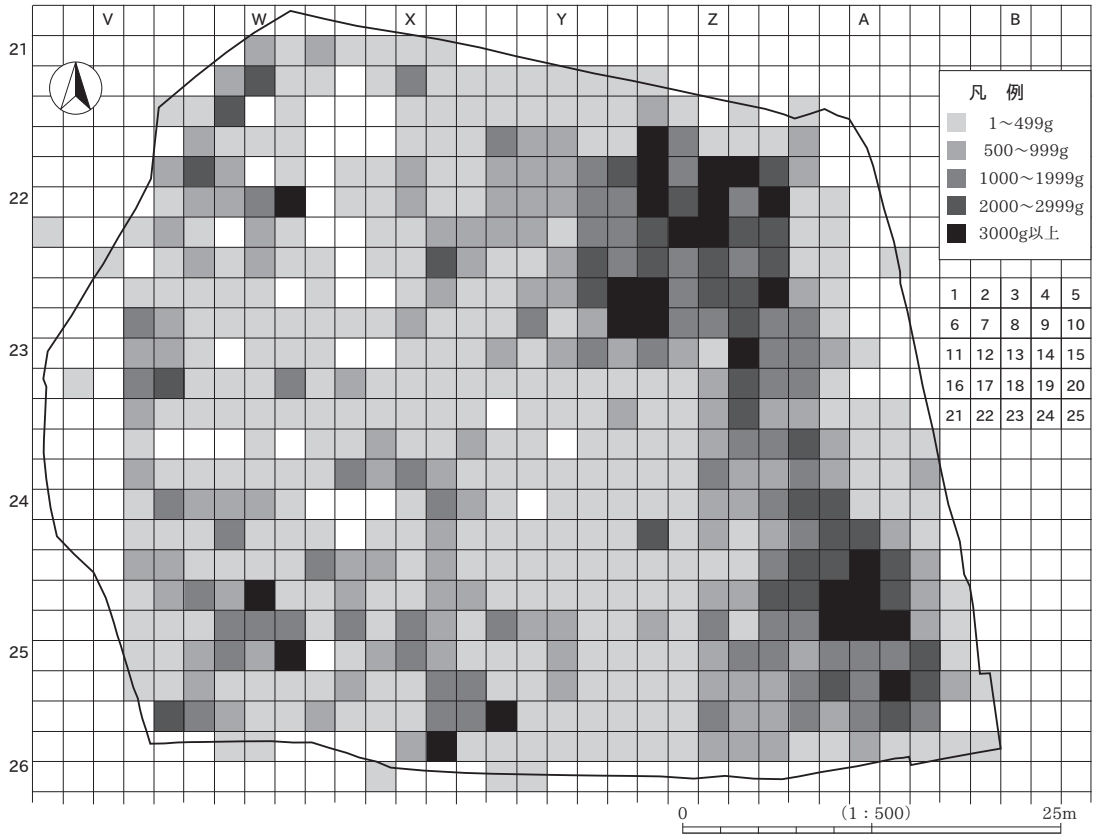
B 縄 文 土 器

1）分　　布

縄文土器は、平箱 76 箱、総重量 454.3kg 出土した。分布を見ると西側段丘裾に沿って集中が見られる（第 17 図）。すぐ西側の上位の段丘上には縄文中期から晩期にわたる大遺跡である剣野 B 遺跡があり、その西側斜面（剣野沢側斜面）には、土器捨て場がある。剣野沢遺跡は、位置関係から独立した遺跡でなく、剣野 B 遺跡の人たちの活動領域内の遺跡であり、山裾の土器集中は剣野 B 遺跡の土器捨て場の延長である可能性が大きい。この集中範囲と西側の自然流路（SR1）に挟まれた平坦面に掘立柱建物や埋設土器、土坑など帯状に分布する傾向が見られるが、ここの部分の土器の分布は比較的稀薄である。西側に 1 段低い自然流路（SR1）には比較的多く出土しており、剣野沢遺跡で使用された土器の可能性が大きい。

2）分　　類

縄文土器の時期的な分類については、隣接する大集落遺跡である柏崎市剣野 B 遺跡［品田ほか 2011］の分類（大別・細別）を参考にした。下記の分類は、報文中でさらに細別されているが、ここではおおまかな傾向を把握するために、この分類を基に記述する。また、細別についても可能な限り対比させ、観察表に記した。なお、中期の土器については［品田 2011］［寺崎 2009］、瘤付土器については［小林 2008］、加曽利 B 式土器については［秋田 2008］、高井東式土器については［林 2008］、御経塚式土器については［西野 2008］と［高堀 1996］、井口式土器については［高堀 1996］、八日市新保式土器に



第 17 図　縄文土器の重量分布図

ついては［高堀 1996］、三仏生式土器については［國島 1996］、新潟県の後期については［田中・渡邊 1999］、晩期については［渡邊・荒川 1999］をそれぞれ参考とした。

［剣野 B 遺跡の縄文土器の大別と細別］

第Ⅰ群　前期末葉・中期初頭以前の土器群

A 類（早期後半の土器）、B 類（前期の土器）、C 類（剣野 E 式土器）

第Ⅱ群　中期前葉新崎式期の在来系土器群

Ⅱ-1 群 A ～ F 類(蓮華文系土器)、Ⅱ-2 群 G ～ N 類(半隆起線･爪形文系土器)、Ⅱ-3 群 O 類(半粗製土器)、Ⅱ-4 群 P 類（浅鉢形土器）

第Ⅲ群　中期前葉新崎式期の異系統・外来系土器群

A 類（中部高地･関東西部（五領ヶ台式系））、B 類（関東東部（阿玉台式系））、C 類（東北南部（大木 7b 式系））、X 類（所属不明・その他の土器）

第Ⅳ群　中期中葉・後半の土器群

A 類（馬高式土器）、B 類（大木 8a 式土器）、C 類（大木 8b 式土器）

第Ⅴ群　後期前葉の土器群

A 類（三十稲場式系土器）、B 類（南三十稲場式系土器）

第Ⅵ群　後期中葉の土器群

A 類（三仏生式土器（古））、B 類（三仏生式土器（新））、C 類（酒見式系土器）

第Ⅶ群　後期後半期の土器群

A 類（深鉢形土器）、B 類（椀形･鉢形土器）、C 類（注口土器）、D 類（井ノ口式土器）、E 類（八日市新保式土器）

第Ⅷ群　晩期の土器群

A 類（大洞 B1 式期の土器）、B 類（大洞 B2 式期の土器）、C 類（大洞 BC 式期の土器）、D 類（大洞 C1 式期の土器）、E 類（大洞 C2 式期の土器）、F 類（大洞 A ～ A' 式期の土器）、G 類（御経塚式系の土器）、H 類（中屋式系の土器）、I 類（佐野式系の土器）、J 類（列点文施文土器）、K 類（横位平行沈線文の土器）、L 類（半粗製土器）、X 類（所属不明・その他の土器）

第Ⅸ群　ミニチュア土器・小形土器

第Ⅹ群　粗製土器群

A 類（縄文）、B 類（撚糸文）、C 類（条線文）、D 類（無文）

3）遺　構　出　土

P632（図版 38・78-1）

1 は掘立柱建物 SB6 の北東隅の柱穴から出土した。注口土器の緩く反る注口部で、無文である。漆による補修が認められる。後期であるが、時期限定できない。

P594（図版 38・78-2）

2 は緩い波状を呈する深鉢の口縁部で、鋸歯状の沈線と縄文が縁を巡る。沈線による文様区画で、無文部もある。後期後葉の瘤付土器の段階と考える。

P690（図版 38・78-3）

3 は前期末葉～中期初頭の深鉢の平口縁である。口縁の肥厚部と半隆起線文の間は、格子目沈線文で充填される。

P714（図版 38・78-4）

中期前葉の小型の深鉢。内面は丁寧なミガキが施され、外面は縄文 LR。口縁部は四単位の突起が想定できる。口唇部の一部は内傾する面を持つ。底面に笹の葉のような平行する葉脈痕が認められる。

埋設 701（図版 38・78-5）

やや膨らみのある深鉢下半部で、無文である。

埋設 702（図版 38・78-6）

やや膨らみのある深鉢下半部。歪みがあり､片側がひろがる。上部にわずかに縄文の縦条が認められる。

埋設 703（図版 38・78-7 ～ 9）

7 は深鉢口縁部破片。口縁部縄文 RL を横施文。体部は縦位に転がす。体部の縄文は付加条（縄巻縄）か。縄文後期、北陸系と考えられる。8 は深鉢下半部。条痕文が縦位に施文される。9 は深鉢体部破片。無文であるがミガキが認められる。

SK349（図版 38・78-10）

深鉢底部。無文で、内面コゲ。

SK604（図版 38・78-11）

口縁部と底部を欠損する壺。やや広口の頸部で体部は丸く膨らむ。体部は縄文 LR。縄文施文後、頸部下の縄文施文接点部分に強いナデを一周させる。縄文晩期大洞 C1 ～ C2 段階。

SX711（図版 38・78-12）

直線状に開く深鉢で、底部を欠損する。前面に縄文が施される。結束の認められない羽状縄文で上半は

縦、下半は横施文である。縄文前期であろうか。

SK608（図版 39・78・79-13 ～ 15）

13 は口縁部に小突起を持つ深鉢。4 単位になると考えられる。角板状の浅い沈線で文様区画しているが、沈線は浅く不明瞭である。縄文は LR で、施文方向は不規則である。口縁に沿っては帯状に縄文が巡る。磨り消しも雑で、区画沈線施文具と同一工具でなでている。外面スス付着。後期瘤付土器。14 は粗製深鉢。底部を欠損する。器面はなめらかでなく凹凸があり、全面縄文 LR 施文であるが。方向は不規則である。15 は深鉢上半部破片。縄文 LR の条が縦に走る。

SK609（図版 39・79-16）

直線状に開く深鉢の口縁部から胴部破片。16a は口縁部。横沈線が数本走る。16b・c は体部。上部に横沈線が数本走る。下部は縄文（RL?）の条が縦走する。後期後葉か。

SR1（自然流路）（図版 39 ～ 41・79 ～ 80-17 ～ 55）

自然流路からの出土で、各期の土器が出土している。17・18 は斜格子目文や細竹管文の爪形文等前期末から中期初頭の特徴を持つ。19 ～ 21 はやや太い半隆起線文と格子目文で中期初頭から前葉の特徴を持つ。22 は当該期の縄文深鉢。結節縄文 LR を縦位に施文。23 は後期前葉南三十稲場式土器の口縁部破片。24・25 は加曽利 B1 式段階の浅鉢。26 も同期の壺と考えられる。27 は無文の浅鉢である。28 ～ 45 は後期後葉の土器で、28 ～ 35・37・38 がいわゆる瘤付土器と言われているものである。28 ～ 31 は入り組み文を特徴とする。37 は注口土器口縁部で突起がある。38 は細い帯状の縄文である。39 は深鉢の中空突起で中部関東系の高井東式と考えられる。40 ～ 45 は口縁部破片。いずれも北陸系井口式に近いと思われる。45 は丁寧な造りで、口縁端部は貼り付けで肥厚し廂状に外方へ張り出す。口縁帯には 2 条の沈線が沿い、中央は無文、上部に縄文 LR、下部に縄文 RL が認められる。欠損した上端部に円形の押圧が附随する。ススが全面に付着する。北陸系と考えるが、さらに西の土器の系統の可能性もある。46 ～ 51 は縄文晩期である。46 は粗製深鉢。口縁端部に刻みを付す。47 は口縁外反する鉢で大洞 BC 期。48 は平行沈線間に細かい縄文 LR の鉢で大洞 C2 式期。49・50 は大洞 A 式期の粗製深鉢。51 は鉢の口縁部である。口縁端部はひだ状で、受口状となる。4 本の平行沈線が走り、下端は縄文 RL。赤彩が施される。大洞 A 段階。52 は粗製の深鉢。口縁肥厚し、縄文 RL? が横施文される。体部は縄文？が縦走する。53 は斜格子目状の沈線。54・55 は底部である。

4）包 含 層 ほ か

縄文前・中期（図版 41・80-56 ～ 71）

56 は、波状口縁になると考えられる。口縁部は肥厚し、端部は面取りされ、ソーメン状の貼付文が縦に連続する。肥厚部には深い三角形印刻が交互に配され、鋸歯状としている。以下には結節の浮線文が 3 状 1 単位で直線、弧線を描いている。前期後葉の諸磯 C 式期。57 は、口縁部突起で細いソーメン状浮線文の斜格子が施される。前期末の十三菩提式に近い。58 も口縁部破片。無文部に、横に 2 条の隆帯を貼り付け、上下交互に隆帯を押し付けることにより波状にしている。同じく前期と考えられる。59 は体部破片。竹管平行線による三角形区画で、横沈線を充填する。体部に縄文？。前期末によく見られる文様。

60 はいわゆる剣野 E 式によく見られる深鉢口縁部文様。口縁端部は縄圧痕と思われる。その下が斜格子目文で、縄圧痕のある隆帯が巡る。61 は口縁から体部にかけての破片。口縁部と頸部下半に半隆起線文に挟まれて楔形印刻文による蓮華文が付される。胴部には撚糸文 L が縦走する。62 も 61 に同じく楔

形印刻文による蓮華文であるが、幅が狭い。頸部無文。63 は横平行半隆起線が密に連続し、口縁端部とその下及び 3 本おいた下部に連続爪形文が付される。64 は口縁部縄文地上に楔形印刻と半隆起短線による蓮華文、その下には連続爪形文がある。65 も口縁部破片。波状口縁で、波頂部に縦隆帯を付す。口縁に沿って半隆起線と爪形文が施される。66 は深鉢底部。底部は外方にふんばる。太い半隆起線と格子目文の充填が見られる。底部網代底。67 は口縁部に縦半隆起線が連続する。中部高地系。68 も深鉢。半隆起線と爪形文である。隆帯上にも爪形文が付される。69 は大形深鉢の体部下半部。器厚は厚い。半隆起線による縦横区画。縄文は RL。70 は無文のキャリパー形深鉢。中期前葉にみられる器形。71 は中期中葉の深鉢口縁部破片。隆帯による剣先文と細沈線による充填が見られる。頸部は無文。

縄文後期（図版 41 ～ 45・80 ～ 83-72 ～ 169）

72･73 はいわゆる三十稲場式土器である。典型的な突き刺し刺突が施される。73 は頸部に突帯が巡り、刺突が付される。74 は大形の深鉢。体部上半はほぼ直立し、下半は底部に向けて急速にすぼまる。口縁やや肥厚し、6 個の小突起が付く。口縁に沿ってめぐる沈線間に斜位短沈線が充填される。体部無文である。75 は深鉢。口縁は無文で、その下に斜刻みの付された隆帯が巡る。口縁無文帯部には大きな半球形窪みが連続する。体部には太くて浅い沈線が縦方向に文様区画する。地文は縄文 LR。76 は鉢。口縁部は内側に大きく内湾し、ほぼ水平となる。口縁端部には短沈線が縦に連続する。その下は半隆起線が細長い楕円状に巡り、5 単位となる。体部上半には、2 本沈線による大きな波状文が付される。全体に細沈線が充填される。下半部は無文。77 は壺と考えられる。底部大きく、最大径を持ち、頸部に向かって緩くすぼまる。上端でわずかに頸部が認められる。2 本沈線による菱形文が連続する。縄文は LR で区画内を充填している。2 本沈線間は無文である。

78 は後期中葉加曽利 B1 式の深鉢または鉢で、口縁はやや内傾する。外面には 4 本単位の沈線束が 2 段巡る。内面は口縁近くに断面三角形状の隆帯が巡り、その下に 5 本の沈線が巡る。無文である。79 も類似の土器。口縁は外方に向かって開くが、端部は内傾し、キザミが付される。外面ほぼ等間隔に横平行沈線が引かれ、交互に縄文 LR が付される。この横沈線は段ごとに縦沈線で切られる区切り文である。内面口縁下には隆帯が一周する。またその下には 4 本の沈線が巡る。内面荒れている。80 は浅鉢であろう。口縁は外方に開く。外面沈線下に条線が横方向に走る。内面には口縁下に隆帯が走り、口縁との間に円形でやや深い刺突が巡る。81 は小型の壺または注口土器の肩部。かなり薄手。上部に斜短沈線が巡る。その下には竹管半隆起線による重菱形文が見られる。82 も壺または注口土器の口縁部破片。口縁に沿って肩部に沈線が走る。その間にカッコ文で､中に縦沈線が入る。補修孔と思われる孔がある。83 は小型の壺。無文で下半部に沈線が巡る。84 は無文の浅鉢である。口縁部内湾し、小突起が 2 個つく。85・86 は同一個体。口縁部に付く大形の突起で中は中空となる。翼状鉢巻隆帯が巡る。86 は口縁接着部である。87 は大きく開く波状口縁部。頂部に舌状隆帯がある。口縁に沿っては無文帯でその下に隆帯が巡る。以下は区切り平行沈線である。88 は薄手口縁部破片。口縁はくの字で直立する。口縁部には細く浅い沈線が数本施文された後、2 条の連続刺突が巡る。89 は壺頸部から体部破片で体部にやや膨らみを持つ。体部には細い沈線による鋸歯状文が縦に配される。いずれも後期中葉と考えられる。

90 ～ 94 はいずれも波状口縁の深鉢。口縁に沿っては帯状に縄文が巡る。以下は磨り消し縄文となる。91 は全体器形がほぼ窺える。体部中央が緩くすぼまり、下半は少し膨らむ。口縁は波状となる。体部中央は沈線による横区画の磨り消し縄文で、上下に鋸歯状沈線が巡る。その上下には、入字状の沈線区画が認められる。95・96 も同様波状口縁である。97 は平口縁。クランク状区画で、区画内縄文。98 は体部

破片。入り組み文である。99 ～ 102 は口縁部に割瘤が付される。横位帯状磨り消し縄文で、入り組み文も見られる。103 ～ 105 は波状口縁の波状部。103 は口縁に沿ってキザミ、105 には瘤が認められる。106 は、口縁 U 字状の突起。中央に刻みのある割瘤がある。107 は三角突起で端部にハの字状に鋸歯状沈線が付される。108 は口縁に沿って帯状の縄文で、円形十字割瘤が付される。109 は口縁部帯状に肥厚し、瘤にハの字状キザミがある。110 は平口縁で口縁に沿って横ハの字状沈線が巡る。111 は口縁短く外反し、端部にハの字状沈線が付される。中央に穴のある瘤が付される。瘤を中心に左右対称の文様。沈線による帯状の区画内には縄文が付され、やや肥厚する。黒及び赤漆が認められる。112 は太くて深い沈線。113 は脚状の突起。突帯が巡る。114 は帯状の区画に縄文 LR が充填される。115 は、横長の割瘤で縦沈線が走る。116 は体部下半で、縄文 RL 施文後、横沈線を 4 本引いている。上部は無文。117 は鉢。口縁部に中央が少し窪む円環状浮文がある。また不安定な沈線格子目が浮文をつないである。118 ～ 122 は口縁部破片。119・120 は壺または注口土器の可能性がある。118 ～ 120 は口縁に沿って鋸歯状に沈線が巡る。118・121 には瘤が添付される。122 は壺または注口土器口縁部。横磨り消しで、縄文施文部はやや肥厚する。123 は壺または深鉢と考えられる。背の高い隆帯上に縄文 LR が施され、無文部を挟んで 2 条の沈線間に刺突が充填される。124・125 も壺または注口土器と考えられる。124 は細い沈線による文様区画、帯状の細い隆帯上に縄文が付される。125 は微隆起線による文様区画。126 ～ 129 は台付鉢または甕の底部。いずれも無文である。130 ～ 132 は多孔底土器である。133・134・136・137 は壺または注口土器と考えられる。133 は口縁及び突帯部分に鋸歯状沈線が巡る。134 は縦割瘤と沈線区画内に縄文充填である。136 は同心円状に削り出しによる隆帯が巡り、楕円形刺突が付される。また、割瘤も付される。137 は細かい縄文施文後、横沈線を配する。138 は壺と考えられ、複雑な沈線区画がある。135・140 ～ 144 は注口土器の注口部。139 も注口土器と考えられる。145 ～ 151 は深鉢口縁部。145・147 には貼付文が付く。沈線による帯状の区画には縄文が付される。150 は無文。152 は鉢と考えられる。口縁に沿った沈線切れ目に円形刺突がある。153・154 は浅鉢であろう。口縁部は直立し、体部は内側に強く屈曲する。153 は口縁部に縦 2 本の貼付文。154 は沈線が巡る。以上 145 ～ 154 は北陸井口式に類似する。155 ～ 157・161 ～ 164 は北陸系八日市新保式と考えられる。155･156 は波状口縁。口縁に沿って、沈線、縄文が付される。157 は口縁下部で、縦の沈線が見られる。158 は波状口縁で端部に縄文が付される。159・160 は縦瘤状の貼り付け浮文が見られる。161 は波状口縁で、三叉状連結文が見られる。162 も深鉢口縁部。沈線による三叉状文が施される。163 は鉢と考えられる。細い沈線による楕円区画がある。164 は壺と考えられ、楕円の眼鏡状隆帯が認められる。165 ～ 168 は関東中部系の高井東式と考えられる。165 は波状口縁深鉢波頂部。波頂部は三角形に鋭く尖り、口縁に沿って隆帯上に縄文が付される。また、頂部にボタン状浮文が 2 個縦に付く。166 は波状口縁頂部と考えられる。橋状把手が付く。167･168 も波状口縁。隆帯による区画で､隆帯上には刻みが付される。

169 は南三十稲場式にも類似するが、沈線が太く、系統・時期が明確でない。

縄文晩期（図版 45・46・83-170 ～ 187）

170 ～ 172 は北陸の御経塚式であろう。171・172 には三叉文がある。172 は浅鉢と思われる。173 は亀ヶ岡系大洞 B1 式、174 は大洞 B2 式と考える。175 ～ 179 は羊歯状文が特徴的な大洞 BC 式である。180・181 は大洞 C1 式、183 ～ 185 は大洞 A 式である。185 の壺は体部上半の段が特徴的である。186･187 は大洞 A ～ A' 式の深鉢。186 は口縁部に沈線で、頸部無文で体部は網目状撚糸文である。187 は頸部すぼまる。体上部に沈線文様。188・189 はミニチュア土器底部。190 ～ 193 は後・晩期の

粗製土器である。

C 土　製　品

土　　偶（図版 52・87-304 ～ 311）

土偶は可能性のあるものを含めると、16 点出土している。その内、部位が明確な 8 点を掲載した。

304・305 は中期の土偶と考える。土器の時期的な量比から、中期前葉の所産である可能性が高い。304 はいわゆる河童形土偶の頭部である。円盤状の芯部を造り、その後に粘土紐を巻き、縦方向の刻みを施して、菊花状の頭髪としている。一体化した波状の眉と鼻は微隆起し、眼および口は半円状の刺突により表現される。頸部との接合痕は、摩耗のため不明である。305 は体部上半の左胸部で、円錐状の胸は高さ 1cm 程である。欠損部はかなり摩耗しているが、体部中央に位置する欠損部には、縦方向の植物質の圧痕が数本認められる。類例は知らないが、植物を束ねたものを心棒として作成した可能性もある。縦方向の分割塊で製作されるものは中期に多いので、中期土偶と考えた。

306 ～ 311 は後期後葉から晩期前葉の特徴をもつ土偶である。306 は顔面が円形を呈する頭部で、耳部が欠損する。中空品で、目は貼付 + 刺突で表現され、口部も刺突となる。裏面頭頂部にも円孔が認められるが、貫通はしていない。T 字に近い眉と鼻は微隆起し、鼻の下端がやや横に広がる。顔面の文様は浅い沈線で描かれ、口部両脇には対向する横 V 字文が描かれる。浅く幅広の沈線が後頭部～頸筋にかけて、横位に数条認められるが、調整なのか意図的な文様なのか不明である。残りは悪いが、顔面のほぼ全面に赤彩が施されている。307 も顔面が円形に近い頭部で、眉・鼻は T 字状の貼付けである。目は三角形に近い刺突で、口部も刺突である。縁に沿って沈線が残る。頭頂部の前寄りが筋状に浅く窪んでおり、306 のような頭頂部を意識していた可能性がある。耳部は端部を欠損するが、貫通痕が残り、耳孔は径 2.5mm 程である。308 は右腕部で、付け根部が太く、手に向かって先細りとなる。断面は面取りされた楕円形を呈する。湾曲する二の腕から一の腕が垂下し、手部でわずかに外側に屈曲する。309 は体部上半で、円錐形の乳房が貼り付けられる。上方から浅い沈線で描かれた正中線は短く、胸部で止まる。背面には 2 条の沈線による、右下がりの釣針状の袈裟懸け文が認められる。体部横断面はほぼ長方形を呈し、左側面は直線的だが、右側面は浅く窪む。310 は体部下半で、腹部は平坦である。右脚部の欠損部を中心に黒褐色系の補修材が認められるが、材質は不明である。背面上部に 2 条の沈線による入組み文が描かれる。311 も体部下半で、腰部は左右外方に張り出し、正面にはほぼ全周するように無文の隆帯が巡る。正面には臍を意識した凹みがあり、背面上部に沈線による渦巻き文、または入組み文が描かれる。

有 孔 土 製 品（図版 52・87-312）

1 点出土した。312 は周縁を大きく欠損し、表裏面の剥落も多いが、その形状から直径 6cm 前後の円盤状を呈していたものと考える。中心付近の径 4mm 程の貫通孔は、表裏面から穿孔され、中央部がやや狭くなる。

耳　飾　り（図版 52・87-313 ～ 315）

3 点出土し、ほぼ全形が把握できるが、赤彩は認められない。それぞれの最大径と形状は 313 が径 4.1cm の鼓状、314 が径 2.8cm の臼状、315 が径 2.2cm で両者の中間的なものである。314 のみ貫通孔（径 7mm）が認められる。

D　石 器 ・ 石 製 品（図版 47 ～ 51・84 ～ 86）

今回の調査で出土した石器は、下層からの出土で、出土土器に対応する時期の所産であるが時期の細分はできない。

資料の提示は実測図、写真、観察表で行い、本文で分析を加えた。出土量は多くはないが、器種分類を行い、その中から好資料を選別し、図化・掲載した。石器・石製品全体の器種別数量及び図化数量、図化率は第 3 表のとおりであるが、全体の図化数は石製品を含めて 105 点、図化率は 9.4%である。図化はしていないが写真のみ掲載した石錘が 5 点ある。使用痕、付着物等は、スクリントーンで表現した。凡例は各図版に表示した。縮尺率は表のとおりである。

器　種　名		出土数	種別比	掲載数	図化率	縮尺率
剥片石器	石　鏃	77	0.074	17	0.221	2/3
剥片石器	尖頭器	2	0.002	2	1.000	1/2
剥片石器	石　錐	8	0.008	4	0.500	1/2
剥片石器	石　匙	2	0.002	2	1.000	1/2
剥片石器	石　篦	1	0.000	1	1.000	1/2
剥片石器	両極石器	115	0.111	5	0.043	1/2
剥片石器	不定形石器	245	0.236	15	0.061	1/2
	小　計	450	0.434	46	0.102	
礫石器	打製石斧	12	0.012	2	0.167	1/3
礫石器	磨製石斧(大)	107	0.103	10	0.093	1/3
礫石器	磨製石斧(小)	25	0.024	4	0.160	1/3
礫石器	石　錘	95	0.092	13	0.137	1/4
礫石器	磨石類	333	0.321	14	0.042	1/4
礫石器	砥石類	5	0.005	2	0.400	1/3
礫石器	石皿類	11	0.011	2	0.182	1/5
	小　計	588	0.566	47	0.080	
石　器　合　計		1038	1.000	93	0.090	
	石　核	59		2	0.034	1/2
	剥片類	852		0	0	
	小　計	911		2		
石器類合計		1949		95	0.049	
石製品	石棒類	18		4	0.222	1/3
石製品	不明品	1		1	1.000	1/3
石製品	有孔品	2		2	1.000	1/2
石製品	不明品	3		3	1.000	1/2
石製品合計		24		10	0.417	
剥片を除く石器・石製品総計		1121		105	0.094	
	チップ	236		0		
	自然礫	289		0		
	被熱礫	61		0		
	軽　石	11		0		
	珪化木	1		0		

第 3 表　石器・石製品類一覧表

1）石　　器

出土した石器は第 3 表のとおりである。石核、剥片を含めた総数は 1949 点、石核・剥片を除いた石器は 1038 点である。

石　鏃（図版 47・84-194 ～ 210）

基部の形状により凹基有茎（194）、凹基無茎（195 ～ 199）、凹基五角形（200）、平基無茎（201･202）、凸基有茎（203 ～ 208）、尖基（209･210）に分類した。凹基有茎(194)は 1 点で、裏面に主要剥離面を残す。流紋岩製で、基部にアスファルトの付着が認められる。凹基無茎（195 ～ 199）は形状にバラエティーがある。195・196 は長さに対して幅の比率が大きく、側縁は丸みを持つ。基部の抉りも深い。196 にはアスファルトの付着が見られる。198･199 は細身で細長い。198 は基部抉りが深いが 199 は浅い。200 は側縁基部側で膨らみを持ち、五角形を呈するので凹基五角形とした。平基無茎（201・202）のうち 201 はやや細身で、202 は正三角形に近い。凸基有茎（203 ～ 208）にも形状にばらつきがある。203・204 は基部が長く幅広である。203 は裏面に主要剥離面を大きく残し、調整は縁辺のみである。205 は茎部欠損する。細身で小型である。206 は先端及び茎部を欠損する。207 は断面三角形状で厚みがある。茎部を欠損する。208 は茎部のほうが長い。203・206 にアスファルトの付着が認められる。尖基（209・210）は尖頭器または石槍様である。209 は両端欠損するが柳葉形である。210 は基部が長く石槍に近い。裏面に主要剥離面を大きく残す。横長剥片を素材とする。基部にアスファルトの付着が認められる。

尖頭器（図版 47・84-211・212）

211 は中央やや外れて両端対称に浅い抉りがある。両面に主要剥離面を大きく残す。212 は横長剥片を利用しているが、未成品と思われる。左右非対称で、全面に調整が及ばない。

石　錐（図版 47・84-213 ～ 216）

213・214 は基部が幅広の定型的な石錐である。213 は先端を欠損する。刃部の断面は五角形に近い。214 は断面三角形で、先端部使用痕が認められる。215 は不定形石器を利用している。2 か所に先頭部があり、1 か所に使用痕が認められる。216 は細長く、全面に調整を施した尖頭器様錐である。断面菱形である。

石　匙（図版 47・84-217・218）

いずれも横長の石匙。表裏面に主要剥離面を残し縁辺に調整を施している。

石　箆（図版 47・84-219）

形状は打製石斧に類似。刃部は主要剥離面を大きく残す。全面粗い調整。

両極石器（図版 47・84-220 ～ 224）

いずれも礫素材で、自然面を残す。220 は上下、左右に打点が認められる。221 は両端に自然面を残す。これも上下左右に打点が認められる。222 は上下に打点が認められ、自然面を大きく残す。223 は小型。上下に打点がある。224 は上下、左右に打点がある。

不定形石器（図版 48・84・85-225 ～ 239）

「剥片を素材とし、二次加工や使用痕が認められ、定形石器でない石器」を不定形石器とした［高橋雄 1992］。総数 245 点で、全石器（剥片、チップを除く）1,038 点中の 23.6%を占める。小型のものが多いために、判別しがたいものが多く、意図的な二次加工と判断できるものを対象とした。

分　　類　刃部形状を主眼として分類を行った。分類に当たり、元屋敷遺跡上段［高橋雄 2002］、アチヤ平遺跡上段［高橋優 2002］等を参考にした。複数の側辺に刃部が施されている場合は、二次加工の長さ、丁寧さ、施された部位の観点から、より主要な刃部と判断した部位で分類した。

A 類（225 ～ 228）　剥片の縁辺に連続的な二次加工が施されて、滑らかな刃部が作出されたものである。刃部は片面加工で作出されたものを基本としており、断面形は片刃を呈する。いわゆる削器・スクレイパーと呼称されるものである。刃部角で細分した。

A1 類（225・226）　刃部の角度が 45 度以上と急角度のもの。

A2 類（227・228）　刃部の角度が 45 度以下と浅角度のもの。

B 類（229）　連続的な二次加工が施され、鋸歯状の刃部を持つものである。片面調整が多く、刃部断面形は片刃が主体である。鋸歯縁石器と呼称されていたものに相当する。

C 類（230・231）　素材の両面に連続的な二次加工が施されたものである。両面加工のため、刃部断面形は両刃が主体となる。

D 類（232）　抉入状の刃部を有するものである。抉入石器・ノッチと呼称されていたものに相当する。

E 類（233）　素材の端部または一部に連続的な二次加工が施されたものである。

F 類（234・235）　不連続な二次加工が施されたものである。剥離の大きさにより細分した。

F1 類（234）　小型の不連続剥離が施されたもの。

F2 類（235）　中・大型の不連続剥離が施されたもの。

G 類　鋭利な先端部を持つものである。該当するものはない。

H 類（236・237）　刃部の加工は明瞭でないが、使用の結果と思われる剥離が観察できるものである。鋭利なため欠けやすく、微細剥離も含まれる。

I 類（238・239）　急斜度の剥離で、総体的に小型であり、刃部の可能性は残すが、十分機能しないと

思えるもの。石鏃などの定形石器の未成品と思われるものが多く含まれる。

石　核（図版 48・85-240・241）

240 は多面からの調整剥離が認められる。241 は両端から縦長剥片素材が作出されている。

打製石斧（図版 49・85-242・243）

242 は短冊形に近い。基部に自然面を一部残す。刃部裏面には摩耗痕が認められる。243 は両端を欠損する。形状から撥形になると考えられる。薄手である。

磨製石斧（図版 49・85-244 ～ 257）

大きさにより長さ 10cm 前後の大型（244 ～ 252）と長さ 5cm 前後の小型（254 ～ 257）に分類できる。大型のものでは基部が細くすぼまり、側縁に明確な稜を持つものが多い。247 は刃部のみ欠損している。249 では基部に敲打痕があり、250 では刃部に敲打痕があり、折損した基部にも一部敲打痕が認められる。248 は側縁に明瞭な稜は認められない。244 は基部のすぼまりがほとんどない。251 は大形で厚みがあり重い。252 は自然礫の縁辺に連続の剥離があるが、磨り痕は認められないので、磨製石斧の分類としては適当でないかもしれない。253 は磨り切り技法により切り出された端片である。小型品では、側縁の稜が明確なもの（254・256）とそうでないもの（255・257）とがある。255・256 では、刃部に刃こぼれが認められる。

石　錘（図版 50・85・86-258 ～ 275）

素材礫の形状により以下に分類した。素材礫が細長で長軸に対して左右ほぼ対称なものを A 類、左右非対称なものを B 類、ほぼ円形なものを C 類とした。また、抉りが長軸の上下にあるものを 1 類、左右にあるものを 2 類、上下左右にあるものを 3 類とした。258 ～ 262 は A1 類。形状、大きさにはばらつきがある。263 は B1 類。形状はやや下膨れ。264 は B2 類。左右の窪みが小さく、何らかの使用の結果窪んだ痕跡とも取れるが、一応石錘とした。表裏面にも敲痕がある。265・266 は C1 類。267 は上記分類に入らないため D 類とした。磨面、敲痕があることから磨石類が適当かもしれないが、窪みも認められることから一応石錘と分類した。268 ～ 275（271 ～ 275 は写真のみ）は集中して出土した。A、B、C 類ともあるが、全て 1 類である。長さは 7 ～ 8cm、幅は 6cm 前後と比較的そろっている。

磨石類（図版 50・51・86-276 ～ 289）

磨石類は五丁歩遺跡［高橋雄 1992］を参考とした。

A 類（磨痕）（276 ～ 280）　なめらかな球体面を持つ自然礫を用いている。279 は扁平で細長い。

B 類（磨痕 + 凹痕）該当なし

C 類（磨痕 + 敲打痕）（283）　283 は表裏面、側面に磨痕が認められ、端部に浅く敲打痕がある。

D 類（磨痕 + 凹痕 + 敲打痕）　該当なし

E 類（凹痕）（282）　282 は細長い扁平礫の表裏面に連続して凹痕がある。

F 類（凹痕 + 敲打痕）（281・285・286）　281 は表裏面に凹痕、側面に敲打痕がある。285 は表裏面に浅い凹痕、長軸両端部に敲打痕がある。286 は表裏面に連続した深い凹痕、短軸側面に浅い敲痕がある。

G 類（敲打痕）（284・287 ～ 289）　284 は俵状で、表裏、両側、両端に敲打痕がある。287 は細長い棒状で両端に敲打痕がある。288 は翡翠性のいわゆる多面体敲石。289 も翡翠性で敲打痕がある。

砥　石（図版 51・86-290・291）

290 は磨痕があまり明確でない。291 は両面を使用している。

石皿類（図版 51・86-292・293）

292 は脚付で、皿縁辺に縁を有する。293 は脚、縁なしである。

2）石　製　品（図版 51・86-294 ～ 303）

石　棒（図版 51・86-294 ～ 297）

294 ～ 296 は有頭石棒である。294 はいわゆる彫刻石棒で、削り出しにより顔を描いている。表裏対称の文様で耳状突起が付く。帯状文様には細い沈線が密に刻まれる。頭部は平らで磨痕が認められる。295 は頭部膨らみを持つ。括れ部に２条の沈線が巡る。296 は縦位に欠損する。前面磨きによりなめらかで、側面は面取される。下部の欠損部、両側面敲により括れ部を作出していることから、石棒の頭部と判断される。297 は加工痕は認められないが、棒状であることから石棒の可能性が高い。

その他（図版 51・86-298 ～ 303）

298・299 は扁平小型自然礫に穴をあけている。いずれも両面からの穿孔。300 は細長い自然礫の 1 側面に敲による凹がある。301 は自然礫に半球状の凹があるが、自然の可能性もある。302 は両側面にキザミがある。303 は扁平礫端部両面から斜め方向に磨った結果溝状となったと考えられ、砥石の可能性もある。

E　木　製　品（図版 52・87-316 ～ 318）

居住域に近接して自然流路が存在したが、水場を利用した遺構を構成する木材や、道具類の木製品は検出できなかった。柱根 2 点、柱根または杭 1 点を図化した。

316・317 は掘立柱建物の SB7 を構成する柱根で、それぞれ北西の P707、南西の P706 で検出した。同様な柱根は P710 でも残存していたが、遺存状況は悪い。丸木取りの柱根で、316 は径が 48.9 × 42.6cm、317 は径が 42.2 × 38.0cm を測る。底面は芯部分が隆起して伐採時の形状を残すが、小型工具により全面が調整され、平滑に仕上げられている。加工方向は一定せず、不規則である。318 は P704 から検出したもので、柱根または杭の可能性がある。径が 12.0 × 10.5cm の丸木取りで、SB7 の柱根と比較してかなり小型である。底面は 316・317 より尖度があり、縁辺部から中心に向かう調整が認められる。

第Ⅵ章　自然科学分析

1　放射性炭素年代測定（AMS 測定）

A　測定対象試料

剣野沢遺跡は、新潟県柏崎市剣野字鎌田 998-1 ほかに所在する。鵜川左岸の剣野丘陵を挟んだ、標高 9m 前後の谷間沖積地に立地する遺跡で、上層から鎌倉時代を主体とした中世の集落、下層から縄文時代の集落と当時の自然流路が検出されている。測定対象試料は、上層の SE244 から出土した木製鉢（試料⑬: IAAA-82534）、SD1 のほぼ中央に打たれた杭 40（試料⑭:IAAA-82535）、下層の P707（SB7）出土柱根（試料①：IAAA-121395）の合計 3 点である（第 4 表）。SB7 は検出面の深度等から、縄文時代の掘立柱建物跡と考えられている。

B　測定の意義

試料の年代測定により、出土遺構の時期を明らかにする。試料①は縄文時代の掘立柱建物跡の柱根と考えられるが、遺物量は中期前葉と後期後半の 2 時期に主体があることから、どちらの時期の建物跡なのか判断するための手がかりを得る。また上層の遺構に伴う木製品・杭を分析することにより、遺構の機能していた時期を把握したい。

C　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と第 4 表に記載する。

（3）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

D　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

E　算　出　方　法

（1）δ ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第４表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第４表上半に、補正していない値を参考値として第４表下半に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を第４表に、補正していない値を参考値として第４表に示した。

（4）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ=68.2%）あるいは２標準偏差（2σ=95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、試料⑬、⑭の暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース（Reimer et al. 2004）、OxCalv4.0 較正プログラム［Bronk Ramsey 1995； Bronk Ramsey 2001； Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001］を、試料①の暦年較正年代の計算に、IntCal09 データベース（Reimer et al. 2009）、OxCalv4.1 較正プログラム［Bronk Ramsey 2009］を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第４表に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C（‰）（AMS）	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-82534	試料⑬	上層：SE244 ６層	木製品(鉢)	AAA	-27.01 ± 0.72	890 ± 30	89.56 ± 0.37
IAAA-82535	試料⑭	上層：SD1- 杭 40	木製品(杭)	AAA	-28.55 ± 0.52	600 ± 30	92.86 ± 0.36
IAAA-121395	試料①	下層：P707（SB7）	柱根	AAA	-27.16 ± 0.39	3,080 ± 30	68.11 ± 0.25

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-82534	920 ± 30	89.19 ± 0.34	886 ± 32	1052calAD − 1080calAD（19.6%） 1129calAD − 1133calAD（ 2.4%） 1153calAD − 1211calAD（46.2%）	1040calAD − 1110calAD（32.7%） 1116calAD − 1219calAD（62.7%）
IAAA-82535	650 ± 30	92.18 ± 0.34	595 ± 31	1310calAD − 1360calAD（53.7%） 1387calAD − 1401calAD（14.5%）	1298calAD − 1371calAD（69.4%） 1378calAD − 1411calAD（26.0%）
IAAA-121395	3,120 ± 30	67.81 ± 0.22	3,084 ± 26	1409calBC − 1371calBC（38.7%） 1346calBC − 1316calBC（29.5%）	1424calBC − 1293calBC（95.4%）

〔参考値〕

第４表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

F 測 定 結 果

試料の ^{14}C 年代は、SE244 出土木製鉢（⑬）が 890 ± 30yrBP、SD1 の杭 40（⑭）が 600 ± 30yrBP、P707（SB7）出土柱根（①）が 3080 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、⑬が 1052 ～ 1211cal AD、⑭が 1310 ～ 1401cal AD、①が 1409 ～ 1316cal BC の間に各々複数の範囲で示される。⑬は古代から中世頃、⑭は中世に当たる年代値となっている。①は縄文時代後期後葉頃に相当し［小林編 2008］、主体的に遺物が出土した時期の一方に合致すると見られる。

試料の炭素含有率はいずれも 50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

文　献

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy： the OxCal Program, *Radiocarbon* 37（2），425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43（2A），355-363

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51（1），337-360

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43（2A），381-389

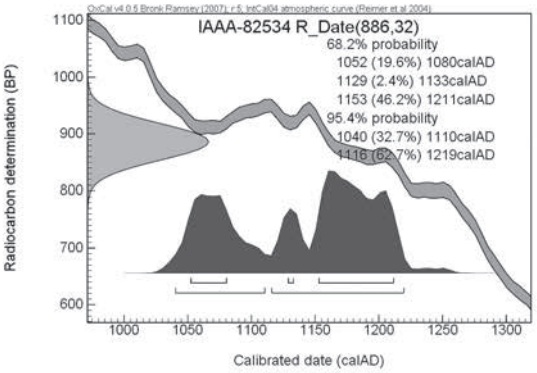
小林達雄編　2008　総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

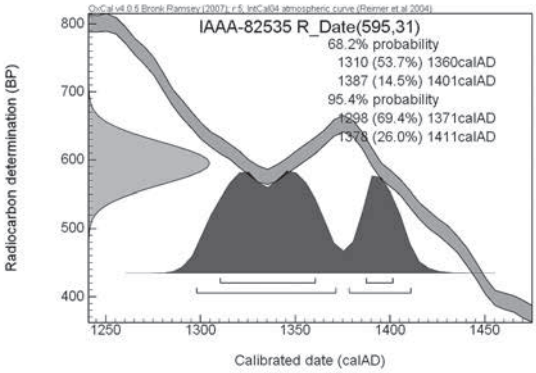
Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

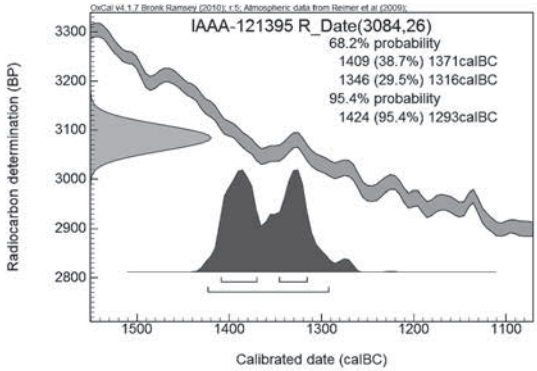
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51（4），1111-1150

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion： Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19（3），355-363

［参考］暦年較正年代グラフ







2　花粉分析・植物珪酸体分析

A　試　　料

試料は、調査区西側より検出された鎌倉時代の耕作痕の可能性が示唆される、浅く平坦な掘込および周辺より採取された土壌である。試料採取地点は、掘込北側（北壁;21Y19 グリッド）、西側（西壁;23X12 グリッド）、南側（南壁;26Z6 グリッド）の 3 地点であり、採取試料は北壁 21Y グリッド（以下、北壁）のⅢ a、Ⅲ b、IVa 層（上位から試料番号 1 ～ 3）、西壁 23X グリッド（以下、西壁）のⅢ a、Ⅲ b、Ⅲ b'、IVa 層（上位から試料番号 1 ～ 4）、南壁 26Z グリッド（以下、南壁）ではⅢ a、Ⅲ b、Ⅲ c、IVa 層（上位より試料番号 1 ～ 4）の計 11 点である。このうち、西壁のⅢ b' 層は、下位の IV 層に由来すると考えられる偽礫が混じる状況から耕作土の可能性が指摘されている。

また、本遺跡の下層調査時の土層ベルトより、柱状を呈する塊状の土壌試料（以下、柱状試料）が採取されている。22X22 グリッド採取の本試料は、高さ約 48cm、幅・奥行約 14cm を測り、発掘調査所見に基づく分層が為されている状態にあった。この土壌試料の観察では、下位より褐灰色粘土、上位に不整合で炭化物や木片（根材含む）、褐灰色粘土の偽礫が混じる暗灰色シルト、炭化物が混じり管状酸化鉄の発達が顕著な暗灰色シルト、下位の堆積物に比べ孔隙が発達し、やや暗色化する暗灰色シルトが確認された。観察所見および調査担当者からの提供資料を参考として、褐灰色粘土より土壌試料 2 点（試料番号 5，4）、炭化物や木片（根材含む）、褐灰色粘土の偽礫が混じる暗灰色シルトより 2 点（試料番号 3，2）、炭化物が混じり管状酸化鉄の発達が顕著な暗灰色シルトより 1 点（試料番号 1）を採取した。

上記した試料のうち、調査対象として優先とされた西壁；23X グリッドはⅢ a、Ⅲ b、Ⅲ b'、IVa 層の土壌試料 4 点、この他の地点では耕作の可能性が示唆されるⅢ c 層とその上位のⅢ b 層（北壁;21Y Ⅲ b 層、南壁;26Z Ⅲ b, Ⅲ c 層）、柱状試料では上記したⅢ層 b-c 層に相当すると考えられる炭化物や木片（根材含む）、褐灰色粘土の偽礫が混じる暗灰色シルトより採取した土壌試料 2 点（試料番号 2，3）を分析試料として選択した。これらの土壌試料 9 点を対象に花粉分析、植物珪酸体分析を行う。

B　分　析　方　法

1）花　粉　分　析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9，濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる微粒炭量も求める。炭片は 20μm 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表（第 5 表）、および主要花粉化石群集の層位分布図（第 18 図）として表示する。微粒炭量は、堆積物 1cc あたりに含まれる個数を一覧表・図として示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、各分類群の含量は 100 単位として表示する。100 個 /g 未満は「<100」で表示し、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に 100 単位として表示する。各分類群の植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

C　結　　果

1）花　粉　分　析

結果を第 5 表、第 18 図に示す。図表中で複数の種類を「－」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を「+」で表示するに留めている。以下に、各地点の産状を記す。

西　　壁

Ⅳa 層（試料番号 4）は花粉化石の産出状況が悪く、定量解析が実施できるだけの個体数を得ることが出来なかった。検出された種類は、木本類ではツガ属、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ブナ属が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節が、1 － 12 個体検出されるのみである。また、検出される花粉化石の保存状態は悪い。

Ⅲ b' ～Ⅲ a 層（試料番号 3 ～ 1）は花粉化石の産出状況が良く、保存状態も比較的良好である。いずれも草本花粉の占める割合が高く、イネ科が優占する。その他ではカヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴い、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ等の水湿地生植物に由来する花粉・胞子も検出される。また、試料番号 2 からは、栽培種であるソバ属も認められる。

木本花粉は、Ⅲ b' 層（試料番号 3）はブナ属が最も多く産出し、マツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う。Ⅲ b, a 層（試料番号 2, 1）はマツ属が最も多く産出し、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属、エノキ属－ムクノキ属等を伴う。層位的な変化を見ると、上位に向かってマツ属が増加し、スギ属、ハンノキ属、ブナ属は減少する傾向が認められる。

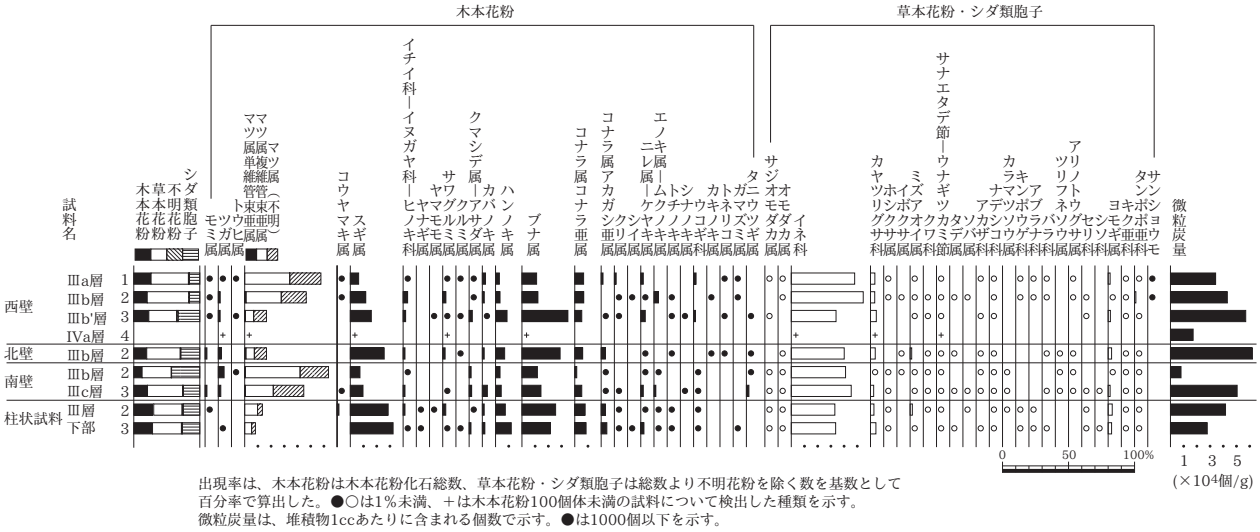
微粒炭量は、Ⅳa 層（試料番号 4）は約 17,200 個 /cc、Ⅲ b' 層（試料番号 3）は約 57,000 個 /cc、Ⅲ b 層（試料番号 2）は約 43,100 個 /cc、試料番号 1 が約 34,200 個 /cc である。

北　　壁

Ⅲ b 層（試料番号 2）からは、花粉化石が豊富に産出し、保存状態も良好である。群集組成をみると草

試料名	西壁 23X12				北壁 21Y19	南壁 26Z6		柱状試料 22X22	
分類群	Ⅲa層	Ⅲb層	Ⅲb'層	Ⅳa層	Ⅲb層	Ⅲb層	Ⅲc層	Ⅲ層 下部	
	1	2	3	4	2	2	3	2	3
木本花粉									
モミ属	1	1	1	−	3	−	3	1	−
ツガ属	1	3	3	2	5	9	4	−	1
トウヒ属	1	−	1	−	−	1	−	−	−
マツ属単維管束亜属	−	2	1	−	2	1	1	−	−
マツ属複維管束亜属	71	55	13	1	14	85	44	21	11
マツ属（不明）	49	39	20	−	20	44	48	8	6
コウヤマキ属	1	1	−	−	−	−	2	3	−
スギ属	13	24	33	3	56	15	20	62	68
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	2	7	4	−	3	2	3	3	2
ヤナギ属	−	−	−	−	−	−	−	1	1
ヤマモモ属	−	−	2	−	−	−	−	1	−
サワグルミ属	1	5	2	1	4	−	2	5	1
クルミ属	1	−	2	−	1	−	−	−	2
クマシデ属−アサダ属	2	2	5	−	−	3	4	1	3
カバノキ属	5	3	1	−	3	−	8	3	4
ハンノキ属	6	7	18	−	15	7	9	16	25
ブナ属	23	25	72	4	63	24	30	55	45
コナラ属コナラ亜属	14	14	11	−	13	3	11	17	18
コナラ属アカガシ亜属	3	−	2	−	7	1	2	7	9
クリ属	3	1	1	−	−	−	1	2	2
シイ属	−	1	−	−	−	−	−	−	1
ニレ属−ケヤキ属	4	2	7	−	2	1	4	2	5
エノキ属−ムクノキ属	−	7	−	−	−	1	3	1	1
フウ属	−	1	−	−	−	1	−	−	−
サンショウ属	−	−	−	−	−	1	−	1	−
キハダ属	−	1	−	−	−	−	−	1	−
ウルシ属	−	−	−	−	1	1	−	−	−
モチノキ属	−	1	−	−	−	−	1	−	−
カエデ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−
トチノキ属	−	1	1	−	1	−	−	2	1
ブドウ属	1	−	−	−	−	−	−	−	1
ノブドウ属	−	−	1	−	−	−	−	1	−
シナノキ属	−	−	1	−	−	−	1	−	−
ウコギ科	4	−	3	−	−	1	2	1	2
カキノキ属	−	2	−	−	2	−	−	−	−
ハイノキ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−
イボタノキ属	−	−	−	−	−	1	−	1	−
トネリコ属	1	−	1	−	1	−	−	−	−
ガマズミ属	1	1	−	−	−	−	−	−	1
タニウツギ属	−	−	1	−	2	1	4	−	−
スイカズラ属	−	−	−	−	−	1	−	−	−
草本花粉									
サジオモダカ属	1	−	4	−	−	1	1	3	1
オモダカ属	1	6	−	−	1	3	1	1	1
イネ科	374	543	301	12	441	670	449	233	245
カヤツリグサ科	26	32	39	2	40	13	24	18	30
ホシクサ属	1	1	−	−	−	1	1	1	1
イボクサ属	−	2	−	−	1	2	−	−	−
ミズアオイ属	6	6	8	−	13	7	1	12	2
ユリ科	−	−	−	−	2	−	−	−	−
クワ科	−	1	3	−	4	1	1	2	−
ギシギシ属	−	−	−	−	−	−	1	−	−
サナエタデ節−ウナギツカミ節	4	5	3	1	7	3	4	1	5
タデ属	−	1	−	−	2	−	1	−	3
ソバ属	−	1	−	−	−	−	1	1	−
アカザ科	4	−	1	−	2	2	2	−	2
ナデシコ科	2	1	1	−	4	2	1	1	2
カラマツソウ属	−	−	−	−	−	2	1	2	−
キンポウゲ科	1	1	−	−	−	−	−	1	2
アブラナ科	1	2	−	−	−	−	−	3	1
バラ科	1	1	−	−	2	−	2	−	1
マメ科	−	1	−	−	−	1	−	2	−
ツリフネソウ属	−	−	−	−	1	1	1	−	−
キカシグサ属	−	−	1	−	−	1	3	−	−
アカバナ属−ミズユキノシタ属	−	−	−	−	1	−	−	−	−
アリノトウグサ属	5	5	−	−	1	2	1	−	−
セリ科	−	2	3	−	−	−	2	2	1
ネナシカズラ属	1	−	−	−	−	1	1	−	−
シソ科	−	−	−	−	−	−	1	−	1
オオバコ属	−	1	−	−	−	−	−	−	2
オミナエシ属	1	−	−	−	−	1	1	−	−
ヨモギ属	12	9	15	−	29	8	15	22	19
キク亜科	2	2	1	−	3	1	6	2	3
タンポポ亜科	5	10	2	−	8	2	9	2	4
不明花粉	13	10	19	1	8	6	9	12	12
シダ類胞子									
ヒカゲノカズラ属	−	1	−	−	−	−	1	−	−
ゼンマイ属	1	−	−	−	−	−	−	−	−
サンショウモ	3	1	−	−	−	−	−	−	−
他のシダ類胞子	119	156	299	36	320	699	249	180	194
合　計									
木本花粉	208	206	207	11	218	205	208	216	210
草本花粉	448	633	382	15	562	725	531	309	326
不明花粉	13	10	19	1	8	6	9	12	12
シダ類胞子	123	158	299	36	320	699	250	180	194
総　計（不明を除く）	779	997	888	62	1100	1629	989	705	730

第５表　剣野沢遺跡の花粉分析結果一覧



第 18 図　剣野沢遺跡の花粉化石群集の層位分布図

本花粉の割合が高く、イネ科が多産する。その他ではカヤツリグサ科、ミズアオイ属、ヨモギ属等を伴い、オモダカ属、イボクサ属、ツリフネソウ属等の水湿地生植物も検出される。木本花粉ではスギ属、ブナ属が多く認められ、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属等を伴う。微粒炭量は、約 62,100 個 /cc である。

南　　壁

Ⅲ c, b 層（試料番号 3, 2）は、この他の地点と同様に産出量、保存状態とも良好で、草本花粉の割合が高い。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等の他、水湿地生植のサジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ツリフネソウ属や、栽培種のソバ属も認められる。木本花粉ではマツ属が多産し、ツガ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属等を伴う。

微粒炭量は、Ⅲ c 層（試料番号 3）は約 50,500 個 /cc、Ⅲ b 層（試料番号 2）は約 8,000 個 /cc である。

柱　状　試　料

Ⅲ b-c 層（試料番号 3, 2）とも群集組成は類似し、草本花粉の割合が高い。草本花粉は、前出の 3 地点と同様にイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴い、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、ソバ属等が検出される。木本花粉は、スギ属やブナ属が多く産出し、マツ属、ハンノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属等を伴う。

微粒炭量は、Ⅲ b-c 層下部（試料番号 3）は約 27,900 個 /cc、同上部（試料番号 2）は約 41,700 個 /cc である。

2）植物珪酸体分析

結果を第 6 表、第 19 図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるが、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各地点の産状を記す。

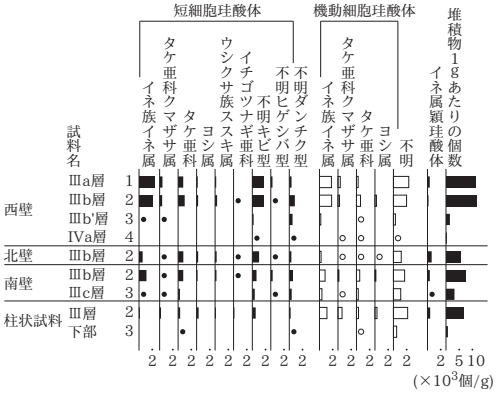
西　　壁

Ⅳa 層（試料番号 4）の植物珪酸体含量は約 300 個 /g と低い値を示す。検出された分類群も少なく、ク

（個／g）

試料名	西壁 23X12				北壁 21Y19	南壁 26Z6		基本土層 22X22	
分類群	Ⅲa層 1	Ⅲb層 2	Ⅲb'層 3	Ⅳa層 4	Ⅲb層 2	Ⅲb層 2	Ⅲc層 3	Ⅲ層 下部 2	3
イネ科葉部短細胞珪酸体									
イネ族イネ属	2,300	2,000	<100	−	600	1,100	<100	100	−
タケ亜科クマザサ属	400	400	<100	−	<100	<100	<100	200	−
タケ亜科	800	1,000	−	−	800	800	300	300	<100
ヨシ属	200	200	−	−	200	100	−	300	−
ウシクサ族ススキ属	200	300	−	−	200	200	−	100	−
イチゴツナギ亜科	−	<100	−	−	<100	<100	−	100	−
不明キビ型	1,700	1,800	200	<100	1,000	600	400	500	−
不明ヒゲシバ型	300	<100	−	−	<100	300	<100	−	−
不明ダンチク型	300	800	500	<100	300	600	400	200	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体									
イネ族イネ属	1,800	1,800	200	−	200	800	400	1,100	−
タケ亜科クマザサ属	300	200	−	<100	<100	100	<100	600	−
タケ亜科	300	600	<100	<100	<100	500	300	300	<100
ヨシ属	−	200	−	−	<100	100	−	300	−
不明	2,300	2,000	300	<100	1,200	1,700	1,100	2,200	500
珪化組織片									
イネ属穎珪酸体	300	200	−	−	600	400	<100	400	−
合　計									
イネ科葉部短細胞珪酸体	6,200	6,700	900	100	3,400	3,900	1,300	1,800	200
イネ科葉身機動細胞珪酸体	4,700	4,900	600	200	1,700	3,300	1,800	4,500	600
珪化組織片	300	200	0	0	600	400	100	400	0
総　計	11,300	11,700	1,500	300	5,700	7,600	3,200	6,800	700

第６表　剣野沢遺跡の植物珪酸体含量



堆積物1ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g 未満を示す。

第 19 図　剣野沢遺跡の植物珪酸体含量

マザサ属を含むタケ亜科等が検出されるのみである。

Ⅲb' 層（試料番号 3）は、植物珪酸体含量は約 1,500 個 /g と増加する。クマザサ属を含むタケ亜科のほか、栽培植物のイネ属の葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体は約 200 個 /g である。

Ⅲb 層（試料番号 2）とⅢa 層（試料番号 1）では、Ⅲb' 層に比べ植物珪酸体含量が増加し、2 試料とも約 1.1 万個 /g 程度である。検出される分類群も類似し、イネ属の葉部に形成される植物珪酸体や籾殻に形成される穎珪酸体も検出される。その含量は、短細胞珪酸体は 2,000 ～ 2,300 個 /g、機動細胞珪酸体は約 1,800 個 /g、穎珪酸体は 200 ～ 300 個 /g である。この他に、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族等が検出される。

北　　壁

Ⅲb 層（試料番号 2）の植物珪酸体含量は約 5,700 個 /g である。イネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約 600 個 /g、機動細胞珪酸体は約 200 個 /g、穎珪酸体は約 600 個 /g である。この他に、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。

南　　壁

Ⅲc 層（試料番号 3）の植物珪酸体含量は約 3,200 個 /g である。イネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は 100 個 /g 未満、機動細胞珪酸体は約 400 個 /g、穎

珪酸体は 100 個 /g 未満である。また、検出される分類群や含量が少なく、クマザサ属を含むタケ亜科等が認められるのみである。

Ⅲ b 層（試料番号 2）の植物珪酸体含量が約 7,600 個 /g と下位試料に比較して高い値を示す。イネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約 1,100 個 /g、機動細胞珪酸体は約 800 個 /g、穎珪酸体は約 400 個 /g である。この他に、クマザサ属を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科等が検出される。

柱　状　試　料

Ⅲ b-c 層相当下部に相当する試料番号 3 の植物珪酸体含量は約 700 個 /g と低い値を示す。タケ亜科等がわずかに検出されるのみである。Ⅲ b-c 層相当下部に相当する試料番号 2 の植物珪酸体含量は約 6,800 個 /g で、イネ属の葉部や籾殻に形成される植物珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体は約 100 個 /g、機動細胞珪酸体は約 1,100 個 /g、穎珪酸体は約 400 個 /g である。この他に、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科等が検出される。

D　考　　察

1）古　植　生

掘込周辺のⅣ～Ⅲ層の花粉分析の結果、西壁；23X グリッドの花粉群集では、IVa 層（試料番号 4）からは、花粉化石がほとんど検出されなかったが、Ⅲ b，a 層は各試料とも産出状況、保存状況は良好であった。

一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている［中村 1967；徳永・山内 1971；三宅・中越 1998 など］。IVa 層の花粉化石は保存状態は悪く、花粉外膜が破損している状況が認められたことから経年変化により分解・消失したと考えられる。

西壁の IVa 層からは、木本類ではツガ属、マツ属、スギ属、サワグルミ属、ブナ属等が認められ、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節が認められた。これらの産状から、周辺にはツガ属やマツ属、スギ属等の針葉樹、サワグルミ属、ブナ属等の落葉広葉樹が周辺に生育し、調査地周辺にはクマザサ属等のイネ科やカヤツリグサ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節等の草本類が生育したと考えられる。

西壁のⅢ b' ～ a 層は、花粉群集の産状から、Ⅲ b' 層（試料番号 3）とⅢ b，a 層（試料番号 2，1）に区分される。Ⅲ b' 層（試料番号 3）では、ブナ属が最も多く産出し、マツ属、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属等を伴う群集が認められる。一方、Ⅲ b，a 層では、検出される分類群に大きな変化は認められないが、Ⅲ b' 層で多産したブナ属、スギ属の割合が減少し、マツ属の割合が増加するほか、草本類のイネ科の割合が高くなるという傾向を示す。

Ⅲ b' 層で多産したブナ属は、コナラ亜属等と共に冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素であることから、周辺の丘陵や後背山地等に林分を形成しており、林内や林縁にはカバノキ属、クリ属、ウコギ科、タニウツギ属等も生育していたと考えられる。スギ属は、人工林では山腹斜面下に出現し、水分・養分の供給が十分で、水はけの良い土壌で最もよく生育するとされている［高原 1998］。これを参考とすると、周辺の丘陵斜面や低湿地等に部分的に林分を形成していた可能性がある。また、河畔や低湿地等の適湿地に林分を形成する種群であるハンノキ属、ニレ属－ケヤキ属をはじめとして、ヤナギ属、サワグルミ属、

クルミ属、クマシデ属－アサダ属、トチノキ属、シナノキ属、トネリコ属は、鵜川沿いの低湿地や丘陵部開析谷等に生育していたと考えられる。なお、Ⅲb，a 層で多産したマツ属のうち、亜属まで同定できたものの多くは複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は、生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育するほか、二次林の代表的な種類でもある。このことから、マツ属は、周辺に二次林として分布したことや、崩壊地や砂丘上等に生育したと推定される。

西壁におけるⅢ層の花粉群集の変化から、鎌倉時代頃の本遺跡周辺の丘陵・山地部にはブナ属やコナラ亜属等からなる落葉広葉樹林やスギ林が分布していたが、鎌倉時代およびそれ以降に代償植生としてのマツ属が増加するという変化が示唆される。また、湿地林要素のハンノキ属もⅢb，a 層で低率となる傾向が認められることから、湿地林の減少という変化も推定される。

西壁における花粉群集とその変遷を参考に、この他の 3 地点を比較すると、北壁のⅢb 層（試料番号 2）や柱状試料Ⅲb-c 層相当下部（試料番号 3, 2）は、ブナ属やスギ属が多産し、マツ属が低率であることから、西壁のⅢb' 層と類似する。一方、南壁のⅢc 層（試料番号 3）やⅢb 層（試料番号 2）は、マツ属が優占し、上位層で増加するのに対し、スギ属やブナ属の割合が低いことから、西壁のⅢb，a 層と同様の推移が指摘される。地点間、層位間で差異が認められたが、概ね同様の植生変遷を反映していると考えられる。

一方、草本類では、西壁のⅢb' 層とⅢb，a 層では木本類ほど大きな変化は認められず、この他の各地点の試料も同様の組成を示した。いずれも開けた明るい場所を好む人里植物を多く含む分類群であるイネ科が多産し、カヤツリグサ科やヨモギ属等を伴うという特徴が認められ、サジオモダカ属やオモダカ属、ホシクサ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サンショウモ等の水湿地生植物に由来する分類群も認められた。植物珪酸体分析結果では、IVa ～Ⅲb' 層は検出される分類群は少なかったが、Ⅲb，a 層よりクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、ススキ属が検出された。これらの結果から、遺跡周辺の明るく開けた場所にはイネ科やカヤツリグサ科等をはじめとする人里植物からなる草地が分布し、湿潤な場所にはヨシ属やカヤツリグサ科の一部を含む水湿地生植物が生育したと考えられる。

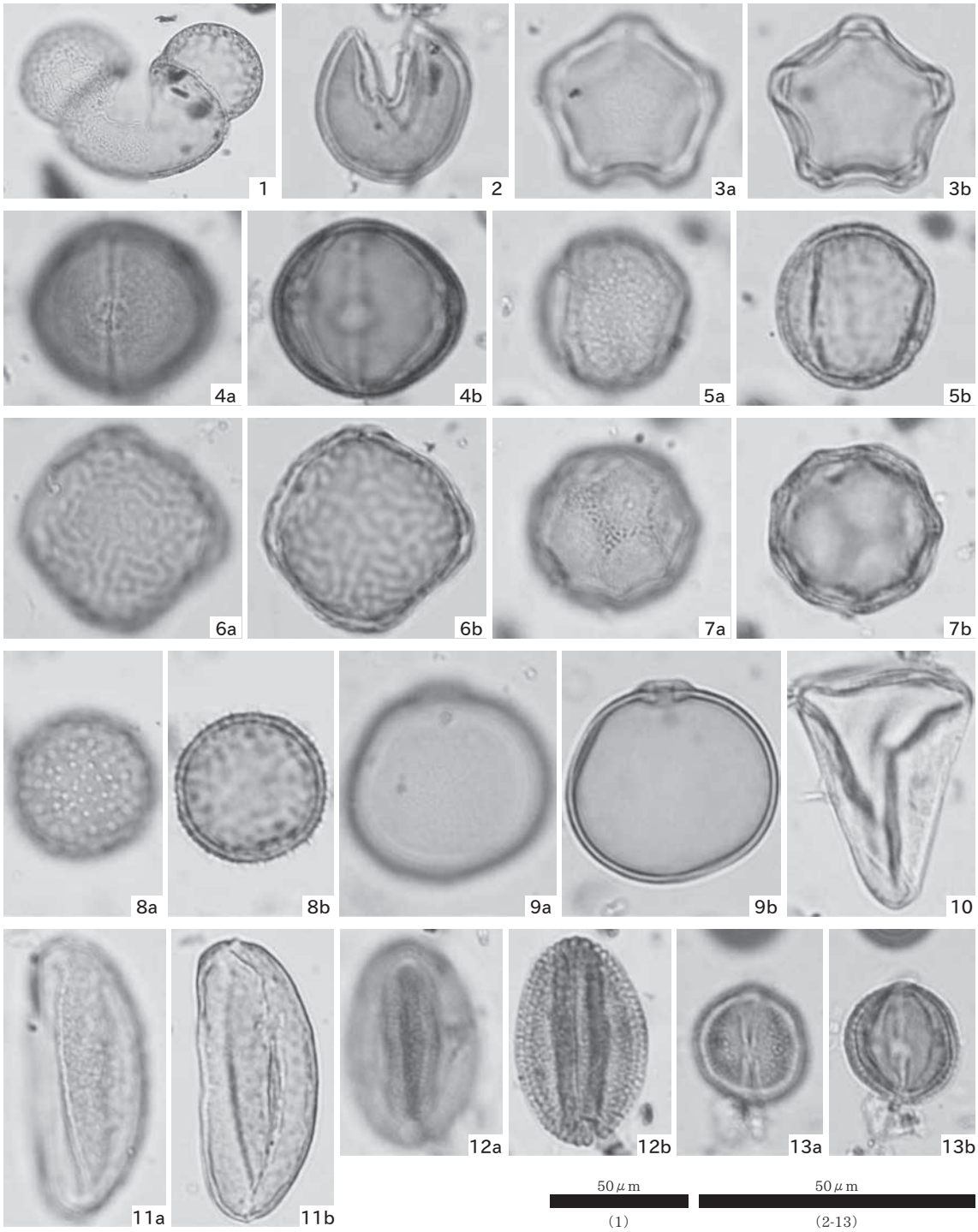
なお、草本類では、上述した木本類で認められたⅢb' 層とⅢb，a 層におけるスギ属とブナ属の減少とマツ属の増加と相関するように、草本類の割合がやや高率となり、イネ科の産出が顕著となる傾向が認められた。このことから、遺跡周辺における森林植生の変化とともに、草本類の生育する草地や水湿地の増加するといった変化も推定される。

2）稲 作 の 検 討

今回分析対象とした各土層における植物珪酸体のイネ属（機動細胞珪酸体）の産状は、IVa 層は未検出、Ⅲc 層は約 100 個 /g、Ⅲb' 層は約 200 個 /g、Ⅲb 層は機動細胞珪酸体は約 800 ～ 1,800 個 /g、Ⅲa 層は約 1,800 個 /g であった。また、Ⅲb-c 層相当と考えられる柱状試料では、0 ～ 1000 個 /g であった。

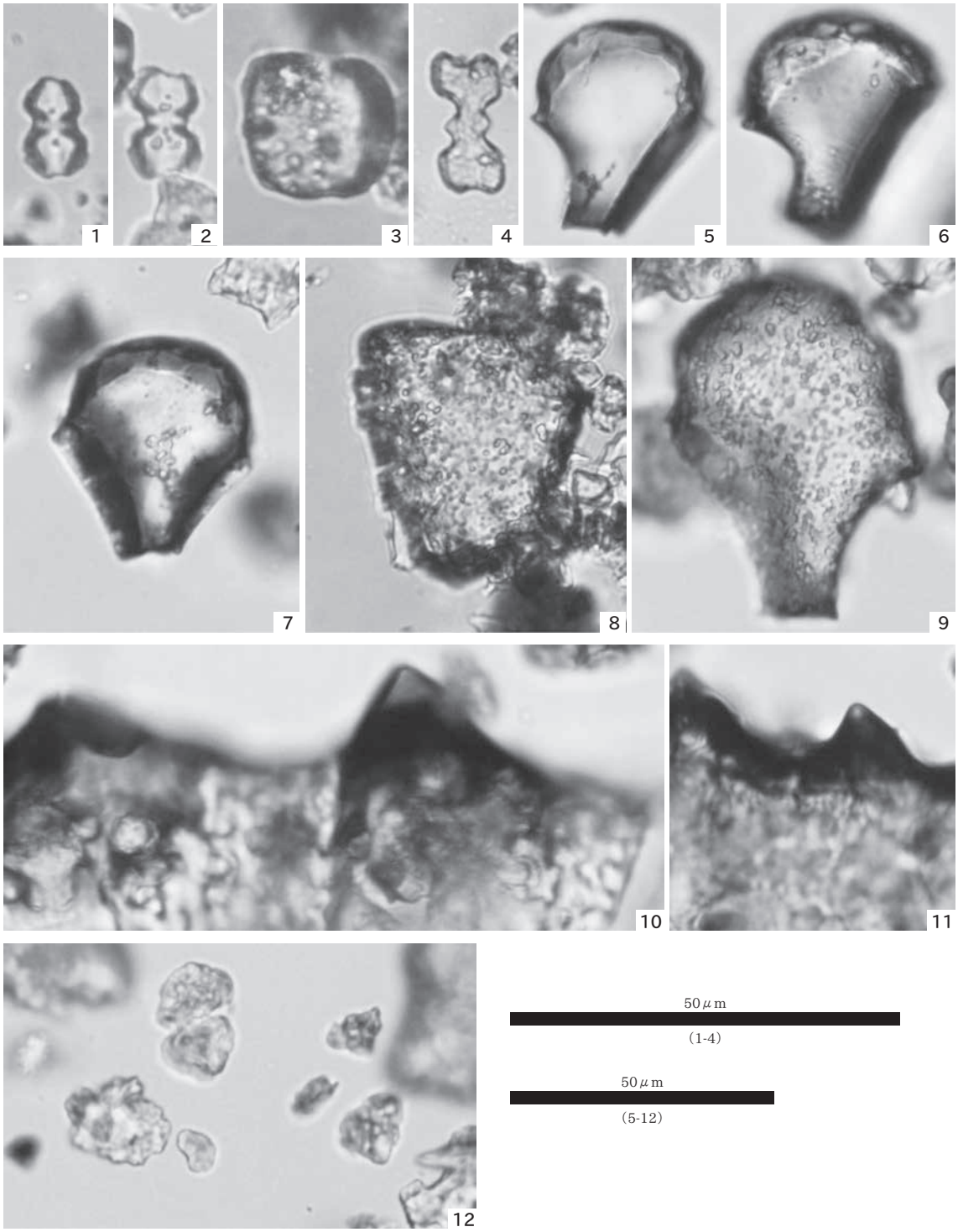
水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料 1g 当り 5,000 個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている［杉山 2000］。今回の分析結果では、西壁のⅢb，a 層における約 1,800 個 /g が最も高い値であり、上記した調査事例よりも低い。

植物珪酸体群集および含量におけるイネ属の産状をみると、上位試料で量比および含量ともに高くなる傾向が指摘されるほか、Ⅲb，a 層からは含量は低いがイネ属の穎珪酸体が 200 ～ 600 個 /g 程度検出さ



1. マツ属（西壁Ⅲa層；1）
2. スギ属（西壁Ⅲb層；2）
3. ハンノキ属（西壁Ⅲa層；1）
4. ブナ属（西壁Ⅲb層；2）
5. コナラ属コナラ亜属（西壁Ⅲb層；2）
6. ニレ属－ケヤキ属（西壁Ⅲa層；1）
7. サジオモダカ属（西壁Ⅲb層；3）
8. オモダカ属（西壁Ⅲb層；2）
9. イネ科（西壁Ⅲb層；3）
10. カヤツリグサ科（西壁Ⅲb層；3）
11. ミズアオイ属（南壁Ⅲb層；2）
12. ソバ属（西壁Ⅲb層；2）
13. ヨモギ属（柱状試料；3）

第 20 図　剣野沢遺跡で検出された花粉化石



1. イネ属短細胞珪酸体（西壁Ⅲb層；2）
2. イネ属短細胞珪酸体（南壁Ⅲb層；2）
3. ヨシ属短細胞珪酸体（柱状試料Ⅲ層下部；2）
4. ススキ属短細胞珪酸体（南壁Ⅲb層；2）
5. イネ属機動細胞珪酸体（西壁Ⅲb層；2）
6. イネ属機動細胞珪酸体（南壁Ⅲb層；2）
7. イネ属機動細胞珪酸体（柱状試料Ⅲ層下部；2）
8. クマザサ属機動細胞珪酸体（西壁Ⅲa層；1）
9. ヨシ属機動細胞珪酸体（柱状試料Ⅲ層下部；2）
10. イネ属穎珪酸体（西壁Ⅲb層；2）
11. イネ属穎珪酸体（北壁Ⅲb層；2）
12. 鉱物粒子（西壁Ⅳa層；4）

第 21 図　剣野沢遺跡で検出された植物珪酸体

れた。また、花粉分析ではイネ属同定を行っていないが、多産したイネ科花粉中にイネ属に類する形態を示す個体も多く認められた。これらの点を考慮すると、Ⅲc，b' 層での稲作の可能性を支持することは難しいが、Ⅲb，a 層では周辺域で稲作が行われていたことや、イネの植物体の利用が推定される。

なお、本遺跡は、鵜川が形成した沖積地よりも標高の高い台地上の低地に立地することを考慮すると、集水域は狭く、水田等に適すると考えられる土地条件は開析谷内や低地等に限定される。したがって、本地点も生産（集約）性が低い、あるいは、耕作期間が短かい水田であった可能性があるが、この点については、さらに本遺跡周辺における資料を蓄積し、改めて評価することが望まれる。

引用文献

近藤錬三，2004，植物ケイ酸体研究 . ペドロジスト，48，46-64.

三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究，6，15-30.

中村　純，1967，花粉分析 . 古今書院，232p.

杉山真二，2000，植物珪酸体（プラント･オパール）. 辻　誠一郎（編著）考古学と自然科学３　考古学と植物学，同成社，189-213.

高原　光，1998，スギ林の変遷 . 安田　喜憲・三好　教夫（編著），図説　日本列島植生史，朝倉書店，207-223.

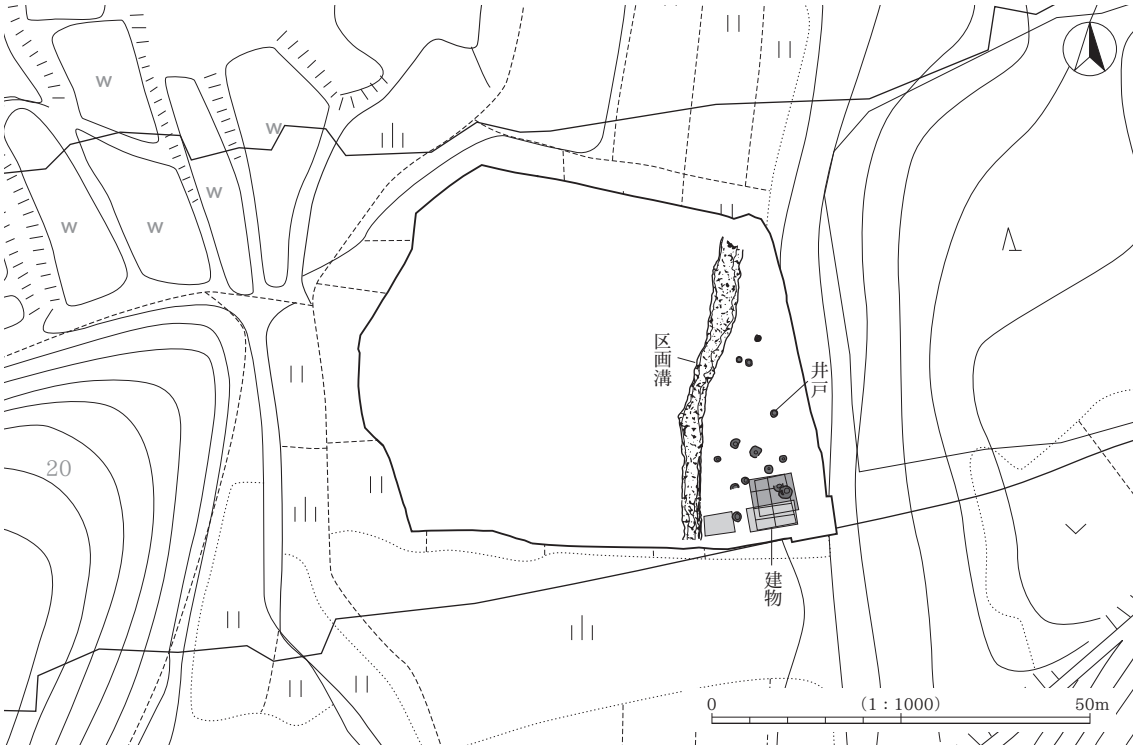
徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子 . 化石の研究法，共立出版株式会社，50-73.

第Ⅶ章　ま　と　め

上　　層

上層は、古代から中世の 9 世紀後半から 16 世紀にかけての遺物が認められた。また、遺構は掘立柱建物 5 棟、柵 1 列、井戸 15 基、土坑 15 基、溝 14 条などを検出したが、いずれも谷筋に沿って東側山裾部で確認された。掘立柱建物及び井戸は調査区の南側、すなわち剣野沢の上流側に集中しており、遺物の分布とも一致する。遺構を時期別に把握することは困難であったが、大方は中世に属すると考えられる。掘立柱建物は東西に長軸を持つ SB2、SB5 と南北に長軸を持つ SB1、SB3 がある。SB2 と SB5 は桁行が長く東西に並列で並び、軸方向も一致することから、同時期の所産と考えることができる。一方 SB1 と SB3 は桁行と梁行の長さが正方形に近い。またいずれも北側に向かって細くなる共通性を持つ。SB1 は確認した掘立柱建物の中で最も大きく、総柱建物である。SB3 は総柱ではないが、ほぼSB1 と重なり合っていることから、建て替えの可能性がある。これら建物群の北側下流部に井戸が集中する。谷筋のほぼ中央を区画溝である SD1 が走り、その西側には遺構はない。地形的には南側の上流部谷幅が広くなっており、集落の中心はそちらにあったと考えられる。

遺物のうち土器は古代から中世に及び、連続性が認められる。須恵器の多くは小泊産と考えられ、9 世紀後半か 10 世紀前半のものである。当該期と思われる灰釉、緑釉も出土していることは注目される。灰釉 98、99 は同一個体の可能性が大きいが、高台は K90 に近い。続いて中世では土師質土器皿類がまとまった出土を見せているほか、珠洲焼、美濃瀬戸焼、越前焼、輸入陶磁器の青磁、白磁、青白磁、青花な



第 22 図　中世の集落配置

どがある。土師質土器は、ロクロ成形のＲ種、手づくね成形のＴ種、手づくね成形の京都系Ｋ種がある。Ｒ種は出土が少なく、形状からは 11 ～ 12 世紀に収まる。至徳寺例［水澤 2007］などを代表とする。Ｋ種も少なく、15 ～ 16 世紀の所産である。その間、13 ～ 14 世紀代に収まるのがＴ種である。皿では体部に稜を持つことが特徴的で「刈羽・三島型」と呼ばれるものである。皿、小皿ともにⅠ類とⅡ類に分類した。県内における土師質土器の傾向では、Ⅱ類が古相で、Ⅰ類が新相を呈する。SE244 はⅡ類のみの出土で、SD1 や包含層でもⅡ類の出土が多い。珠洲焼も出土しているが量的には少なく、Ⅰ期からⅥ期まで確認できる。擂鉢では、内面に卸目のないⅠ期のものが数点ある。美濃瀬戸は出土が少ないが、後期Ⅱ期（15 世紀）から大窯４期（16 世紀）［藤澤 1986］くらいまである。平椀、皿、小鉢などがあるが、天目茶椀が比較的多く出土しており、遺跡を性格づける一つとなる。越前焼は、擂鉢である。

輸入陶磁器の青磁、白磁、青白磁は、12 世紀から 16 世紀まで認められるが、12 世紀では龍泉窯に交じって同安窯産も少量ある。また、13 世紀後半から 14 世紀と思われる青磁盤や青白磁の合子身など威信財とされるものも出土している。青花も数点出土がある。

木製品では、祭祀具、呪符木簡、塔婆が注目される。祭祀具では陽物、鳥形、五輪塔形があり、呪符木簡は「急急如律令」である。塔婆は判読できない。

このように、上層中世は谷筋に営まれた集落であるが、集落の中心は調査区の南側上流にあると考えられ、規模、内容はうかがうことができない。しかし、古代では緑釉の存在、中世では陶磁器の中に威信財とされる青白磁、青磁盤があり、また祭祀具や葬送に関連すると考えられる塔婆の存在は、近世には存在したとされる香積寺と直接関連はないにせよ、一般集落とは異なる性格を有していた遺跡とすることも可能である。

下　　層

下層では縄文時代中期から晩期の遺物が確認されたが、後期から晩期が主体を占める。すぐ東の斜面をあがった丘陵上には中期から晩期に至る大集落である剣野Ｂ遺跡があり、剣野沢遺跡も縄文時代には彼らの活動範囲内であり、一体として捉える必要がある。検出した遺構は掘立柱建物３棟、埋甕３基、土坑 15 基などである。遺構は、谷の東側山裾にあり、谷中央には自然の谷川が流れている、３棟の掘立柱建物はいずれも亀甲状を呈するもので、上段の剣野Ｂ遺跡にも存在する。SB6 の柱穴から出土する土器は後期後半の土器であり、また SB7 の P707 の柱根の C14 年代は 3080BP でやはり後期後半を示している。掘立柱建物に炉が伴わないことや、３基の埋甕も後期以降の粗製深鉢であることから、大半の遺構が後期後半から晩期の所産と考えることができる。

遺物のうち、土器は上段の剣野Ｂ遺跡と同じあり方を示しているが、中期前葉より後期後半以降の土器量が多いことから、中期よりも後期以降のほうが、剣野沢遺跡の土地利用が盛んであったといえる。石器も大方の器種が揃っているが比率に偏りが見られる。まず、打製石斧が少なく、磨製石斧が多いことがあげられる。遺構が少ないこととも関連があろうか。磨製石斧が多いのは、剣野Ｂ遺跡の人たちの木材獲得の場であったためとも思われる。もう一つ、磨石類が多いことがあげられる。種別比率が最も高く 32.1%を占める。不定形石器よりも多い。このことは、剣野Ｂ遺跡の人たちの生産活動、土地利用を考えるうえで重要である。

このように剣野沢は、剣野Ｂ遺跡集落の人たちの活動範囲の中であり、木材獲得、加工の場であった。また、水場遺構は確認できなかったが、谷を利用した生産活動の場でもあったと考えられる。

引用・参考文献

相沢　央・小林昌二　2000　「柏崎市箕輪遺跡出土木簡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

秋田かな子　2008　「加曾利Ｂ式土器」『総覧　縄文土器』　アム・プロモーション

足利　健亮　1975　「6、東国（9）交通」『日本歴史地理総説　古代編』　吉川弘文館

荒川隆史・加藤　学ほか　1999　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第93集　和泉Ａ遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

猪狩俊哉　2004　「第Ⅴ章５　木製品」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第133集　青田遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀ほか　2011　『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第214集　千古作遺跡　香積寺遺跡』　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

伊藤啓雄　2006　「新潟県における中世土師器皿と輸入陶磁器･瀬戸美濃製品　－中世後半～近世初頭の様相－」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』　北陸中世考古学研究会

宇佐美篤美　1987　「大原遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇１　新潟県柏崎市史編さん委員会

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

大野隆一朗・徳間正一ほか　1990　「大地」『柏崎市史』上巻　新潟県柏崎市史編纂委員会

岡田和則　2000　「箕輪遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

岡田憲一　2008　「凹線文系土器（宮滝式・元住吉山Ⅱ式土器）」『総覧　縄文土器』　アム・プロモーション

荻野正博　1983　「越後国中世荘園の成立」『新潟史学』　第16号新潟史学会

小野正敏　1982　「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会

加賀真樹　1997　「第６章第１節　珠洲窯」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編　桂書房

金子拓男　1987　「三締寺経塚遺跡」『柏崎市史資料集』考古篇１　新潟県柏崎市史編さん委員会

金子拓男　1990　「第６章第５節　交通と交通路、第６節　延喜式内神社」『柏崎市史』上巻　新潟県柏崎市史編さん委員会

國島　聡　1996　「三仏生式土器」『日本土器事典』　雄山閣出版株式会社

小林圭一　2008　「瘤付土器」『総覧　縄文土器』　アム・プロモーション

品田高志　1985　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第４　吉井遺跡群』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志ほか　1985　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第５　刈羽大平　小丸山』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1987　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第７　西岩野』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1990a　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第11　千古塚』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1990b　『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第13　吉井遺跡群Ⅱ』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1991a　「越後の中世土師器」『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会

品田高志　1991b　『小児石』柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第15　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1995a　『柏崎市埋蔵文化財調査図録　第１集　藤橋東遺跡群』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1995b　「Ⅷ　総括１　鵜川中流域における古代・中世の遺跡」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第20集　柏崎市の遺跡Ⅳ』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1996　「季節と縄文集落」『新潟県考古学談話会会報』第16号　新潟県考古学談話会

品田高志　1997　「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸』　北陸中世土器研究会

品田高志　1999a　「Ⅲ　総括３　角田遺跡出土中世土師器の時期と変遷」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書　第32集　角田』　新潟県柏崎市教育委員会

品田高志　1999b　「越後における中世後期の土師器Ⅲ　－京都系土師器第２波の流入と展開－」『中世土師器の基礎研究』XⅣ　日本中世土器研究会

品田高志・中野　純ほか　1996 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第21集 田塚山遺跡群』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤啓雄　1997a 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第25集 呑作』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤啓雄　1997b 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第26集 前掛り』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・中野　純ほか　2000 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第34集 横山東遺跡群Ⅰ』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・平吹　靖　2001 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第37集 十三本塚北』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・伊藤啓雄ほか　2001 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第38集 柿崎町』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志・平吹　靖ほか　2010 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第59・60・61集 軽井川南遺跡群Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志　2011 「Ⅷ 縄文時代の土器・土製品類」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第63集 剣野』 新潟県柏崎市教育委員会
品田高志ほか 2011 『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第63集 剣野』 新潟県柏崎市教育委員会
新沢佳大　1970 『柏崎編年史』上巻　新潟県柏崎市教育委員会
鈴木郁夫ほか 1988 『土地分類基本調査 岡野町』 新潟県
鈴木郁夫ほか 1989 『土地分類基本調査 柏崎・出雲崎』 新潟県
高橋　保ほか 1979 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第19集 下谷地遺跡』 新潟県教育委員会
高橋　保ほか 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第109集　箕輪遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　保　2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第189集　寺前遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
高橋　優　2002 「第Ⅴ章 6L ～ P」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XⅢ　アチヤ平遺跡上段』 新潟県朝日村教育委員会
高橋保雄　1992 「Ⅳ-4B　石器類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書　第57集　五丁歩遺跡・十二木遺跡』 新潟県教育委員会
高橋保雄　2002 「第Ⅴ章 5. A、C. (7)・(17)～(20)」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XⅣ 元屋敷遺跡Ⅱ（上段）』 新潟県朝日村教育委員会
高堀勝善　1996 「井口式土器」『日本土器事典』 雄山閣出版株式会社
高堀勝善　1996 「八日市新保式土器」『日本土器事典』 雄山閣出版株式会社
高堀勝善　1996 「御経塚式土器」『日本土器事典』 雄山閣出版株式会社
田中耕作・渡邊裕之　1999 「第２章 縄文時代 第２節 縄文土器 第５項 後期」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
寺崎裕助　2009 「新潟県における新崎式土器」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
中　大輔　2003 「日本古代の駅家と地域社会　－越後国三嶋駅の事例を中心に－」『古代交通研究』第13号　古代交通研究会
中野　純　1998 「柏崎市大宮縄文前期集落遺跡」『新潟県考古学会第10回大会　研究発表・調査報告等要旨』 新潟県考古学会
中野　純　1995 「Ⅷ 総括２ 鯨波地区東部における縄文遺跡の立地」『柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第20集 柏崎市の遺跡Ⅳ』 新潟県柏崎市教育委員会
中野　純　2003 「柏崎市琵琶島城跡の調査概要」『新潟県考古学会　第15回大会　研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会
西野秀和　2008 「御経塚式土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
橋本正博　2003 「第Ⅶ章 木製品」『八日市地方遺跡Ⅰ（第２分冊 遺物報告編』 石川県小松市教育委員会
林　克彦　2008 「高井東式土器」『総覧 縄文土器』 アム・プロモーション
藤澤良祐　1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要Ⅴ』 愛知県瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ　－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要Ⅴ』 愛知県瀬戸市歴史民俗資料館
藤澤良祐　2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発表要旨集』

藤巻正信　1988　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第27集 西田・鶴巻田遺跡群』 新潟県教育委員会
水澤幸一　2005　「越後の中世土器」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会
水澤幸一　2007　「中世越後の土器と陶磁器 －11～14c. 前半」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』 北陸中世考古学研究会
村山教二　1990　「第1章 第2節 越後における荘園制の展開」『柏崎市史』上巻　新潟県柏崎市史編さん委員会
森田　勉　1982　「Ⅱ　14～16世紀の貿易陶磁の編年　14～16世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　日本貿易陶磁研究会
山崎忠良ほか 2005　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第140集 東原町遺跡・下沖北遺跡Ⅱ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
山田邦明　1987　「第2章 第2節 3国人と守護」『新潟県史 通史編2中世』 新潟県
山本信夫　2000　『太宰府市の文化財 第49集 太宰府条坊跡XV －陶磁器分類編－』 福岡県太宰府市教育委員会
山本 肇・高橋　保ほか　2003　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第125集 下北沖遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉岡康暢　2003　「珠洲焼概論」『珠洲焼概論』平成15年度埋蔵文化財専門職員実務研修資料集　新潟県教育庁文化行政課
米沢　康　1976　「古代北陸道の伝馬制について」『信濃』第28巻5号　信濃史学会
米沢　康　1980　「大宝二年の越中国四郡分割をめぐって」『信濃』第32巻6号　信濃史学会
渡邊朋和・荒川隆史　1999　「第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第6項 晩期」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会

遺構観察表（上層）（1）

遺構番号	遺構種別	建物	分割図版	個別図版	写真図版	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	検出標高	底面標高	測量深さ	個別図深さ	主な切り合い	備考
111	SK	SB1	5	7	55	25A8	円形	－	65	60	9.299	8.728	57			
117	SK	SB1	5	7	55	25A9	楕円形	－	54	45	9.421	8.827	59		SK117>P116	
158	P	SB1	5	7	55	25A19・20	楕円形	－	68	50	9.456	8.910	55		P158≠P154	
163	P	SB1	5	7	55	25A25	円形	－	62	53	9.413	8.762	65			
181	P	SB1	5	7	55	25A18	楕円形	－	67	54	9.305	8.714	59			
185	P	SB1	5	7	55	25A13	楕円形	－	70	52	9.264	8.725	54			
196	P	SB1	5	7	55	25A23・24, 26A3・4	円形	－	64	56	9.319	8.703	62			
201	P	SB1	5	7	55	26A2	楕円形	－	54	43	9.190	8.818	37			
209	SK	SB1	5	7	55	25A22	楕円形	－	65	50	9.184	8.823	36			
211	P	SB1	5	7	55	25A17	楕円形	－	56	46	9.147	8.701	45			
216	P	SB1	5	7	55	25A12	楕円形	－	59	40	9.043	8.763	28			
259	P	SB1	5	7	55	25A14	円形	－	49	44	9.364	8.824	54		P259≠SE156A	
321	P	SB1	5	7	55	25A25	円形	－	43	43	9.369	8.928	44		P321>P326	
197	SD	SB1	5	7	55	25A23・24, 26A3・4	－	V字状	174	51	9.288	8.897	39	33		
155	P	SB2	5	7	55	25A20	楕円形	－	50	40	9.442	8.942	50			
178	P	SB2	5	7	55	25A18・19	円形	－	42	41	9.346	8.728	62			
191	P	SB2	5	7	55	25A17・18	円形	－	54	51	9.186	8.837	35			
197	SD	SB2	5	7	55	25A23・24, 26A3・4	－	V字状	174	51	9.311	8.707	60			
198	P	SB2	5	7	55	26A3	楕円形	－	58	38	9.253	8.838	42			
202	P	SB2	5	7	55	26A2	楕円形	－	63	45	9.164	8.765	40			
205	P	SB2	5	7	55	25A22	楕円形	－	27	22	9.171	8.865	31			
213	P	SB2	5	7	55	25A16・17	円形	－	37	34	9.145	8.777	37			
290	P	SB2	5	7	55	25A25	楕円形	－	33	27	9.410	8.881	53			
326	P	SB2	5	7	55	25A25	円形	－	(30)	(30)	9.325	8.927	40		P326<P321	
106	P	SB3	5	8	55	25A12	楕円形	－	40	32	9.221	9.086	14			
110	SK	SB3	5	8	55	25A7・8・12・13	楕円形	－	80	64	9.244	8.759	49		SK110≠P109	
114	P	SB3	5	8	55	25A9	円形	－	38	38	9.398	9.010	39		P114<P115	
153	P	SB3	5	8・11	55	25A15	円形	台形状	48	44	9.450	8.843	61	31		
162	P	SB3	5	8	55	25A20・25	円形	－	42	40	9.503	8.832	67			
171	P	SB3	5	8	55	25A24	円形	－	34	33	9.395	8.877	52			
190	P	SB3	5	8	55	25A17	不整形	－	35	32	9.142	8.785	36			
195	P	SB3	5	8	55	25A23, 26A3・4	円形	－	40	37	9.272	8.806	47		P195≠P194	
210	P	SB3	5	8	55	25A22・23	楕円形	－	40	29	9.194	8.871	32			
231	P	SB3	5	8	55	25A9・10	円形	－	45	43	9.430	8.733	70			
172	P	SB4	5	8	55	25A19・24	円形	－	32	31	9.408	8.948	46			
180	P	SB4	5	8	55	25A18	円形	－	37	34	9.273	8.878	40			
184	P	SB4	5	8	55	25A13	円形	－	37	34	9.259	8.875	38			
193	P	SB4	5	8	55	25A23, 26A3・4	円形	－	42	36	9.274	8.839	44		P193≠P194	
251	P	SB4	5	8	55	25A19	円形	－	41	35	9.393	9.189	20			
119	P	SB5	5・6	8		26Z5	円形	－	43	38	9.074	8.780	29			
125	P	SB5	5・6	8		26Z25	円形	－	29	28	9.061	8.648	41			
131	P	SB5	5・6	8		25Z24	楕円形	－	45	37	9.048	8.826	22			
226	P	SB5	5	8		25Z25, 25A21	楕円形	－	37	30	9.093	8.736	36			
263	P	SB5	5	8		26A1	円形	－	39	38	9.144	8.840	30			
281	P	SB5	5・6	8		26Z4	楕円形	－	34	27	9.041	8.870	17			
76	P	SA1	5	8		25A3	楕円形	－	40	33	9.319	9.107	21			
77	P	SA1	5	8		25A3	楕円形	－	34	25	9.236	9.018	22			
78	P	SA1	5	8		25A3	円形	－	28	27	9.193	8.875	32			
79	P	SA1	5	8		25A2・7	円形	－	34	30	9.184	9.056	13			
83	P	SA1	5	8		25Z10, 25A6	円形	－	31	28	9.073	8.865	21			
84	P	SA1	5	8		25A6	円形	－	30	28	9.082	8.916	17			
89	P	SA1	5	8		25A6	円形	－	30	30	9.105	8.997	11			
91	P	SA1	5	8		25A7	円形	－	33	30	9.178	8.887	29			
2	SE		4	9	62	23A12	円形	漏斗状	84	74	9.247	8.191	106	93		
53	SE		5	9	62	24A21	円形	U字状	125	107	9.110	7.992	112	110		
71	SE		4	9	62	24A13・14	円形	箱状	96	90	9.423	8.169	125	123		
75	SE		5	9	62	25A4	円形	台形状	95	85	9.411	8.560	85	85		
81	SE		5	9	62	25A8	円形	台形状	106	102	9.336	8.169	117	108		
98	SE		5	9	62	25A6・7・11・12	円形	半円状	98	90	9.182	8.648	53	55	SE98>SD103	
104	SE		5	9		25A11	円形	U字状	109	(59)	9.064	8.250	81	75	SE104<P97	
139	SE		5・6	9	62	25Z4・5	楕円形	U字状	86	68	8.963	7.970	99	94		
156A	SE		5	10	62・63	25A14・15・19	円形	台形状	172	170	9.381	8.183	120	115	SE156A>SE156B	
156B	SE		5	10	63	25A13・14	不明	台形状	(130)	103	9.325	8.421	90	83	SE156B<SE156A	
233	SE		5	10	63	24A22, 25A2	方形	階段状	144	124	9.204	7.575	163	150	SE233>P293	

遺構観察表（上層）（2）

遺構番号	遺構種別	建物	分割図版	個別図版	写真図版	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	検出標高	底面標高	測量深さ	個別図深さ	主な切り合い	備考
244	SE		5	10	63	25A21	円形	台形状	123	118	9.120	8.408	71	73	SE244>P225	
249	SE		4	10	64	23A22	方形	台形状	95	82	9.103	8.226	88	78		
304	SE		4	11		24A15	－	－	143	(45)	9.725	9.292	43	(42)		
360	SE		4	11	64	23A16・21	円形	箱状	77	70	8.960	8.062	90	86		
13	SK		4	11	64	24A1・2	円形	U字状	62	55	9.091	8.314	78	74		
51	SK		4	11	64	23A11・16	方形	漏斗状	67	65	8.849	8.316	53	50		
70	SK		4	11		24A13・18	楕円形	台形状	68	56	9.396	8.935	46	43		
128	SK		5・6	11	64	25Z19	円形	U字状	63	62	9.014	8.521	49	48		
135	SK		5・6	11	64	25Z9・10・14・15	楕円形	弧状	122	82	9.021	8.542	48	42		
253	SK		4	11	64	23Z15・20, 23A11・16	円形	漏斗状	86	74	8.803	8.062	74	72		
298	SK		5	11		24Z25	不整形	半円状	85	63	9.100	8.621	48	43		
692	SK		2	11	65	22W15・20	長方形	台形状	145	117	7.990	7.443	55	55		礫多量に含む
512	P		5	11	65	25B16	円形	箱状	32	31	9.475	8.994	48	40		
1	SD		4・5	14	55・66・67	21 ～ 26Z 21 ～ 23A	－				－	－	－			
52	SD		5	12		24A16	－	半円状	145	25	－	－	－	17		
103	SD		5	12		25A6・7	－	台形状	83	28	－	－	－	7	SD103<SE98	
133	SD		5・6	12		25Z15	－	台形状	109	38	－	－	－	16	SD133<P306. P307.P308	
140	SD		5・6	12	65	24Z19-25Z9	－	弧状	652	87	－	－	－	9	SD140>SX141	
299	SD		5・6	12		24Z25, 25Z4・5	－	弧状	115	20	－	－	－	6		
305	SD		2	12	65	22X5-22Y4	－	台形状	800	125	－	－	－	20		
313	SD		6	12	65	24X23-25X10	－	台形状	485	72	－	－	－	8		
314	SD		6	12	65	25X14・19・24	－	弧状	554	62	－	－	－	7		
628	SD		2	12	65	21X20-21Y17	－	弧状	548	27	－	－	－	7		
693	SD		2	12		22W10	－	弧状	130	62	－	－	－	8		
147	SX		6	15	67	25Y4・5, 25Z1・2他	不整形	弧状 台形状	755	480	－	－	－	10		耕作痕か
250	SX		4	15	67	24Y9・10, 24Z6・7他	長方形	弧状 台形状	830	179	－	－	－	25		耕作痕か
252	SX		2・3・4	15	67	23Y2-23Z3他	長方形	弧状 台形状	1365	220	－	－	－	18		耕作痕か
265	SX		2・3	15	67	22Z1-5他	長方形	弧状 台形状	690	438	－	－	－	30-38		耕作痕か

遺構観察表（下層）（1）

遺構番号	遺構種別	建物	分割図版	個別図版	写真図版	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	検出標高	底面標高	測量深さ	個別図深さ	主な切り合い	備考
585	P	SB6	18・19	24	68	23Y2	円形	箱状	47	41	8.136	7.612	52	47		柱痕
586	P	SB6	19	24	68	23Y1・6	楕円形	－	35	29	8.167	7.941	23			
588	P	SB6	19	24	68	23Y6	楕円形	U字状	53	44	8.144	7.658	49	47		柱痕
590	P	SB6	19	24	68	23X10	楕円形	－	42	(35)	8.129	7.893	24			
591	P	SB6	19	24	68	23X5	楕円形	－	41	32	8.119	7.981	14			
617	P	SB6	18・19	24	68	23X5	円形	－	23	23	8.083	7.872	21			
632	P	SB6	18・19	24	68	22Y22	楕円形	－	51	39	8.166	7.896	27			
634	P	SB6	18・19	24	68	22Y21	楕円形	台形状	50	40	8.164	7.586	58	40		柱痕
706	P	SB7	20	25	56・68	25X15	円形	台形状	55	52	7.677	7.436	24	22		柱根
707	P	SB7	20	25	56・68	25X4・5	円形	台形状	72	65	7.618	7.488	13	23		柱根
708	P	SB7	20	25	56・68	25Y11	円形	弧状	40	35	7.811	7.710	10	10		
709	P	SB7	20	25	56・68・69	24Y21, 25Y1	円形	弧状	53	53	7.749	7.656	9	7		
710	P	SB7	20	25	56・68	25Y7	円形	弧状	62	55	7.733	7.571	16	12		柱根
552	P	SB8	19・22	24		24Y9	円形	－	29	27	8.421	8.110	31			
559	P	SB8	19・20・22	24		24Y14	円形	－	35	33	8.418	8.258	16			
564	P	SB8	19・20・22	24		24Y13	楕円形	－	47	33	8.402	8.307	10			
565	P	SB8	19・22	24		24Y8	円形	－	35	31	8.406	7.884	52			
568	P	SB8	19	24		24Y7・8・12・13	円形	－	38	37	8.367	8.194	17			
348	SK		19	26	70	23X24, 24X4	楕円形	弧状	87	68	8.077	7.891	19	15		
349	SK		19	26	70	23X25, 24X5	円形	階段状	112	72	8.279	7.968	31	17-42		底面中央に小穴
350	SK		19	26	70	24Y6	円形	台形状	102	86	8.336	7.985	35	33		
539	SK		22・23	26	70	24Z12	円形	台形状	86	75	8.458	8.313	15	12		
575	SK		19・20	26	70	24Y11	円形	階段状	100	100	8.300	7.940	36	30-44		底面中央に小穴
578	SK		20・23	26	71	25Y14	楕円形	弧状	69	33	8.547	8.425	12	10		
579	SK		20・23	26	71	26Y4	楕円形	弧状	128	70	8.596	8.502	9	10		
604	SK		19	26	71	23X18・19	方形	台形状	86	77	8.155	7.666	49	42	SK604>SK605	
605	SK		19	26	71	23X18・19	方形	台形状	114	83	8.163	7.771	39	33	SK605<SK604	
608	SK		19・22	27	57・71	23Y5・10 23Z1・6	楕円形	弧状	218	128	8.291	8.008	28	26	SK608>SK609B	

遺構観察表（下層）（2）

遺構番号	遺構種別	建物	分割図版	個別図版	写真図版	グリッド	平面形	断面形	長軸	短軸	検出標高	底面標高	測量深さ	個別図深さ	主な切り合い	備考
609A	SK		19・22	27	57・71	23Y10・15, 23Z6・11	楕円形	不整形	156	106	8.287	8.080	21	25	SK609A>SK609B	
609B	SK		19・22	27	57・71	23Y10	楕円形	弧状	98	77	8.264	8.055	21	24	SK609B<SK608 SK609B<SK609A	
622	SK		19・22	27	72	23Z16	円形	箱状	76	67	8.212	8.019	19	18		
625	SK		19・22	27	72	23Y9・14	円形	弧状 階段状	77	70	8.217	8.056	16	11-22		底面中央が窪む
641	SK		19・22	27	72	23Y3・4	方形	階段状	80	74	8.114	8.008	11	15	SK641≠P670	
701	埋		18	25	57・69	22W13	円形	台形状	35	30	7.790	7.642	15	14		
702	埋		19・20 22・23	25	57・69	24Z16	円形	台形状	38	34	8.627	8.362	27	20		
703A	埋		20	25	57・69	25Y16・21	円形	台形状	68	62	8.415	8.141	27	27		
703B	埋		20	25	57・69	25Y16・21	楕円形	台形状	136	96	8.446	8.321	13	20		
670	P		19	27		23Y4・9	円形	台形状	38	37	8.109	7.890	22	18	SK641≠P670	
704	P		20	25	69	25X23	円形	U字状	16	15	7.769	7.518	25	25		柱根か
705	P		20	25	69	25X22	楕円形	U字状	20	13	7.576	7.450	13	13		柱根か
542	SD		22	25		24Z7	－	弧状	162	21	－	－	5-10	11	SD542<P541	

上層（古代・中世）の土器類観察表（1）

報告番号	図版番号	分類		遺構	グリッド	層位	口径	底径	器高	残存	色調		調整等の所見	備考
		種別	器形				cm	cm	cm	/36	外面	内面		
1	30・73	土師器	椀	P201 －	26A3イ 25A8	1 Ⅲb	14.0	(6.0)	(4.8)	口9 底4	にぶい橙 7.5YR7/4	黒 N2/0	外：ロクロナデ、底部ヘラケズリ 内：黒色	(内面黒色)
2	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅰc類)	P216	25A12ウ	1	6.8	5.2	1.4	口5 底7	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
3	30・73	須恵器	横瓶	SK14 P184 SD1	24A1エ 25A13ウ 23Z24ア	1 1 4	－	－	(21.6)		灰 7.5Y5/1	灰 7.5Y5/1	外：格子目タタキ 内：無文あて具	
4	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅱd類)	SE53	24A21	－	(9.1)	(7.3)	1.5	口1 底4	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
5	30・73	土師質 (R種)	小皿 (Ⅱ類)	SE71	24A14ウ	1	－	3.4	(1.5)	底18	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	・ロクロ成形　・(体)ロクロナデ　・(底)回転糸切り→ナデ?	
6	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅰa類)	SE71	24A14ウ	1	(7.7)	(6.0)	1.6	口1 底5	橙 5YR6/8	橙 5YR7/6	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
7	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱb類)	SE139	24Z25	1	14.8	－	(2.3)	口7	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	内面黒色化
8	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱb類)	SE139	25Z5	－	13.5	－	(2.9)	口9	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	内面黒色化
9	30・73	土師器	製塩土器	SE156A	25A14	2	－	11.6	(5.4)	底6	橙 5YR6/6	赤褐 10R4/3	外：輪積み、縦指ナデ、底部砂 内：ナデ、赤化	
10	30・73	土師質 (R種)	有台皿	SE156B	25A14	1	－	6.1	(2.3)	底12	にぶい橙 5YR6/4	灰褐 7.5YR6/2	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ	
11	30・73	土師器	無台椀	SE156B	25A14イ	1	－	5.5	(1.3)	底6	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 5YR7/4	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り	
12	30・73	土師器	椀皿	SE156B	25A14	1	(11.4)	－	(1.7)	口3	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
13	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱc1類)	SE244	25A21		(13.7)	(7.4)	(3.3)	口5 底4	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
14	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱc1類)	SE244	25A21イ	1	(13.4)	(7.6)	(3.0)	口10 底14	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
15	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱc1類)	SE244	25A21ア	6	12.4	8.0	3.0	口27 底29	黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
16	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱd類)	SE244	25A21ア	5	13.8	－	(2.9)	口6	灰黄褐 10YR5/2	浅黄橙 10YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
17	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱd類)	SE244	25A21ア	5	11.4	－	2.8	口6	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
18	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅱb類)	SE244	25A21エ	4	8.2	6.1	1.6	口36 底36	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	タール状付着物
19	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅱb類)	SE244	25A21エ	4	8.2	5.4	1.5	口36 底36	明褐灰 7.5YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
20	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅱb類)	SE244	25A21	3	(8.0)	(5.6)	1.5	口18 底18	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
21	30・73	土師質 (T種)	小皿 (Ⅱb類)	SE244	25A21イ	4	7.8	6.5	1.4	口36 底36	灰白 7.5YR8/2	にぶい橙 7.5YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
22	30・73	須恵器	横瓶	SD1 SE75 SE244	23Z15ア 25A4ウ 25A21	4 1 6	9.6	8.5	(23.2)	口11	オリーブ黒 7.5Y3/1	灰 7.5Y4/1	外：口縁ロクロナデ、格子目タタキ 内：無文あて具	
23	30・73	須恵器	甕 (転用砥石)	SE244	25A21イ	6	－	－	(6.2)		灰 10Y6/1	灰黄 2.5Y7/2	外：格子目タタキ 内：平行あて具、炭化物	
24	30・73	山茶碗	小皿	SD1 SE360	23Z19イ 23A21	4 1	8.2	4.0	2.4	口12 底36	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	内外面ロクロナデ、口縁端部自然釉、底部左回転糸	
25	30・73	土師質 (T種)	皿 (Ⅱd類)	SE360	23A21	1	(12.8)	－	(3.4)	口1	褐灰 10YR5/1	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	

上層（古代・中世）の土器類観察表（2）

報告番号	図版番号	分類 種別	分類 器形	遺構	グリッド	層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残存 /36	色調 外面	色調 内面	調整等の所見	備考
26	30・73	土師質（T種）	皿（Ⅱd類）	SE360	23A21	1	(11.2)	－	(3.2)	口1	灰白 10YR8/2	灰白 2.5Y8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
27	30・73	須恵器	長胴壺？鉢？	SK11 SD1	25A13ア 23Z23エ	1 4	－	13.4	(8.1)	底4	黒 10YR2/1	暗赤灰 2.5YR3/1	外：ロクロケズリ 内：縦ナデ	
28	30・73	土師質（T種）	皿（Ⅱd類）	SK128	25Z19エ	1	13.7	11.0	2.3	口7 底6	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
29	30・73	土師質（T種）	小皿（Ⅱd類）	SK128	25Z19	1	(7.6)	(5.7)	1.3	口6 底11	にぶい黄橙 10YR7/2	灰白 10YR8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
30	30・73	土師質（K種）	小皿	SK298	24Z25	－	7.2	－	1.6	口6	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
31	30・73	土師質（T種）	小皿（Ⅰa類）	SK298	24Z25	－	(8.1)	－	1.9	口3	灰白 7.5YR8/2	灰白 10YR8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
32	30・73	須恵器	無台杯	SK346	23Y13ウ	1	12.3	7.6	3.6	口5 底10	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	外：ロクロナデ、回転ヘラ 内：ロクロナデ、薄く炭化物）	
33	30・73	須恵器	無台杯	SD1 P168	22A1ア 26A4イ	3 1	12.2	6.3	2.7	口8 底15	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR4/1	外：ロクロナデ、回転ヘラ 内：ロクロナデ	
34	31・73	青磁	椀	SD1	24Z8イ	4	(15.4)	－	(2.8)	口4	オリーブ 5Y5/4	オリーブ 5Y5/4	外：鎬蓮弁、施釉 内：施釉	龍泉Ⅱb
35	31・73	青磁	椀	SD1	24Z8エ	3	－	－	(2.2)		灰オリーブ 5Y5/3	灰オリーブ 5Y5/2	外：櫛目、施釉 内：施釉	同安
36	31・73	青磁	皿	SD1	22Z20エ	5	(9.4)	－	(1.4)	口3	オリーブ灰 2.5GY6/1	オリーブ灰 2.5GY6/1	外：口縁端部麺取り、施釉 内：施釉	同安Ⅰ-1a
37	31・73	青磁	椀or杯	SD1	23Z24ア	4	－	5.6	(1.1)	底4	緑灰 10GY6/1	緑灰 7.5GY6/1	外：施釉、底部施釉 内：施釉	龍泉Ⅲ
38	31・73	青白磁	合子身	SD1	23A1ア	3	4.8	4.0	2.1	口5 底12	明緑灰 10GY8/1	灰白 2.5GY8/1	外：蓮弁、受口部、体部下半施釉なし 内：施釉	?
39	31・73	白磁	椀	SD1	25Z7ウ	2	17.9	－	(3.2)	口3	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	外：玉縁大、施釉 内：施釉	Ⅳ類?
40	31・73	白磁	椀	SD1	23Z10ア	4	16.6	－	(2.8)	口3	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	外：玉縁小、施釉 内：施釉	Ⅳ類
41	31・73	白磁	椀	SD1	24Z3ウ	3	－	－	(2.3)	口2	明緑灰 7.5GY8/1	明緑灰 7.5GY8/1	外：口禿、施釉 内：施釉	Ⅸ類
42	31・73	白磁	小椀	SD1	23Z19ア	4	(6.2)	－	(3.1)	口3	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	外：施釉 内：施釉	?
43	31・73	白磁	皿	SD1	24Z12	3	(11.9)	－	(1.1)	口2	灰白 10Y7/1	灰白 10Y7/1	外：薄手、施釉 内：施釉	Ⅴ類
44	31・73	白磁	皿	SD1	22Z25ア	5	－	4.5	(1.8)	底10	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	外：施釉、高台、底部施釉なし 内：施釉	?
45	31・73	珠洲焼	甕	SD1	24Z8	4	－	－	(6.3)		オリーブ黒 5Y2/2	灰 5Y5/1	外：平行タタキ 内：無文あて具	
46	31・73	珠洲焼	甕	SD1	24Z3イ	4	(長) 13.9	(幅) 7.5	(厚) 2.5		灰白 2.5Y7/1	黄灰 2.5Y6/1	外：平行タタキ、外及び断面を研面 内：無文あて具	(転用砥石)
47	31・73	珠洲焼	壺（T種）or甕	SD1	23Z5ウ	4	－	－	(5.4)		灰 10Y4/1	灰 10Y5/1	外：　幾何文タタキ、断面割れ目に漆接着 内：無文あて具、漆	
48	31・73	珠洲焼	片口鉢	SD1	25Z13	4	20.2	10.0	8.0	口6 底15	黄灰 2.5Y5/1	黄灰 2.5Y5/1	外：ロクロナデ、断面漆継 内：ロクロナデ、下半部磨り痕、底部静止糸、	Ⅱ期?
49	31・73	珠洲焼	片口鉢	SD1	23Z10	4	－	－	(7.2)	口4	灰 5Y5/1	灰オリーブ 5Y5/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	Ⅰ期
50	31・73	珠洲焼	片口鉢	SD1	23Z10イ	4	35.4	－	(6.0)	口4	灰 10Y4/1	灰 10Y4/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、卸目	Ⅳ期
51	31・73	珠洲焼	片口鉢	SD1	24Z23イ	3	29.0	－	(6.0)	口6	灰 N4/0	灰 N4/0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、卸目	Ⅳ期
52	31・73	土師質（R種）	有台皿	SD1	23Z14ア	3	－	7.0	(2.5)	底2	橙 5YR6/6	黒 10YR2/1	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ	内面黒色処理?
53	31・73	土師質（R種）	有台皿	SD1	25Z3ウ	3	－	6.0	(1.9)	底13	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ	
54	31・73	土師質（R種）	皿（Ⅰ類）	SD1	23Z14ウ	3	－	7.0	(2.7)	底9	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR7/6	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り	
55	31・73	土師質（R種）	皿（Ⅰ類）	SD1	26Z3ウ	5	－	7.0	(2.6)	底36	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)不明	
56	31・73	土師質（R種）	皿（Ⅱ類）	SD1	23Z9	4	－	5.2	(2.2)	底36	にぶい黄褐 10YR4/3	黒 10YR1.7/1	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)不明	内面黒色処理?
57	31・73	土師質（R種）	皿（Ⅱ類）	SD1	23Z19ア	4	－	5.7	(1.8)	底23	灰褐 7.5YR4/2	灰褐 7.5YR5/2	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)不明	
58	31・73	土師質（R種）	小皿（Ⅱ類）	SD1 －	23Z9ウ 23Z8	3 Ⅲb	9.0	3.5	2.2	口4 底33	明褐 7.5YR5/8	明褐 7.5YR5/6	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り（右）	
59	31・73	土師質（R種）	小皿（Ⅱ類）	SD1 －	23Z14ア 25A11	3 Ⅲa	8.4	3.4	2.3	口5 底29	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り	底部中央を穿孔
60	31・73	土師質（R種）	小皿（Ⅱ類）	SD1	23Z5ウ	4	－	3.4	(1.3)	底36	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/6	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り（右）	

上層（古代・中世）の土器類観察表（3）

報告番号	図版番号	分類 種別	分類 器形	遺構	グリッド	層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残存 /36	色調 外面	色調 内面	調整等の所見	備考
61	31・73	土師質（R種）	小皿（Ⅱ類）	SD1	23Z19	3	－	3.9	(1.2)	底36	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り（右）	
62	31・73	土師質（R種）	小皿（Ⅲ類）	SD1	25Z24エ	1	8.8	6.0	1.9	口1 底19	黒 10YR1.7/1	黒 10YR1.7/1	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り（右）	内外面に黒色付着物
63	31・73	土師質（T種）	皿（Ⅰa類）	SD1 SD1	22Z25ア 24Z4ア	5 3	12.1	－	3.4	口14	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
64	31・73	土師質（T種）	皿（Ⅰa類）	SD1 SD1	22Z25ウ 25Z23エ	5 2	11.7	－	3.7	口13	淡橙 5YR8/3	淡橙 5YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
65	31・73	土師質（T種）	皿（Ⅰb類）	SD1	26Z3	4	12.7	5.4	3.6	口15	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
66	31・73	土師質（T種）	皿（Ⅰb類）	SD1	23Z10	－	12.0	－	(3.5)	口9	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
67	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅰb類）	SD1	24Z13エ	4	11.4	－	3.7	口10	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
68	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅰb類）	SD1	23Z23エ	4	11.0	－	3.4	口9	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
69	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅰc類）	SD1 SD1	22Z25ウ 24Z18イ	5 4	12.4	－	2.9	口8	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	タール状付着物
70	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅰc類）	SD1	24Z23イ	3	11.4	－	3.2	口15	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
71	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱb類）	SD1	23Z14イ	4	12.6	－	2.9	口11	浅黄橙 10YR8/3	橙 7.5YR6/6	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
72	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱb類）	SD1	24Z23イ	3	(11.2)	－	1.9	口4	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
73	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc1類）	SD1	23Z24ア	4	13.8	－	2.5	口6	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄 2.5Y7/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
74	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc1類）	SD1 SD1 SD1	22Z15 22Z15ア 23Z14イ	4 3 4 4	12.9	－	2.9	口29	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
75	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc1類）	SD1	22Z10ウ	5	12.6	－	2.9	口15	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
76	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc1類）	SD1	24Z12エ	4	12.5	6.0	3.2	口6	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
77	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc1類）	SD1	23Z5	－	12.4	－	(3.2)	口8	灰白 2.5Y8/2	淡黄 2.5Y8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
78	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc2類）	SD1	25Z13ア	2	13.8	－	3.0	口6	明褐灰 7.5YR7/1	明褐灰 5YR7/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
79	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc2類）	SD1	24Z23	－	(13.2)	－	2.8	口3	淡黄 2.5Y8/4	淡黄 2.5Y8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
80	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc2類）	SD1	23Z9イ	3	12.6	－	2.8	口16	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
81	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱc2類）	SD1 SD1	23Z4エ 24Z3イ	4 4	12.4	7.0	3.1	口21	灰白 10Y8/1	灰白 5Y8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
82	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱd類）	SD1	25Z13ア	4	13.5	－	(2.7)	口6	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
83	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱd類）	SD1	23Z14エ	4	13.0	－	2.8	口7	橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/8	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
84	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱd類）	SD1	24Z23	－	(12.8)	－	(2.8)	口7	浅黄橙 7.5YR8/3	灰白 7.5YR8/2	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
85	31・74	土師質（T種）	皿（Ⅱd類）	SD1 SD1	24Z3イ 24Z9ア	3 3	12.3	－	2.7	口2	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
86	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅰa類）	SD1	23Z8エ	2	8.1	5.5	2.0	口24 底20	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
87	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅰa類）	SD1	22Z25ウ	5	7.8	－	2.0	口10	淡黄 2.5Y8/3	浅黄 2.5Y7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
88	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅰb類）	SD1	25Z13ウ	3	8.5	－	1.6	口11	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
89	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅰb類）	SD1	25Z8	4	8.0	－	1.7	口36 底36	灰白 2.5Y8/2	淡黄 2.5Y8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
90	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅰb類）	SD1	24Z4ア	3	7.3	4.5	1.5	口13	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
91	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅰc類）	SD1 SD1	25Z13ア 25Z13ウ	4 4	8.0	－	1.8	口14	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
92	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅱb類）	SD1 SD1	22Z20ア 22Z10ウ	4 5	7.7	6.3	1.7	口25 底25	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
93	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅱc類）	SD1 SD1 SD1	22Z25 22Z25ア 22Z20エ	1 3 5 4	8.4	－	1.6	口27	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
94	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅱc類）	SD1	22Z20ア	4	8.4	6.6	1.8	口20 底21	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
95	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅱc類）	SD1 SD1	22Z15ウ 22Z25ウ	4 5	7.8	6.4	1.3	口17 底20	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	タール状付着物
96	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅱc類）	SD1 SD1 試掘3T	25Z3イ 25Z18ウ 22Z4	4 4 －	7.6	6.4	1.5	口29 底29	灰白 2.5Y8/2	淡黄 2.5Y8/3	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	
97	32・74	土師質（T種）	小皿（Ⅱc類）	SD1	23Z4イ	3	7.2	－	1.6	口10	浅黄橙 10YR8/3	黄褐 10YR5/6	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	

上層（古代・中世）の土器類観察表（4）

報告番号	図版番号	分類 種別	分類 器形	遺構	グリッド	層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残存 /36	色調 外面	色調 内面	調整等の所見	備考
98	32・74	灰釉陶器	皿	SD1	23Z5イ	4	－	8.2	(1.8)	底9	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、灰釉	K90?
99	32・74	灰釉陶器	皿	SD1	23A1ウ	4	－	7.0	(1.6)	底9	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、灰釉	K90?
100	32・74	須恵器	杯蓋	SD1 SD1	23Z19イ 23Z13イ	4 4	13.6	－	(2.4)	口2	オリーブ灰 2.5GY5/1	灰 10Y4/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
101	32・74	須恵器	杯蓋	SD1 －	25Z3イ 25A2	4 Ⅲb	11.0	－	(1.7)	口8	暗赤褐 5YR3/2	黒褐 10YR3/2	外：ロクロナデ、ヘラケズリ 内：ロクロナデ	
102	32・74	須恵器	有台杯	SD1	25Z3エ	4	－	6.7	(2.7)	底8	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	外：ロクロナデ、底部回転ヘラ 内：ロクロナデ	
103	32・74	須恵器	有台杯	SD1	24Z3エ	3	－	7.2	(1.8)	底7	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	外：ロクロナデ、底部回転ヘラ 内：ロクロナデ	
104	32・74	須恵器	無台杯	SD1	23Z10エ	3	－	8.0	(3.2)	底19	褐灰 10YR6/1	灰黄 2.5Y6/2	外：ロクロナデ、底部左回転ヘラ 内：ロクロナデ	
105	32・74	須恵器	無台杯	SD1	23Z15イ	4	－	7.2	(2.5)	底23	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y5/1	外：ロクロナデ、底部左回転ヘラ 内：ロクロナデ	
106	32・74	須恵器	無台杯？	SD1	23Z14エ	4	－	4.5	(1.7)	底9	灰 5Y5/1	灰 5Y4/1	外：ロクロナデ、底部？回転糸 内：ロクロナデ	
107	32・74	須恵器	鉢	SD1	23Z19イ	4	20.8	－	(4.7)	口6	浅黄 2.5Y7/3	灰白 5Y7/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
108	32・74	須恵器	鉢	SD1	22Z25	1	19.9	－	(6.8)	口5	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
109	32・74	須恵器	鉢	SD1 －	22Z20エ 25A6	5 Ⅲb	－	(13.7)	(3.5)	底1	灰白 5Y7/2	灰白 5Y7/2	外：ロクロナデ、輪積痕 内：ロクロナデ、摩耗	
110	32・74	須恵器	長頸壺	－ SD1 SX147	25A11 25Z18イ 25Z1ア	Ⅲb 4 1	－	4.7	(6.3)	底20	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR6/1	外：ロクロナデ、底部？回転糸 内：ロクロナデ	
111	32・74	須恵器	長胴壺	SD1	23Z15イ	4	17.6	－	(9.8)	口6	灰白 5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
112	32・74	須恵器	横瓶	SD1 －	26Z2イ 25Z25	3 Ⅲb	－	－	(4.2)		灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	外：格子タタキ、自然釉、頸部ロクロナデ、 内：同心円タタキ	
113	32・74	須恵器	甕	SD1 －	23Z14イ 25A3	4 Ⅲb	－	－	(8.5)		灰 10Y5/1	灰 10Y6/1	外：格子タタキ 内：同心円タタキ	
114	32・74	須恵器	甕	SD1	26Z3イ	1	－	－	(4.5)		灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	外：摩耗、炭化物 内：同心円タタキ、摩耗、炭化物	（転用砥石）
115	32・74	土師器	小甕	SD1	23Z9ウ	4	14.0	－	(5.7)	口3	明赤褐 5YR5/6	橙 7.5YR6/6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、口縁部コゲ	
116	32・74	土師器	長甕	SD1 SD1	26Z3エ 25Z23ア	3 4	20.0	－	(10.1)	口5	明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
117	32・74	土師器	円筒形支脚	SD1 SD1 SD1	23Z9ウ 23Z14ア 22Z24イ	4 3 5	7.6	8.4	8.1	口6 底11	橙 7.5YR6/6	明黄褐 10YR7/6	外：輪積痕 内：輪積痕	
118	32・74	土師器	円筒形支脚	SD1	23Z14イ	4	9.6	－	(3.6)	口13	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/4	外：輪積痕 内：輪積痕	
119	32・74	土師器	椀	SD56	24A21イ	1	－	6.4	(1.5)	底13	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	外：ロクロナデ、底部？回転糸 内：ロクロナデ	
120	32・74	土師質（R種）	皿（Ⅱ類）	SD140	24Z24イ	1	13.4	4.6	4.3	口1 底8	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)不明	
121	32・74	土師質（R種）	有台皿	SX252	23Z3エ	1	－	(7.5)	(2.3)	底36	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ	
122	32・74	土師器	小甕	SX265 SX265	22Z2ア 22Z2ウ	1	－	7.4	(3.9)	底30	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
123	32・74	青磁	椀	－	25A24	Ⅲb	15.1	－	(5.3)	口4	オリーブ黒 7.5Y6/3	オリーブ黒 7.5Y6/3	外：施釉 内：施釉	龍泉Ⅰ
124	32・74	青磁	椀	－	24X5	Ⅱ Ⅲ	12.2	－	(2.8)	口3	オリーブ灰 5GY6/1	オリーブ灰 5GY6/1	外：施釉 内：施釉	龍泉Ⅲ
125	32・74	青磁	椀	－	26Y4	Ⅲb	－	－	(2.0)	口2	明オリーブ灰 5GY7/1	明オリーブ灰 5GY7/1	外：施釉、蓮弁、断面漆 内：施釉	上田BⅡ
126	32・74	青磁	椀	－	22A6	Ⅲa	(15.0)	－	(3.9)	口4	オリーブ灰 10Y5/2	オリーブ灰 10Y5/2	外：施釉、蓮弁 内：施釉	上田BⅡ
127	32・74	青磁	椀	－	25W7	Ⅲ	(17.2)	－	(4.6)	口4	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	外：施釉、被熱 内：施釉	上田DⅡ
128	32・74	青磁	椀	－	24X19	Ⅲ	(15.0)	－	(3.1)	口3	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰オリーブ 7.5Y6/2	外：施釉 内：施釉	上田DⅡ
129	33・74	青磁	椀	－	23W15	Ⅲ	－	5.3	(1.9)	底26	オリーブ 5Y5/6	オリーブ 5Y5/6	外：施釉 内：施釉	
130	33・75	青磁	盤	－	24V10	Ⅲ	(23.6)	－	(4.0)	口4	灰オリーブ 7.5Y6/2	灰 7.5Y6/1	外：施釉、被熱 内：施釉、蓮弁	龍泉Ⅳ
131	33・75	青磁	盤	－	25Z11	Ⅲb	(27.8)	－	(1.8)	口1	緑灰 10G6/1	緑灰 10G6/1	外：施釉 内：施釉	龍泉Ⅲ
132	33・75	白磁	椀	－	24W24	Ⅲ	15.7	－	(1.9)	口3	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	外：施釉、玉縁 内：施釉	Ⅳ

上層（古代・中世）の土器類観察表（5）

報告番号	図版番号	分類 種別	分類 器形	遺構	グリッド	層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残存 /36	色調 外面	色調 内面	調整等の所見	備考
133	33・75	白磁	?	－	－	－	－	8.4	(1.7)	底5	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	外：施釉、高台無釉 内：施釉	森田E
134	33・75	白磁	皿	－	24A1	Ⅲa	8.8	－	(1.4)	口5	灰白 10Y8/1	灰白 10Y8/1	外：施釉 内：施釉	森田C・D
135	33・75	白磁	皿	－	24X25	Ⅲa	－	4.4	(2.4)	底33	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	外：施釉 内：施釉	森田D・E
136	33・75	白磁	皿	－	24X23	Ⅲa	－	4.1	(2.1)	底36	にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 10YR8/2	外：施釉 内：施釉	森田D・E
137	33・75	白磁	瓶?	－	22Z25	－	－	－	(5.4)		灰白 5Y7/2	にぶい黄橙 10YR7/4	外：施釉 内：無釉	
138	33・75	青花	皿	－	24A6	Ⅲb	－	6.7	(1.3)	底4	灰白 5GY8/1	灰白 5GY8/1	外：施釉（畳付底部無釉） 内：施釉	小野B1群
139	33・75	青花	椀	－	25A17	Ⅲb	－	－	(2.3)	底2	灰白 5GY8/1	明緑灰 7.5GY8/1	外：施釉（畳付無釉） 内：施釉	?
140	33・75	瀬戸 美濃焼	天目茶碗	－	26Z2	Ⅲa	10.4	－	(4.8)	口5	黒褐 5YR2/1	黒褐 5YR2/1	外：施釉縞状 内：施釉縞状	藤澤後Ⅳ新
141	33・75	瀬戸 美濃焼	天目茶碗	－	23Z2	Ⅲb	11.8	－	(4.2)	口7	暗褐 7.5YR3/4	褐 7.5YR4/3	外：施釉 内：施釉	藤澤大窯2
142	33・75	瀬戸 美濃焼	天目茶碗	－	25Z9	Ⅲa	(12.0)	－	(3.5)	口2	黒 5YR1.7/1	黒 5YR1.7/1		藤澤大窯4 新
143	33・75	瀬戸 美濃焼	天目茶碗	－	24X15	Ⅱ	(10.4)	－	(4.5)	口2	暗赤褐 5YR3/6	暗赤褐 5YR3/6		藤澤大窯2
144	33・75	瀬戸 美濃焼	天目茶碗	－	22A16	Ⅲa	－	4.4	(3.6)	底36	暗褐 7.5YR3/3	暗褐 10YR3/4		藤澤後Ⅱ
145	33・75	瀬戸 美濃焼	天目茶碗	－	23Y2	Ⅲ	－	4.5	(1.4)	底36	褐 7.5YR4/6	黒 7.5YR1.7/1		藤澤大窯1
146	33・75	瀬戸 美濃焼	平椀	－	23Y10	Ⅲ	(16.6)	－	(3.8)	口3	オリーブ黒 7.5Y6/3	浅黄 7.5Y7/3		藤澤後Ⅱ
147	33・75	瀬戸 美濃焼	小鉢	－	22Y10	Ⅲb	11.8	－	(2.8)	口5	灰白 7.5Y7/1	オリーブ灰 10Y6/2		藤澤後Ⅱ～ Ⅲ
148	33・75	瀬戸 美濃焼	皿	－	25X13	Ⅲ	－	5.2	(1.0)	底12	灰オリーブ 7.5Y5/3	オリーブ黒 7.5Y6/3		
149	33・75	珠洲焼	甕	－	22X16	Ⅲ	(40.0)	－	(5.5)	口3	灰 10Y4/1	灰 10Y5/1	外：口縁ロクロナデ、平行タタキ 内：無文あて具	Ⅳ2～Ⅳ3 期
150	33・75	珠洲焼	甕	－ －	24Y7 24Y12	Ⅲb Ⅲb	－	－	(13.4)		暗灰黄 2.5Y4/2	黄灰 2.5Y5/1	外：平行タタキ 内：無文あて具、漆付着	(転用砥石)
151	33・75	珠洲焼	甕	－	22Z11	Ⅲb	－	－	(7.6)		灰 5Y4/1	灰 5Y5/1	外：平行タタキ、スス付着 内：無文あて具	Ⅲ～Ⅳ
152	33・75	珠洲焼	壺（T種） or甕	－	24X6	Ⅲ	－	－	(8.3)		灰 7.5Y4/1	灰 7.5Y4/1	外：平行タタキ 内：無文あて具、炭化物	Ⅲ～Ⅳ
153	33・75	珠洲焼	壺	－	25Z12	Ⅲb	17.0	－	(6.1)	口3	黒 10Y2/1	黒 10Y2/1	外：ロクロナデ、断面漆 内：ロクロナデ	
154	33・75	珠洲焼	壺	－	25A25	Ⅱ Ⅲ	－	－	(4.2)		灰 10Y4/1	灰 10Y5/1	外：ロクロナデ、櫛波状文 内：ロクロナデ	
155	33・75	珠洲焼	片口鉢	－	22X14	Ⅲb	30.4	－	(7.2)	口3	灰 N4/0	灰 N4/0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	Ⅱ期?
156	33・75	珠洲焼	片口鉢	－	23Z24	Ⅲb	－	－	(4.5)	口4	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y5/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	Ⅲ～Ⅳ期
157	33・75	珠洲焼	片口鉢	－	25X9	Ⅲb	－	－	(4.9)		黄灰 2.5Y5/1	灰 5Y5/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、卸目	Ⅲ～Ⅳ期
158	33・75	珠洲焼	片口鉢	－	22X10	Ⅳ	－	－	(5.0)	底3	灰 10Y4/1	灰 7.5Y5/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、卸目	Ⅲ～Ⅳ期
159	33・75	珠洲焼	片口鉢	－	23Y20	Ⅲ	(31.0)	－	(5.8)	口3	暗灰黄 2.5Y5/2	灰黄 2.5Y6/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、卸目	Ⅵ期
160	33・75	珠洲焼	片口鉢	－	23A16	Ⅲb	－	－	(3.0)	口1	灰 5Y5/1	灰 5Y6/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、卸目	Ⅵ期
161	33・75	越前焼	片口鉢	－	23X15	Ⅲb	(35.6)	－	(5.6)	口4	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR5/2	外：ロクロナデ、断面漆 内：ロクロナデ、卸目	15後C～ 16C前
162	33・75	土製品	転用 研削具	－	26Z3	Ⅲb	(長) 2.4	(幅) 2.9	(厚) 1.3		黄灰 2.5Y6/1	オリーブ黒 7.5Y3/2		(中世陶器)
163	33・75	土製品	転用 研削具	－	23A2	Ⅰ Ⅱ	(長) 1.9	(幅) 1.9	(厚) 1.1		オリーブ 5Y5/4	灰 5Y4/1		瀬戸美濃焼
164	34・75	土師質 (R種)	柱状高台 皿	－	25Z10	Ⅲa	7.6	－	(1.8)	口4	黄灰 2.5Y6/1	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・(体)ナデ	
165	34・75	土師質 (R種)	有台皿	－	24Z14	Ⅲb	－	7.2	(2.4)	底6	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)不明	
166	34・75	土師質 (R種)	皿 (Ⅱ類)	－	25Z9	Ⅲb	－	5.0	(1.9)	底29	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄 2.5Y6/2	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り(右)	
167	34・75	土師質 (R種)	小皿 (Ⅰ類)	－	25Z22	Ⅲa	－	5.0	(0.8)	底11	にぶい褐 7.5YR5/4	褐灰 10YR4/1	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り(右)	
168	34・75	土師質 (R種)	小皿 (Ⅱ類)	－	22Z6	Ⅲb	－	4.2	(2.0)	底22	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	・ロクロ成形 ・(体)ロクロナデ ・(底)回転糸切り(右)	
169	34・75	土師質 (K種)	皿	－	25Z16	アン	14.6	－	(2.1)	口5	黒 10YR1.7/1	にぶい黄橙 10YR6/3	・手づくね成形 ・(体)ナデ	・外面黒色化
170	34・75	土師質 (K種)	皿	－	25X23	アン	12.0	－	1.6	口5	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	・手づくね成形　・(体)ナデ ・(底)オサエ→未調整	

上層（古代・中世）の土器類観察表（6）

報告番号	図版番号	分類 種別	分類 器形	遺構	グリッド	層位	口径 cm	底径 cm	器高 cm	残存 /36	色調 外面	色調 内面	調整等の所見	備考
171	34・75	土師質（K種）	小皿	－	22Y3	Ⅲ	8.8	－	1.6	口7	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	
172	34・75	土師質（K種）	小皿	－	25W21	Ⅲ	8.2	3.2	1.7	口12 底9	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	タール状付着物
173	34・75	土師質（K種）	小皿	－	25W8	Ⅲ	8.0	4.0	1.9	口12 底9	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR5/3	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	タール状付着物
174	34・75	土師質（K種）	小皿	－	23Y16	Ⅲb	7.8	－	1.9	口7	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/3	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	タール状付着物
175	34・75	土師質（K種）	小皿	－ －	26Z5 25V20	Ⅲa アン	7.6	2.4	1.4	口13 底3	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	タール状付着物
176	34・75	土師質（T種）	皿（Ⅰa類）	－	22Y14	Ⅲb	12.6	－	3.3	口21	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/4	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	わずかに外面黒色化
177	34・75	土師質（T種）	小皿（Ⅰc類）	－	25A22	Ⅲb	8.6	－	1.6	口23 底29	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	タール状付着物
178	34・75	土師質（T種）	小皿（Ⅰc類）	－	25V24	Ⅲb	8.2	－	1.6	口13	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	
179	34・75	土師質（T種）	小皿（Ⅲ類）	－	22X6	Ⅲ	－	3.8	（1.0）	底26	黄橙 10YR8/6	明黄褐 10YR7/6	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	
180	34・75	土師質（T種）	小皿（Ⅲ類）	－	22X13	Ⅲb	－	3.0	（1.4）	底18	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	・手づくね成形　・（体）ナデ ・（底）オサエ→未調整	
181	34・75	瓦器	小皿・小椀	－	25Z5	Ⅲb	9.0	－	（2.3）	口3	黒 N1.5/0	黒 N1.5/0	・手づくね成形 ・外：黒色　内：黒色	
182	34・75	緑釉	皿	－	24Y12	Ⅲb	－	5.2	（1.3）	底4	緑灰 5G5/1	緑灰 7.5GY5/1	外：施釉 内：施釉	
183	34・75	緑釉	皿	－	26Z5	Ⅲa	13.0	－	（1.8）	口4	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ、施釉	
184	34・75	須恵器	杯蓋	－	25V14	Ⅲ	14.8	－	（2.9）	口4	灰白 N7/0	灰白 N7/0	外：ロクロナデ、はぜる 内：ロクロナデ、はぜる	
185	34・75	須恵器	無台杯	－	25A9	Ⅲb	11.6	－	（2.9）	口5	灰 N4/0	灰 N4/0	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
186	34・75	須恵器	鉢?	－	25A20	Ⅲb	－	－	（10.1）		灰 5Y6/1	灰 5Y6/1	外：ロクロナデ、平行タタキ 内：ロクロナデ、同心円あて具	
187	34・75	須恵器	長頸壺	－	22Y17	Ⅲb	－	4.4	（3.4）	底2	灰オリーブ 5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
188	34・75	須恵器	甕	－	22Z14	Ⅲb	（32.4）	－	（5.1）	口1	黒褐 2.5Y3/1	黄灰 2.5Y4/1	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
189	34・75	須恵器	甕	－	26Y3	Ⅲb	－	－	（6.5）		灰 10Y5/1	灰 10Y6/1	外：格子目タタキ 内：平行あて具	
190	34・75	須恵器	甕	－	22Z25	Ⅳ	－	－	（4.2）		灰 10Y5/1	灰 10Y6/1	外：格子目タタキ 内：放射状あて具	
191	34・75	土師器	無台椀	－	26A2	Ⅲb	12.8	5.9	5.3	口7 底36	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 5YR7/4	外：ロクロナデ ・（底）回転糸切り（右） 内：ロクロナデ	
192	34・75	土師器	無台椀	－	25A18	Ⅳa	12.1	6.0	3.6	口1 底33	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄橙 7.5YR8/4	・（体）ロクロナデ ・（底）回転糸切り（右）	
193	34・75	土師器	無台椀	－	26A3	Ⅲb	13.2	－	（3.4）	口6	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	
194	34・75	土師器	長甕	－	26A1	Ⅲb	21.4	－	（5.5）	口9	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	外：ロクロナデ、スス 内：ロクロナデ	
195	34・75	土師器	長甕	－	24A19	Ⅲb	（23.0）	－	（14.5）	口6	淡赤橙 2.5YR7/4	黄灰 2.5Y6/1	・（体）ロクロナデ→カキメ	

上層（古代・中世）の木製品観察表（1）

報告番号	図版番号	器種	出土位置 遺構	出土位置 層位	出土位置 グリッド	属性（単位：cm） 長さ	属性（単位：cm） 幅	属性（単位：cm） 厚さ	木取り	備考
196	35・76	容器（椀）	SE244	6	25A21エ	口：－	底：（8.0）	高：（5.0）	横木地板目	内外面黒色漆
197	35・76	容器（皿）	SE244	6	25A21イ	口：9.6	底：6.6	高：1.3	横木地柾目	内外面黒色漆（底面除く）
198	35・76	容器（合子身）	SE244	6	25A21ア	口：6.8	底：8.0	高：4.6	横木地板目	内外面黒色漆
199	35・76	容器（鉢）	SE244	6	25A21イ	口：22.2	底：15.5	高：8.7	横木地柾目	白木
200	35・76	曲物（底板）	SE244	6	25A21ア	36.0	（10.2）	1.2	流れ柾目	
201	35・76	曲物（底板）	SE244	6	25A21ア	40.0	（8.1）	1.2	柾目	
202	35・76	部材	SE244	6	25A21ア	20.0	3.9	1.0	流れ柾目	
203	35・76	丸材	SE360	4	23Z25	43.0	11.0	10.5	丸木取り	
204	35・76	部材	SK128	4	25Z19	（21.6）	2.0	1.6	柾目	
205	35・76	部材	SK128	4	25Z19	（30.1）	2.2	0.5	柾目	
206	35・76	木簡	SD1	4	24Z8	（6.7）	2.2	0.5	柾目	「法阿ミた×」
207	35・76	木簡	SD1	2	26Z3イ	（5.5）	2.5	0.2	流れ柾目	「×急急如律令」
208	35・76	祭祀具（塔婆?）	SD1	4	25Z13ウ	19.2	2.3	0.5	流れ柾目	
209	35・76	糸巻	SD1	2	26Z3	18.8	4.0	1.0	柾目	
210	35・76	部材（小型）	SD1	－	25Z23イ	4.2	4.3	1.1	板目	
211	35・76	板材	SX252	1	23Z3ウ	10.4	3.6	1.4	流れ柾目	
212	35・76	角材	SX252	3	23Y5イ	12.2	2.4	1.6	板目	
213	35・76	木簡	－	Ⅲb	22Z14	11.3	2.8	0.3	板目	「六斗五カ升カ□□□□」
214	35・76	祭祀具（五輪塔形）	－	Ⅲb	22Z7	7.4	3.3	0.4	板目	「キャカラバア」
215	35・76	祭祀具（塔婆）	－	Ⅲb	22Z8	17.4	2.1	0.5	柾目	

上層（古代・中世）の木製品観察表（2）

報告番号	図版番号	器種	出土位置			属性（単位：cm）			木取り	備　考
			遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		
216	35・76	木簡	－	Ⅲb	25Y22	（15.8）	1.7	0.4	板目	「×奉法華経一部」
217	35・76	木簡	－	Ⅲb	23Y8	（11.4）	2.0	0.6	柾目	「×太郎」
218	35・76	遊戯具（将棋駒）	－	Ⅲb	24Y3	2.9	（1.1）	0.3	流れ柾目	「金将」
219	36・76	祭祀具（陽物形?）	－	Ⅲb	25X5	（11.1）	3.2	3.0	丸木取り	
220	36・76	祭祀具（鳥形?）	SR1?	－	25X3	49.2	8.4	1.6	板目	
221	36・77	曲物（底板）	－	Ⅲb	25Y10	16.5	（2.7）	0.7	柾目	
222	36・77	曲物（底板）	－	Ⅳ	26Z3	17.8	3.3	0.5	柾目	
223	36・77	下駄（連歯）	－	Ⅲ	25Z24	（13.0）	8.7	2.6	柾目	
224	36・77	下駄（差歯）	－	Ⅲ	24W23	8.6	8.3	1.9	流れ柾目	
225	36・77	下駄（差歯）	－	Ⅲb	25X4	10.5	8.4	2.3	柾目	
226	36・77	下駄（差歯）	－	Ⅳ	26Z1	9.2	5.8	1.6	板目	
227	36・77	部材	－	Ⅲ	25W4	14.8	3.5	0.5	流れ柾目	
228	36・77	部材（小型）	－	Ⅲ	25W14	15.1	3.3	0.8	流れ柾目	
229	36・77	部材（小型）	－	Ⅲ	25X22	17.5	3.1	1.0	流れ柾目	
230	36・77	部材	－	Ⅳ	24Y25	10.3	2.4	1.8	流れ柾目	
231	36・77	板材	－	Ⅲ	23W16	15.4	7.4	0.8	柾目	
232	36・77	板材	－	Ⅲ	23W16	13.6	（2.2）	0.6	柾目	
233	36・77	板材	－	Ⅲb	26Y5	13.2	2.7	0.5	流れ柾目	
234	36・77	不明（火付け木?）	－	Ⅲb	－	（15.4）	2.4	0.8	板目	

上層（古代・中世）の土製品観察表

報告番号	図版番号	出土位置			種　別	属性（単位：cm）			備　考
		遺構	層位	グリッド		長さ（高）	幅	厚さ	
235	36・77	－	Ⅲb	22X19	不明土製品	2.7	2.8	2.8	貫通孔径１～2.5mm　吊り下げて使用？
236	36・77	SD1	3	22Z20ウ	有孔土製品？	4.8	3.3	0.6	土師質土器の転用　穿孔２箇所
237	36・77	－	Ⅳa	23Y5	土錘（有溝）	3.7	2.2	1.8	重量13.1g
238	36・77	SD1	5	22Z15ウ	土錘（管状）	7.7	4.7	4.6	重量147.6g　孔径1.6～2.0cm
239	36・77	－	Ⅲc	24Y21	土錘（管状）	6.0	4.7	4.7	重量104.6g　孔径1.4cm
240	36・77	－	Ⅲb	24Y19	土錘（管状）	6.4	（5.0）	（3.2）	重量78.3g　推定孔径1.2cm

上層（古代・中世）の石製品観察表

報告番号	図版番号	種別		石材	出土位置			属性（単位：mm/g）				備考
		器種	分類等		遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
241	36・77	砥石		泥　岩	－	Ⅲb	22Y10	121.3	30.4	13.0	86.3	断面長方形 / 平面方形 / 側面方形
242	36・77	砥石		安山岩	－	Ⅲb	25Z22	80.0	39.9	38.1	179.1	断面方形 / 平面Ｉ字 / 側面方形
243	36・77	砥石		流紋岩	－	Ⅲa	24A2	40.7	21.4	16.6	18.3	断面長方形 / 平面方形 / 側面三角形

上層（古代・中世）の金属製品観察表

報告番号	図版番号	器種	材質	出土位置			属性（単位：mm/g）				備　考
				遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
244	37・77	刀子	鉄	SD1	4	23Z4	77	15	3	9.1	欠損
245	37・77	刀子	鉄	SD1	3	23Z18ア	89	13	3	9.0	欠損
246	37・77	刀子	鉄	－	Ⅲa	25Z15	（148）	11	3	10.5	３つに折れ曲がる
247	37・77	小柄	銅	－	Ⅲb	25A12	97	14	5	26.5	内部に刀子部残る
248	37・77	箸	鉄	－	Ⅲb	22X20	（154）	5	5	10.9	欠損
249	37・77	鑷子	鉄	－	Ⅲb	22Z8	74	15	5	3.2	欠損　U字状を呈する
250	37・77	釘・楔	鉄	－	Ⅲa	25Y5	64	12	4	6.8	
251	37・77	カスガイ	鉄	－	Ⅲb	25Z5	53	33	8	10.0	欠損

※計測は形状を良く残す部分で行った（計測値≠最大値）。

上層（古代・中世）の銭貨観察表

報告番号	図版番号	銭貨名	書体通称	王朝	初鋳年（西暦）	出土位置			外径縦	外径横	厚さ	重さ	備　考
						種別	層位	グリッド	mm	mm	mm	g	
252	37・77	開元通寶	－	唐	621	－	Ⅲ	22Z10	25.0	25.0	1.1	2.8	「背上月」
253	37・77	天聖元寶	真書	北宋	1023	－	Ⅲb	23Z6	25.2	25.1	1.3	3.9	
254	37・77	皇宋通寶	篆書	北宋	1038	SD1	3	23Z23イ	24.8	24.9	1.3	2.2	右側上を一部欠損
255	37・77	至和通寶	篆書	北宋	1054	－	Ⅲb	23Y24	24.4	24.8	1.0	2.5	左側上を一部欠損
256	37・77	熙寧元寶	真書	北宋	1068	－	Ⅲb	22Z8	24.0	24.0	1.4	2.6	
257	37・77	元豊通寶	篆書	北宋	1078	－	Ⅲb	23Z6	24.8	24.6	1.2	3.3	
258	37・77	元祐通寶	篆書	北宋	1086	－	Ⅲb	22Y21	24.5	24.4	1.3	2.7	
259	37・77	紹聖元寶	篆書	北宋	1094	－	Ⅲb	22Y5	23.7	23.8	1.5	3.4	
260	37・77	元符通寶	篆書	北宋	1098	SD1	3	22Z15	24.4	24.7	0.9	1.7	
261	37・77	聖宋元寶	行書	北宋	1101	－	Ⅲa	25X10	24.6	24.7	0.7	1.9	
262	37・77	政和通寶	篆書	北宋	1111	－	Ⅲa	25X10	24.9	24.8	1.5	3.6	
263	37・77	洪武通寶	－	明	1368	－	Ⅲ	22X6	22.7	22.8	1.7	3.7	「無背」？　背面右下側に線有り
264	37・77	洪武通寶	－	明	1368	－	Ⅲb	22A11	23.3	23.4	1.8	2.7	「無背」
265	37・77	洪武通寶	－	明	1368	－	Ⅲa	26Z5	23.5	23.3	1.6	2.8	「無背」

下層（縄文時代）の土器類観察表（1）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類 器形	分類 部位	『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状 波	口縁形状 突起	貼瘤 平	貼瘤 長軸	貼瘤 縦横	遺構	グリッド	層位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	色調 外面	色調 内面	胎土	調整等の所見	備考
1	38・78	注口土器	注口	第Ⅶ群 C7c類	後期										P632	22Y22	1	－	(5.6)	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	－	注口部	体部接着部に漆
2	38・78	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器							P594	23X10	1	－	(4.1)	－	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	白	縄文LR。鋸歯状沈線。	
3	38・78	深鉢	口縁部	第Ⅰ群 C2類	前期～中期	前期末葉～中期初頭		(剣野E式)				○			P690	25A1	－	－	(4.0)	－	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	砂	口縁折返しにより肥厚。格子目文	
4	38・78	深鉢	口縁～底部	第Ⅱ-3群 O3類	中期	前葉	北陸系	新崎式			○				P714 － －	24A24 24A24 25A3	1 Ⅳa Ⅳa	16.4	18.0	8.6	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砂、土	縄文LR。内面ミガキ。 底面平行葉脈痕（笹の葉?）。	
5	38・78	深鉢（粗製）	体～底部	第Ⅹ群 D3類											埋設 701	22W13	－	－	(19.2)	10.6	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい黄橙 10YR7/3	砂、土	器面は被熱により荒れているが、無文と考える。	内面は部分的にコゲが付着。外面被熱
6	38・78	深鉢（粗製）	体～底部	第Ⅹ群 A+D3類											埋設 702	24Z16	－	－	(25.5)	11.0	橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4	砂、白	歪みのある器形で、現地での遺構半割面を参考に実測図を作成。被熱で器面は荒れているが、上端に縦位の縄文の条がわずかに認められる。	外面スス、内面コゲ
7	38・78	深鉢（粗製）	口縁～体部	第Ⅹ群 A2a類	後期		北陸系					○			埋設 703	25Y16・21	－	－	(12.6)	－	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	砂、白	縄文RLを口縁部は横位に、体部は縦位に転がす。 体部の縄文は付加条（縄巻縄）か?。	No.2
8	38・78	深鉢（粗製）	体～底部	第Ⅹ群 C1類	後期	後葉?									埋設 703	25Y16・21	－	－	(27.3)	12.0	淡黄 2.5Y8/3	浅黄橙 10YR8/3	砂	条痕文は北陸では井口式以降に認められるため、後期後葉と考える。	外面スス、内面コゲ No.1（本体）
9	38・78	深鉢（粗製）	体部	第Ⅹ群 D1類											埋設 703	25Y16・21	－	－	(13.1)	－	黒褐 10YR3/2	にぶい黄橙 10YR7/4	砂、土	無文。縦方向を基調としたミガキ。	No.2 外面スス
10	38・78	深鉢（粗製）	底部	第Ⅹ群 D3類											SK349	24X5	－	－	(10.1)	8.5	橙 5YR6/6	灰黄 2.5Y7/2	砂、土	無文	内面コゲ
11	38・78	壺	頸～体部	第Ⅷ群 D・E類	晩期	中葉	東北系（亀ヶ岡系）	大洞C1～C2式							SK604	23X18	1	－	(11.6)	－	にぶい黄褐 10YR5/4	明黄褐 10YR6/6	砂	頸部無文、体部縄文LR。薄手	
12	38・78	深鉢（粗製）	口縁～体部	第Ⅹ群 A3b類	前期										SX711	25Y6	3	22.0	(21.6)	－	橙 5YR6/8	橙 5YR6/6	砂、土	結束の認められない羽状縄文。上半はLRとRL縄文を縦位に、下半に横位に施文する部分あり。	外面スス、内面コゲ
13	39・78	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器			○				SK608	23Y5	1	23.9	(21.7)	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄褐 10YR5/4	砂	磨り消し縄文だが磨りは雑で、文様を区画する沈線も不明瞭。地文は不規則な縄文LR。	No.43他 外面スス
14	39・78	深鉢（粗製）	口縁～体部	第Ⅹ群 A2b類	後期							○			SK608	23Y5	1	30.2	(21.4)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	－	粗製土器だが造りは丁寧。縄文LRの条の方向は不規則で、隙間も多い。	No.44他 外面スス
15	39・79	深鉢（粗製）	口縁～体部	第Ⅹ群 B1a類	後期							○			SK608	23Z1	2	30.0	(11.3)	－	浅黄橙 10YR8/4	灰白 10YR8/2	砂	縦方向の縄文LRの条。	No.38 外面スス
16	39・79	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 D類	後期	後葉	北陸系								SK609	23Y10	－	－	(5.7)	－	黒 7.5YR2/1	褐灰 5YR4/1	砂、白、雲	縄文RL?。縄文の条が縦走することから北陸系か、上半部細い沈線横走	
17	39・79	壺 or深鉢	口縁部	第Ⅰ群 C2類	前期～中期	前期末葉～中期初頭		(剣野E式)				○			SR1	25W9	－	－	(3.5)	－	褐灰 5YR4/1	黒 5YR1.7/1	－	斜格子目文	外面スス
18	39・79	壺 or深鉢	体～底部	第Ⅰ群 C2類	前期～中期	前期末葉～中期初頭		(剣野E式)							SR1	25W9	－	－	(16.3)	－	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3	土?	中央の膨らむ俵形。斜格子目文と細爪形文	外面スス
19	39・79	深鉢	口縁部	第Ⅱ-1群 C1類	中期	初頭	北陸系	新崎式				○			SR1	23V19	－	－	(3.7)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄褐 10YR6/2	白	半隆起線文	
20	39・79	深鉢	体部	第Ⅱ-1群 C1類	中期	初頭	北陸系	新崎式							SR1	25W3	－	－	(5.5)	－	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	－	半隆起線文	
21	39・79	深鉢	底部	第Ⅱ-2群 N類	中期	初頭	北陸系	新崎式							SR1	24V20	－	－	(3.5)	13.3	にぶい黄橙 10YR6/4	明黄褐 10YR6/6	砂	半隆起線文と格子目文	
22	39・79	深鉢	体部	第Ⅱ群	中期	初頭									SR1	23V20	－	－	13.7	－	黒褐 10YR3/2	褐 7.5YR4/4	砂、土?	結節縄文LRを縦位に施文。	
23	39・79	深鉢	口縁部	第Ⅴ群 B類	後期	前葉		南三十稲場式				○			SR1	25W21	－	－	(4.4)	－	黒褐 10YR2/2	黒褐 10YR3/2	砂、雲	口縁部に1条の横位沈線文。体部は縦位の沈線文が密に施される。	
24	39・79	浅鉢	口縁部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1式				○			SR1	21W22	－	－	(6.9)	－	黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR6/4	－	口縁部にキザミ。横沈線区画。内面にも沈線及び列点。縄文LR?	
25	39・79	浅鉢	体部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1式							SR1	21W18	－	－	(4.7)	－	黒褐 10YR3/2	にぶい黄褐 10YR4/3	砂	地文に縄文Lr。無文部は磨り消し。上下に横沈線。中央の無文帯右側に沈線による楕円状区画。	
26	39・79	壺or注口土器	口縁部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B式				○			SR1	25W8	－	14.0	(7.8)	－	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/2	白	無文	
27	39・79	浅鉢	口縁～体部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B式				○			SR1	25X18	－	(19.0)	(5.4)	－	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	白	無文	

下層（縄文時代）の土器類観察表（2）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類 器形	分類 部位	『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状 波	口縁形状 突起	口縁形状 平	貼瘤 長軸	貼瘤 縦横	遺構	グリッド	層位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	色調 外面	色調 内面	胎土	調整等の所見	備考
28	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群A2類	後期	後葉		瘤付土器		◎			縦	3＊1	SR1	23V20	－	－	(6.4)	－	黒褐 7.5YR3/2	黒褐 10YR2/2	白	鍵手状入組み文。縦位瘤横わり。縄文LR	
29	40・79	深鉢	体部	第Ⅶ群A2類	後期	後葉		瘤付土器							SR1	23V19	－	－	(5.8)	－	黒 2.5Y2/1	暗灰黄 2.5Y5/2	砂	クランク状入り組み文。縄文LR磨り消し	外面スス
30	40・79	深鉢	体部	第Ⅶ群A2類	後期	後葉		瘤付土器							SR1	24W25	－	－	(7.2)	－	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	白	クランク状入り組み文。縄文Lr?	25ラインベルト－No.10 外面スス、内面コゲ
31	40・79	深鉢	体部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器							SR1	25X17	－	－	(8.7)	－	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	砂	幅の細い入り組み文。縄文RL	
32	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群A6c類	後期	後葉		瘤付土器		○					SR1	25W8	－	－	(5.8)	－	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/2	砂	山形突起。細い撚糸文R。	外スス
33	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群A7類	後期	後葉		瘤付土器			○				SR1	25W9	－	－	(9.6)	－	黒 2.5Y2/1	黒褐 7.5YR3/2	白	山形突起。縄文?	
34	40・79	壺 or深鉢	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器				○			SR1	24W24	－	－	(3.5)	－	黒 2.5Y2/1	黒 2.5Y2/1	砂	口縁部帯状縄文RL。連続山形文	25ラインベルト－No.7
35	40・79	鉢	体部	第Ⅶ群A5類?	後期	後葉		瘤付土器							SR1	24X21	－	－	(3.3)	－	橙 2.5YR6/6	にぶい黄褐 10YR4/3	砂	沈線による文様	25ラインベルト－No.23
36	40・79	壺	体～底部	第Ⅶ群	後期	不明		不明							SR1	26X4	－	－	(2.7)	5.6	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	砂	縄文LR。底部網代痕。	
37	40・79	注口土器	口縁部	第Ⅶ群C類	後期	後葉		瘤付土器	○		○				SR1	24X21	－	10.2	(4.6)	－	黒褐 10YR2/2	黒褐 10YR2/3	砂	口縁部大小突起。頸部無文・ミガキ。口縁部節の細かい縄文、沈線	
38	40・79	注口土器	体部	第Ⅶ群C3類	後期	後葉		(瘤付 第Ⅱ段階)							SR1	25W12	－	－	(5.6)	－	灰黄褐 10YR5/2	黒褐 2.5Y3/1	白	細い平行沈線文様区画内に縄文LR。他は磨り消しにより無文。	
39	40・79	深鉢	突起	第Ⅶ群	後期	後葉	中部系 関東系	高井東式		◎					SR1	23V19	－	－	(15.6)	－	黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1	砂	端部が袋状となる大形突起。前面スス付着	外面スス
40	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○					SR1	25W4	－	－	(9.4)	－	黒褐 10YR2/2	暗褐 10YR3/3	砂	山形突起。隆帯	外面スス、内面コゲ
41	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式			○				SR1	23V9	－	－	(7.2)	－	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	砂、土	平口縁に小突起 口縁部一段肥厚し、細かい縄文RL。	
42	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○					SR1	25W8	－	－	(5.9)	－	灰褐 7.5YR4/2	褐灰 7.5YR4/1	砂	波状口縁突起部。区画に沿って帯状に縄文RL	
43	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○	△				SR1	23V19	－	－	(4.4)	－	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	白	楕円形状の沈線文。	
44	40・79	深鉢or 浅鉢	体部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系?	井口式?							SR1	25W11	－	－	(6.8)	－	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/4	土?	屈曲部より上位の口縁部と思われる範囲に対称弧線文。	外面はかなり被熱。
45	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系?	井口式?		○					SR1	23V15	－	－	(6.8)	－	黒褐 10YR3/2	灰黄褐 10YR4/2	砂、白	肥厚する口縁帯に2条の沈線が沿い、中央は無文、上部に縄文LR、下部に縄文RL。欠損した上端部に円形の押圧が附随する。	外面全面にスス
46	40・79	深鉢	口縁～底部	第Ⅷ群C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式				○			SR1 － －	25V10 24V25 22W14	－ Ⅳa Ⅳa	23.5	25.8	8.6	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	白	口縁部外からの押圧による小波状。縄文LRと縄文RLを横位を基本に、乱雑に器面全体に施文	
47	40・79	鉢	口縁部	第Ⅷ群C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式				○			SR1	24X13	－	－	(4.0)	－	黒褐 7.5YR2/2	黒褐 7.5YR3/1	砂、白	羊歯状文	外面スス、内面コゲ
48	40・79	鉢	体部	第Ⅷ群E類	晩期	中葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞C2式							SR1	24X1	－	－	(2.8)	－	黒褐 10YR3/2	にぶい黄褐 10YR5/3	土?	横沈線文、縄文LR。	
49	40・79	深鉢	口縁～体部	第Ⅷ群F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A式				○			SR1	25X8	－	－	(5.2)	－	灰黄褐 10YR4/2	黒 10YR2/1	砂、白	口唇部は上からの押圧によりヒダ状。口縁端部は無文帯で、その境に縄文RLの結束部。	外面スス、内面コゲ
50	40・79	深鉢	口縁部	第Ⅷ群F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A式				○			SR1	25X16	－	－	(2.9)	－	黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR6/3	白、土	49と同一個体の可能性。	外面スス
51	40・79	鉢	口縁部	第Ⅷ群F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A式				○			SR1	24W20	－	－	(2.8)	－	黒 7.5YR2/1	黒褐 10YR2/2	白	口縁端部は斜位の楕円押圧によりヒダ状を呈し、口縁端面は内傾し受け口となる。口縁端部下に4条の平行沈線が横位に巡り、下端に縄文RL。わずかに赤彩あり。	
52	41・80	深鉢 (粗製)	口縁部	第Ⅹ群A2a類	後期		北陸系					○			SR1	25W14	－	(34.2)	(17.1)	－	黒 N2/0	暗灰 N3/0	砂	口縁貼り付けにより肥厚。肥厚部に縄文RL横走。体部縄文? 条縦走。	外面スス、内面コゲ
53	41・80	深鉢 (粗製)	口縁～体部	第Ⅹ群C1類	後期							○			SR1	23V9	－	－	(10.7)	－	黒褐 7.5YR3/1	黒 7.5YR2/1	砂、白	ハケ目（1単位幅約1.4cm）による斜格子文。	口縁部付近のみスス付着。
54	41・80	深鉢	底部	第Ⅹ群D2類	後期?										SR1	24W25	－	－	(6.2)	8.8	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	砂、雲、土	無文。底部平行葉脈痕。	

下層（縄文時代）の土器類観察表（3）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類 器形	分類 部位	『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状 波	口縁形状 突起	口縁形状 平	貼瘤 長軸	貼瘤 縦横	遺構	グリッド	層位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	色調 外面	色調 内面	胎土	調整等の所見	備考
55	41・80	深鉢（粗製）	底部	第X群 D3類	?										SR1	22W6	−	−	(5.5)	11.0	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/4	砂	無文。底面網代圧痕。	
56	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅰ群 B類	前期	後葉		（諸磯C式）		△					−	25Y7	Ⅳa	−	(6.0)	−	明褐灰 7.5YR7/2	灰褐 7.5YR5/2	砂	ソーメン状の棒状貼付文。三角形印刻文。結節浮線文。	
57	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅰ群 B類	前期	末葉		（十三菩提式）（鍋屋町式）		◎	○				−	25A4	Ⅳa	−	(4.7)	−	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/3	砂	縄文LRを施文後、ソーメン状の貼付文。口縁端部は縦位に、波頂部下位に山形モチーフが認められる。	
58	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅰ群 B類	前期	末葉		（十三菩提式）（鍋屋町式）				○			−	−	−	−	(4.2)	−	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4	砂	口縁端部内外面の貼付により肥厚。外面は口縁部下にも隆帯を横位に貼り付け、隆帯上棒状工具の押圧によりヒダ状。	04 試掘3TrⅥ～Ⅸ層
59	41・80	鉢 or深鉢	体部	第Ⅰ群 B類	前期	末葉									−	24A13	Ⅳb	−	(5.0)	−	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/4	砂	竹管平行線による三角区画。縄文？	
60	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅰ群 C1類	中期	初頭		（剣野E式）				○			−	22Z12	Ⅳa	−	(4.2)	−	橙 5YR6/6	にぶい黄 2.5Y6/4	砂	口縁端部及び斜格子目文の下部に縄圧痕。	
61	41・80	深鉢	口縁～体部	第Ⅱ-1群 B類	中期	前葉	北陸系	新崎式			○				−	23W6	Ⅳ	−	(12.5)	−	にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR4/2	砂、土？	頸部無文帯を挟んで楔形陰刻文による蓮華文。体部縦位撚糸文L。	No.1
62	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅱ-1群 B類	中期	前葉	北陸系	新崎式				○			−	25B16	Ⅳa	−	(5.4)	−	灰褐 7.5YR4/2	橙 7.5YR6/6	砂、土？	口縁部に楔形陰刻文による蓮華文。頸部無文。	
63	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅱ-2群 L類	中期	前葉	北陸系	新崎式				○			−	22Z22	Ⅲb	−	(7.3)	−	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	土？	横半隆起線が密に連続。口縁部及び下部に爪形文。	
64	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅱ-2群 L類	中期	前葉	北陸系	新崎式				○			−	23A6	Ⅲa	−	(4.0)	−	明褐 7.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4	砂、土？	口縁部地文縄文。楔形陰刻と半隆起短線による蓮華文。爪形文。	
65	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅱ-2群 K2類	中期	前葉	北陸系	新崎式		○	△				−	24A23	Ⅳ	−	(6.1)	−	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	土？	区画隆帯。半隆起線＋連続爪形文。楔形刺突	
66	41・80	深鉢	底部	第Ⅱ-2群 N類	中期	前葉	北陸系	新崎式							−	25A1	Ⅳa	−	(7.4)	14.6	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	−	半隆起線を主体の文様とし、部分的に細い沈線で格子目文を充填。底部外面に網代痕	
67	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅲ群 A2類	中期	前葉	中部高地	（深沢）		△		△			−	23Y2	Ⅳa	−	(4.5)	−	灰褐 7.5YR4/2	にぶい橙 7.5YR6/4	雲、英	縦位半隆起線文が連続。	
68	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅱ-2群 K2類	中期	前葉	北陸系	新崎式				○			−	25A4	Ⅳa	−	(5.0)	−	黄灰 2.5Y4/1	橙 7.5YR7/6	砂	連続爪形文。	
69	41・80	深鉢	体部	第Ⅱ-2群 N類	中期	前葉	北陸系	新崎式							−	25A20	Ⅳa	−	(11.0)	−	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	砂	縄文RL地上に半隆起線によるB字文等	
70	41・80	深鉢	口縁～体部	第Ⅱ群	中期	前葉	関東系	（阿玉台式?）				○			−	25A3	Ⅳa	(29.5)	(14.7)	−	にぶい橙 7.5YR6/4	浅黄橙 10YR8/3	砂	無文。口縁部半隆起線文。	
71	41・80	深鉢	口縁部	第Ⅳ群 C類	中期	中葉	東北系（在地系）	大木8b式							−	23W19	Ⅳa	−	(9.1)	−	橙 5YR6/8	黒褐 5YR2/1	砂	貼付隆帯＋渦巻文。充填短沈線。	No.7
72	41・80	深鉢	体部	第Ⅴ群 A類	後期	前葉		三十稲場式 2期							−	22W18	Ⅳ	−	(9.6)	−	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	土？	全面刺突文	
73	41・80	深鉢	体部	第Ⅴ群 A類	後期	前葉		三十稲場式 2期							−	23Y25	Ⅳa	−	(13.7)	−	灰黄褐 10YR4/2	灰黄 2.5Y7/2	土？	頸部刻み隆帯。体部全面刺突文。	
74	42・80	深鉢	口縁～底部	第Ⅴ群 B類	後期	前葉		南三十稲場式			○				−	22W7	Ⅳ	33.0	45.2	8.4	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	砂、土	口縁斜位短沈線。6単位の波形小突起。	内面コゲ
75	42・80	深鉢	口縁部	第Ⅴ群 B類	後期	前葉		南三十稲場式				○			− − −	22Z7 22Z8 22Z9	Ⅳa Ⅳa Ⅳa	−	(8.9)	−	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR6/3	長・砂	口縁に沿って半球状刺突。隆帯上に斜刻み。体部幅広斜位沈線。縄文LR	
76	42・81	鉢	口縁～底部	第Ⅴ群 B類	後期	前葉		南三十稲場式				○			−	22W7	Ⅳ	24.0	20.9	9.3	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	砂、白	体部上半部に文様。2本沈線による大波状。区画内沈線充填。	
77	42・80	壺	体～底部	第Ⅴ群 B類	後期	前葉?		南三十稲場式?							−	24A17	Ⅲb	−	(6.1)	11.5	灰黄褐 10YR5/2	黒 10YR2/1	長・砂	2条の菱形状沈線文。充填縄文LR。	
78	42・81	深鉢or鉢	口縁～体部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1式				○			−	22Z8	Ⅳa	23.2	(7.1)	−	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい褐 7.5YR6/3	長・砂	外面4本沈線束2条。内面5本沈線束	
79	42・81	深鉢or鉢	口縁～体部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1式				○			− −	25X20 26X4	Ⅳa Ⅳa	−	(8.2)	−	暗灰黄 2.5Y5/2	黄褐 2.5Y5/3	砂・雲	口縁端部にキザミ、等間隔の横平行沈線と区切り文。交互に縄文LR充填。内面に突帯及び4本沈線束	外面スス
80	42・81	浅鉢	口縁部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1式				○			−	25X22	−	−	(4.7)	−	明黄褐 10YR6/6	明黄褐 10YR6/6	砂・雲	横沈線と横条痕。内面上端隆帯と円形刺突	
81	42・81	壺or 注口土器	体部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1式							−	24Z19	Ⅳa	−	(2.5)	−	褐灰 7.5YR4/1	明褐灰 7.5YR7/2	砂	上部斜短沈線。重菱形文。	
82	42・81	壺or 注口土器	口縁部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B1～2式		△					−	25A6	Ⅳa	−	(4.1)	−	にぶい橙 7.5YR7/4	黒褐 10YR3/2	砂・雲	横沈線。カッコ文。補修孔。	

下層（縄文時代）の土器類観察表（4）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類		『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状			貼瘤		遺構	グリッド	層位	口径	器高	底径	色調		胎土	調整等の所見	備考
		器形	部位							波	突起	平	長軸	縦横				cm	cm	cm	外面	内面			
83	42・81	壺	体～底部	第Ⅵ群	後期	中葉	関東系	加曽利B3式?							－	22W6	Ⅳ	－	(7.5)	6.2	にぶい黄橙 10YR7/3	黒褐 2.5Y3/1	砂	下半部に横沈線	No.1
84	43・81	浅鉢	口縁～体部	第Ⅵ群	後期	中葉		不明			○	△			－	22Z9	Ⅳa	36.4	(16.7)	－	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	砂	二個の小突起。無文	埼玉県寿能遺跡出土に類似
85	43・81	深鉢	突起	第Ⅵ群 A2類	後期	中葉					○				－	23Y4	Ⅳa	－	(6.9)	－	橙 7.5YR7/6	灰黄褐 10YR4/2	砂・雲	鉢巻状隆帯。小円刺突。中空品	
86	43・81	深鉢	突起	第Ⅵ群 A2類	後期	中葉					○				－	25A25	Ⅳ	－	(9.5)	－	にぶい黄橙 10YR6/4	褐灰 7.5YR4/1	砂・雲	鉢巻状隆帯	
87	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅵ群 A2類	後期	中葉		三仏生式?		○					－	23V20	Ⅳ	－	(6.6)	－	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	砂・雲	波状部に逆J字文。口縁に沿った横沈線と区切り文。	
88	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅵ群 (C類)	後期	中葉	北陸系	(酒見式?)				○			SX252	22Z21ウ	1	－	(3.4)	－	灰黄 2.5Y7/2	黒褐 2.5Y3/2	砂	細い横沈線と連続刺突	
89	43・81	壺	頸部	第Ⅵ群 (C類)	後期	中葉	北陸系	(酒見式?)							－	25X25	Ⅲb	－	(4.7)	－	黒褐 2.5Y3/2	黄褐 2.5Y5/4	砂・長	細い縦位鋸歯状沈線。	
90	43・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		◎					－	22Z6	Ⅳa	－	(10.2)	－	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	砂・雲	帯状削り出し肥厚部に縄文?	
91	43・82	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		◎					－	25Z5	Ⅳa	－	(39.3)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	浅黄橙 10YR8/3	砂・雲	磨り消し縄文。入組み文。縄文帯に鋸歯状文。地文縄文RL。	
92	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		◎					－	24A18	Ⅳa	－	(6.7)	－	赤灰 2.5YR4/1	灰赤 2.5YR5/2	白	折り返し口縁肥厚。縄文RL施文後磨り消し	
93	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		◎					－	24A18	Ⅳa	－	(6.6)	－	灰赤 2.5YR5/2	明褐灰 7.5YR7/2	白	92に同じ	
94	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		○					－	25Z10	Ⅳ	－	(4.4)	－	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	砂	口縁端部肥厚。無文部は磨り消しで、縄文部は斜位の入り組み文の可能性。縄文はRLとLRにより羽状。	
95	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		◎					－ －	22Y25 25A19	Ⅳa Ⅳa	－	(3.9)	－	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR4/2	白	沈線区画内縄文RL施文後磨り消し	
96	43・81	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器		○	○				－	22Z21	Ⅳa	－	(9.9)	－	にぶい褐 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR6/2	白	山形小突起。沈線による入り組み文。縄文Lr充填	
97	43・81	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器				○			－	24A19	Ⅲb	－	(7.0)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	黒褐 10YR3/1	白	クランク状磨り消し。縄文RL。	内面コゲ
98	43・81	深鉢	体部	第Ⅶ群 A2類	後期	後葉		瘤付土器							－	23Y5	Ⅳa	－	(9.7)	－	黒褐 10YR3/2	褐灰 10YR4/1	白	沈線による多段の入組み文。その間に縄文LR充填。横区画の部分は横位、縦区画の部分は縦位施文。	No.24
99	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		○			縦	8*2	－	25A8	Ⅳa	－	(8.1)	－	褐 7.5YR4/6	極赤褐 7.5YR2/3	砂	突起状の縦位割瘤。数段の入り組み文。縄文LR。磨り消し。	外面スス、内面コゲ
100	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		○			縦	7*2	－	23Y5	Ⅳa	－	(4.8)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄褐 10YR5/3	砂	99に同じ	No.58　23Y・Z遺物集中区外面スス
101	43・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		○			縦	7*2	－	24A1	Ⅲa	－	(7.0)	－	灰黄褐 10YR5/2	褐灰 10YR5/1	砂、白	縦長割瘤。縄文?	
102	43・81	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		○					－	25A3	Ⅳa	－	(6.5)	－	明赤褐 2.5YR5/6	黒褐 5YR3/1	白	口縁に沿った隆帯および縦隆帯上に刻み。縄文RL?、無文部磨り消し。	
103	44・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		◎					－	25A19	Ⅳa	－	(5.6)	－	にぶい褐 7.5YR5/3	黒褐 10YR2/2	砂、白	口縁に沿って刻み。地文は縄文LRで、曲線により入り組み的な文様。	
104	44・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		○					－	22X15	Ⅲb	－	(4.3)	－	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3	砂、白	磨り消し縄文LR	
105	44・81	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器		○			円	1*1	－	25X25	Ⅲb	－	(4.1)	－	暗灰黄 2.5Y5/2	黄褐 2.5Y5/4	白	削り出し隆帯交点に小瘤	
106	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器			○		縦	3*2	－	25A16	Ⅲb	－	(5.0)	－	オリーブ黒 5Y3/1	灰黄褐 10YR6/2	砂、白	突起部も縄文LR。割瘤。	
107	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器			○				－	22Z8	Ⅳa	－	(5.1)	－	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	砂	山形突起部側面に鋸歯状沈線。縄文LR	
108	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器				○	縦	2*2	－	25A16	Ⅲb	－	(4.2)	－	黒褐 10YR3/1	にぶい黄橙 10YR7/3	砂、白	口縁部帯状に肥厚。縄文LR。円形十字割瘤。以下無文	
109	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群 A3類	後期	後葉		瘤付土器				○			－	25A8	Ⅳa	－	(3.3)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	－	口縁端部は一段肥厚。瘤状肥厚部にハの字状の刻み。口縁端部以外は無文。	
110	44・82	壺	口縁部	第Ⅶ群 A6c類	後期	後葉		瘤付土器				○			－	24A1	Ⅲb	(11.5)	(3.7)	－	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 7.5YR6/1	砂	口縁に沿って横ハの字状沈線	

下層（縄文時代）の土器類観察表（5）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類 器形	分類 部位	『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状 波	口縁形状 突起	口縁形状 平	貼瘤 長軸	貼瘤 縦横	遺構	グリッド	層位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	色調 外面	色調 内面	胎土	調整等の所見	備考
111	44・82	深鉢or注口土器	口縁部	第Ⅶ群A類	後期	後半		安行?			△	△			－	25A15	Ⅳa	－	(4.7)	－	黒N1.5/0	黒褐10YR3/2	白	中央に瘤状突起と深い刺突。瘤を中心に対称の文様構成。区画内に縄文?	整No.433と同一か 外面スス
112	44・82	深鉢or注口土器	体部	第Ⅶ群A類	後期	後半		安行?							－	25A16	Ⅲb	－	(4.6)	－	黒10YR2/1	黒褐10YR3/1	砂	地文縄文か?、沈線文様	整No.378と同一か
113	44・82	深鉢	突起	第Ⅶ群	後期	後葉		瘤付土器							－	22W6	Ⅳ	－	(4.9)	－	灰白10YR8/1	灰白10YR8/1	砂、土	脚状の突起。帯状隆帯と沈線。	
114	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器			○				－	25Z20	Ⅲb	－	(6.5)	－	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR6/3	砂、白	口縁部小突起。口縁と体部で縄文条方向に違い。縄文LR?	
115	44・82	深鉢	体部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器					横	1＊5	－	23Z21	Ⅲb	－	(3.4)	－	灰黄褐10YR4/2	にぶい黄褐10YR5/3	白	横位の割瘤	
116	44・82	深鉢	体部	第Ⅶ群	後期	後半	北陸系?								－	23Z11	Ⅳa	－	(14.2)	－	黒褐10YR3/1	にぶい黄褐10YR5/3	砂、白	縄文RL施文後横平行沈線。上部無文。	外面スス、内面コゲ
117	44・82	鉢	口縁～体部	第Ⅶ群	後期	後半		瘤付土器?				○			－	22X25	Ⅳa	23.4	(8.6)	－	にぶい褐7.5YR6/3	明褐7.5YR5/8	砂、白	中央が浅く窪む円環状浮文と縦長瘤。細沈線の格子目	No.1　22X遺物集中区
118	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器				○	円	1＊1	－	22Y1	Ⅳa	－	(3.0)	－	褐灰7.5YR5/1	褐灰7.5YR5/1	砂、白	縄文LR施文後鋸歯状沈線。磨り消し縄文と瘤	
119	44・82	壺or注口土器	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器							－	23Y10エ	Ⅳa	－	(2.4)	－	灰褐7.5YR5/2	明褐灰7.5YR7/2	白	縄文（?）施文後鋸歯状沈線と円形刺突	
120	44・82	壺or注口土器	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器				○			－	23Y5	Ⅳa	－	(2.9)	－	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2	－	縄文LR施文後鋸歯状沈線	No.62　23Y・Z遺物集中区
121	44・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器				△			－	23Z1	Ⅳa	－	(4.4)	－	灰白10YR8/2	灰白10YR8/2	－	口縁部縄文LR施文後刺突。磨り消し（削り出し）隆帯と割瘤	No.49　遺物集中区
122	44・82	壺or注口土器	口縁部	第Ⅶ群A3類	後期	後葉		瘤付土器				○			－	25A17	Ⅲb	－	(4.9)	－	にぶい黄2.5Y6/3	暗灰黄2.5Y5/2	－	磨り消し（削り出し）縄文LRによる隆帯	
123	44・82	壺or深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群	後期	後葉		不明							－	24A19	Ⅲb	－	(5.2)	－	黒褐10YR3/2	灰黄褐10YR5/2	砂、白	2条の沈線間に刺突文。背の高い隆帯上に縄文LR。	
124	44・82	単孔壺or注口土器	体部	第Ⅶ群	後期	後葉		瘤付土器							－	22W12	Ⅳ	－	(6.4)	－	橙5YR6/6	灰褐5YR6/2	砂、白	沈線による横文様。細隆帯上に縄文か?	
125	44・82	壺or注口土器	体部	第Ⅶ群	後期	後葉		瘤付土器?							－	25A8	Ⅳa	－	(4.7)	－	黒褐10YR3/2	褐灰10YR5/1	砂、白	磨り消しによる微隆起線。	
126	44・82	台付鉢or甕	脚部	第Ⅶ群A8類	後期	後半									－	24A7	Ⅲb	－	(5.6)	－	にぶい黄橙10YR6/4	黒2.5Y2/1	砂、白	無文	
127	44・82	台付鉢or甕	脚～底部	第Ⅶ群A8類	後期	後半									SD1	23Z24ア	4	－	(4.6)	6.8	浅黄2.5Y7/3	灰黄2.5Y7/2	砂、白	無文	
128	44・82	台付鉢or甕	脚～底部	第Ⅶ群A8類	後期	後半									－	25A9	Ⅲb	－	(3.4)	6.0	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	－	無文	精製品
129	44・82	台付鉢or甕	脚～底部	第Ⅶ群A8類	後期	後半									SE71	24A14ウ	1	－	(2.4)	5.1	灰白2.5Y8/2	黒2.5Y2/1	－	無文	
130	44・82	多孔底土器	底部	第Ⅶ群A9類	後期	後半									SX252	23Y4イ	－	－	(1.7)	－	淡赤橙2.5YR7/4	灰黄2.5Y7/2	土?	多孔底部	
131	44・82	多孔底土器	底部	第Ⅶ群A9類	後期	後半									－	23Y10	Ⅳa	－	(1.1)	－	淡黄2.5Y8/3	灰白2.5Y8/2	砂、白	多孔底部	
132	44・82	多孔底土器	体～底部	第Ⅶ群A9類	後期	後半									－	24A17	Ⅳa	－	(4.0)	－	灰白10YR8/2	浅黄橙7.5YR8/4	砂	多孔底部	
133	44・82	壺or注口土器	口縁部	第Ⅶ群	後期	後葉		瘤付土器				○			－	22Z11	Ⅳa	10.6	(4.7)	－	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい褐7.5YR6/3	白	口縁部縄文施文後鋸歯状沈線。その下に削り出し隆帯と斜格子沈線。頸部隆帯上に鋸歯状沈線。	
134	44・82	壺or注口土器	体部	第Ⅶ群C2類	後期	後葉		（瘤付第Ⅱ段階）					縦	5＊2	－	25A15	Ⅳa	－	(3.7)	－	黄灰2.5Y4/1	黄灰2.5Y5/1	白	縦割瘤と沈線区画磨り消し縄文	
135	44・82	注口土器	体部	第Ⅶ群C3類	後期	後葉		（瘤付第Ⅱ段階）							－ －	22Z11 22Z16	Ⅳa Ⅳa	(13.9) (最大径)	(4.8)	－	灰褐7.5YR6/2	橙7.5YR6/6	砂	大きく突出す円すい状突起。削り出し（磨り消し）による細い隆帯。縄文LR	
136	44・82	壺or注口土器	体部	第Ⅶ群C類	後期	後葉		瘤付土器							－ －	23Y11 23Z6	Ⅳb Ⅳa	－	(7.3)	－	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい橙7.5YR7/3	白	同心円状の削り出し。隆帯上に楕円形刺突。割瘤。	No.24
137	44・82	壺or注口土器	底部	第Ⅶ群C1類	後期?										－	21W22	Ⅳ	－	(2.9)	3.0	にぶい黄橙10YR7/3	灰黄褐10YR5/2	品、白	下半部縄文RLと沈線。	
138	44・82	壺	体～底部	第Ⅶ群	後期	後葉		瘤付土器							－	22Z17	Ⅳa	－	(5.9)	7.4	灰褐7.5YR4/2	にぶい黄褐10YR5/4	白	地文細かい縄文LR。中央部に縦位の鋸歯状沈線、垂下する平行沈線で囲まれた部分は磨り消し。	

下層（縄文時代）の土器類観察表（6）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類 器形	分類 部位	『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状 波	口縁形状 突起	口縁形状 平	貼瘤 長軸	貼瘤 縦横	遺構	グリッド	層位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	色調 外面	色調 内面	胎土	調整等の所見	備考
139	44・82	注口土器？	体～底部	第Ⅶ群C類	後期？										－ －	25A3 25A8	Ⅳa Ⅳa	－	(7.6)	2.6	浅黄橙 10YR8/4	黒褐 2.5Y3/1	白	非常に細かい縄文RL。底部半球状窪み	
140	44・82	注口土器	体部～注口	第Ⅶ群C類	後期	後葉		瘤付土器							－	23Z3	Ⅳb	－	(5.5)	－	褐灰 7.5YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	白・雲	注ぎ口部を中心のらせん状削り出し風隆帯。隆帯上に斜め連続刺突。	
141	44・82	注口土器	体部～注口	第Ⅶ群C類	後期	後葉		瘤付土器							－	24A23	Ⅲb	－	(3.5)	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	長・砂	注ぎ口部に瘤２	
142	44・82	注口土器	注口	第Ⅶ群C7a類	後期	後葉		瘤付土器							－	21W22	Ⅳ	－	(3.7)	－	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	長	注口付根部分に沈線。	
143	44・82	注口土器	注口	第Ⅶ群C7b類	後期	後葉		瘤付土器							－	23Z6	Ⅳa	－	(4.4)	－	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR6/3	長・砂	注口付根部分に沈線。小瘤	No.14　遺物集中区
144	44・82	注口土器	注口	第Ⅶ群C7b類	後期	後葉		瘤付土器							－	23Y10	Ⅳa	－	(3.1)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	黄褐 10YR5/6	―	注口付根部分に沈線。	No.11　23Y・Z遺物集中区
145	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		△					－	25A9	Ⅲb	－	(3.5)	－	黒褐 10YR3/2	黒褐 10YR3/2	長・雲	口縁に沿って縦割瘤と沈線。縄文L?	
146	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○					－ －	23Y5 23Y10	Ⅳa Ⅳa	－	(8.8)	－	黒 2.5Y2/1	黒褐 2.5Y3/1	長・砂	波状口縁に沿って縄文RL。磨り消し縄文。波状部に楕円状瘤隆帯。	No.63、No.60 整No.478と同一か
147	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○			縦	1＊2	－	25A8	Ⅳa	－	(7.2)	－	黒褐 10YR3/2	灰黄褐 10YR4/2	砂・長	縦長の瘤状貼付により区切られ、瘤と口縁端部形状に沿うように沈線。沈線間無文で丁寧なミガキ。無文帯の外側に充填縄文RL。以下無文で、ススが薄く付着する。	整No.392と同一か
148	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○					SD52	24A21	－	－	(7.1)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR6/4	砂・長	口縁端部に縄文RL。横沈線	
149	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式			○				SD1	22Z25エ	5	－	(3.4)	－	黒褐 10YR2/2	明赤褐 2.5YR5/6	雲・長・砂	太い横沈線。口縁端部に縄文LR	
150	45・82	深鉢	口縁～体部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式?		○					－	24W21	Ⅳ	(27.1)	(10.6)	－	明褐 7.5YR5/6	黒褐 7.5YR3/1	雲・長・砂	波状口縁で肥厚。その下に隆帯と沈線が巡る。頸部に沈線数本。縄文?	
151	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式		○					－	23Z25	Ⅲ	－	(5.0)	－	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	長・砂	口縁に沿った沈線。縄文?	
152	45・82	鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系		△						－	25A3	Ⅲb	－	(5.0)	－	にぶい黄橙 10YR7/3	黒 10Y2/1	雲・長・砂	頸部に隆帯。中央に細沈線。円形刺突。口縁赤彩か	
153	45・82	浅鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式							－	23Y5	Ⅳa	－	(3.9)	－	にぶい赤褐 5YR5/3	黒褐 5YR2/1	砂・長	縦瘤状貼り付け。口縁に沿った２本の沈線とそれに沿った斜沈線。	No.37　23Y・Z遺物集中区
154	45・82	浅鉢	口縁部	第Ⅶ群D類	後期	後葉	北陸系	井口式							SK135	25Z15ア	1	－	(4.4)	－	黄灰 2.5Y4/1	暗灰黄 2.5Y4/2	砂	口縁に沿った２本沈線。沈線間磨き。	
155	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式		○					－	25W2	Ⅳ	－	(4.1)	－	褐灰 7.5YR4/1	黒褐 7.5YR3/1	砂	細かい縄文RL施文後沈線。	
156	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式		○					－	24A22	Ⅳa	－	(3.2)	－	灰褐 7.5YR5/2	明褐灰 7.5YR7/2	砂	口縁に沿って刻み。縄文LRと磨り消し。	
157	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式							－	22Z23	Ⅲb	－	(3.4)	－	にぶい黄褐 10YR5/3	褐 10YR4/6	砂	縦横沈線。屈曲部に縄文LR。	
158	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系			△					SD1	23Z24ウ	4	－	(3.4)	－	黄灰 2.5Y5/1	灰黄 2.5Y6/2	雲・長・砂	口縁端部のみ縄文RL	
159	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系					○			SD1	23Z14ア	3	－	(4.4)	－	黒褐 10YR3/2	にぶい褐 7.5YR5/4	砂・長	縦瘤状貼り付け連続。	
160	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系					○			SD1	24Z8ア	3	－	(4.1)	－	明褐 7.5YR5/6	黒褐 10YR3/2	砂・雲	口縁断面肥厚するもやや凹状。縦瘤状貼り付け	
161	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式		○					－	25A2	Ⅲb	－	(5.4)	－	浅黄橙 7.5YR8/4	灰黄 2.5Y7/2	砂・長	波状部三叉状連結文。	
162	45・82	深鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式				○			SD1	25Z23イ	－	－	(3.8)	－	灰白 2.5Y8/2	褐灰 10YR6/1	砂・長多い	沈線による三叉文的区画。	
163	45・82	鉢	口縁部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式				○			P83	25Z10	1	－	(4.3)	－	褐灰 10YR6/1	にぶい黄橙 10YR7/2	砂・長	口縁内側にやや肥厚。細い沈線の楕円区画。縄文?	
164	45・82	壺?	体部	第Ⅶ群E類	後期	後葉	北陸系	八日市新保式							－	24Z5	Ⅲb	－	(3.1)	－	黒褐 10YR3/1	橙 7.5YR7/6	雲	楕円眼鏡状隆帯。側縁に鋸歯状沈線。	
165	45・83	深鉢	口縁部	第Ⅶ群	後期	後葉	中部系 関東系	高井東式		◎					－	24Z14	Ⅲb	－	(6.5)	－	灰黄 2.5Y7/2	灰黄褐 10YR6/2	雲	三角突起部に２個のボタン状浮文。口縁に沿って沈線。縄文RL?	

下層（縄文時代）の土器類観察表（7）

胎土（肉眼） 長石：長、石英：英、雲母：雲、白色粒：白、小砂利：砂、土：土器

報告番号	図版番号	分類 器形	分類 部位	『剣野』分類	時期1	時期2	系統	型式	赤彩	口縁形状 波	口縁形状 突起	貼瘤 平	貼瘤 長軸	貼瘤 縦横	遺構	グリッド	層位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	色調 外面	色調 内面	胎土	調整等の所見	備考
166	45・83	深鉢	突起	第Ⅶ群	後期	後葉	中部系 関東系	高井東式							－	24Y18	Ⅳa	－	(5.9)	－	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	砂・長・英	橋状把手と袋状突起	
167	45・83	深鉢	口縁部	第Ⅶ群	後期	後葉	中部系 関東系	高井東式		○					P189	25A18	1	－	(5.4)	－	黒褐 7.5YR3/1	黒褐 10YR3/2	砂・長・英	隆帯区画と沈線。	
168	45・83	深鉢	口縁部	第Ⅶ群	後期	後葉	中部系 関東系	高井東式		○					P189	25A17イ	1	－	(4.3)	－	灰褐 7.5YR4/2	オリーブ黒 7.5Y3/1	砂・英・雲	口縁に沿った低い隆帯。隆帯上刺突	
169	45・83	深鉢	口縁部	第Ⅶ群？	後期	後葉？		不明		△		△			－	25X14	Ⅳa	－	(4.5)	－	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR7/4	砂・長	口縁端部に左下がりの刻み、その下位に４条の平行沈線。	
170	45・83	深鉢	体部	第Ⅶ群 G類	晩期	前葉	北陸系	御経塚式							SD1	24Z8イ	2	－	(5.6)	－	灰褐 7.5YR5/2	灰褐 7.5YR4/2	砂・長・雲	縄文LR。沈線。	
171	45・83	深鉢	体部	第Ⅶ群 G類	晩期	前葉	北陸系	御経塚式							SD1	22Z20イ	5	－	(6.2)	－	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/4	砂・雲	縄文LR。横沈線。三叉文	
172	45・83	浅鉢	体部	第Ⅶ群 G類	晩期	前葉	北陸系	御経塚式	○						－	25A3	Ⅲb	－	(6.9)	－	褐灰 5YR4/1	灰黄褐 10YR5/2	砂・雲少	縄文L施文後沈線。ほぼ全面赤彩。三叉文？	
173	45・83	鉢	体部	第Ⅶ群 A類	晩期	初頭	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞B1式							－	22A1	Ⅲb	－	(5.2)	－	褐灰 10YR4/1	にぶい黄褐 10YR5/4	砂・長	横沈線、三叉文	
174	45・83	鉢	体部	第Ⅶ群 B類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞B2式							－	24A14	Ⅳa	－	(4.7)	－	黒 2.5Y2/1	黒褐 2.5Y3/1	雲	横沈線、三叉文	外面スス、内面コゲ
175	45・83	鉢 or深鉢	口縁部	第Ⅶ群 C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式				○			－	25A3	Ⅳ	－	(6.2)	－	黒褐 10YR3/2	灰褐 7.5YR4/2	砂・雲	口縁部キザミ、羊歯状文、結節縄文RL?	外面スス
176	45・83	鉢 or深鉢	口縁部	第Ⅶ群 C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式				○			－	25A19	Ⅲb	－	(4.4)	－	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	砂・雲	羊歯状文	
177	45・83	鉢	口縁部	第Ⅶ群 C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式			○				－	25Z20	Ⅲb	－	(4.0)	－	黒褐 10YR2/3	黒褐 7.5YR3/1	砂・雲	羊歯状文	外面スス
178	45・83	鉢	口縁部	第Ⅶ群 C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式							SD1	22Z9イ	3	－	(4.5)	－	黒褐 10YR2/2	黒褐 10YR2/2	砂・雲	羊歯状文風。	外面スス
179	45・83	注口土器	注口	第Ⅶ群 C類	晩期	前葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞BC式							－	25Z19	Ⅲb	－	(2.6)	－	灰白 2.5Y8/2	にぶい黄橙 10YR7/2	砂	注口部。注口付根に文様	
180	45・83	鉢	口縁部	第Ⅶ群 D類	晩期	中葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞C1式				○			－	25Y6	Ⅲb	－	(4.8)	－	にぶい黄褐 10YR4/3	明褐 7.5YR5/6	雲・砂	口縁に沿った沈線間に斜刺突。結節縄文。	
181	45・83	浅鉢	体部	第Ⅶ群 D類	晩期	中葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞C1式							－	26A4	－	－	(3.5)	－	黒 2.5Y2/1	黄灰 2.5Y4/1	雲・砂・長	雲形文。縄文LR、沈線	
182	45・83	深鉢	体部	第Ⅶ群 F類	?	?	?	?							－	25A15	Ⅳa	－	(5.1)	－	橙 5YR6/8	明赤褐 2.5YR5/8	砂・長	細い沈線による同心円状の文２か所。	
183	45・83	鉢	体部	第Ⅶ群 F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A式							－	24A20	Ⅲb	－	(2.7)	－	黒褐 7.5YR2/2	褐 7.5YR4/3	雲・砂・長	平行沈線。結節網縄文	
184	45・83	浅鉢	口縁～体部	第Ⅶ群 F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞C2～A式				○			－	25Y12	Ⅳ	(13.7)	(3.9)	－	にぶい黄褐 10YR4/3	黒 10YR2/1	砂	口縁端部２条の平行沈線、その下位に網目状撚糸文。	外面スス、内面コゲ
185	45・83	壺	頸～体部	第Ⅶ群 F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A式							－	21X11	暗渠	－	(4.7)	－	黒 2.5Y2/1	浅黄 2.5Y7/3	砂・土	頸部無文。縄文LR	
186	46・83	深鉢	口縁～底部	第Ⅶ群 F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A～A'式							－	21X18	－	(30.6)	36.0	9.8	黒褐 5YR2/1	にぶい赤褐 5YR4/3	砂、白	口縁部に沈線。体部に網目状撚糸文。	
187	46・83	深鉢	体～底部	第Ⅶ群 F類	晩期	後葉	東北系 (亀ヶ岡系)	大洞A～A'式							－ －	24A24 25A3	－ Ⅳa	－	(23.0)	8.8	黒褐 2.5Y3/2	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂	口縁部に平行沈線。内面全面と外面に部分的にアスファルト状物質が付着。	
188	46・83	ミニチュア	体～底部	第Ⅸ群											－	22W2	Ⅳ	－	(2.7)	1.4	灰白 10YR8/2	にぶい黄橙 10YR7/2	砂	ミニチュア土器	
189	46・83	ミニチュア	体～底部	第Ⅸ群											－	25A3	Ⅳa	－	(3.4)	4.7	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1	砂・土	ミニチュア土器	
190	46・83	深鉢 (粗製)	口縁～体部	第Ⅹ群 A1b類	後期	後葉						○			－	23Y10	Ⅳa	－	(16.9)	－	暗灰黄 2.5Y4/2	浅黄橙 10YR8/3	砂	縄文L	
191	46・83	深鉢 (粗製)	体～底部	第Ⅹ群 A2a類	後期		北陸系？								－	25V25	Ⅳ	－	(12.3)	12.8	淡黄 2.5Y8/4	黄 2.5Y8/6	砂、白	縦位の縄文RL。	外面被熱 内面コゲ
192	46・83	深鉢 (粗製)	口縁～体部	第Ⅹ群 A2b類	後期	後葉						○			－	23Z3	－	29.6	(15.2)		にぶい黄褐 10YR5/3	黄褐 10YR5/6	砂、白	縄文LR。ヘラナデ?	
193	46・83	深鉢 (粗製)	体～底部	第Ⅹ群 A2b類	晩期？										－	22W14	Ⅳa	－	(16.5)	9.4	浅黄橙 10YR8/3	黒 7.5Y2/1	白	縄文LRを粗雑に転がす。外面は被熱により荒れている	外面被熱 内面コゲ

下層（縄文時代）の石器・石製品観察表（1）

報告番号	図版番号	種別 器種	種別 分類等	石材	出土位置 遺構	出土位置 層位	出土位置 グリッド	属性（単位：mm/g） 長さ	幅	厚さ	重量	備考
194	47・84	石　鏃	凹基有茎	流紋岩	SD1	2	23Z14ア	26.6	15.6	4.4	1.1	アスファルト付着
195	47・84	石　鏃	凹基無茎	チャート	SX147	1	24Z21ウ	27.4	18.3	4.6	2.1	基部片側欠損
196	47・84	石　鏃	凹基無茎	チャート	SD1	5	23Z5ア	22.7	17.1	5.2	1.5	アスファルト付着
197	47・84	石　鏃	凹基無茎	チャート	－	Ⅳa	21Z21	22.7	14.4	2.9	0.8	
198	47・84	石　鏃	凹基無茎	チャート	－	Ⅲb	22Z19	36.0	14.1	5.1	1.7	基部片側欠損
199	47・84	石　鏃	凹基無茎	珪質頁岩	SD313	1	24X23エ	27.7	13.9	4.4	1.6	先端部欠損
200	47・84	石　鏃	凹基五角形	チャート	SD1	4	23Z10ウ	21.8	14.9	4.5	1.2	
201	47・84	石　鏃	平基無茎	チャート	－	Ⅲb	24Y11	28.8	15.2	5.4	1.8	
202	47・84	石　鏃	平基無茎	頁岩	－	Ⅲb	24A25	26.3	22.6	7.3	3.1	
203	47・84	石　鏃	凸基有茎	チャート	SD1	3	25Z8ウ	33.2	17.9	5.4	2.4	黒色物（アスファルト？）付着
204	47・84	石　鏃	凸基有茎	チャート	SD1	3	23Z23イ	33.2	14.8	8.6	2.7	
205	47・84	石　鏃	凸基有茎	チャート	－	Ⅲb	21Y25	23.2	9.8	3.6	0.6	茎部欠損
206	47・84	石　鏃	凸基有茎	珪質頁岩	－	Ⅲb	24X14	18.3	13.1	5.1	1.0	アスファルト付着。先端部、茎部欠損
207	47・84	石　鏃	凸基有茎	チャート	SD1	4	23Z10ア	33.3	13.4	7.8	3.0	茎部欠損
208	47・84	石　鏃	凸基有茎（長）	流紋岩	SX147	1	25Z1エ	22.1	13.5	6.5	1.3	茎部欠損
209	47・84	石　鏃	尖基	ホルンフェルス	SD1	－	24Z8イ	34.4	14.5	6.0	2.9	両端部欠損
210	47・84	石　鏃	尖基	頁岩	－	Ⅲb	25A24	44.3	13.6	8.0	3.6	アスファルト付着。茎部欠損
211	47・84	尖頭器		流紋岩	SX252	1	23Z2ア	46.4	17.8	7.0	4.8	
212	47・84	尖頭器		頁岩	SD1	5	22Z20エ	50.3	21.8	7.4	6.0	
213	47・84	石　錐		チャート	－	Ⅲb	25Z3	43.2	20.1	9.1	7.4	先端部欠損
214	47・84	石　錐		チャート	－	Ⅲb	22Z21	35.1	16.9	12.2	4.7	先端部摩耗痕
215	47・84	石　錐		頁岩	－	Ⅲb	25A21	38.3	38.5	8.3	6.6	先端部摩耗痕
216	47・84	石　錐		頁岩	－	Ⅲb	25A22	52.5	11.5	8.7	4.3	
217	47・84	石　匙		チャート	－	Ⅲb	23Z2	24.9	52.5	8.3	6.1	
218	47・84	石　匙		流紋岩	－	Ⅲb	22Y8	25.8	40.5	7.5	7.3	先端部欠損
219	47・84	石　篦		泥岩	SD1	4	24Z23エ	96.8	49.1	24.9	141.0	
220	47・84	両極石器		チャート	－	Ⅳa	22Z16	42.9	32.4	8.1	11.4	
221	47・84	両極石器		チャート	SD1	3	23Z14ア	32.9	23.8	8.4	6.3	
222	47・84	両極石器		チャート	SD1	－	23Z10	56.1	36.3	17.3	48.0	
223	47・84	両極石器		チャート	－	Ⅳb	22Z16	26.6	23.7	6.4	5.6	
224	47・84	両極石器		チャート	－	Ⅲb	22Z19	35.3	46.3	10.1	22.6	
225	48・84	不定形石器	A1類	流紋岩	－	Ⅳa	22Y7	39.1	59.3	13.6	23.6	
226	48・84	不定形石器	A1類	流紋岩	－	Ⅳa	23Y2	49.1	49.6	10.6	21.1	
227	48・84	不定形石器	A2類	頁岩	－	Ⅳa	22Z14	47.2	34.0	9.8	13.9	
228	48・84	不定形石器	A2類	安山岩？	－	Ⅲb	22Y6	107.6	38.2	16.0	66.1	
229	48・84	不定形石器	B類	泥岩	－	Ⅲb	25A12	48.8	66.8	11.0	28.3	
230	48・84	不定形石器	C類	チャート	SD1	4	24Z13イ	45.4	36.6	11.8	21.7	
231	48・84	不定形石器	C類	泥岩	－	Ⅲb	24Y12	73.3	42.0	8.2	29.2	
232	48・84	不定形石器	D類	チャート	SD1	3	22Z14イ	54.4	45.0	11.1	19.5	
233	48・84	不定形石器	E類	珪質頁岩	SD1	4	25Z23ウ	35.2	39.6	11.1	14.7	
234	48・84	不定形石器	F1類	珪質頁岩	SR1	－	25W14	37.7	31.1	9.9	8.6	
235	48・84	不定形石器	F2類	珪質頁岩	試掘4T	Ⅱ・Ⅲ	－	55.7	43.9	14.4	26.2	
236	48・85	不定形石器	H類	泥岩	－	Ⅲb	25A22	61.6	42.9	16.3	33.8	
237	48・85	不定形石器	H類	珪質頁岩	－	Ⅳ	23Y11	65.6	51.7	14.2	28.9	
238	48・85	不定形石器	I類	流紋岩	－	Ⅳa	22Z11	35.6	24.7	12.6	8.6	
239	48・85	不定形石器	I類	チャート	SD1	4	23Z10ウ	36.4	20.0	14.2	8.2	
240	48・85	石　核		頁岩	－	Ⅲb	23Z11	44.1	31.6	22.6	27.9	
241	48・85	石　核		頁岩	－	Ⅳa	22X4	96.7	59.8	39.4	215.6	風化面多く、素材原石か
242	49・85	打製石斧	短冊形	ホルンフェルス	－	Ⅲc	25Y2	134.6	60.2	27.4	206.0	裏面下半部に摩耗痕
243	49・85	打製石斧	撥形	砂質泥岩	SD1	4	23Z9エ	122.6	85.1	12.5	151.1	
244	49・85	磨製石斧		花崗質砂岩	－	Ⅲ	23X5	113.7	50.1	33.3	335.4	完成/刃部3/4
245	49・85	磨製石斧		閃緑岩	－	Ⅲb	25B16	112.9	52.0	27.1	230.1	完成/完形
246	49・85	磨製石斧		蛇紋岩	SD1	4	23A6ウ	96.3	40.5	24.2	138.8	完成/完形
247	49・85	磨製石斧		蛇紋岩	－	Ⅳa	24A23	94.4	41.4	20.3	138.0	完成/刃部欠
248	49・85	磨製石斧		蛇紋岩	－	Ⅲb	26X5	87.4	43.4	19.7	114.0	完成/完形
249	49・85	磨製石斧		砂岩	－	Ⅳ	23W8	105.2	58.2	29.7	254.9	完成/完形
250	49・85	磨製石斧		砂岩	－	Ⅳa	25A22	95.7	54.3	29.2	263.2	完成/刃部2/3。磨石類への転用品
251	49・85	磨製石斧		閃緑岩	SD1	4	24Z13ウ	95.9	65.8	43.6	428.5	敲打/基部1/2
252	49・85	磨製石斧		砂岩	SD1	－	25Z23ア	133.2	57.3	24.5	236.8	刃部に敲打痕。剥離/完形
253	49・85	擦切り残片		蛇紋岩	－	Ⅲb	21X14	84.9	37.0	20.6	86.8	擦切技法の残欠か
254	49・85	磨製石斧		蛇紋岩	－	Ⅲa	25W22	59.0	32.6	20.0	41.3	小型品。完成/刃部3/4
255	49・85	磨製石斧		蛇紋岩	－	Ⅲb	22Z22	56.6	32.9	13.1	41.6	小型品。完成/完形
256	49・85	磨製石斧		頁岩	－	Ⅲb	23Z14	37.3	23.0	9.1	11.5	小型品。完成/基部欠
257	49・85	磨製石斧		蛇紋岩	SR1	－	25X18	39.1	22.1	7.3	10.0	小型品。完成/完形
258	50・85	石　錘	A1類	安山岩(復輝石)	－	Ⅳa	21Z21	109.9	70.0	22.7	281.3	
259	50・85	石　錘	A1類	安山岩（輝石）	SD1	4	22A20イ	120.7	103.4	30.6	595.0	
260	50・85	石　錘	A1類	安山岩（輝石）	SR1	－	25Y6	156.8	115.2	59.9	1565.7	
261	50・85	石　錘	A1類	安山岩（輝石）	SD1	4	24Z18イ	38.0	29.0	9.7	15.4	
262	50・85	石　錘	A1類	安山岩（輝石）	－	Ⅲb	24A6	84.5	68.7	29.6	256.1	

下層（縄文時代）の石器・石製品観察表（2）

報告番号	図版番号	種別		石材	出土位置			属性（単位：mm/g）				備考
		器種	分類等		遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
263	50・85	石　錘	B1類	安山岩（輝石）	SD1	4	23Z14エ	103.5	107.8	30.0	489.0	
264	50・85	石　錘	B2類	安山岩（輝石）	SD1	4	23Z18ウ	89.3	68.1	24.5	229.5	
265	50・85	石　錘	C1類	安山岩（輝石）	－	Ⅲb	24A18	94.9	89.4	31.4	375.6	
266	50・85	石　錘	C1類	安山岩（輝石）	－	Ⅳ	25Y16	104.9	110.1	34.0	556.7	
267	50・85	石　錘?	D類	安山岩（輝石）	－	Ⅲb	22Z10	71.3	74.5	36.1	293.6	
268	50・86	石　錘	A1類	石英斑岩	－	Ⅳa	22X14	80.0	62.1	27.4	182.7	石錘集中区（No.7）
269	50・86	石　錘	B1類	安山岩（輝石）	－	Ⅳa	22X14	80.1	62.8	21.8	157.2	石錘集中区（No.8）
270	50・86	石　錘	C1類	安山岩（輝石）	－	Ⅳa	22X14	63.7	63.4	21.4	124.5	石錘集中区（No.5）
271	－・86	石　錘	A1類	安山岩	－	Ⅳa	22X14	79.5	54.5	21.0	123.0	石錘集中区（No.1）［写真のみ］
272	－・86	石　錘	A1類	安山岩	－	Ⅳa	22X14	84.5	67.0	26.0	199.5	石錘集中区（No.2）［写真のみ］
273	－・86	石　錘	A1類	安山岩（輝石）	－	Ⅳa	22X14	86.0	55.0	24.0	169.0	石錘集中区（No.3）［写真のみ］
274	－・86	石　錘	A1類	安山岩（輝石）	－	Ⅳa	22X14	71.0	63.0	24.5	117.2	石錘集中区（No.6）［写真のみ］
275	－・86	石　錘	C1類	安山岩	－	Ⅳa	22X14	78.0	75.0	22.0	158.2	石錘集中区（No.4）［写真のみ］
276	50・86	磨石類	A類	安山岩（輝石）	SE71	1	24A14ウ	127.8	117.8	86.4	1916.5	
277	50・86	磨石類	A類	安山岩	－	Ⅳa	22Z16	78.7	66.4	57.4	404.7	赤色顔料付着
278	50・86	磨石類	A類	安山岩	－	Ⅳa	22Z13	106.3	58.9	43.0	390.2	
279	50・86	磨石類	A類	安山岩（輝石）	SD1	5	22Z19イ	130.8	81.4	46.1	688.5	
280	50・86	磨石類	A類	安山岩	SR1	－	25W5	80.8	64.3	45.6	335.6	赤色顔料付着
281	50・86	磨石類	F類	閃緑岩	－	Ⅲb	23Z20	88.3	76.1	43.3	406.0	
282	50・86	磨石類	E類	安山岩（輝石）	SD1	4	23Z24ア	120.3	62.7	34.1	356.5	
283	50・86	磨石類	C類	安山岩(復輝石)	－	Ⅳa	24Z21	91.0	83.7	33.2	385.7	
284	51・86	磨石類	G類	安山岩（輝石）	－	Ⅳa	24A12	82.5	58.1	55.3	403.7	
285	51・86	磨石類	F類	安山岩（輝石）	SE81	4	25A8ア	123.0	75.8	61.0	836.3	
286	51・86	磨石類	F類	安山岩（輝石）	－	Ⅳ	22Z21	106.0	60.6	38.2	327.7	
287	51・86	磨石類	G類	安山岩（輝石）	SD1	3	23Z14ウ	74.7	37.2	25.0	113.5	
288	51・86	磨石類	G類	翡翠	－	Ⅳa	22Y3	59.1	57.2	43.0	272.7	多面体敲石
289	51・86	磨石類	G類	翡翠	SR1	－	23W18	87.8	86.2	35.5	359.4	
290	51・86	砥　石		砂岩	SE156A	2	25A14	79.4	52.8	30.1	131.2	
291	51・86	砥　石		砂岩	－	Ⅳa	23Y5エ	36.3	47.4	15.2	25.4	
292	51・86	石皿類	縁あり	安山岩	SD1	3	24Z8ア	103.6	95.1	54.5	378.4	
293	51・86	石皿類	縁なし	砂岩	－	Ⅳ	23Y12	184.0	127.1	50.4	1201.3	
294	51・86	石棒類	有頭/頭部	蛇紋岩	－	Ⅳ	22Y11イ	88.1	46.2	35.5	115.7	彫刻石棒
295	51・86	石棒類	有頭/頭部	緑泥石片岩	SD1	4	23Z18ウ	70.6	34.0	10.8	40.5	括れ部に２条の沈線
296	51・86	石棒類	有頭/頭部	粘板岩	－	Ⅲb	25A6	67.2	49.9	21.6	100.3	括れ部に敲打痕。磨斧の転用品か
297	51・86	石棒類	無頭/頭部	安山岩(復輝石)	SR1	－	25W4	146.4	126.1	109.7	2655.7	
298	51・86	石製品	有孔石製品	頁岩	P172	1	25A19エ	27.6	24.0	6.0	4.2	
299	51・86	石製品	有孔石製品	安山岩(復輝石)	－	Ⅲb	25X19	29.8	18.8	7.2	4.0	
300	51・86	石製品		砂岩	－	－	24Z23	47.5	117.0	29.3	215.6	
301	51・86	石製品		安山岩	SK608	4a	23Y5	72.4	67.2	45.5	193.4	
302	51・86	石製品		安山岩	－	Ⅳa	24A17	51.2	34.4	13.7	23.4	両側面に刻み
303	51・86	石製品		砂岩	－	Ⅲa	25A23	66.2	46.2	7.3	29.6	磨りによる成形部有り

下層（縄文時代）の土製品観察表

報告番号	図版番号	出土位置			種別	属性（単位：cm）			備考
		遺構	層位	グリッド		長さ（高）	幅	厚さ	
304	52・87	－	Ⅲb	25A21	土偶（頭）	1.5	3.2	2.7	中期前葉。河童形土偶。
305	52・87	－	Ⅳ	22Y21	土偶（体・左胸）	5.0	3.5	3.0	中期前葉。胸高1.0cm。細い心棒？
306	52・87	SR1	－	21W22	土偶（頭）	6.5	5.4	3.6	後期後葉～晩期初頭。中空品。赤彩。
307	52・87	－	Ⅳa	23Z1	土偶（頭）	4.0	4.5	2.4	後期後葉～晩期前葉。耳孔約2.5mm。
308	52・87	SD1	4	23Z9イ	土偶（右腕）	3.5	2.7	1.8	後期後半。
309	52・87	－	Ⅲb	23A16	土偶（体・胸～胴）	4.6	5.7	2.6	後期後半。胸高0.7cm。
310	52・87	－	Ⅳ	22Y25	土偶（体・胴～腹）	5.8	4.8	1.9	後期後葉～晩期前葉。黒褐色系の補修材付着。
311	52・87	－	Ⅳa	23Y2	土偶（体・胴～腰）	6.5	5.8	2.3	後期末～晩期前葉。腰部隆帯。
312	52・87	－	Ⅲb	24Z4	有孔土製品	5.9	5.5	2.3	円盤状。貫通孔径0.4cm。
313	52・87	－	Ⅳa	25A18	耳飾り	4.0	4.1	1.6	鼓状。
314	52・87	－	Ⅲb	25A18	耳飾り	2.6	2.8	2.1	臼状。孔径0.7cm。
315	52・87	－	Ⅲb	22Y12	耳飾り	1.7	2.2	1.4	臼状に近い。

下層（縄文時代）の木製品観察表

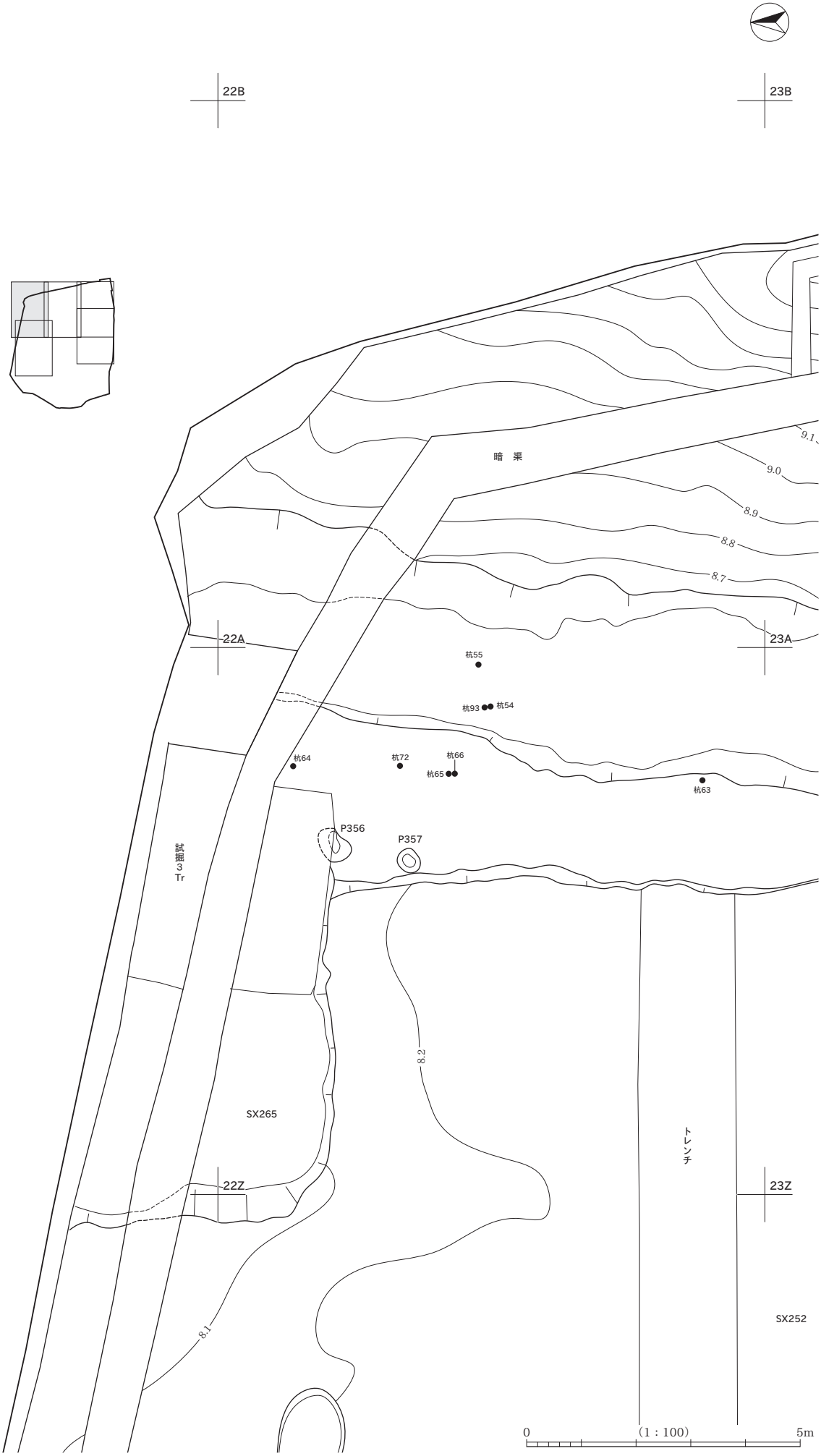
報告番号	図版番号	器種	出土位置			属性（単位：cm）			木取り	備考
			遺構	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		
316	52・87	柱根	SB7（P707）	－	25X4・5	24.2	48.9	42.6	丸木取り	
317	52・87	柱根	SB7（P706）	－	25X15	27.0	42.2	38.0	丸木取り	
318	52・87	柱根・杭	P704	－	25X23	29.4	12.0	10.5	丸木取り	

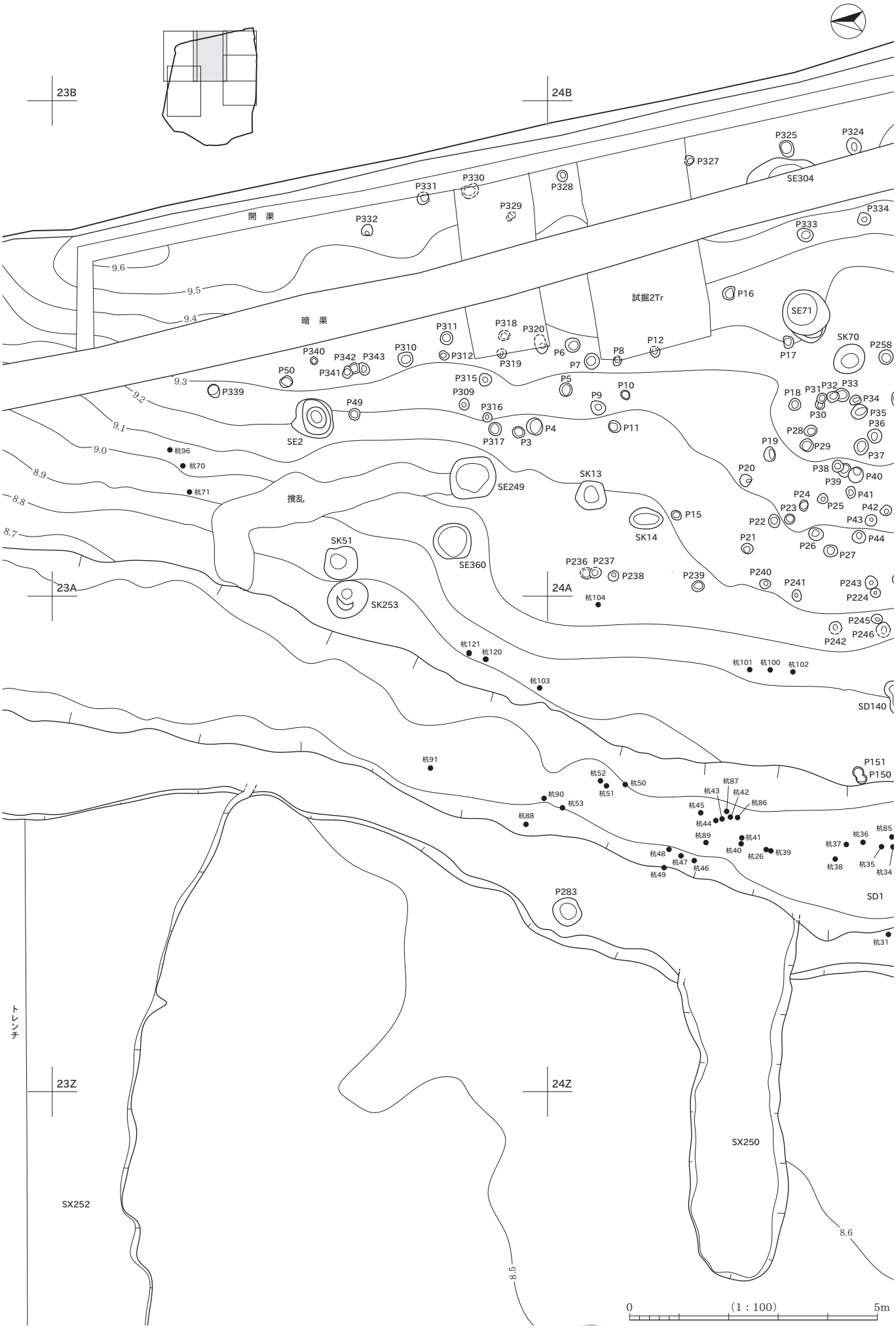
図　　版

上層遺構全体図（S = 1/200）

SX265
22Z
23Z
SX252
8.2
8.1
暗渠
トレンチ
SD628
SD305
22Y
23Y
8.3
8.2
8.1
8.0
杭125
22X
23X
SD693
SK692
0
(1：100)
5m

上層遺構分割図（2）

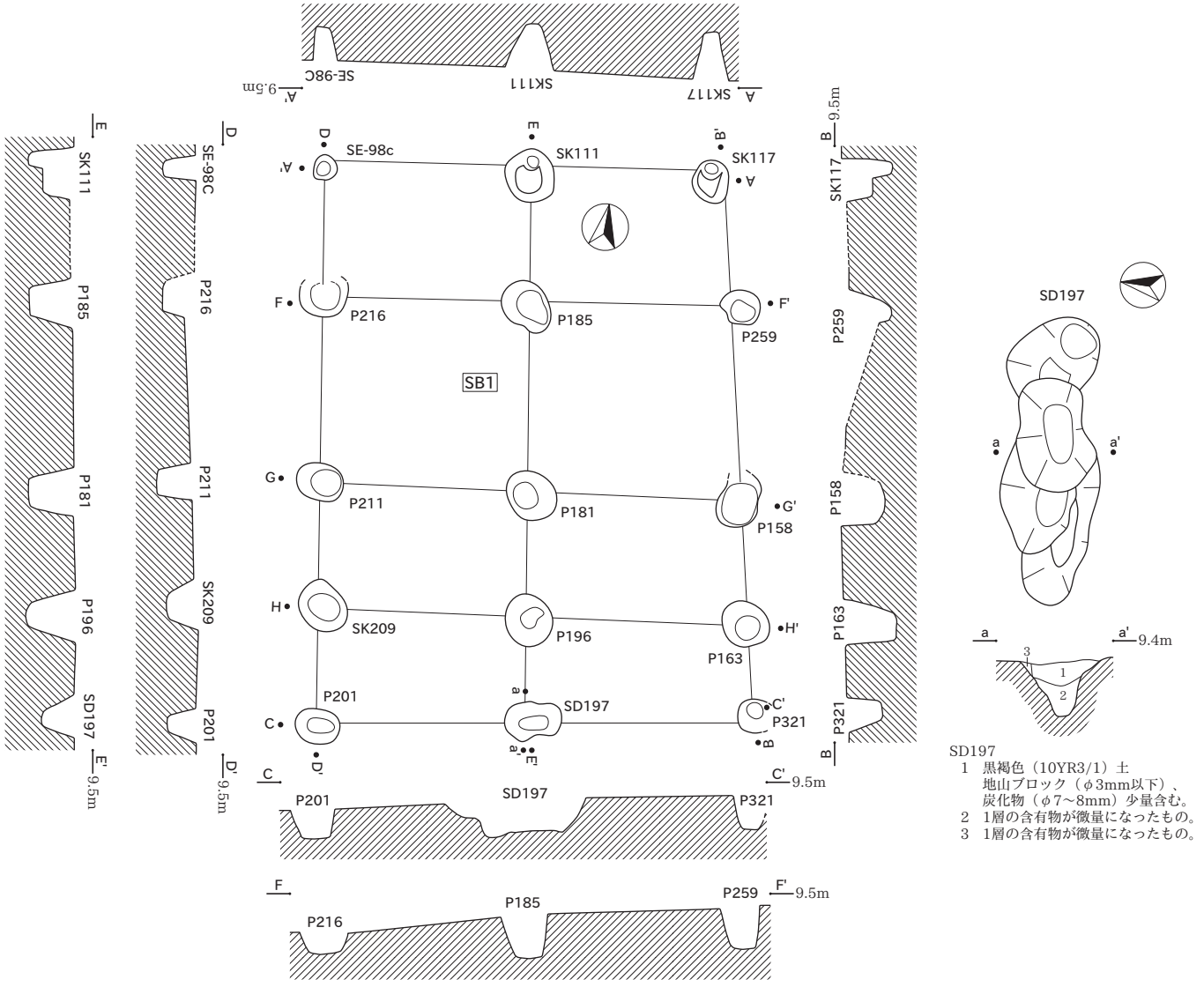

22B
23B
暗 渠
9.1
9.0
8.9
8.8
8.7
22A
23A
杭55
杭93
杭54
杭64
杭72
杭66
杭65
杭63
P356
P357
試掘3Tr
8.2
SX265
トレンチ
22Z
23Z
SX252
8.1
0
(1：100)
5m

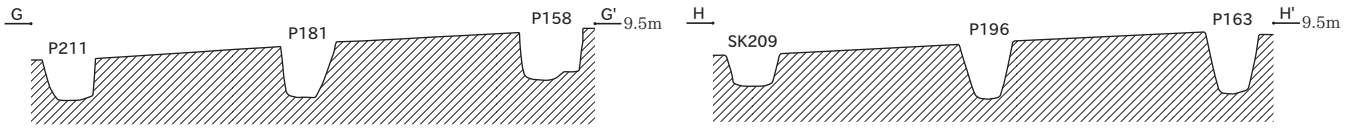

23B
24B
23A
24A
23Z
24Z
開　渠
暗　渠
試掘2Tr
撹乱
トレンチ
SE304
SE71
SK70
SE2
SE249
SK13
SK14
SE360
SK51
SK253
SD140
SD1
SX250
SX252
P283
P151
P150
P325
P324
P327
P330
P331
P328
P329
P332
P334
P333
P16
P17
P258
P311
P318
P320
P312
P319
P6
P7
P8
P12
P340
P342
P343
P341
P310
P50
P339
P315
P309
P316
P317
P3
P4
P5
P9
P10
P11
P49
P18
P31
P32
P33
P34
P30
P35
P36
P28
P29
P37
P19
P20
P38
P39
P40
P41
P24
P25
P23
P42
P22
P43
P21
P26
P27
P44
P15
P236
P237
P238
P239
P240
P241
P243
P224
P245
P246
P242
杭96
杭70
杭71
杭104
杭121
杭120
杭103
杭101
杭100
杭102
杭91
杭52
杭51
杭50
杭90
杭53
杭88
杭87
杭43
杭42
杭86
杭45
杭44
杭89
杭41
杭40
杭26
杭39
杭48
杭47
杭46
杭49
杭37
杭36
杭85
杭38
杭35
杭34
杭31
9.6
9.5
9.4
9.3
9.2
9.1
9.0
8.9
8.8
8.7
8.6
8.5
0
(1：100)
5m

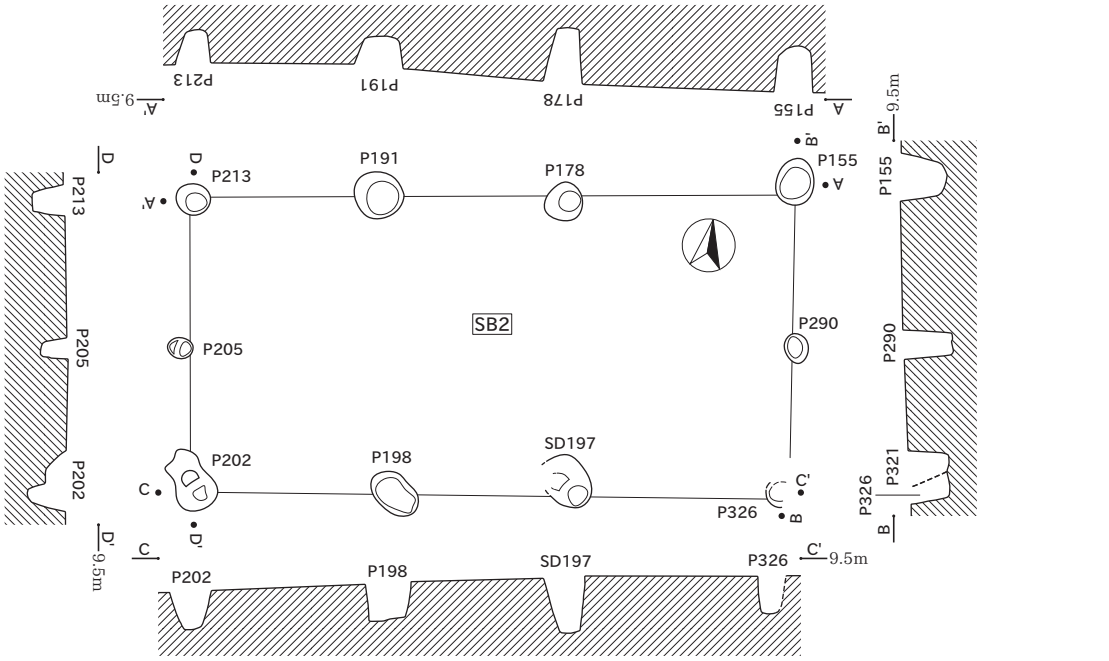
上層遺構分割図（4）

25B
26B
26A
25Z
26Z
試掘1 Tr
SB1
SB2
SB3
SB4
SB5
SA1
SE304
SE71
SE75
SE81
SE233
SE53
SE98
SE104
SE156A
SE156B
SE244
SK70
SK117
SK111
SK110
SK105
SK99
SK298
SK135
SK128
SK209
SD52
SD56
SD103
SD140
SD299
SD133
SD197
SD208
SD1
SX141
SX147
SE139
焼土
暗渠
開渠
トレンチ
9.6
9.5
9.4
9.3
9.2
9.1
9.0
8.9
8.8
8.7
8.6
0
(1：100)
5m

P242
P246
P149
SK298
P248
P296
P297
SD299
SE139
P134
SK135
P306
P308
P307
P136
SD133
P301
SK128
P126
P125
SB5
P124
P119
P118
P123
P121
P120
P122
P300
P138
P137
SD140
P148
杭122
杭92
杭68
杭67
P144
P146
P129
P131
P132
P276
P278
P277
P281
P279
P280
P351
P352
P151
P150
P359
P142
P354
P353
SX141
P143
P145
P130
杭85
杭35
杭84
杭83
杭82
杭24
杭37
杭36
杭29
杭27
杭22
杭61
杭59
杭38
杭34
杭33
杭32
杭28
杭25
杭80
杭21
杭60
杭23
杭79
杭78
杭58
杭56
杭18
杭15
杭14
杭11
杭12
杭9
杭7
杭6
杭5
杭3
杭73
杭1
杭106
杭105
杭20
杭77
杭57
杭17
杭75
杭16
杭13
杭10
杭8
杭4
杭2
杭74
SD1
杭19
杭99
杭31
杭30
杭62
杭95
杭94
25Z
26Z
8.8
暗渠
開渠
トレンチ
SX147
8.7
8.6
8.5
8.4
25Y
26Y
SD313
SD314
8.3
0
(1：100)
5m

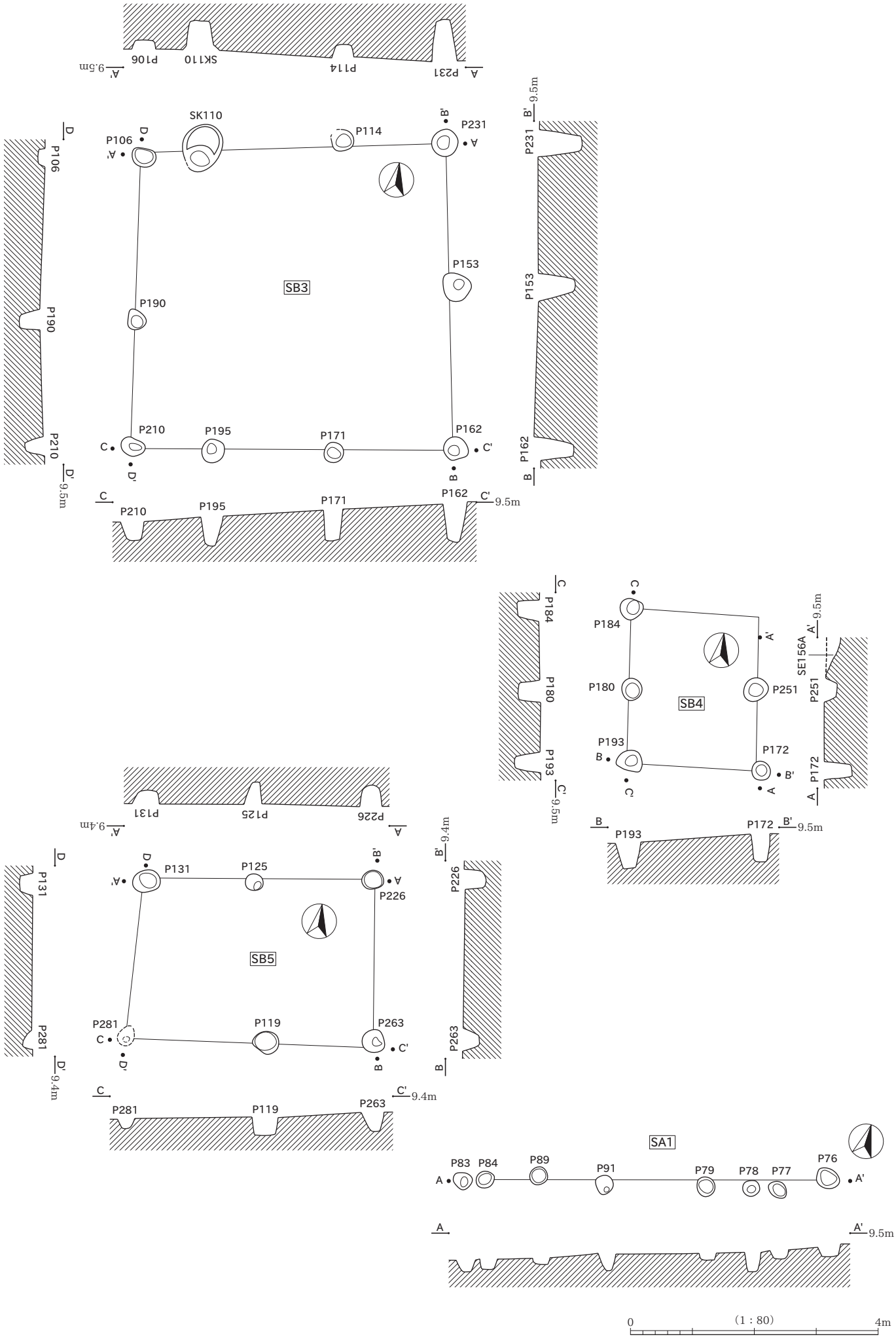


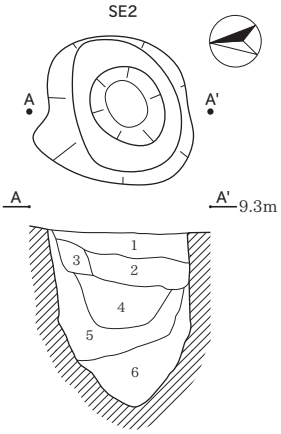




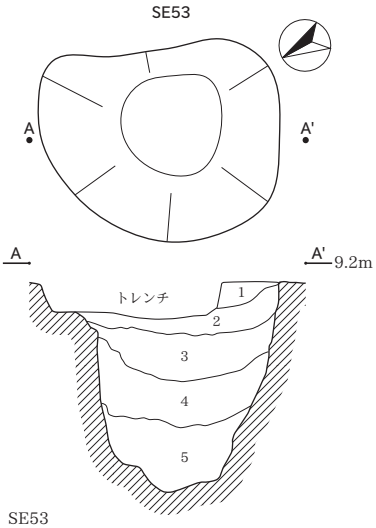
SB平面・エレベーション図
（1：80）
0　4m

個別図
（1：40）
0　2m

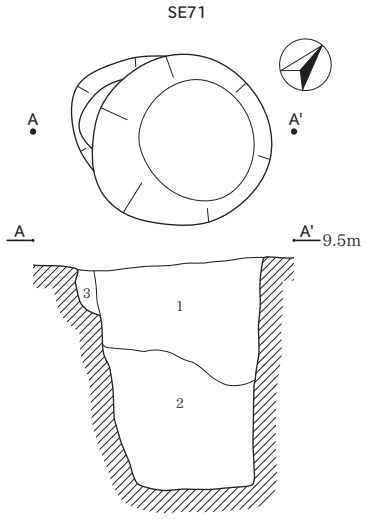

SB3
SK110
P106
P114
P231
P153
P190
P210
P195
P171
P162
SB4
P184
P180
P193
P172
P251
SE156A
SB5
P131
P125
P226
P281
P119
P263
SA1
P83
P84
P89
P91
P79
P78
P77
P76
9.5m
9.4m
(1 : 80)
0
4m



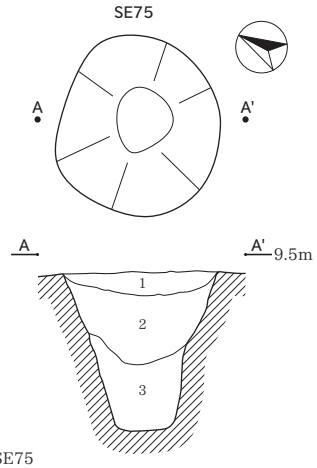
SE2
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性･締りあり。
　地山ブロック（φ9mm以下）、炭化物（φ3mm以下）、
　小礫（φ1.2cm以下）微量含む。
2　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性弱、締りあり。
　地山ブロック（φ9mm以下）、炭化物（φ3mm以下）、
　小礫（φ8mm以下）微量含む。
3　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ9mm以下）多量、炭化物（φ3mm以下）、
　小礫（φ8mm以下）微量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　白色粘土粒、地山ブロック（φ4cm前後）、
　炭化物（φ2mm以下）微量含む。
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　白色粘土粒少量含む。
6　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性・締りあり。
　植物質繊維を含む。



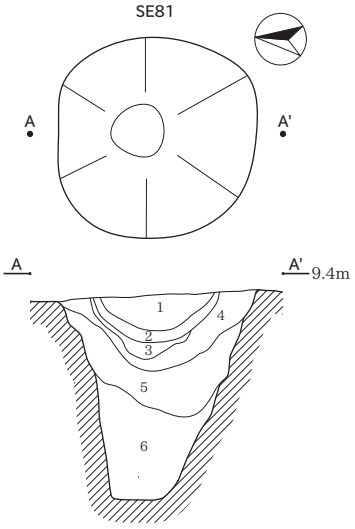
SE53
1　灰色（N4/0）粘質土　粘性・締りあり。
　灰白色ブロック（φ1.3cm前後）、
　炭化物（φ2～3mm）微量含む。
2　灰色（N4/0）粘質土　粘性・締りあり。
　1層に含まれる灰白色ブロックが多くなる。
3　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　灰白色ブロック、炭化物微量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　灰黄褐色ブロック（φ7～12cm）含む。
5　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性弱、締りあり。
　植物質繊維を含む。



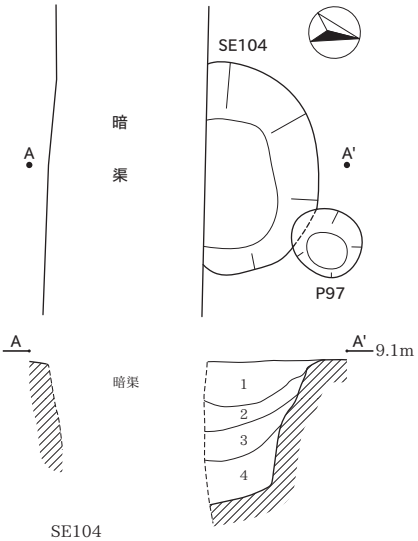
SE71
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ2.5cm以下）少量、炭化物（φ2mm以下）、
　小礫（φ1.8cm以下）微量含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ7cm以下）少量含む。
3　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ1.8cm以下）、炭化物（φ5mm以下）
　微量含む。



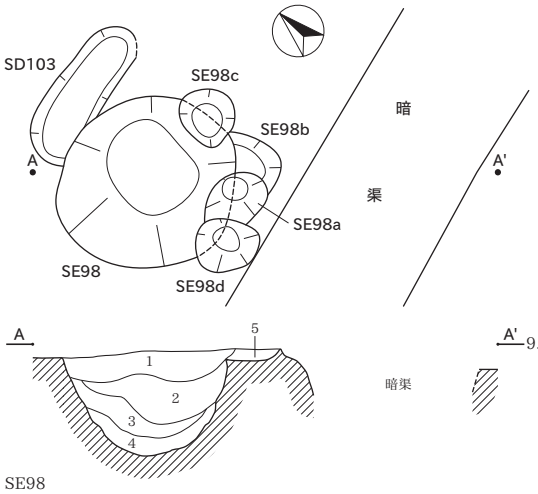
SE75
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ6mm以下）、小礫（φ1.2cm以下）、
　地山ブロック（φ8mm以下）微量含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ4mm以下）、地山粒子（φ4mm以下）微量含む。
3　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性やや弱、締りあり。



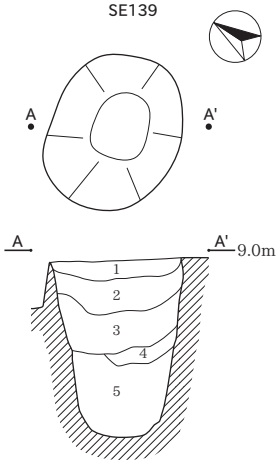
SE81
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ6mm以下）、小礫（φ1.2cm以下）、
　地山ブロック（φ8mm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR6/1）粘質土　粘性・締りあり。
　1層のブロック（φ2cm前後）含む。
3　黒色（10YR2/1）粘質土＋1層　粘性・締りあり。
　炭化物多量含む。
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ6mm以下）、小礫（φ1.2cm以下）、
　地山ブロック（φ8mm以下）微量含む。
5　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・締りあり。
6　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性弱、締りあり。
　礫を含む。



SE104
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ3cm以下）多量、
　炭化物（φ2mm以下）少量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック少量含む。
3　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ4mm以下）微量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ7mm以下）微量含む。

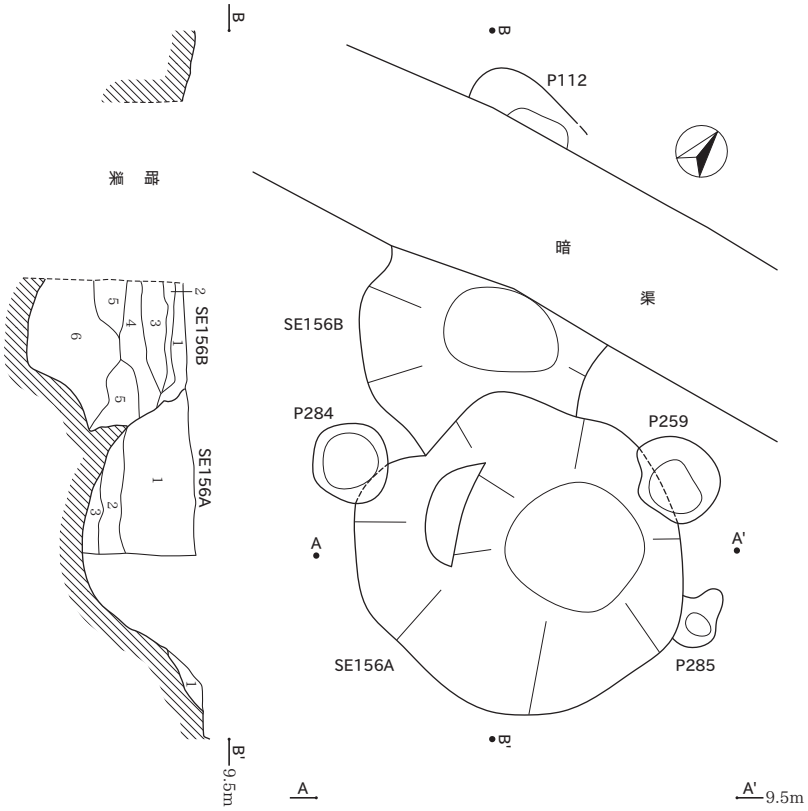


SE98
1　黒色（2.5Y2/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ7mm以下）、
　小礫（φ1.2cm以下）、地山ブロック（φ9mm前後）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ5mm以下）、
　礫（φ2.2cm以下）微量、地山ブロック（φ6cm以下）少量含む。
3　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ2.2cm以下）微量。
　地山ブロック（φ4cm以下）少量含む。
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。地山ブロック（φ3.2cm以下）
　微量含む。
5　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。地山ブロック（φ2.5cm以下）、
　小礫（φ1.5cm以下）、炭化物（φ2.2cm以下）微量含む。



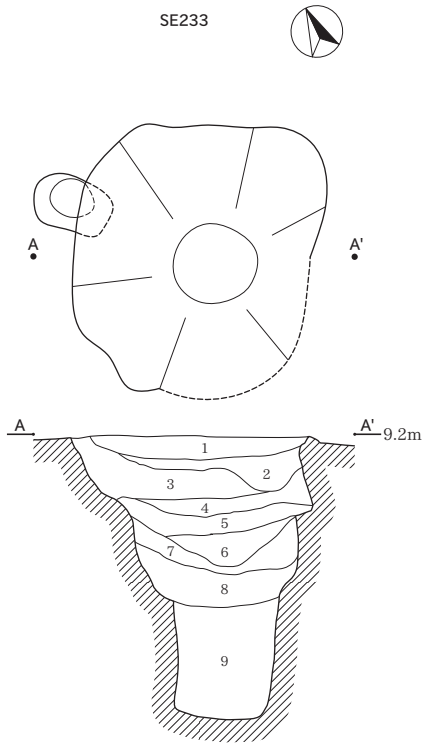
SE139
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（0.6～1.3cm）、地山粒子（φ9mm以下）、
　地山ブロック（φ3mm前後）、
　炭化物（φ1.5cm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ8mm以下）微量、
　地山ブロック（φ8.8cm以下）少量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ5cm以下）微量。
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ8mm以下）微量、
　地山ブロック（φ8.8cm以下）少量含む。
5　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性・締りあり。
　植物質繊維を多量含む。

0　（1：40）　2m

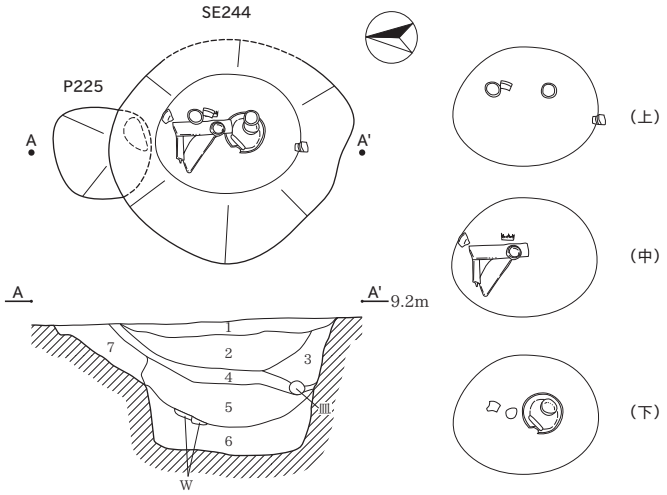


SE156A
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性あり、締り弱い。
　部分的に明るく灰黄褐色粘質土に見える。
　炭化物（φ2～5mm）、黄褐色の地山小礫含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性あり、締り弱い。
　1層とほぼ同じだが、色調はやや明るい。
　炭化物（φ2～5mm）、黄褐色の地山小礫含む。
　植物質を多量含む。
3　黒褐色（10YR2/2）粘質土　粘性あり、締り弱い。
　1、2層より色調暗い。炭化物を帯状に含む。
　人頭大の礫が入り、植物質を含む。
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土主体　粘性あり、締り弱い。
　灰黄色粘質シルトをブロック状に含む。

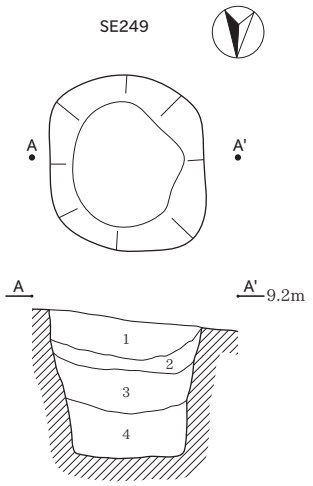
SE156B
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性弱、締りあり。にぶい黄褐色の礫粒含む。鉄分が沈着し、赤味を帯びる。
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。1層より粘性が高い。
3　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物少量含む。鉄分や礫をほとんど含まない。
4　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
5　黒褐色（10YR2/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物少量含む。
6　黒褐色（10YR2/2）粘質土　粘性あり、締り弱い。底面付近に炭化物が集中する。



SE233
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ8cm以下）、小礫含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ7mm以下、最大1.5cm）、地山粘質土（φ5mm以下）
　微量含む。
3　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　4層ベースに炭化物（φ8mm以下）多量含む。
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ7mm以下）、炭化物（φ6mm以下）微量含む。
5　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　6層ベースに炭化物（φ5mm主体）を多量含む。
6　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ3cm以下）、炭化物（φ2mm以下）微量含む。
7　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ11cm以下）を含み、（φ5～7mm）少量含む。
8　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ3cm以下）、炭化物（φ2mm以下）微量含む。
9　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性・締りあり。植物質繊維を含む。

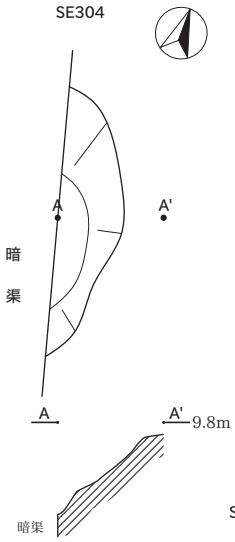


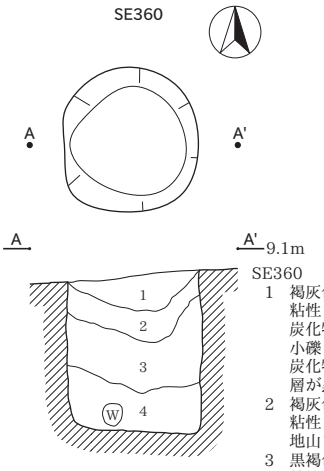
SE244
1　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1cm以下）少量含む。
　地山ブロック（φ5mm以下）、小礫（φ1.2cm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ3～5mm）、
　地山ブロック（φ3mm以下）、小礫（φ7mm以下）微量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ2mm前後）含む。
4　黒色（N1.5/0）粘質土　粘性・締りあり。炭化物の層。
5　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。地山ブロック多量含む。
6　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。地山ブロック（φ8mm以下）、
　小礫（φ3cm以下）少量含む。
7　（P225覆土）褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ2mm以下）、
　地山ブロック（φ8mm以下）微量含む。



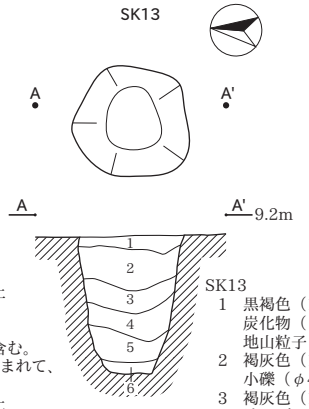
SE249
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　灰白色ブロック、炭化物多量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　地山ブロック（φ4mm以下）微量含む。
3　灰黄褐色（10YR6/2）粘質土　粘性・締りあり。
　明青灰色ブロック、浅黄橙色ブロック多量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）土　粘性・締りあり。

0　（1：40）　2m

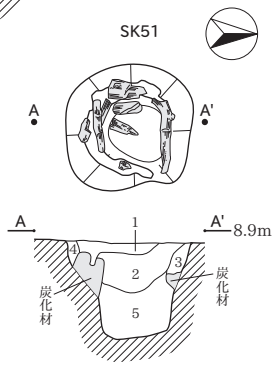




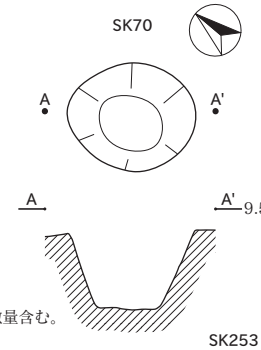
SE360
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土
粘性・締りあり。
炭化物（φ4mm以下）、
小礫（φ8mm以下）少量含む。
炭化物の粒子がやや多く含まれて、
層が黒ずむ。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土
粘性・締りあり。小礫（φ2cm以下）、
地山ブロック（φ7mm以下）微量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土
粘性・締りあり。炭化物、小礫を極微量含む。
4　黒色（10YR2/1）土
粘性・締りあり。植物質や繊維質が含まれる。

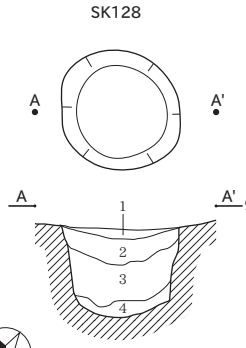


SK13
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ6～14mm）、小礫（φ5～12mm）、
地山粒子（φ4mm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
小礫（φ4mm以下）、炭化物（φ5mm以下）微量含む。
3　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック（φ1.8cm以下）少量含む。
他の含有物は2層と同じ。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
5　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
6　浅黄色（2.5Y7/4）粘質土　粘性・締りあり。
5層の粘質土ブロック（φ2cm以下）少量含む。

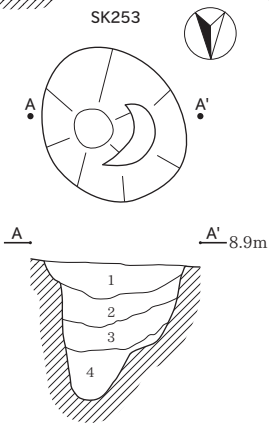


SK51
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ4mm以下）、地山ブロック（φ5cm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ1～4mm）、小礫（φ1.2cm以下）、
地山ブロック（φ3mm以下）微量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ3mm以下）、小礫（φ2cm以下）微量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ3mm以下）、小礫（φ2cm以下）微量含む。
5　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック（φ4.3cm以下、5～8mm）微量含む。

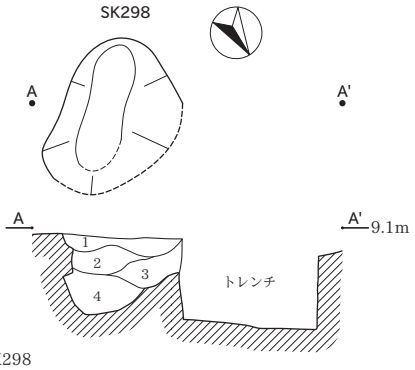




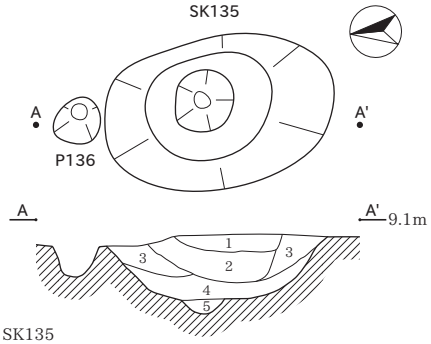
SK128
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土
粘性・締りあり。
炭化物（φ1.2cm以下）微量、
地山ブロック（φ5cm以下）
少量含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土
粘性・締りあり。
炭化物（φ2cm以下、6mm前後が多い）
微量、地山ブロック（φ2.5cm以下）
少量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土
粘性・締りあり。
地山ブロック（φ7～9.3cm）、
炭化物（φ5mm前後）含む。
4　黒色（10YR2/1）粘質土
粘性・締りあり。
上面に藁状の敷物あり。



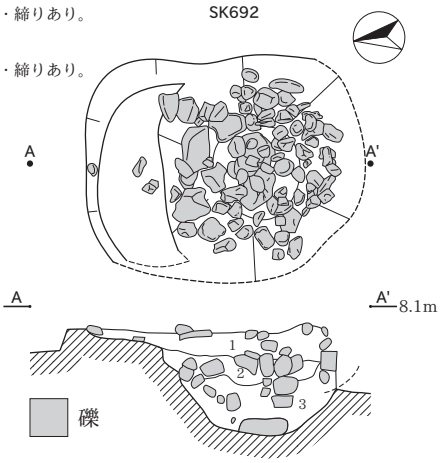
SK253
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック（φ6mm以下）、
炭化物（φ3mm以下）、小礫（φ1.2cm以下）
微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック（φ1.2cm以下）、
地山ブロック（1～6mm前後）、
炭化物（φ2mm以下）微量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ1.1cm以下）、
地山ブロック（φ7mm以下）微量含む。
4　黒色（10YR2/1）粘質土　粘性弱、締りあり。



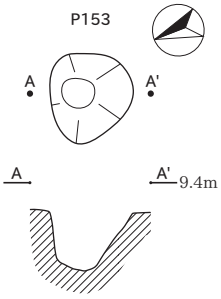
SK298
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ4mm以下）、小礫（φ6mm前後）、
地山ブロック（φ1.2cm）含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ3mm以下）、小礫（φ4mm以下）微量含む。
3　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ3mm以下）、小礫（φ4mm以下）微量含む。
2層と地山の混合で、地山の混合が多い。砂礫を含む。
4　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。

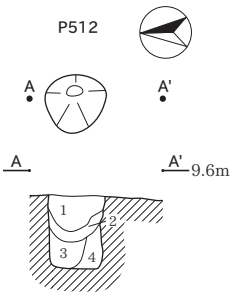


SK135
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ7mm前後）、地山ブロック（φ1.2cm以下）、
礫（φ1cm前後）微量含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ1.5cm前後）少量含む。
1層より多くレンズ状の連なりが認められる。
3　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック（φ2.5cm以下）少量、
炭化物（φ1.2cm以下）微量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック（φ1.7cm以下）、
炭化物（φ2.2cm以下）微量含む。
5　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
地山ブロック含む。



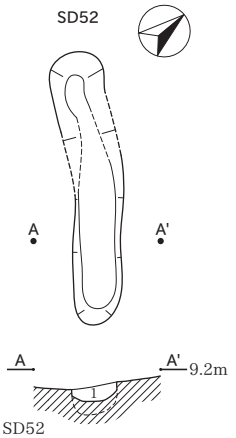
SK692
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土
粘性・締りあり。
礫（φ1～12cm前後）多量、
炭化物（φ3mm前後）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土
粘性・締りあり。
礫（φ1～16cm前後）多量、
炭化物（φ2mm前後）微量含む。
3　黒色（10YR2/1）土
粘性・締りあり。
礫（φ7cm以下）多量、
特大（φ21cm以下）も含まれる。
炭化物（φ2mm前後）微量、
腐植物を多量含む。



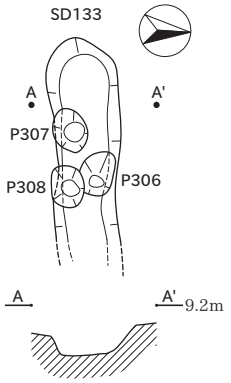


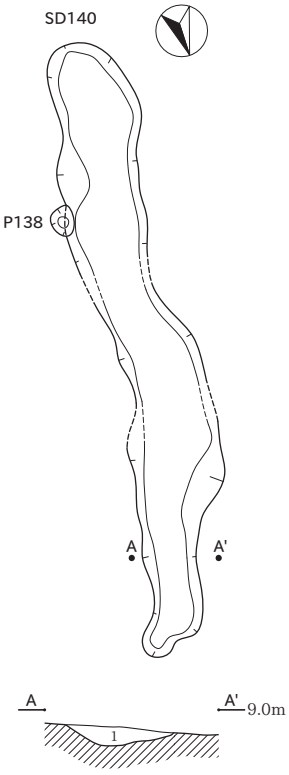
P512
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ5mm以下）、灰白色地山ブロック（φ6mm以下）含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
炭化物（φ5mm以下）、灰白色地山ブロック（φ6mm以下）含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。
4　灰白色（7.5Y7/1）粘質土　粘性・締りあり。
黒褐色ブロック少量含む。

0　（1：40）　2m

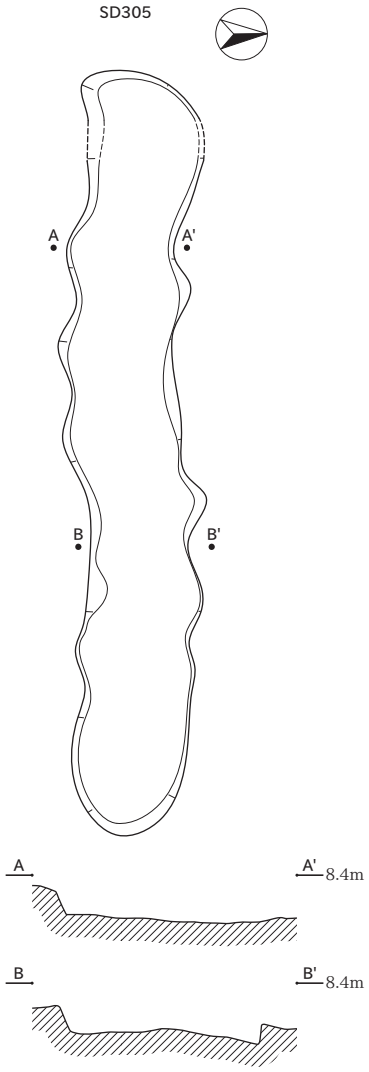


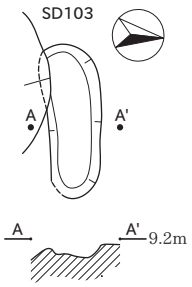
SD52
1　灰色（N4/0）粘質土　粘性・締りあり。
　　炭化物（φ5～8mm）少量、Ⅳ層をブロック状に含む。

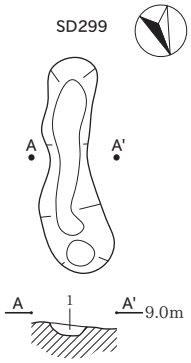




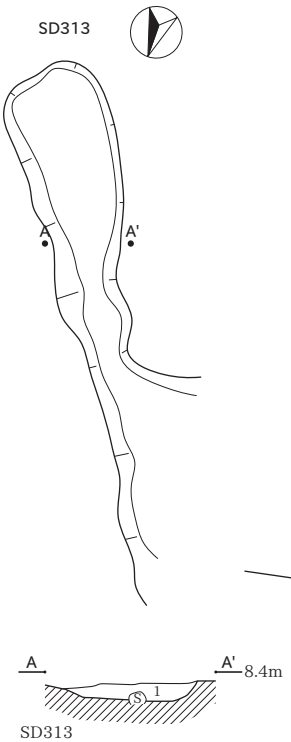
SD140
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土
　　粘性・締りあり。
　　小礫（φ7mm以下）少量、
　　炭化物（φ8mm前後）微量含む。



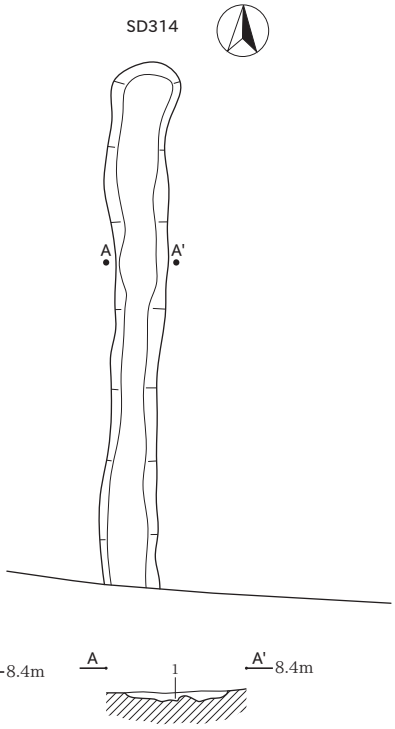




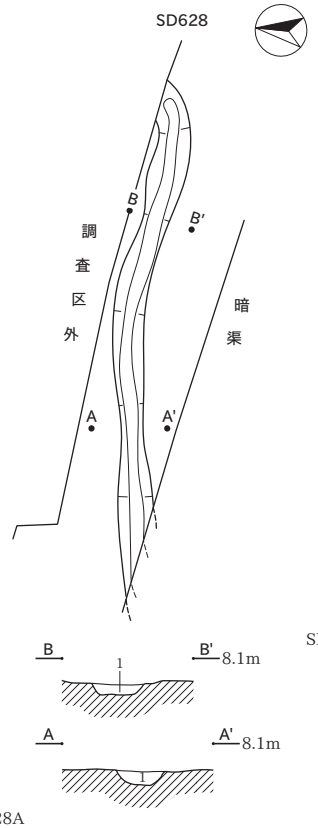
SD299
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土
　　粘性・締りあり。炭（φ4mm以下）、
　　小礫（φ6mm前後）微量含む。



SD313
1　褐灰色（10YR4/1）シルト質土
　　粘性・締りあり。
　　小礫（φ3cm以下）少量、
　　炭化物（φ5mm以下）微量含む。

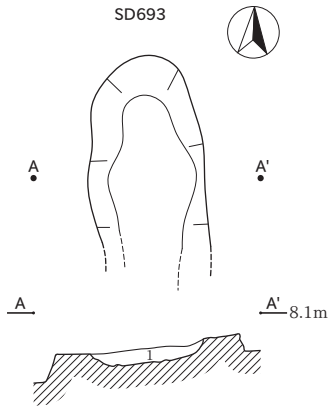


SD314
1　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土
　　粘性・締りあり。
　　炭化物（φ6mm以下）少量含む。



SD628A
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
　　粘性・締りあり。小礫（φ1mm前後）、
　　炭化物（φ2mm前後）微量含む。

SD628B
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
　　粘性・締りあり。小礫（φ1mm前後）、
　　炭化物（φ2mm前後）微量含む。

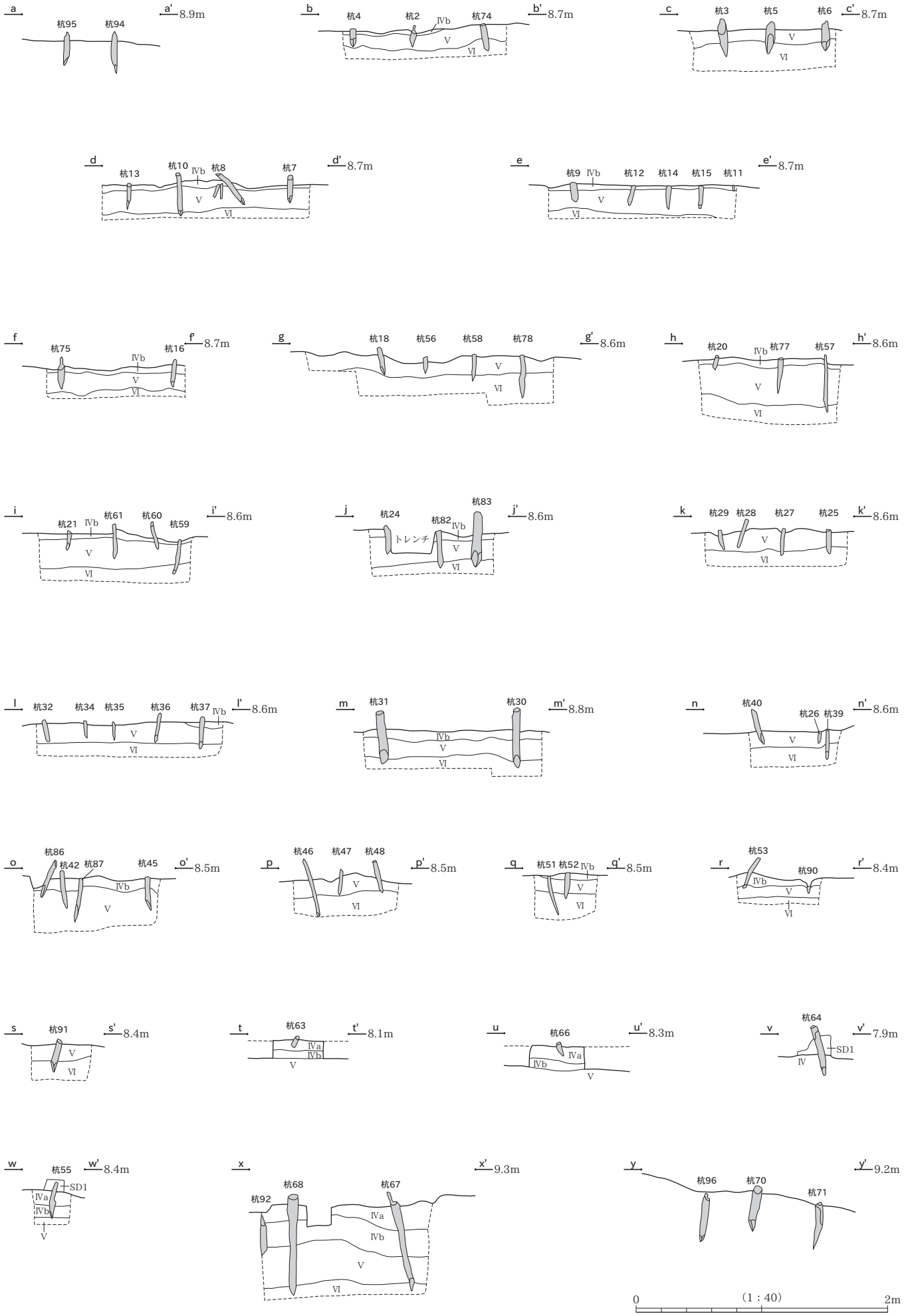


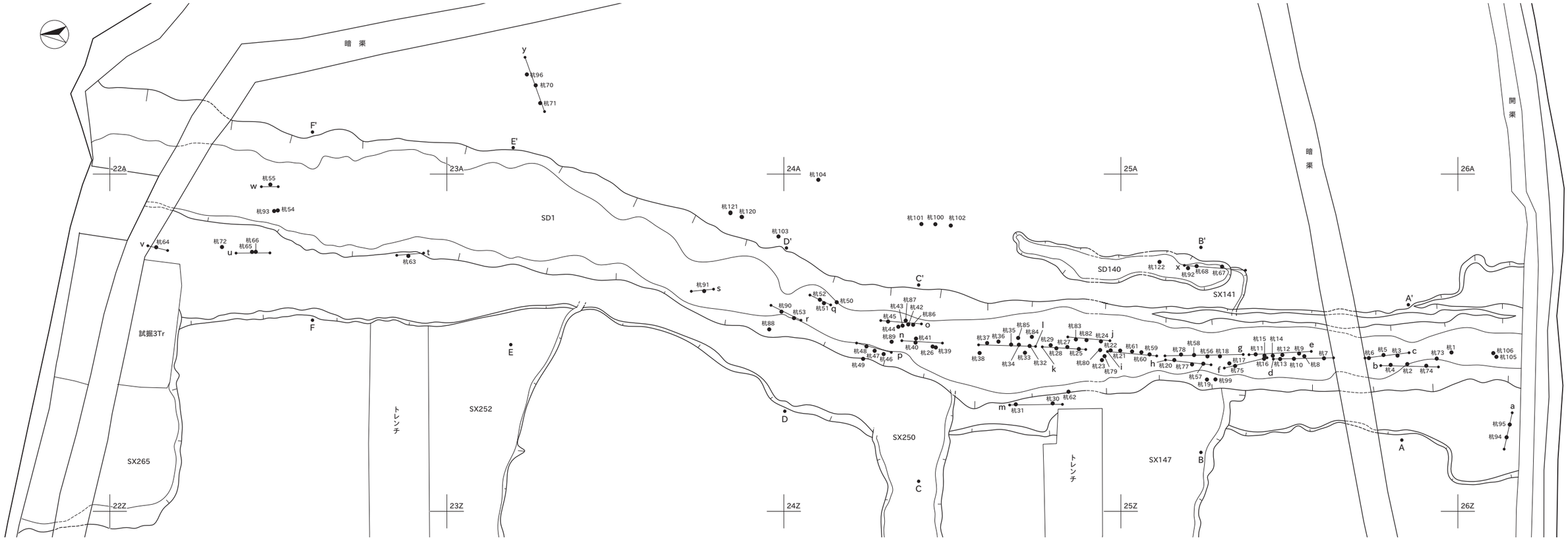
SD693
1　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　　ややシルト質で、炭化物（φ2mm以下）微量含む。

平面図（SD52,SD103,SD133,SD299,SD693）
（1：40）
0　2m

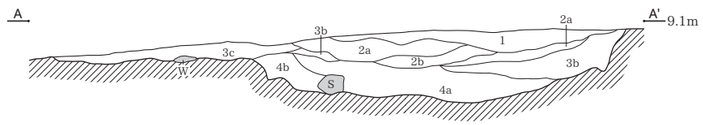
平面図（その他）
（1：80）
0　4m

断面図
（1：40）
0　2m

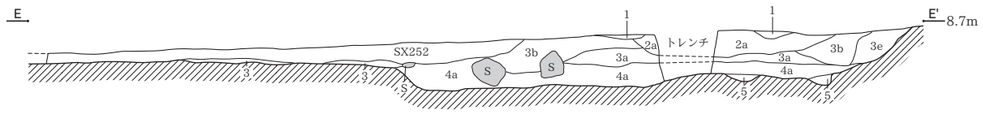

a
a'
8.9m
杭95
杭94
b
b'
8.7m
杭4
杭2
IVb
杭74
V
VI
c
c'
8.7m
杭3
杭5
杭6
d
d'
8.7m
杭13
杭10
IVb
杭8
杭7
e
e'
8.7m
杭9
IVb
杭12
杭14
杭15
杭11
f
f'
8.7m
杭75
杭16
g
g'
8.6m
杭18
杭56
杭58
杭78
h
h'
8.6m
杭20
IVb
杭77
杭57
i
i'
8.6m
杭21
IVb
杭61
杭60
杭59
j
j'
8.6m
杭24
杭82
IVb
杭83
トレンチ
k
k'
8.6m
杭29
杭28
杭27
杭25
l
l'
8.6m
杭32
杭34
杭35
杭36
杭37
IVb
m
m'
8.8m
杭31
杭30
n
n'
8.6m
杭40
杭26
杭39
o
o'
8.5m
杭86
杭42
杭87
杭45
IVb
p
p'
8.5m
杭46
杭47
杭48
q
q'
8.5m
杭51
杭52
IVb
r
r'
8.4m
杭53
IVb
杭90
s
s'
8.4m
杭91
t
t'
8.1m
杭63
IVa
IVb
u
u'
8.3m
杭66
IVa
IVb
v
v'
7.9m
杭64
SD1
IV
w
w'
8.4m
杭55
SD1
IVa
IVb
x
x'
9.3m
杭68
杭67
杭92
IVa
IVb
y
y'
9.2m
杭96
杭70
杭71
0
(1：40)
2m



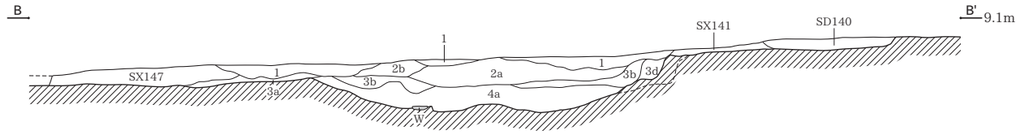
〔Aライン〕



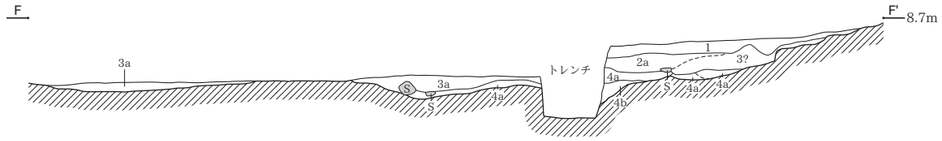
〔Eライン〕



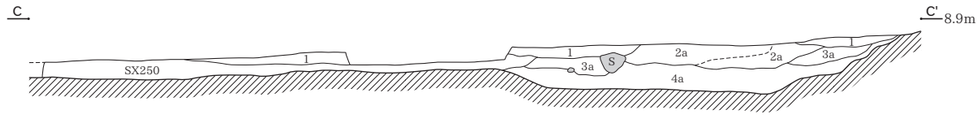
〔Bライン〕



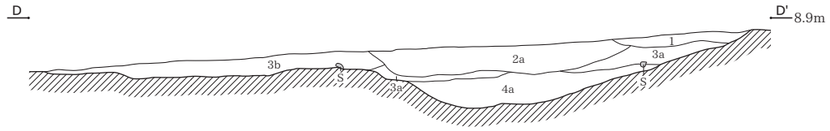
〔Fライン〕



〔Cライン〕



〔Dライン〕



SD1　A～F断面共通
※各層のａ～ｅは、基本的に同じだが含有物や色調が異なるもので、堆積順を示すものではない。
1層　基本層序Ⅲb層。黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ5～8mm）、炭化物（φ3～8mm）少量含む。
2a層　にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土　粘性・締りあり。砂礫（φ1.2cm以下）多量含む。
2b層　にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土　粘性・締りあり。砂礫（φ1.2cm以下）多量含む。
3a層　褐灰色（10YR4/1）粘質シルト　粘性・締りあり。炭化物（φ2～3mm）微量含む。
3b層　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ5mm以下）、炭化物（φ5～7mm）、地山ブロック（φ3cm以下）微量含む。
3c層　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ6mm前後）、炭化物（φ6mm前後）、地山ブロック（φ6mm前後）少量含む。
3d層　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ6mm前後）、炭化物（φ6mm前後）、地山ブロック（φ6mm前後）含む。
3e層　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ5mm以下）、炭化物（φ5～7mm）、地山ブロック（φ3cm以下）微量含む。
4a層　にぶい赤褐色（5YR4/4）粘質土　粘性・締りあり。砂礫含む。
4b層　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ5mm以下）、炭化物（φ8mm前後）、地山ブロック（φ2cm）少量含む。
5層　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。砂礫（φ2mm以下）微量含む。

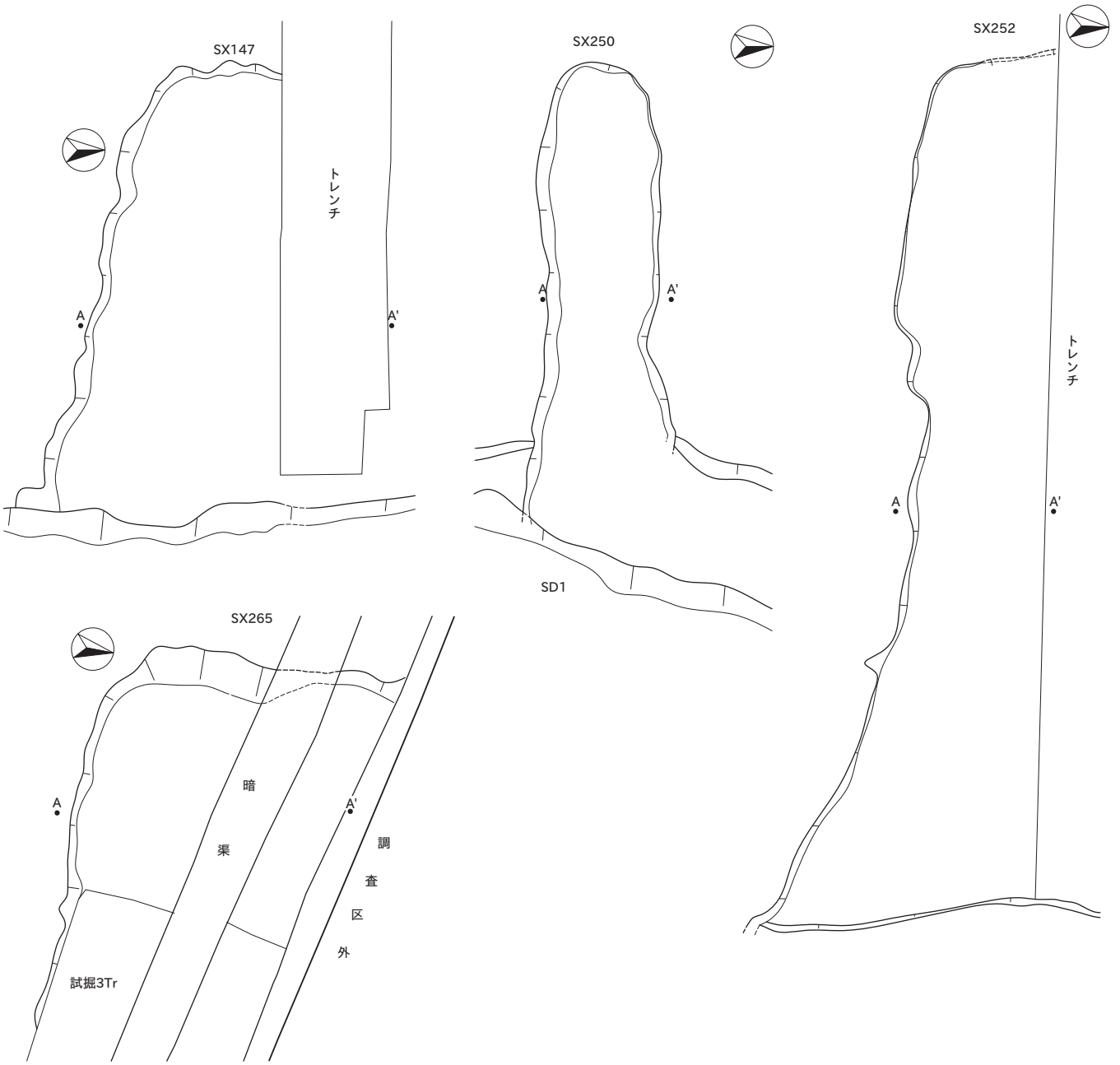
SD1　B断面
SX141埋土　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ1～12mmで3mm以下主体）少量、炭化物（φ1～12mm）微量含む。
SX147埋土　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ1～12mmで3mm以下主体）少量、炭化物（φ1～12mm）微量含む。
SD140埋土　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ7mm以下）少量、炭化物（φ8mm前後）微量含む。

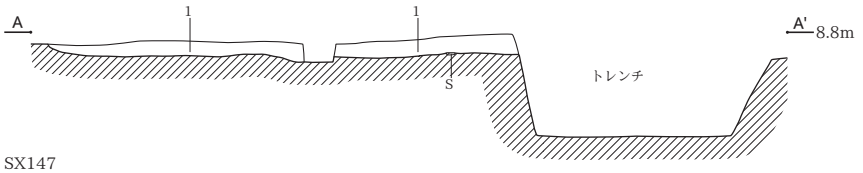
SD1　C断面
SX250埋土　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ1～12mmで3mm以下主体）少量、炭化物（φ1～12mm）微量含む。

SD1　E断面
SX252埋土　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ1～12mmで3mm以下主体）少量、炭化物（φ1～12mm）微量含む。

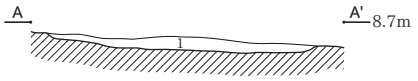
平面図
（1：120）
0　6m

断面図
（1：40）
0　2m

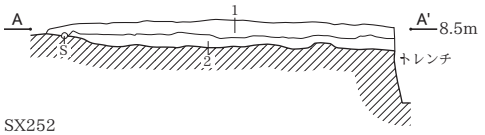




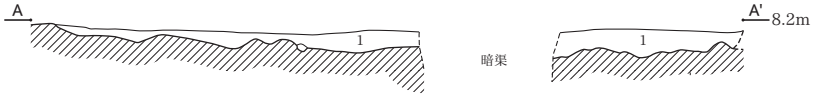
SX147
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（最大φ12mm）微量、小礫（φ3mm前後～1.2cm）少量含む。



SX250
1 褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ1.2cm以下）微量、小礫（φ3mm前後～1.2cm）少量含む。



SX252
1　Ⅲa層の粘質土　粘性・締りあり。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（最大φ1.2cm）微量、小礫（φ3mm前後～1.2cm）少量含む。

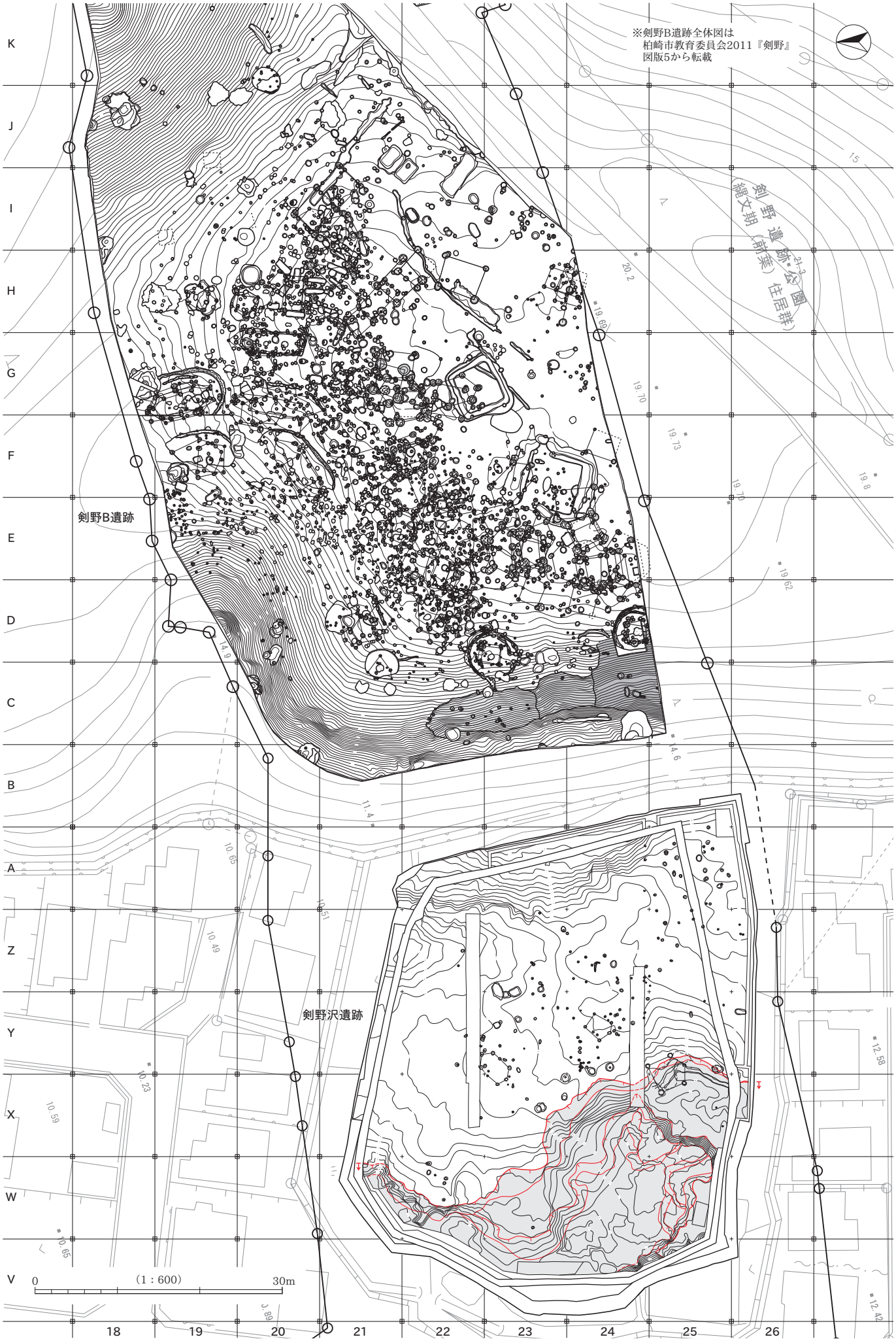


SX265
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（最大φ1.2cm）微量。
　小礫（φ3mm前後～1.2cm）少量含む。

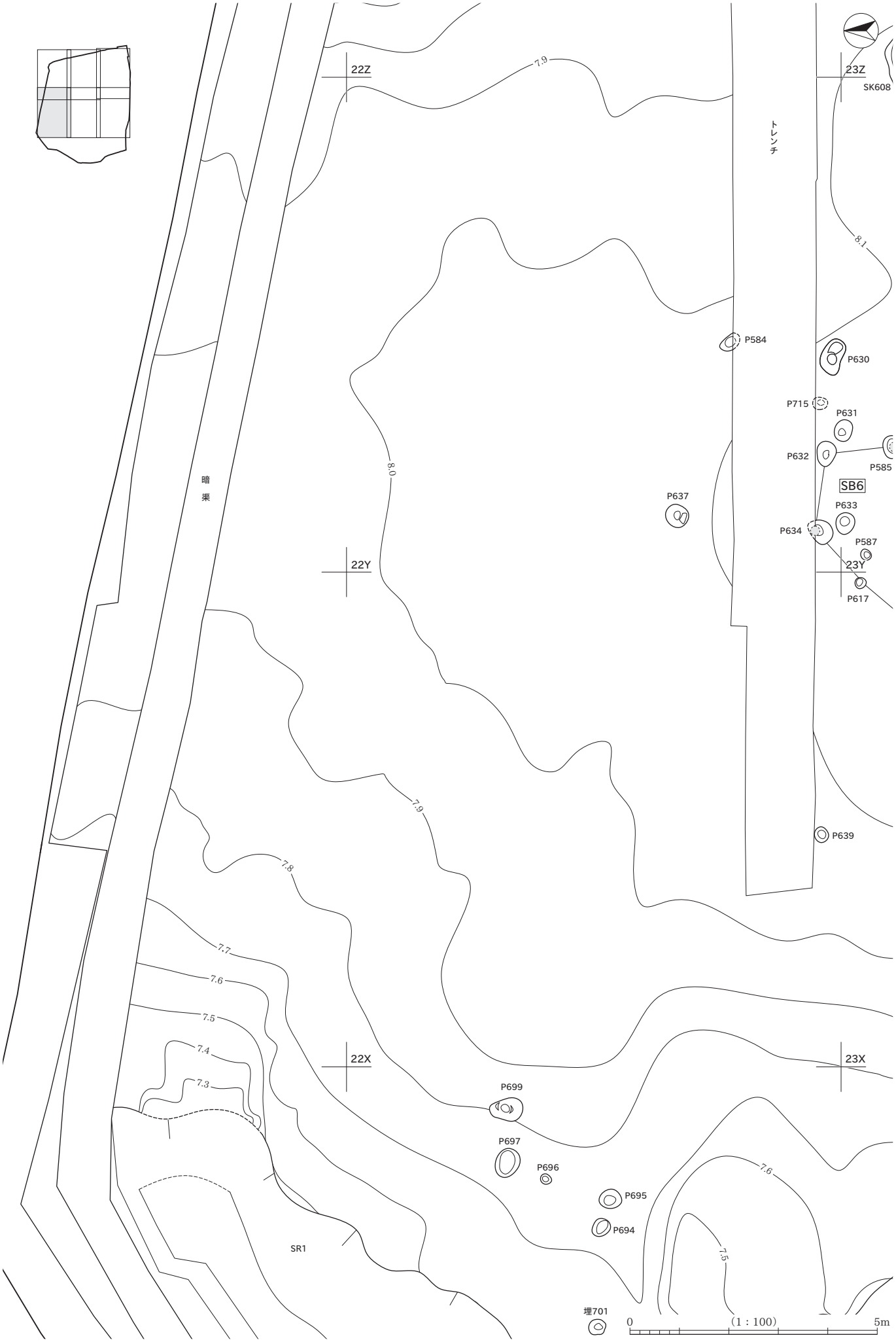
断面図
（1：50）
0　2m

平面図
（1：100）
0　5m

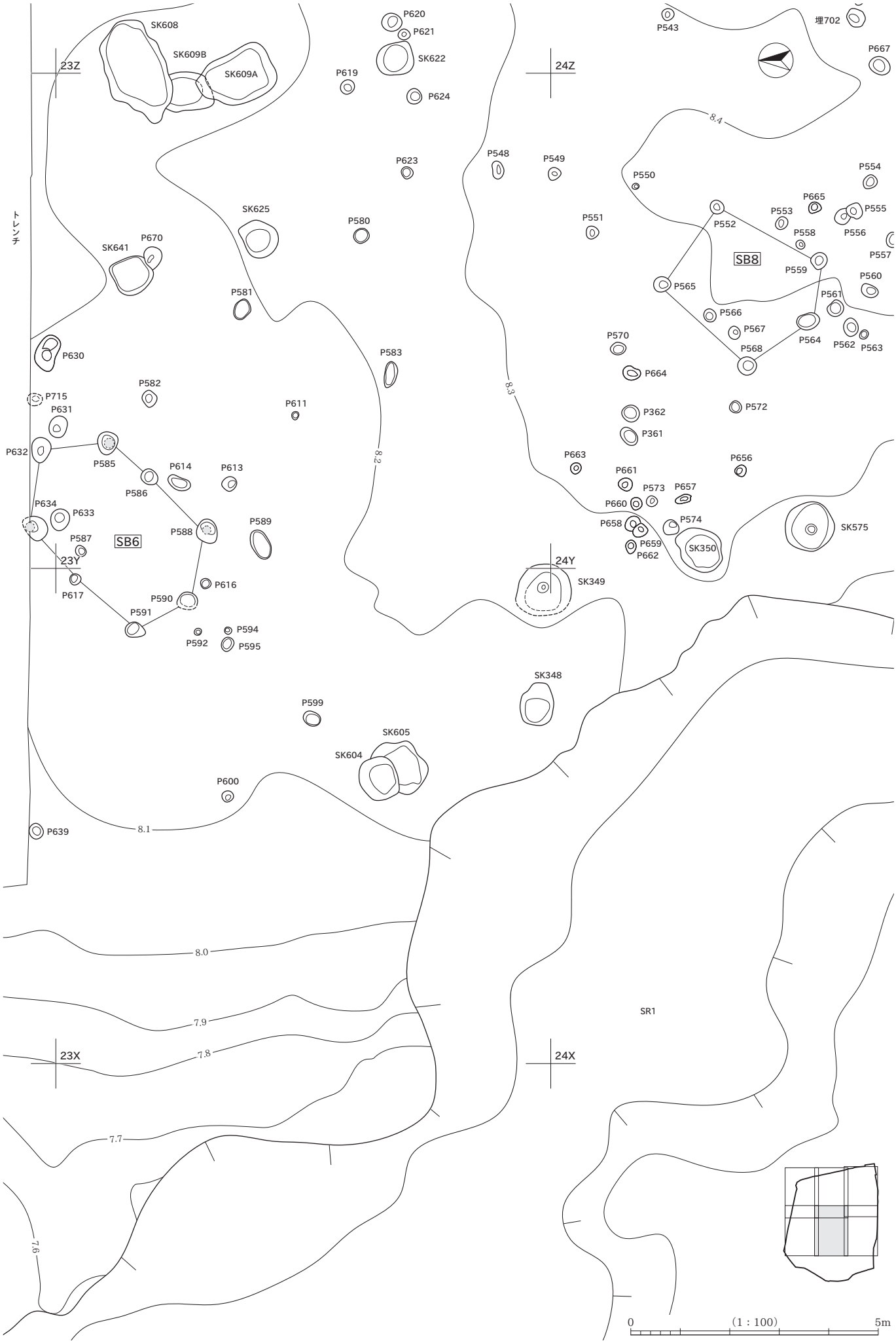
剣野 B 遺跡と剣野沢遺跡全体図

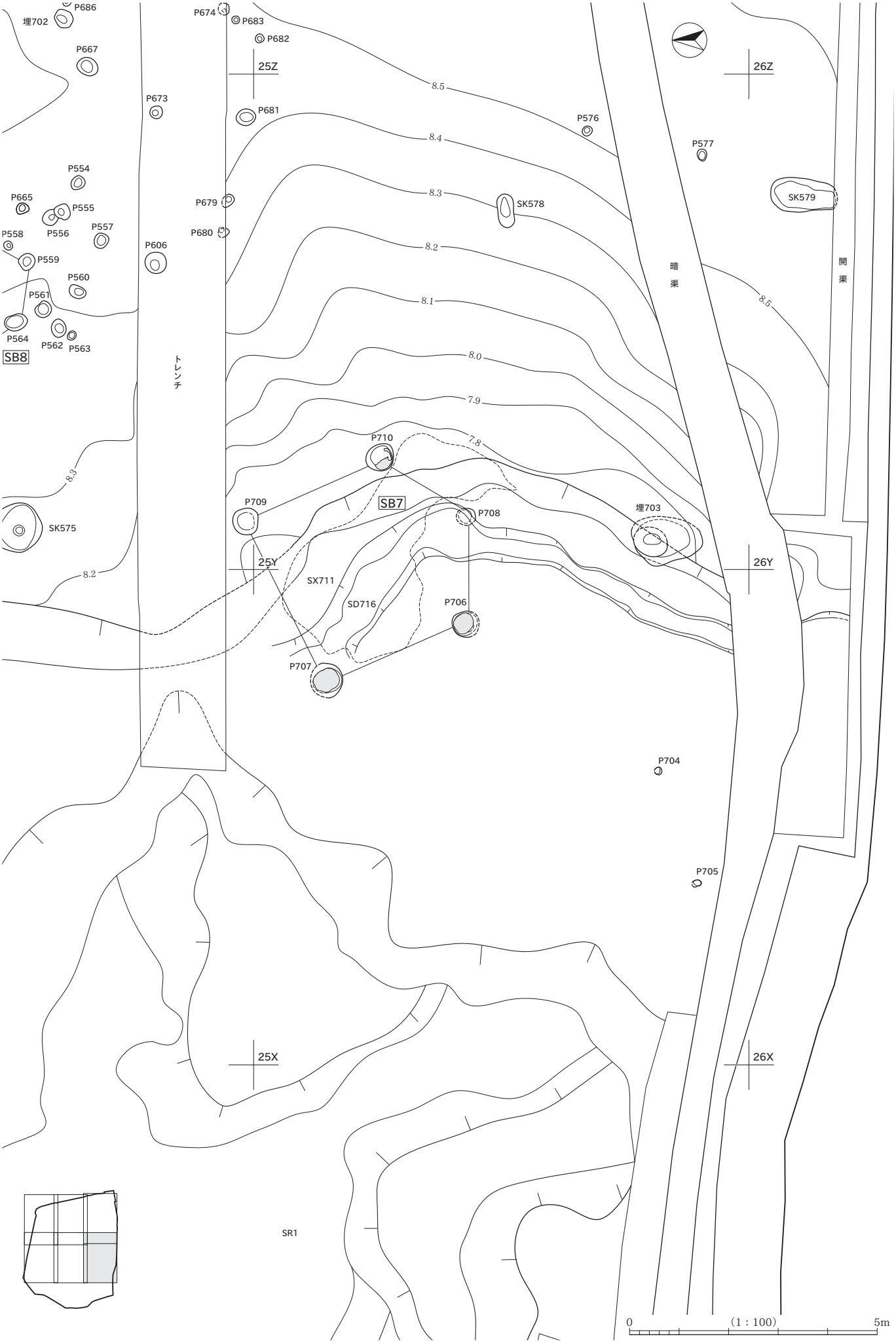


下層遺構全体図（S = 1/200）

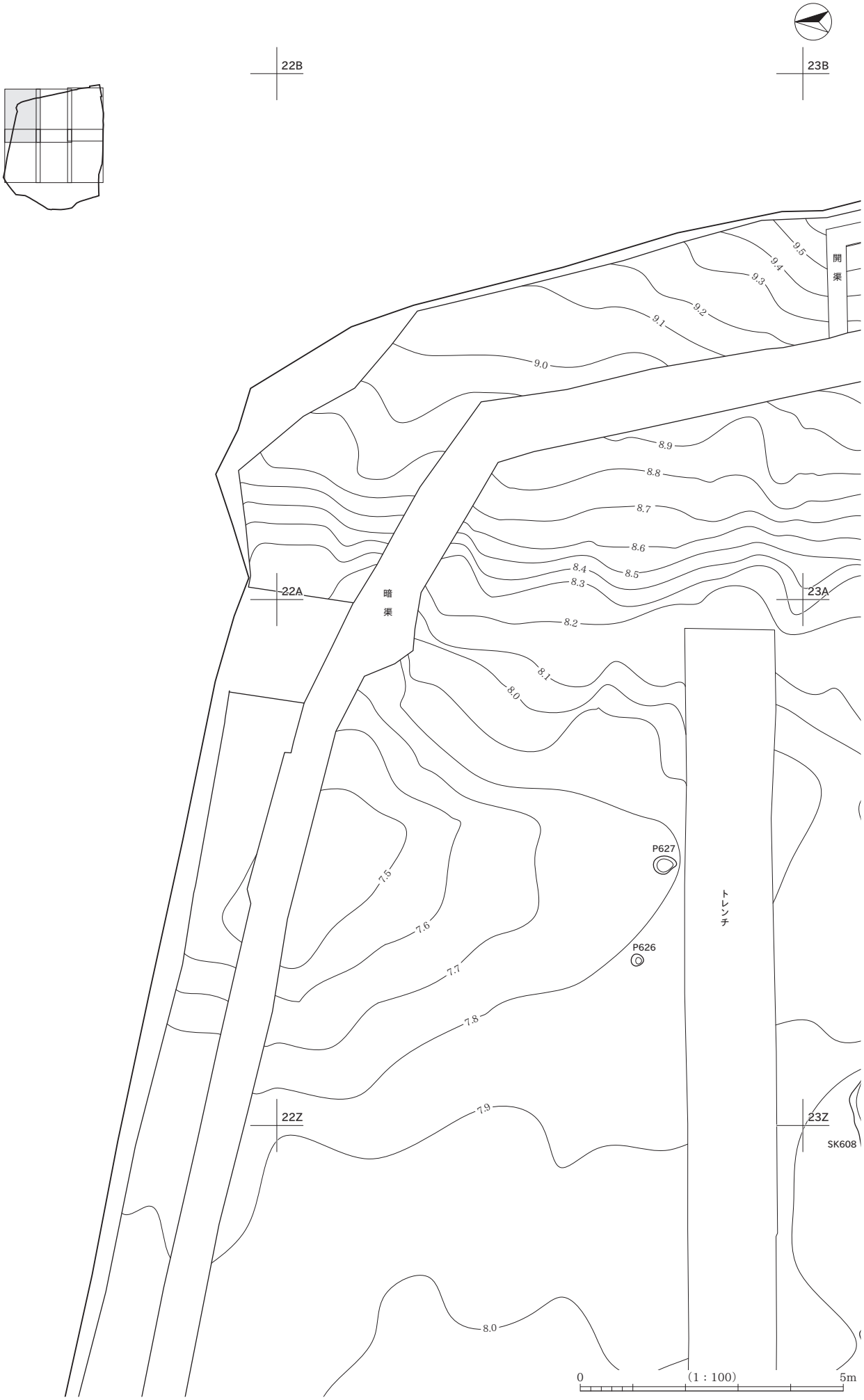

22Z
23Z
SK608
トレンチ
7.9
8.1
P584
P630
P715
P631
P632
P585
SB6
P633
P634
P587
23Y
P617
8.0
P637
22Y
暗渠
7.9
P639
7.8
7.7
7.6
7.5
7.4
7.3
22X
23X
P699
P697
P696
P695
P694
7.6
7.5
SR1
埋701
0
(1：100)
5m

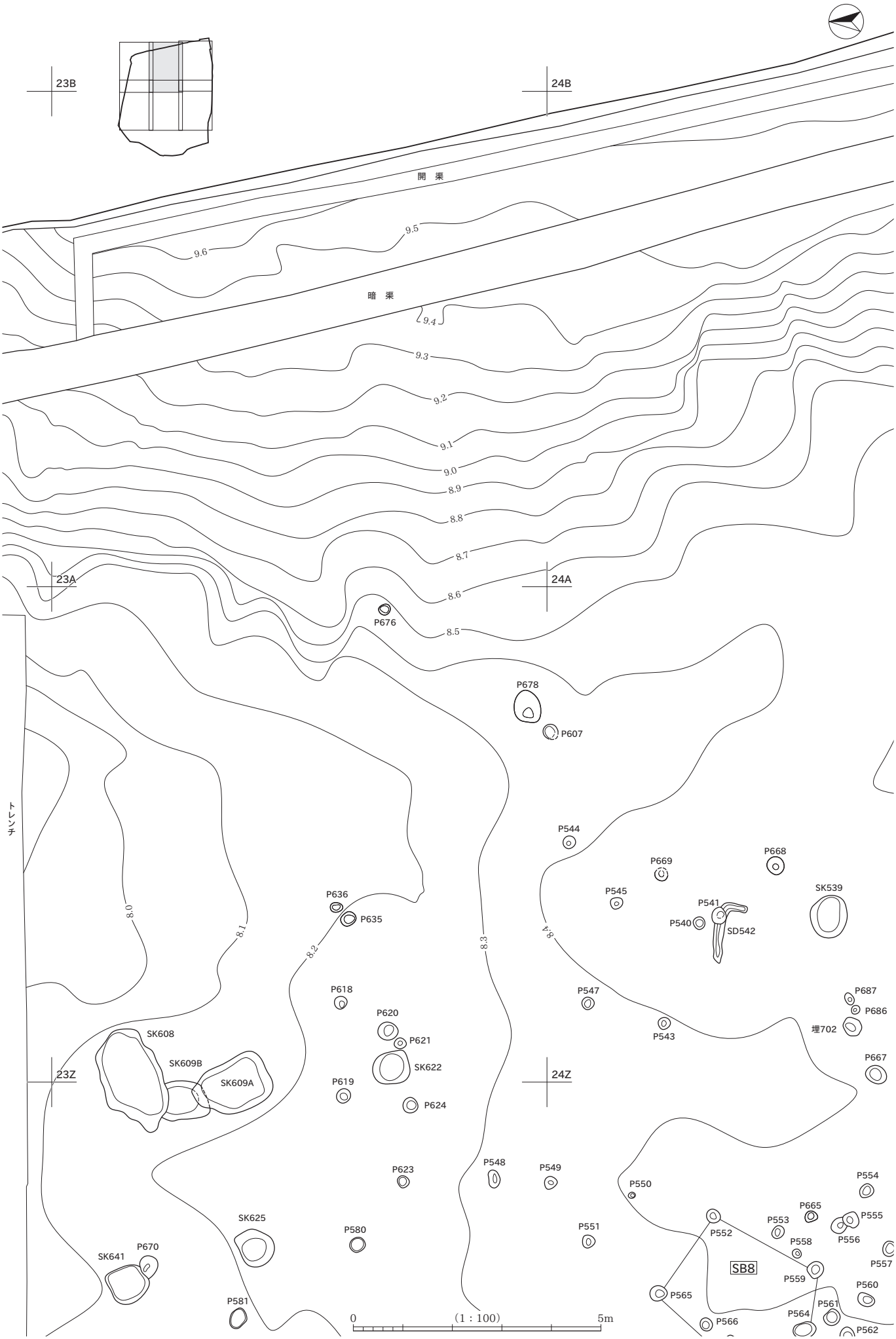
下層遺構分割図（2）


SK608
SK609B
SK609A
23Z
24Z
P620
P621
SK622
P619
P624
P543
埋702
P667
8.4
P623
P548
P549
P550
P554
P665
P553
P555
P552
P558
P556
P557
SB8
P559
P560
P561
P565
P566
P567
P564
P562
P563
P568
P570
P664
P572
P362
P361
P656
P663
P661
P573
P657
P660
P658
P574
P659
P662
SK350
SK575
8.3
P551
P580
SK625
トレンチ
SK641
P670
P581
P630
P583
P582
P715
P631
P611
P632
P585
P614
P613
P586
8.2
P634
P633
P588
P589
P587
SB6
23Y
24Y
SK349
P616
P617
P590
P591
P594
P592
P595
SK348
P599
SK605
SK604
P600
P639
8.1
8.0
7.9
7.8
7.7
7.6
SR1
23X
24X
0
(1 : 100)
5m


P686
埋702
P667
P674
P683
P682
25Z
26Z
8.5
P673
P681
P576
8.4
P577
P554
P665
P555
P679
8.3
SK578
SK579
P558
P556
P557
P680
8.2
P606
P559
暗渠
開渠
P560
8.1
8.5
P561
P564
P562
P563
SB8
トレンチ
8.0
7.9
P710
7.8
8.3
P709
SB7
P708
埋703
SK575
25Y
26Y
8.2
SX711
SD716
P706
P707
P704
P705
25X
26X
SR1
0
(1 : 100)
5m

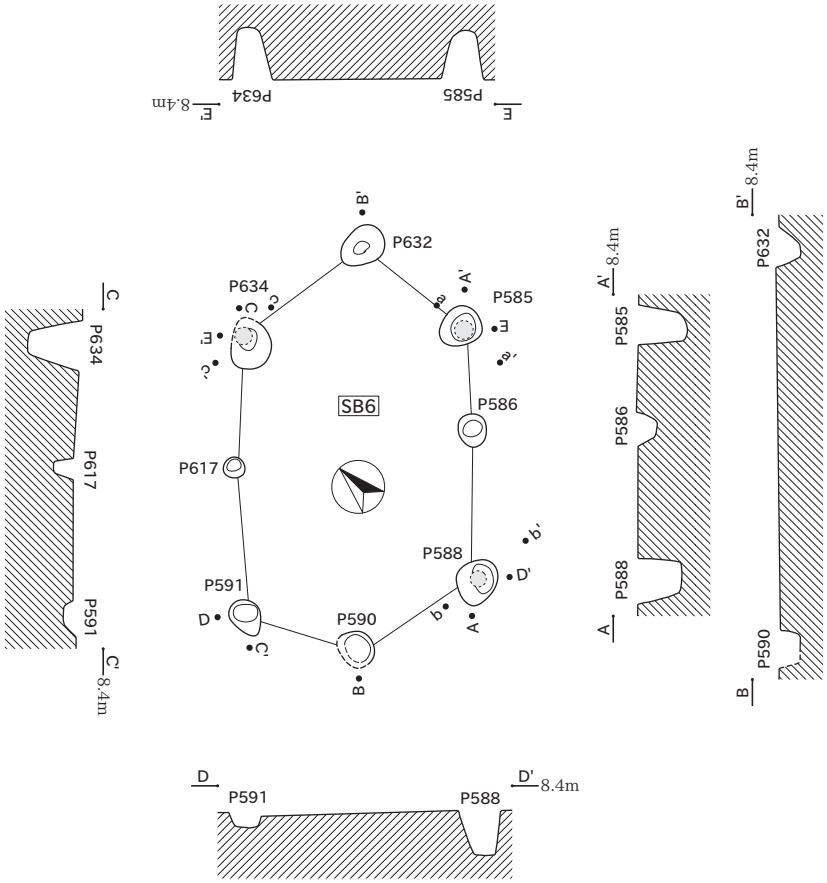
下層遺構分割図（4）

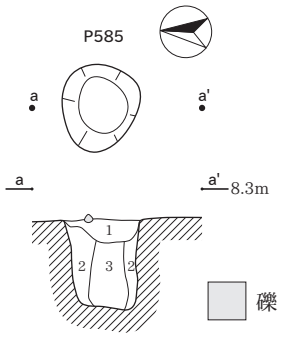

22B
23B
22A
23A
22Z
23Z
開渠
暗渠
トレンチ
P627
P626
SK608
9.5
9.4
9.3
9.2
9.1
9.0
8.9
8.8
8.7
8.6
8.5
8.4
8.3
8.2
8.1
8.0
7.9
7.8
7.7
7.6
7.5
0
(1：100)
5m


23B
24B
開 渠
暗 渠
9.6
9.5
9.4
9.3
9.2
9.1
9.0
8.9
8.8
8.7
8.6
8.5
23A
24A
P676
P678
P607
トレンチ
P544
P669
P668
P545
P541
SK539
P540
SD542
P636
P635
8.0
8.1
8.2
8.3
8.4
P618
P547
P687
P686
P620
P621
P543
埋702
SK608
SK609B
SK609A
SK622
P667
23Z
24Z
P619
P624
P623
P548
P549
P550
P554
P665
P555
P553
P552
P556
P558
P557
SK625
P580
P551
SB8
P559
SK641
P670
P560
P565
P561
P581
P564
P566
P562
0
(1：100)
5m

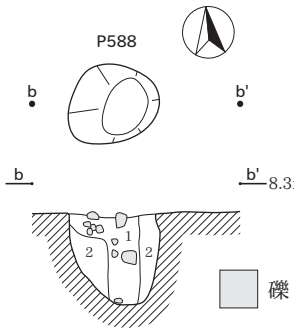
下層遺構分割図（6）

開 渠
開 渠
試掘1 Tr
25B
26B
25A
26A
25Z
26Z
9.2
9.1
9.0
8.9
8.8
8.7
8.6
8.5
8.4
8.3
8.2
8.1
P643
P644
P645
P646
P505
P647
P655
P713
P650
P651
P714
P689
P648
P516
P517
P690
P691
P649
P518
P519
P712
P652
P528
P520
P521
P653
P529
P530
P688
P532
P523
P531
P522
P525
P526
P533
P534
P535
SK539
P537
暗 渠
P685
P538
P684
P687
P686
P675
P672
埋702
P674
P683
P682
P667
P673
P681
トレンチ
P576
P577
P554
P679
P665
P555
P556
P557
P680
P558
P606
P559
P560
SK578
SK579
0
(1：100)
5m

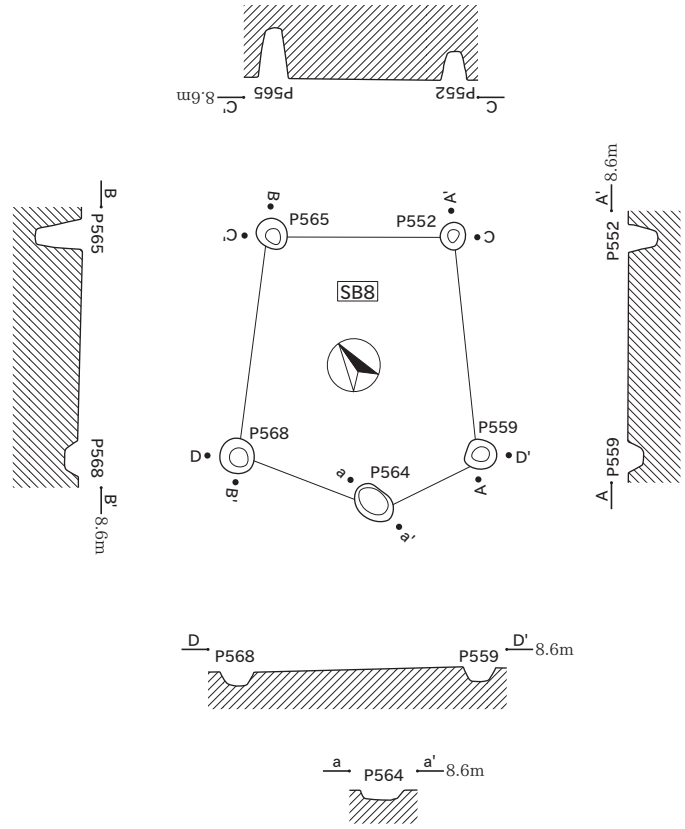


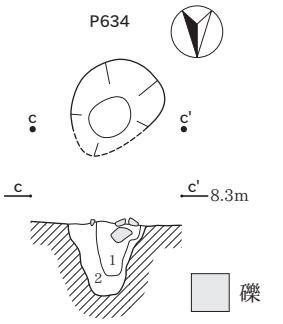


P585
1 褐色（10YR4/4）粘質土　粘性強、締りあり。上部に拳大の礫含む。
2 暗オリーブ色（5Y4/4）＋黒オリーブ色（10Y3/2）粘質土　粘性強、締り弱い。
3 オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土　粘性強、締りなし。柱痕。



P588
1 オリーブ色（5Y5/4）粘質土　粘性強、締り弱い。柱痕。
2 褐色（7.5YR4/3）粘質土　粘性強、締りあり。炭化物少量含む。

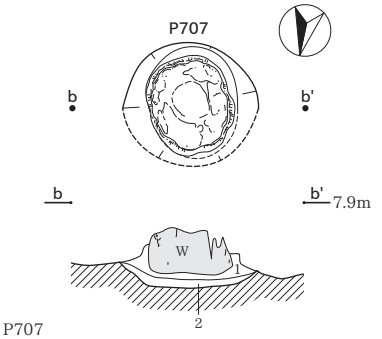




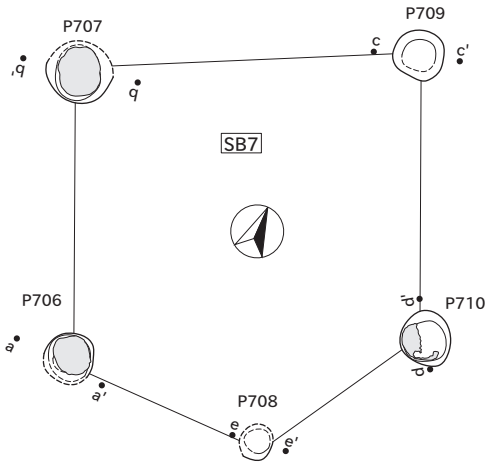
P634
1 オリーブ褐色（2.5Y4/4）粘質土　粘性強、締りなし。礫を含む。柱痕。
2 暗オリーブ色（7.5Y4/3）粘質土　粘性強、締り弱い。

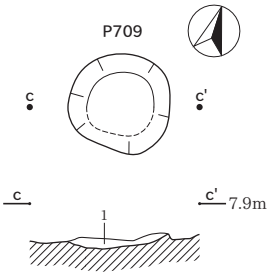
SB平面・エレベーション図（1：80）　0　4m

個別図（1：40）　0　2m

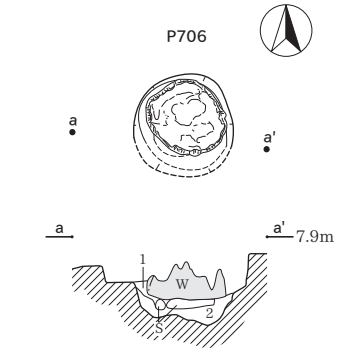


P707
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）微量、小礫（φ5cm以下）
　少量含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）シルト質土　粘性弱、締りあり。
　礫（φ1～6cm前後）多量含む。根固めの層。

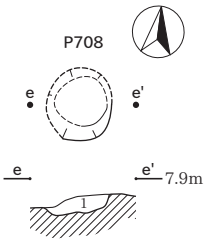




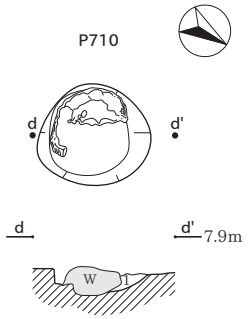
P709
1　褐灰色（7.5YR5/1）粘質土
　粘性・締りあり。礫（φ5.5cm以下）、
　炭化物（φ4cm以下）微量含む。



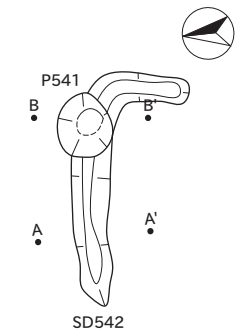
P706
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）微量、小礫（φ5cm以下）
　少量含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）シルト質土　粘性弱、締りあり。
　礫（φ1～6cm前後）多量含む。根固めの層。

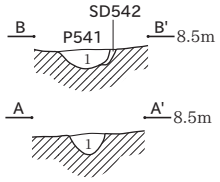


P708
1 灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）微量、小礫（φ5cm以下）
　少量含む。



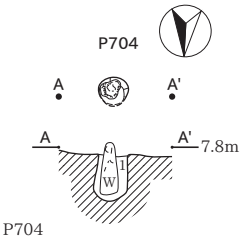
P710
1　褐灰色（7.5YR5/1）粘質土　粘性・
　締りあり。炭化物（φ2mm以下）
　極微量含む。



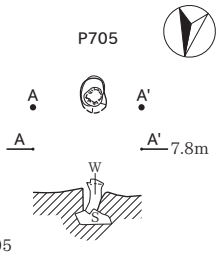


SD542A
1　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫、炭化物（φ2mm前後）含む。

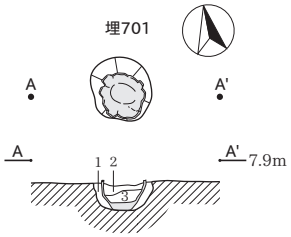
SD542B
1　（P541埋土）褐灰色（7.5YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　白色礫（φ1mm前後）、地山粒（φ2mm以下）微量含む。



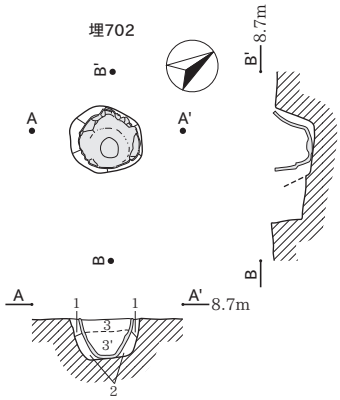
P704
1　灰白色（5Y7/1）シルト質土
　粘性・締りあり。
　炭化物（φ1.2cm以下）少量含む。



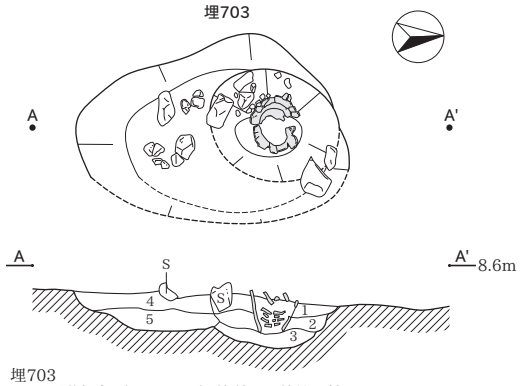
P705
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土
　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）微量、
　小礫（φ5cm以下）少量含む。



埋701
1　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ4mm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ7mm以下）、焼土粒（φ9mm以下）少量含む。
　3層が混入する。
3　暗灰色（N3/0）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3mm以下）微量含む。



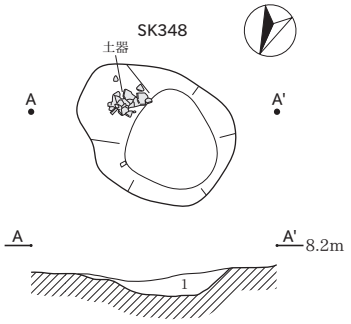
埋702
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）微量含む。
2　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）微量含む。
3　灰黄褐色（10YR4/2）土　粘性・締りあり。
　灰黄褐色ブロック（φ5mm前後）微量含む。
3'　灰黄褐色（10YR5/2）土　粘性・締りあり。
　灰黄褐色ブロック（φ5mm前後）、
　炭化物（φ2mm以下）微量含む。



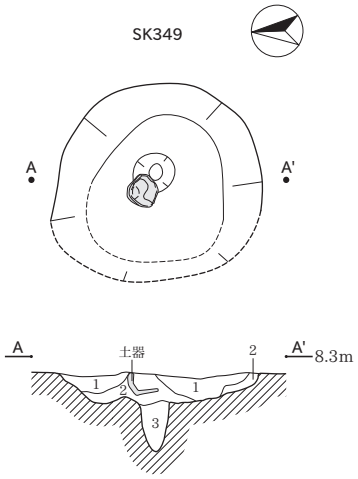
埋703
1　灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm）、小礫（φ6mm以下）微量含む。
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）、小礫（φ2mm以下）極微量含む。
3　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2mm以下）、小礫（φ2mm以下）微量含む。
4　灰黄褐色（10YR6/2）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ3mm以下）、炭化物（φ4mm以下）微量含む。
5　褐灰色（10YR5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　ややシルト質で、炭化物（φ2mm以下）微量含む。

SB平面図
（1：80）
0　4m

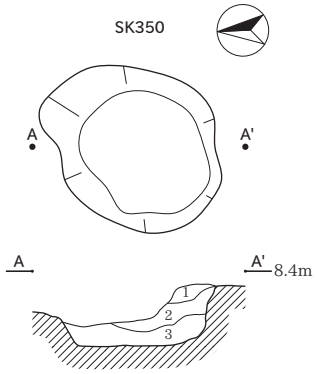
個別図
（1：40）
0　2m



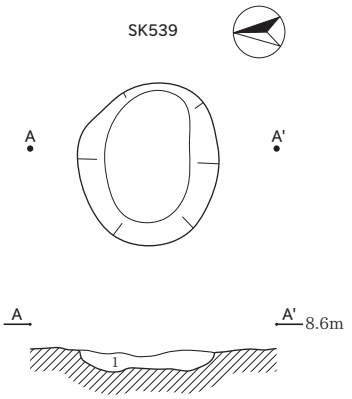
SK348
1　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ3mm以下）、炭化物（φ2mm以下）微量含む。



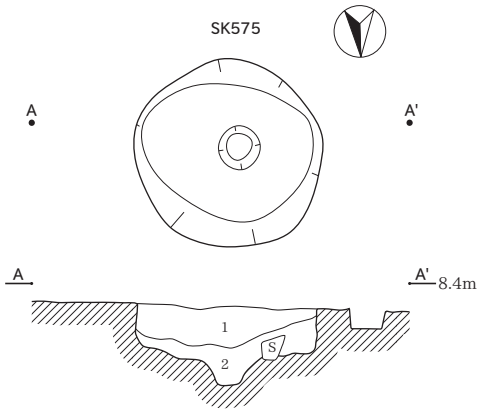
SK349
1　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ3mm以下）、炭化物（φ2mm以下）微量含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3mm以下）微量含む。
3　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3mm以下）少量含む。



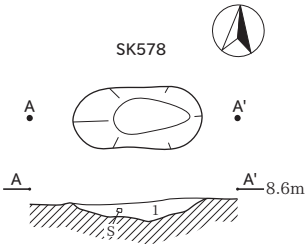
SK350
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ4mm以下）、炭化物（φ2mm以下）微量含む。
2　黄灰色（2.5Y5/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3mm以下）微量含む。
3　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ3mm以下）、炭化物（φ2mm以下）微量含む。



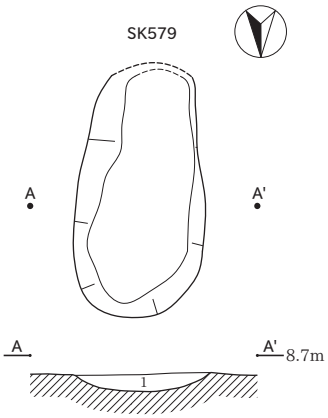
SK539
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫、炭化物（φ2mm前後）微量含む。



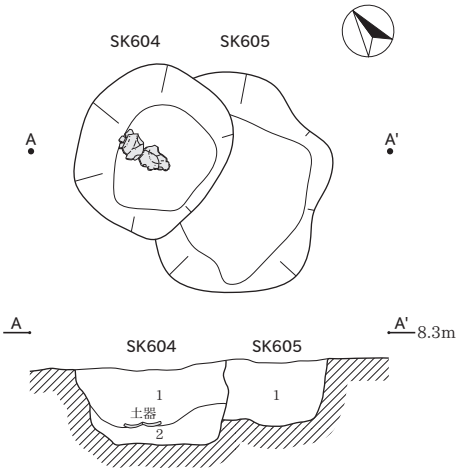
SK575
1　暗褐色（7.5YR3/4）粘質土　粘性・締りあり。
　下部に炭化物（φ1cm前後）少量含む。
2　黒褐色（10YR3/2）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ2～5mm）少量含む。



SK578
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ2mm前後）、炭化物微量含む。



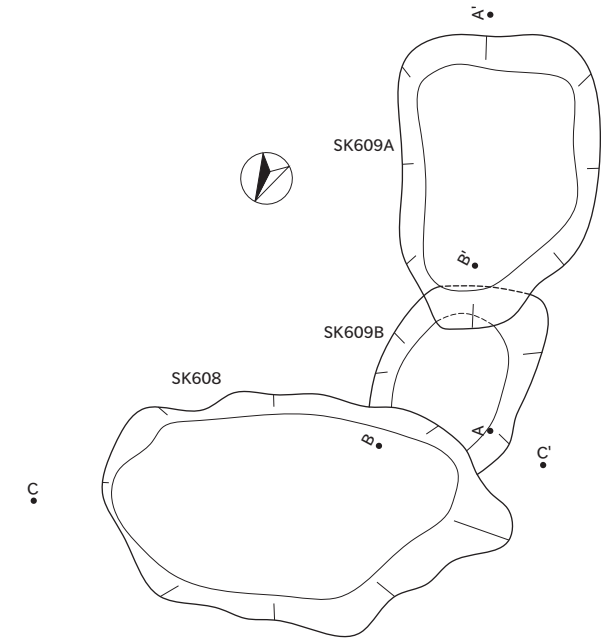
SK579
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　小礫（φ2mm前後）、炭化物（φ2mm前後）微量。

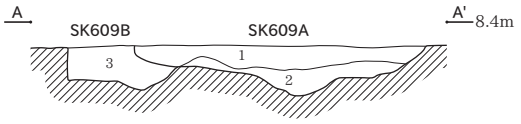


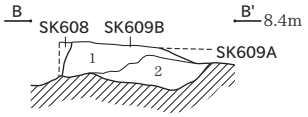
SK604
1　オリーブ褐色（2.5Y4/3）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3mm前後）微量含む。下面に土器あり。

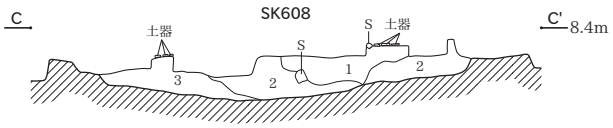
SK605
1　褐色（10YR4/4）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ5mm前後）微量含む。

0　（1：40）　2m





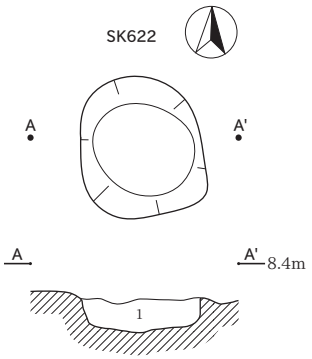




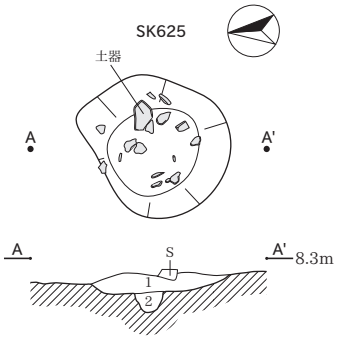
SK608
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ2mm以下）微量含む。
2　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ3mm以下）微量含む。
3　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1mm以下）微量含む。

SK609A
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ3mm以下）微量含む。
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1mm以下）微量含む。

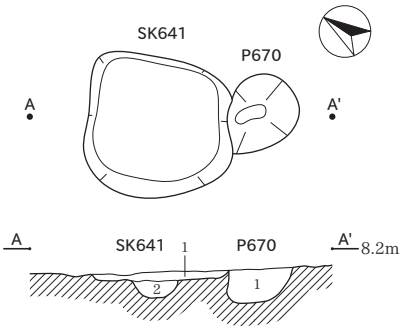
SK609B
1　灰黄褐色（10YR6/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ5mm以下）微量含む。
2　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ2mm以下）微量含む。
3　灰黄褐色（10YR4/2）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1mm以下）微量含む。



SK622
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3mm以下）微量含む。



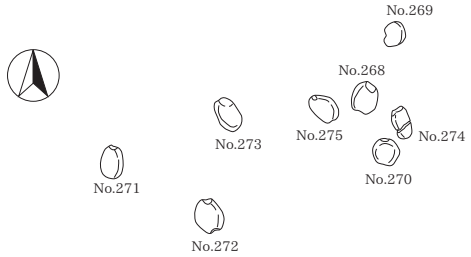
SK625
1　暗褐色（10YR3/4）粘質土　粘性強、締りあり。
2　褐色（7.5YR4/6）粘質土　粘性強、締り弱い。



SK641
1　褐色（10YR4/4）粘質土　粘性・締りあり。
　炭化物（φ3～5mm）含む。
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　粘性・締りあり。

P670
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土　粘性・締りあり。
　橙色土（φ5～10mm）、炭化物（φ3～5mm）含む。

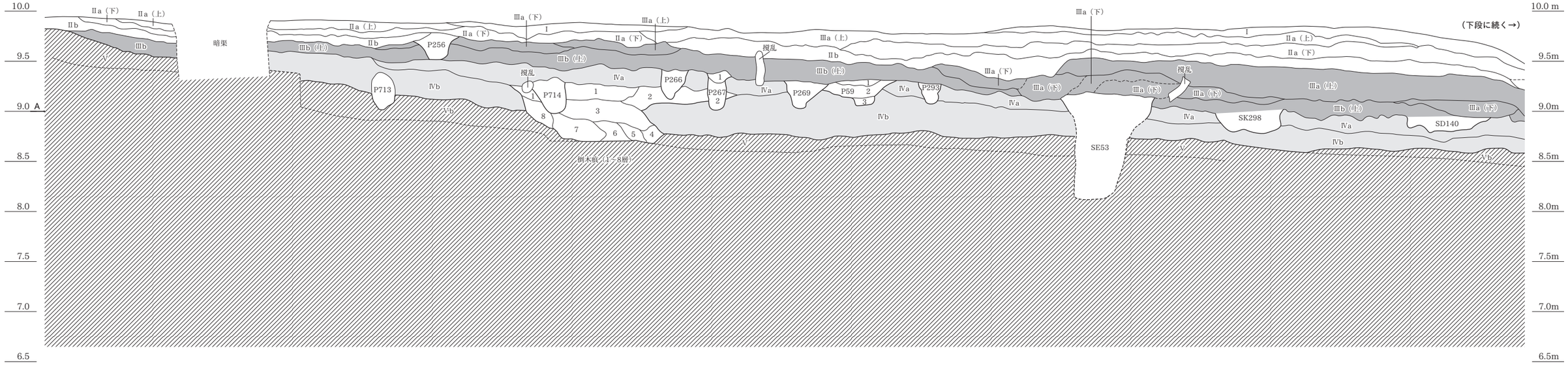
石錘集中区出土状況

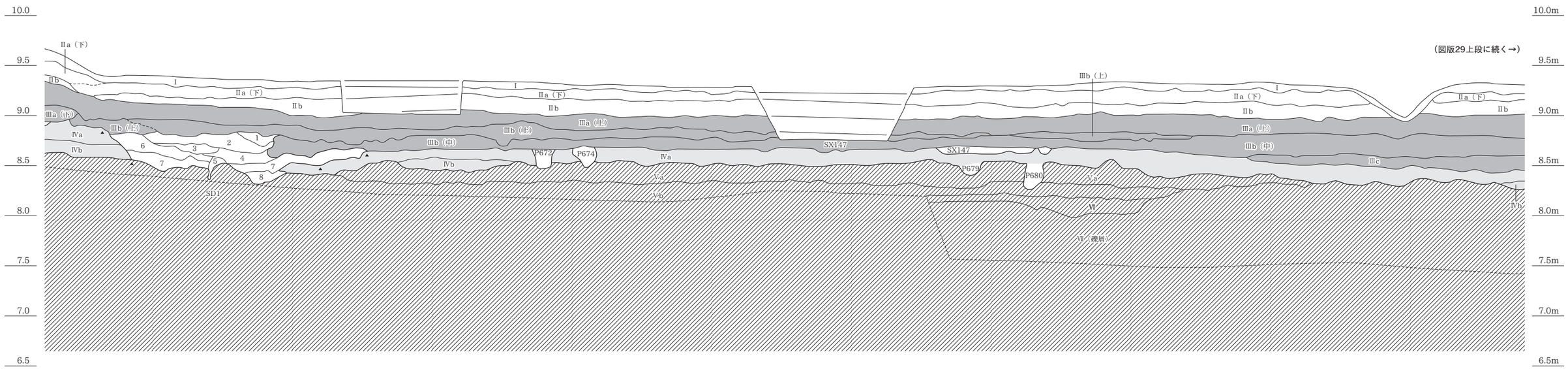


22×13	22×14
22×18	22×19

遺物図
（1：20）
0　1m

平面・断面図
（1：40）
0　2m





基本層序

Ⅰ層　：灰黄褐色（10YR6/2～5/2）粘質土　粘性・締りあり。表土層。炭化物（φ1～7mm）微量に含む。

Ⅱa(上)層：褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ3mm以下）、小礫（φ7mm以下）、地山ブロック（φ2mm以下）を微量含む。

Ⅱa(下)層：褐灰色（10YR5/1）～灰色（N5/0）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1～2mm）、小礫（φ2～3cm）、地山ブロック（φ1～2mm）を微量含む。

Ⅱb層　：褐灰色（10YR4/1）～灰色（N4/0）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ2～5mm前後）、小礫（φ5mm前後）を微量含む。

Ⅲa(上)層：褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1～5mm）を微量、暗灰黄色粘土ブロックを多量含む。

Ⅲa(下)層：褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。Ⅲa（上）層と含有物などは同じだが、色調がやや明るい。

Ⅲb(上)層：黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。Ⅲb（中）層よりやや色調が暗い。炭化物（φ1～7mm）、φ6mm前後の灰白色粘土ブロックを少量含む。小礫（φ2～3cm）を微量含み、暗灰黄色粘土ブロックが混じる。

Ⅲb(中)層：黒褐色（10YR4/1～2.5Y3/2）土　粘性・締りあり。Ⅲb（上）層とⅢc層より色調が薄い。地山ブロックを含み、炭化物（φ1～3mm）を微量含む。

Ⅲb(下)層：褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1～7mm）、φ6mm前後の灰白色粘土ブロックを微量含む。

Ⅲc層　：黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性あり、締りやや弱い。腐植物を多く含む土層で、炭化植物を少量含む。

Ⅲd層　：褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1～3mm）を微量、灰黄褐色シルトブロック（φ1～3cm）を少量含む。

Ⅳa層　：褐灰色（10YR4/1）～灰黄褐色（10YR5/2）粘質土　粘性･締りあり。炭化物（φ4mm以下）を微量含む。小礫（φ3～5cm）を含み、丘陵側は粘性が強くなる。

Ⅳb層　：褐色（10YR4/4）粘質シルト　粘性・締りあり。青灰色～オリーブ灰色ブロックを微量、砂質土・炭粒を少量含む。丘陵側で黒色が強く、平坦部で色調が薄くなる。

Ⅳc層　：灰黄褐色（10YR4/2）～にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　粘性･締りあり。河川（SR1）上に堆積する層で、Ⅳa・Ⅳb層がシルト化したものか。φ5mm以下の炭化物を微量、明黄褐色ブロックを斑点状に含む。

Ⅴa層　：にぶい橙色（7.5YR6/4）粘質土　粘性・締りあり。

Ⅴb層　：灰褐色（7.5YR5/2）粘質土　粘性・締りあり。含有物が極めて少ない。Ａライン以東（丘陵側）は斜面部からの水の影響か、オリーブ灰色（2.5GY6/1）を呈し、粘性が強くなる。また、黒色粒（φ5～7mm）を少量含む。

Ⅵ層　：灰黄褐色（2.5Y6/2）～灰色（N6/0）砂質シルト　粘性やや弱、締りあり。部分的に灰色のやや粘性の強い地点がある。含まれる砂の径は、相対的に細かい。

Ⅶ層　：黄褐色（10YR5/6）～にぶい黄褐色（10YR4/3）土　砂礫層。φ5～18cm程の中型礫を多量に含む。

※東側（図左方向）から

P713（下層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを少量含む。

P256（上層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ1mm前後）を極微量含む。

P714（下層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを微量含む。

倒木痕（下層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを少量含む。
2　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。ベースは黒褐色土で、オリーブ灰色ブロックを中量含む。
3　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。ベースは黒褐色土で、オリーブ灰色ブロックを多量含む。
4　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを少量含む。
5　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。ベースは黒褐色土で、オリーブ灰色ブロックを中量含む。
6　オリーブ灰色（2.5GY6/1）粘質土　粘性・締りあり。Ⅳb層より粘性が強い。黒色粒（φ5～7mm前後）を少量含む。
7　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを少量含む。
8　灰色（5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを微量含む。

P266（上層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロック、炭化物（φ1～7mm）を微量含む。

P267（上層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロック（φ1.2cm以下）、炭化物（φ1～7mm）を微量含む。
2　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。含有物少ない。

P269（上層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロック、炭化物を少量含む。

P59（上層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロック、炭化物を少量含む。
2　黒色（2.5Y2/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物、植物質、地山ブロックを少量含む。
3　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。1層より色調明るい。

P293（上層）
1　黒褐色（10YR3/1）粘質土　粘性・締りあり。オリーブ灰色ブロックを微量含む。

SK298（上層）
1　褐灰色（10YR4/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物（φ4mm以下）、小礫（φ6mm前後）、地山ブロック（φ1.2cm）含む。

SD140（上層）
1　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。小礫（φ7mm以下）少量、炭化物（φ8mm前後）微量含む。

SD1（上層）
1　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質シルト　粘性あり、締り弱い。砂を少量含む。
2　にぶい黄褐色（10YR4/3）＋オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質土　粘性弱、締りあり。
3　にぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土　粘性弱、締りあり。2層と同じだが、砂の粒径が大きい。
4　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質シルト　粘性あり、締り弱い。砂を少量含む。
5　黄灰色（2.5Y4/1）粘質土　粘性・締りあり。細杭の周辺の土層。
6　黒褐色（2.5Y3/1）粘質土　粘性・締りあり。炭化物や植物質や木片等を含む。
7　灰色（5Y4/1）粘質土とにぶい黄褐色（10YR4/3）砂質土の互層　粘性・締りあり。
8　暗灰黄色（2.5Y4/2）粘質シルト　粘性・締りあり。砂を少量含む。

P672（上層）
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト　粘性・締りあり。炭化物（φ3mm前後）を少量含む。

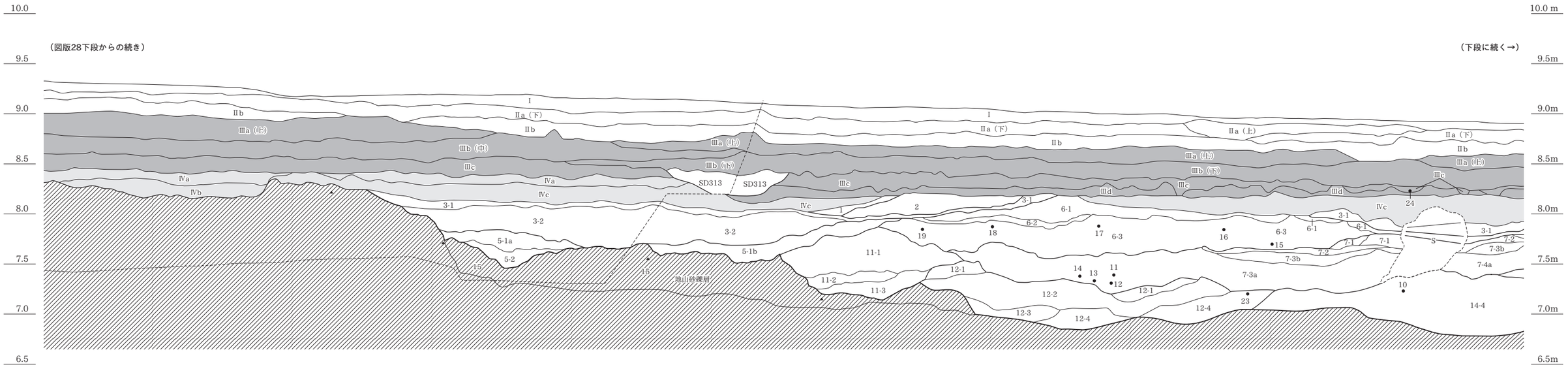
P674（上層）
1　灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルト　粘性・締りあり。炭化物（φ3mm前後）を少量含む。

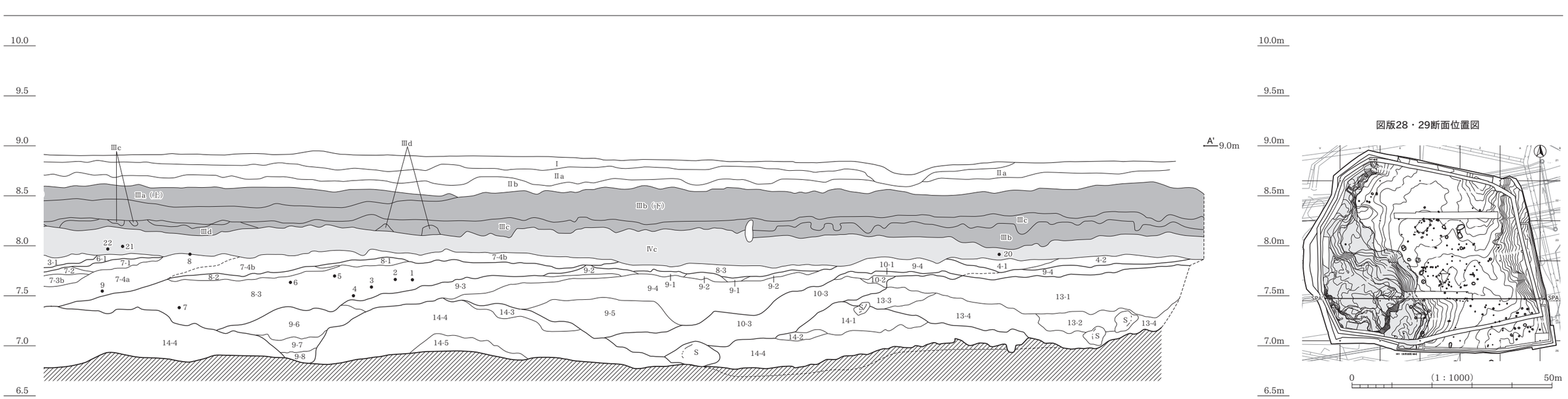
P679（下層）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　粘性・締りあり。

P680（下層）
1　にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルト　粘性・締りあり。

SD313（上層）
1　暗褐色（10YR3/3）＋褐色（10YR4/6）粘質土　粘性・締りあり。細～中砂との互層。炭化物少量含む。

0　（1：40）　2m





図版28・29断面位置図

SR1土層説明

※自然流路（SR1）が土石流等によってまとまって、繰り返し堆積したものと考える。腐植物の混じりが多い黒･黒褐色土は、比較的安定した時期があることを示す。また、こうした黒･黒褐色土の直上には、灰白･黄灰色のシルト層が堆積するパターンが多い。ここではこのような状況と礫層の傾斜･堆積などから、腐植土層（黒色など）/シルト層（黄灰色など）/礫層（暗灰黄色など）の3種の層をひとつのまとまり（単位）として認識し、層を大別した（1～15層）。これらの各単位（大別）は、流路の変遷を示すものと考える。各単位（大別）の多くは、シルト層→腐植土→礫層の順で堆積している。各単位の細別は、「8-2層」のように表記し、細別の必要に応じてa・bも用いた。

①灰黄褐色（10YR6/2）粘質土　粘性・締りあり。ややシルト質。炭化物（φ1～2mm）を微量含む。

②褐灰色（10YR5/1）シルト質土　粘性弱、締りあり。小礫（φ1～2cm前後）を少量、炭化物（φ1～2mm前後）を微量含む。

③川跡の最も新しい単位で、1・2層もこれに含まれる可能性がある。
　3-1層：灰黄褐色（10YR4/2）～黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締りやや弱い。
　3-2層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　砂礫層。粘性なく、締り強い。中型の礫（φ5～8cm前後）を主体に、小礫・砂を多量含む。

④9層より新しいが、3～8層との対応関係や前後関係が明らかでない単位で、黄灰色系の色調を持つ。シルト・砂礫層の単位や、堆積順・土質などから8層あるいは9層に対応する可能性もある。
　4-1層：灰色（5Y5/1）土　シルト層。粘性・締り弱い。砂（φ1mm以下）を多量含む。
　4-2層：灰色（5Y5/1）土　シルト層。粘性・締り弱い。4-1層よりも粒径の細かい砂が多い。

⑤3層より古く、6・11層より新しい単位。
　5-1a層：黒褐色（5YR3/1）土　腐植土層。礫（最大φ12cm前後、φ4～6cmが多い）を多量含む。
　5-1b層：褐灰色（5YR4/1）土　腐植土層。礫の含有量が5-1a層より多く、色調も明るい。
　5-2層：灰白色（2.5Y7/1）土　シルト層。粘性弱、締りあり。砂（φ1mm前後）を多量含む。小礫（φ6～8cm）を少量含む。

⑥5層の西側に堆積し、7層の上部にある層の単位。
　6-1層：灰色（5Y5/1）土　シルト層。粘性・締り弱い。砂（φ1mm以下）を多く含む。4-1層に類似する。
　6-2層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締りやや弱い。3-1層に類似する。
　6-3層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ5～8cm前後）を主体とする。

⑦6層の下位に堆積する層の単位。
　7-1層：灰色（5Y5/1）土　シルト層。粘性・締り弱い。砂（φ1mm以下）を多量含む。4-1層より6-1層に類似するが、灰白色の砂質部分が多い。
　7-2層：黄灰色（2.5Y6/1）土　シルト層。粘性弱、締りやや弱い。5-2層より砂の粒子が細かい。
　7-3a層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締りやや弱い。ベースとなる黒色土は3-1層に類似する。部分的に大礫（φ15cm前後）、中礫（φ7cm前後）を含む。
　7-3b層：黒褐色（7.5YR3/1）土　腐植土層。粘性あり、締りやや弱い。
　7-4a層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ8cm前後）が主体となる。
　7-4b層：灰色（5Y5/1）土　シルト層。粘性・締り弱い。砂（φ1mm以下）を多量含む。

⑧7層の下位で、西側に堆積する層の単位。
　8-1層：黄灰色（2.5Y6/1）土　シルト層。粘性弱、締りやや弱い。含有する砂の粒子が細かい。7-2層に類似する。
　8-2層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締りやや弱い。
　8-3層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ1～12cm前後）を多く含む。分層していないが、東側（図左側）に、8-2層に類似の腐植土が狭在している。

⑨8層の下位で、西側に堆積する層の単位。
　9-1層：黄灰色（2.5Y5/1）土　シルト層。粘性・締り弱い。細砂が主体に含まれる。
　9-2層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。
　9-3層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ8～10cm）を多量含む。部分的に9-2層類似の腐植土が混入する。
　9-4層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。小礫（φ5～8cm）を多量含む。
　9-5層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。小～中礫（φ5～15cm前後）を多量含む。
　9-6層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。小礫を含む。
　9-7層：褐灰色（7.5YR4/1）土　礫層。中礫（φ1～15cm前後）を中量含む。
　9-8層：黒褐色（10YR3/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。小礫（φ1～5cm）を少量含む。14-5層に類似する。

⑩9層の下位で、13層の東側に堆積する層の単位。
　10-1層：黄灰色（2.5Y5/1）シルト質土　粘性・締り弱い。9-1層より粘性が弱く、シルト化している。
　10-2層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。
　10-3層：褐灰色（7.5YR4/1）土　礫層。腐植土が多量に混じる。中礫（φ1～15cm前後）を含む。

⑪6・7層の下位で、12層の上位にある層の単位。11-1･2層と11-3層で区分できる可能性もある。
　11-1層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ10～15cm前後）が主体。
　11-2層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　砂礫層。φ1～2cm前後の礫・砂からなる。
　11-3層：褐灰色（7.5YR4/1）土　礫層。中礫（φ15cm前後）、腐植土を多量含む。

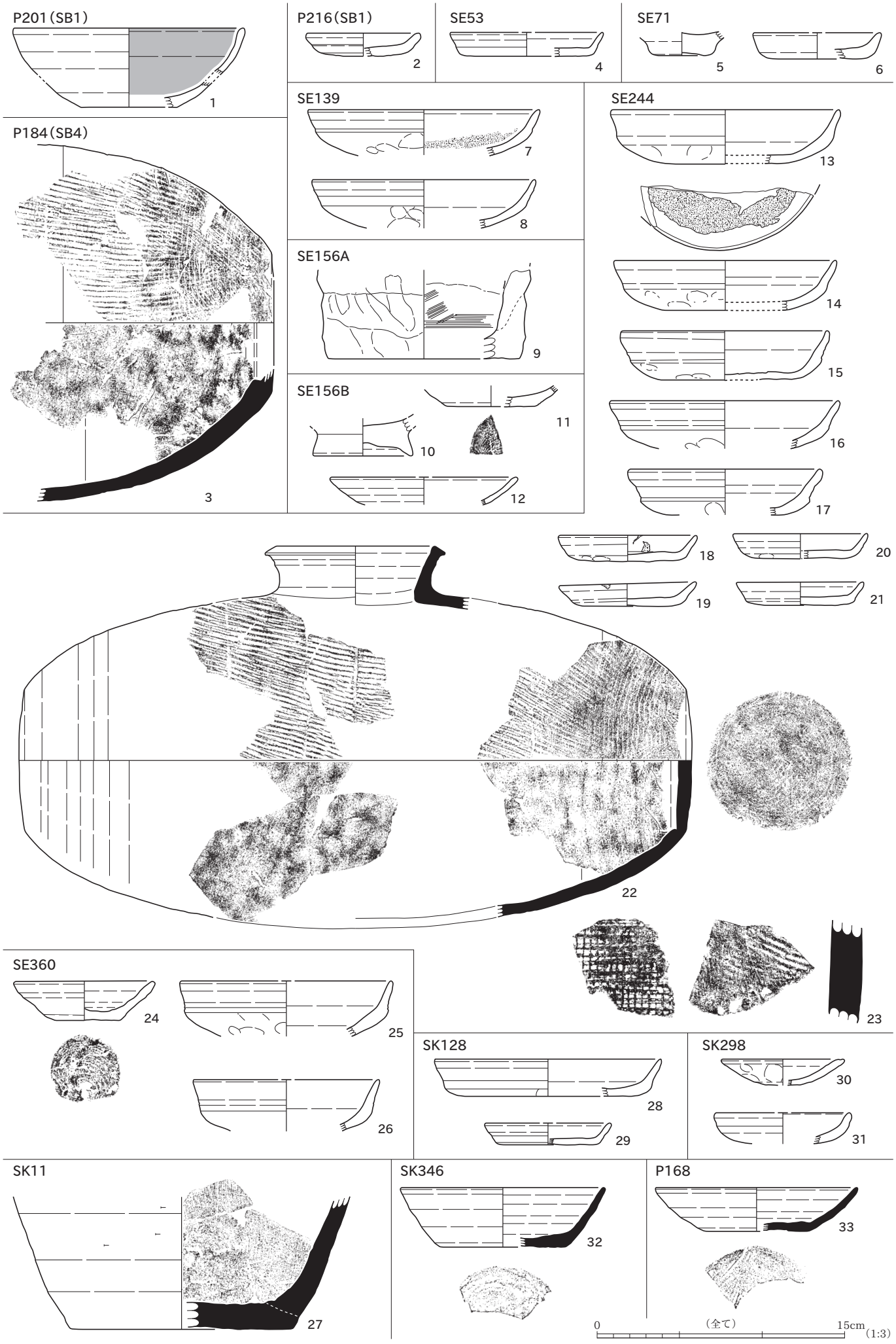
⑫7層の下位で、地山の粘質シルト層と接する最下層の一つの単位。
　12-1層：灰白色（2.5Y7/1）土　シルト層。粘性弱、締り強い。φ1mm前後の砂を含み、小～中礫（φ6～8cm）を少量含む。
　12-2層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。
　12-3層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　砂礫層。φ1.2～1.5cm前後の砂利が主体。
　12-4層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。小～中礫（φ8cm前後）が主体。

⑬10層の下位で、西側に堆積する層の単位。最下層の一つで、他の層の堆積方向とは逆向きを示す。13-1･2層と13-3･4層に二分できる可能性がある。
　13-1層：明黄褐色（10YR7/6）土　礫層。小礫（φ5cm前後）が主体。西側（図右側）の礫の径は大きく、中礫（φ8～10cm前後）が多く認められる。
　13-2層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ8～10cm前後）からなる。
　13-3層：灰白色（2.5Y7/1）土　シルト層。粘性弱、締り強い。やや粒子の粗い砂を多く含む。小礫（φ5cm前後）を少量含む。
　13-4層：褐灰色（7.5YR4/1）土　礫層。中礫（φ10cm前後）、大礫（φ15cm前後）が含まれ、腐植土が多量に混入する。

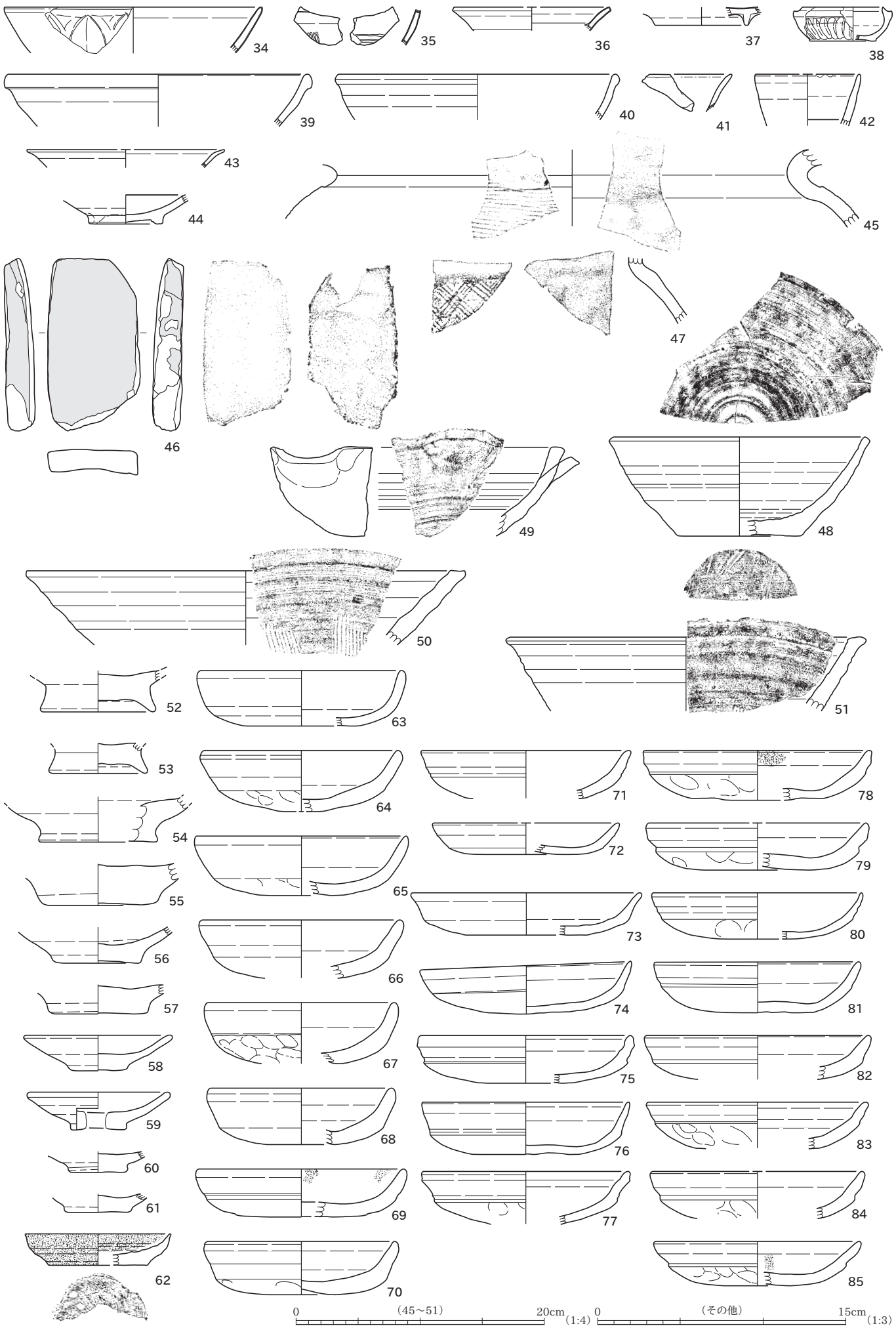
⑭SR1の最下部に堆積する砂礫層。遺物が含まれる最下層。
　14-1層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。小礫（φ1.5～4cm）を多量含む。
　14-2層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。
　14-3層：黒色（7.5YR2/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。14-2層と類似する。
　14-4層：暗灰黄色（2.5Y5/2）土　礫層。中礫（φ～10cm前後）～大礫（φ10～20cm前後）を多量含む。
　14-5層：黒褐色（10YR3/1）土　腐植土層。粘性あり、締り弱い。小礫（φ1～5cm）を少量含む。

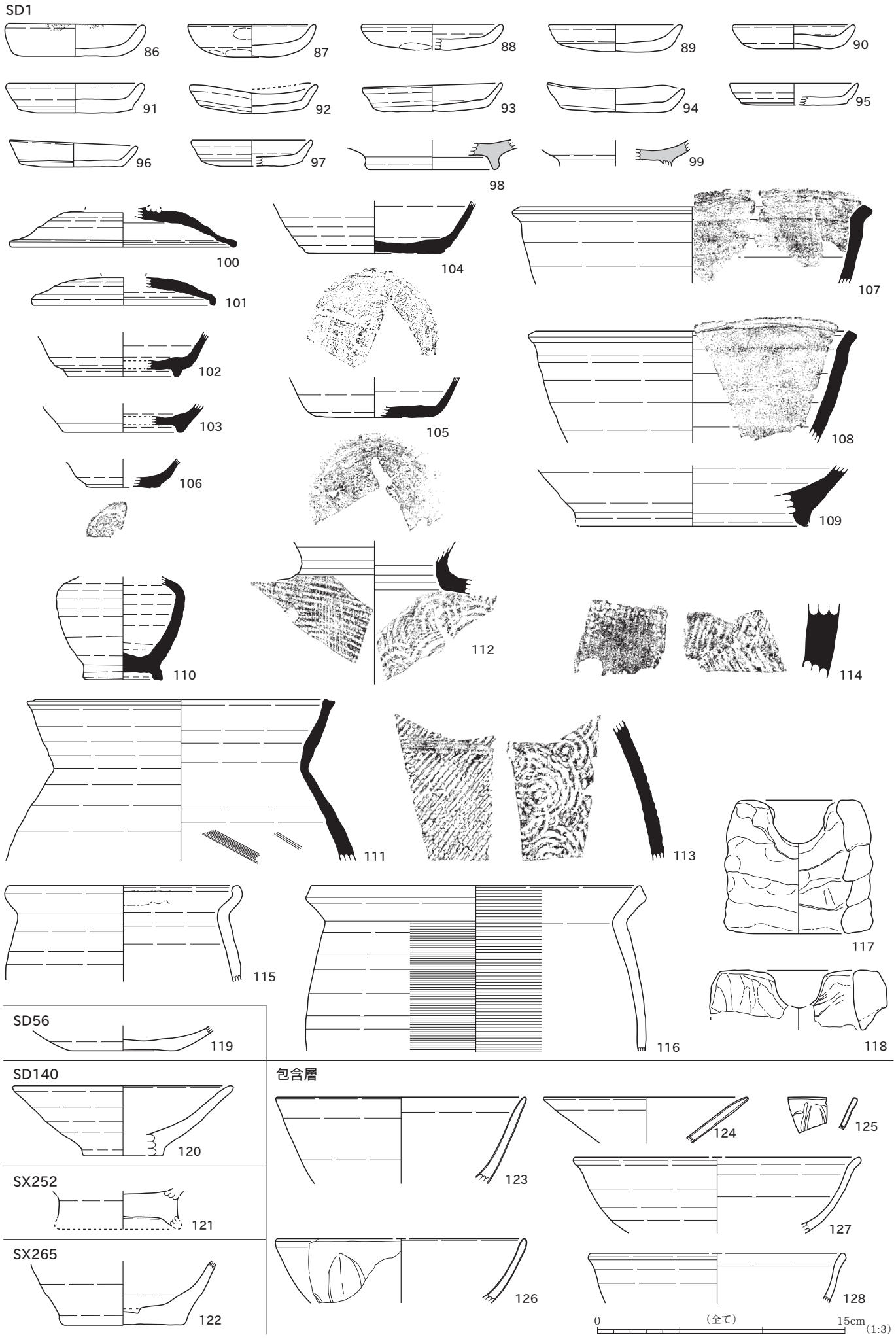
⑮基本層序Ⅶ層の砂礫層と異なる、河川堆積の砂礫層。明灰黄色（2.5Y5/2）を呈し、中礫（φ8cm前後）を主体とする。遺物が含まれないため、地山と判断した。ＳＢ7の柱穴の底面はこの層の上位に位置する。

0　（1：40）　2m

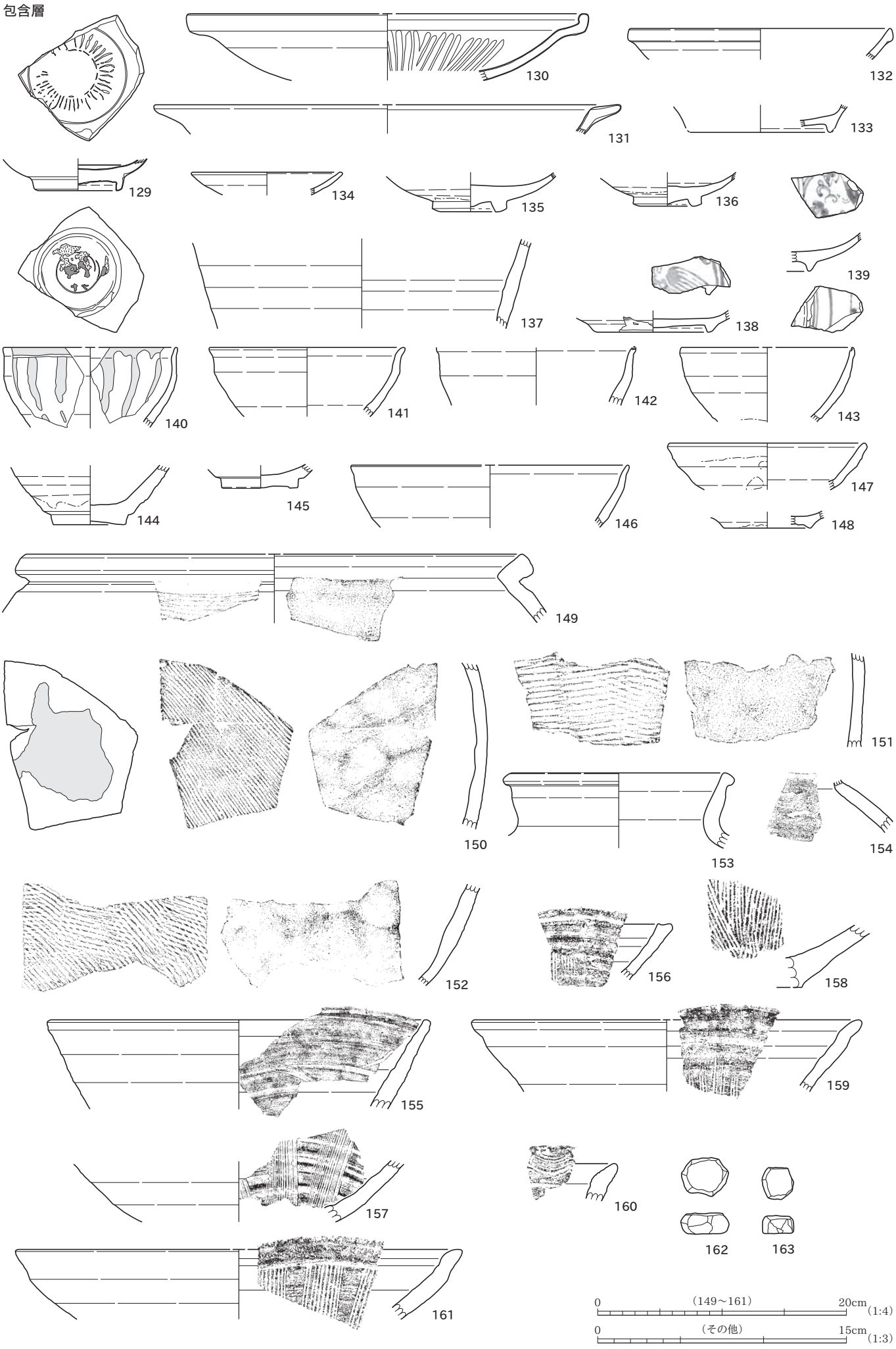

P201（SB1）
1
P184（SB4）
3
P216（SB1）
2
SE53
4
SE71
5
6
SE139
7
8
SE156A
9
SE156B
10
11
12
SE244
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
SE360
24
25
26
SK128
28
29
SK298
30
31
SK11
27
SK346
32
P168
33
0
（全て）
15cm
（1:3）

SD1

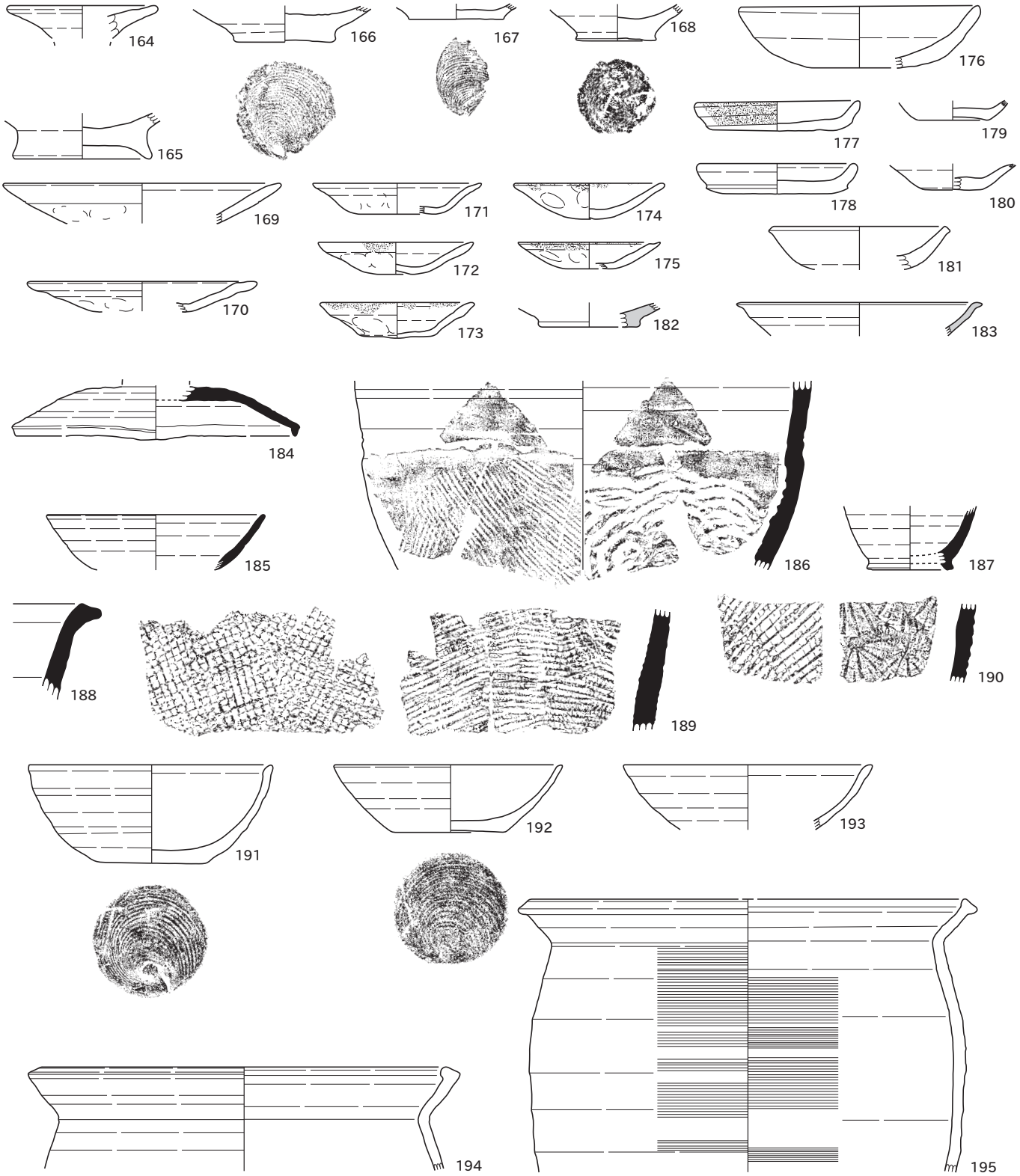

34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
0
(45～51)
20cm
(1:4)
0
(その他)
15cm
(1:3)


SD1
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
SD56
119
SD140
120
SX252
121
SX265
122
包含層
123
124
125
126
127
128
0
（全て）
15cm
(1:3)

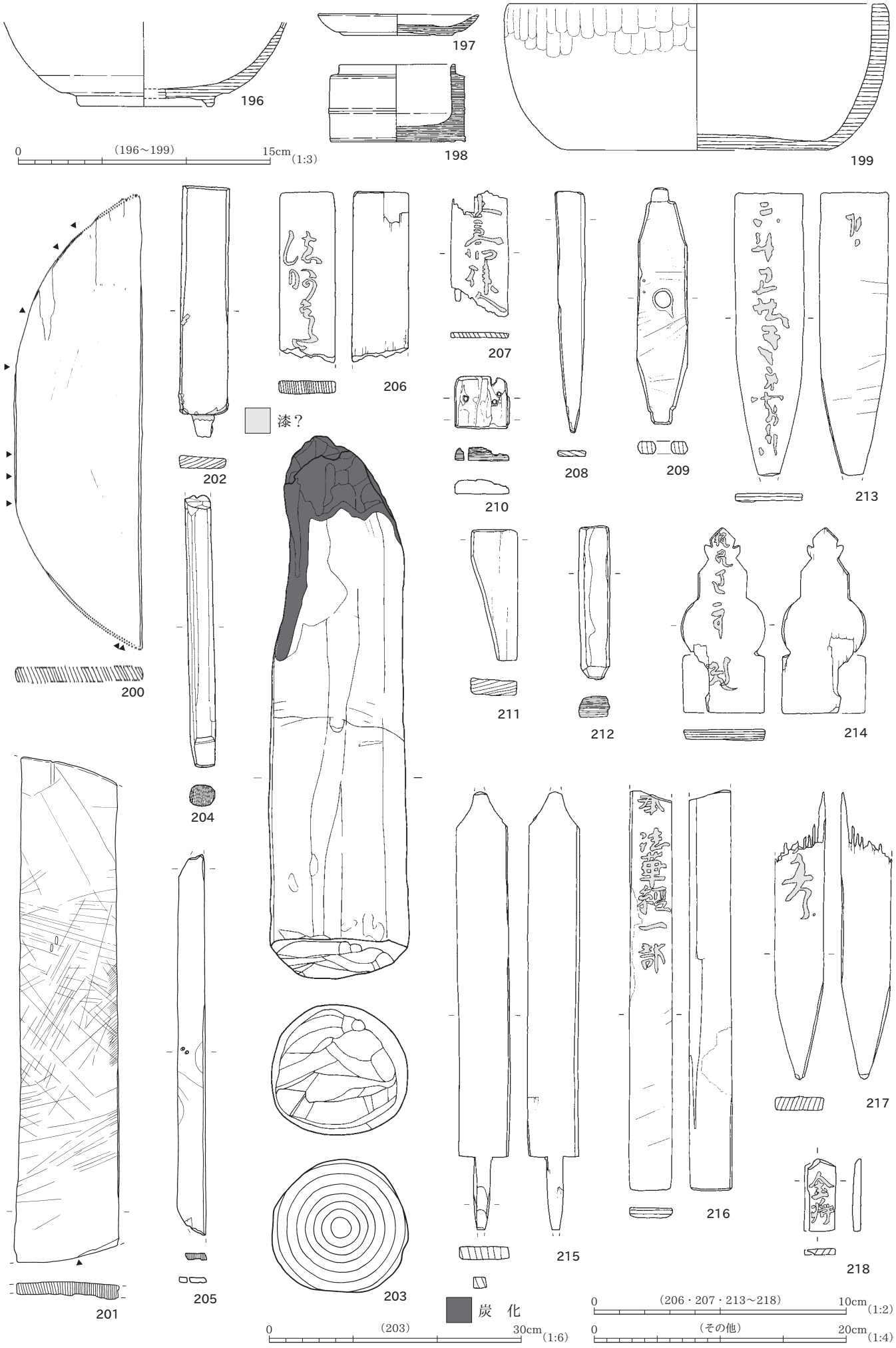
包含層

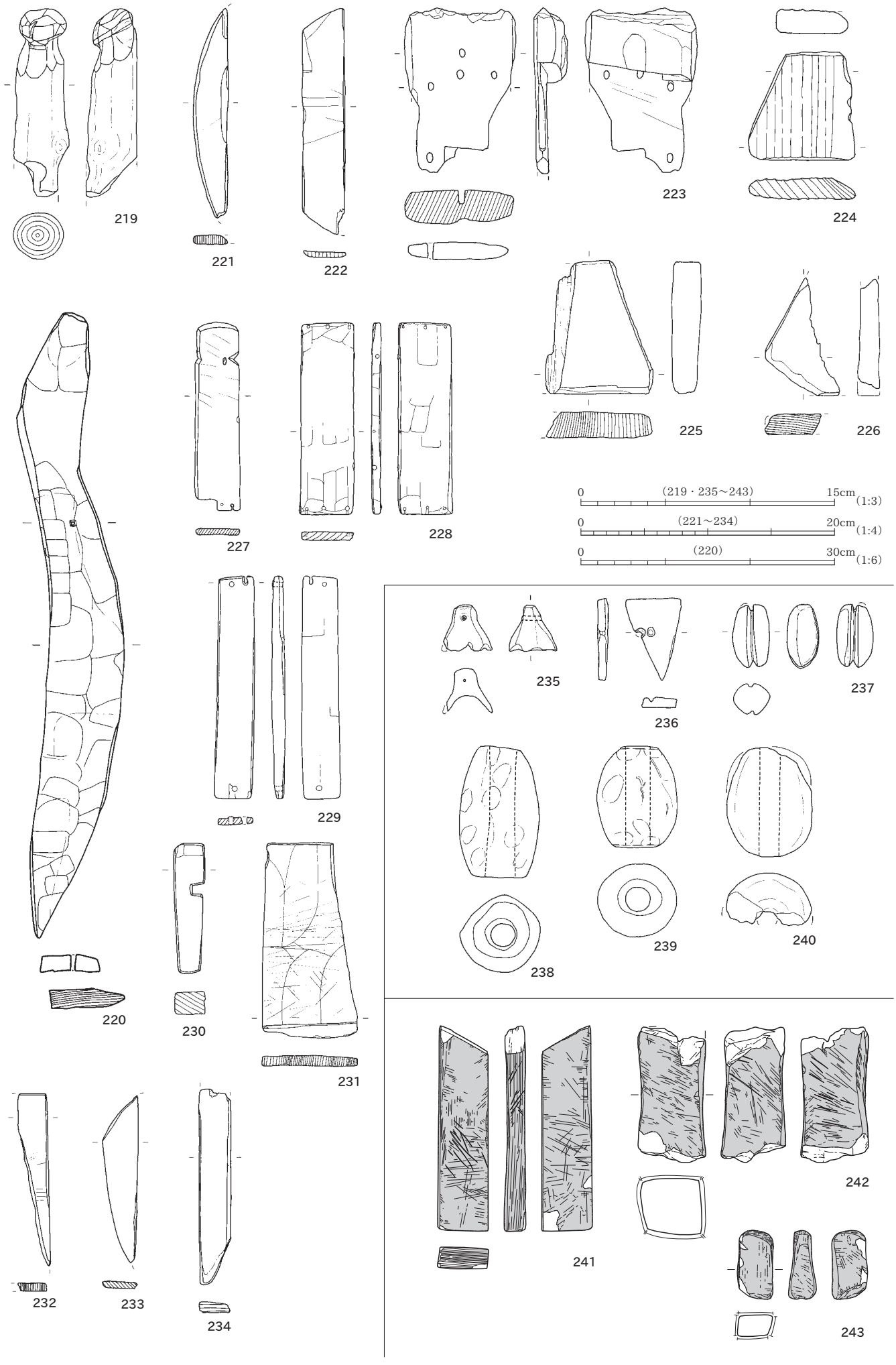

130
132
131
133
129
134
135
136
137
139
138
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
151
150
153
154
152
156
158
155
159
157
160
162
163
161
0
（149～161）
20cm
(1:4)
0
（その他）
15cm
(1:3)

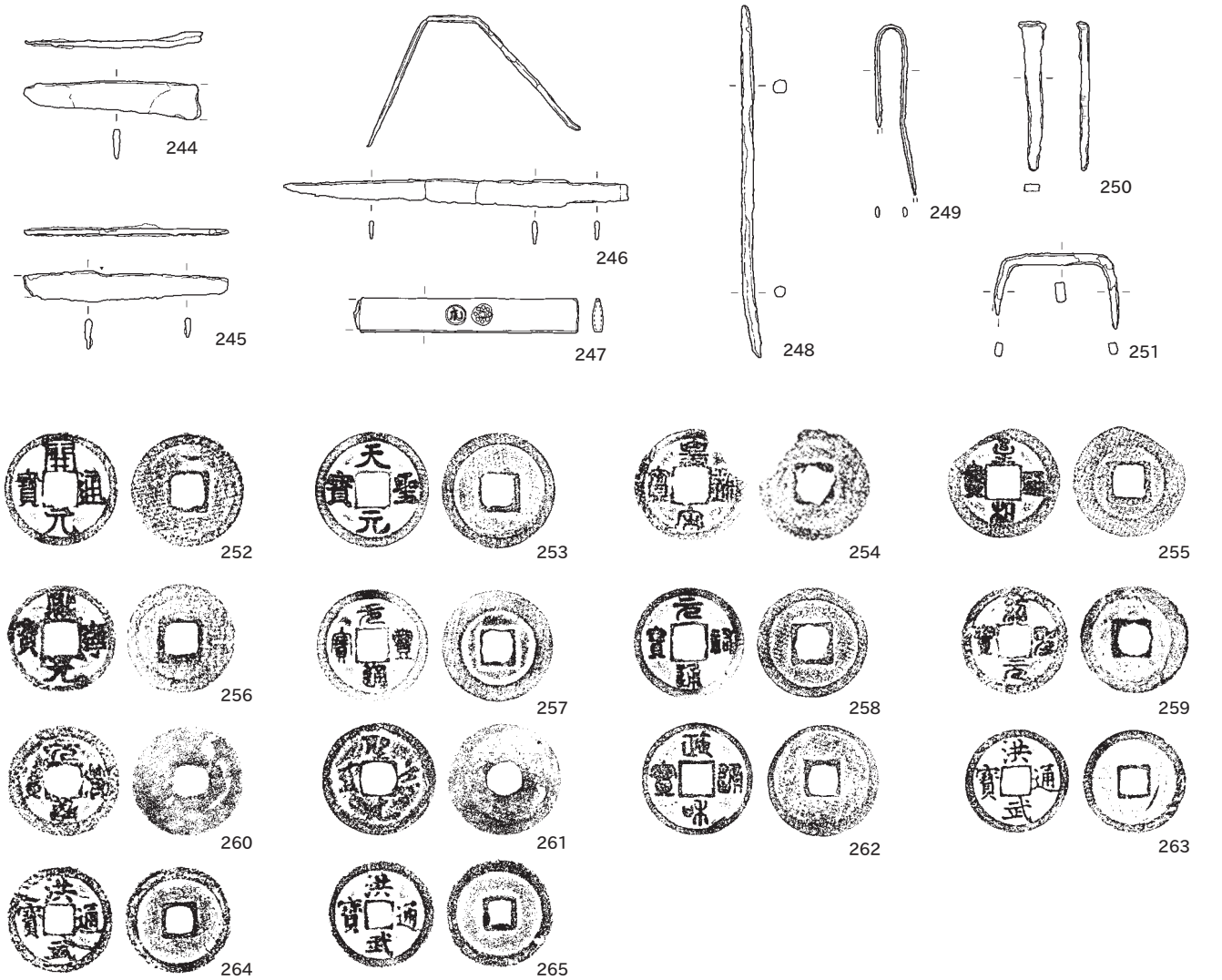
包含層



0　（全て）　15cm（1:3）

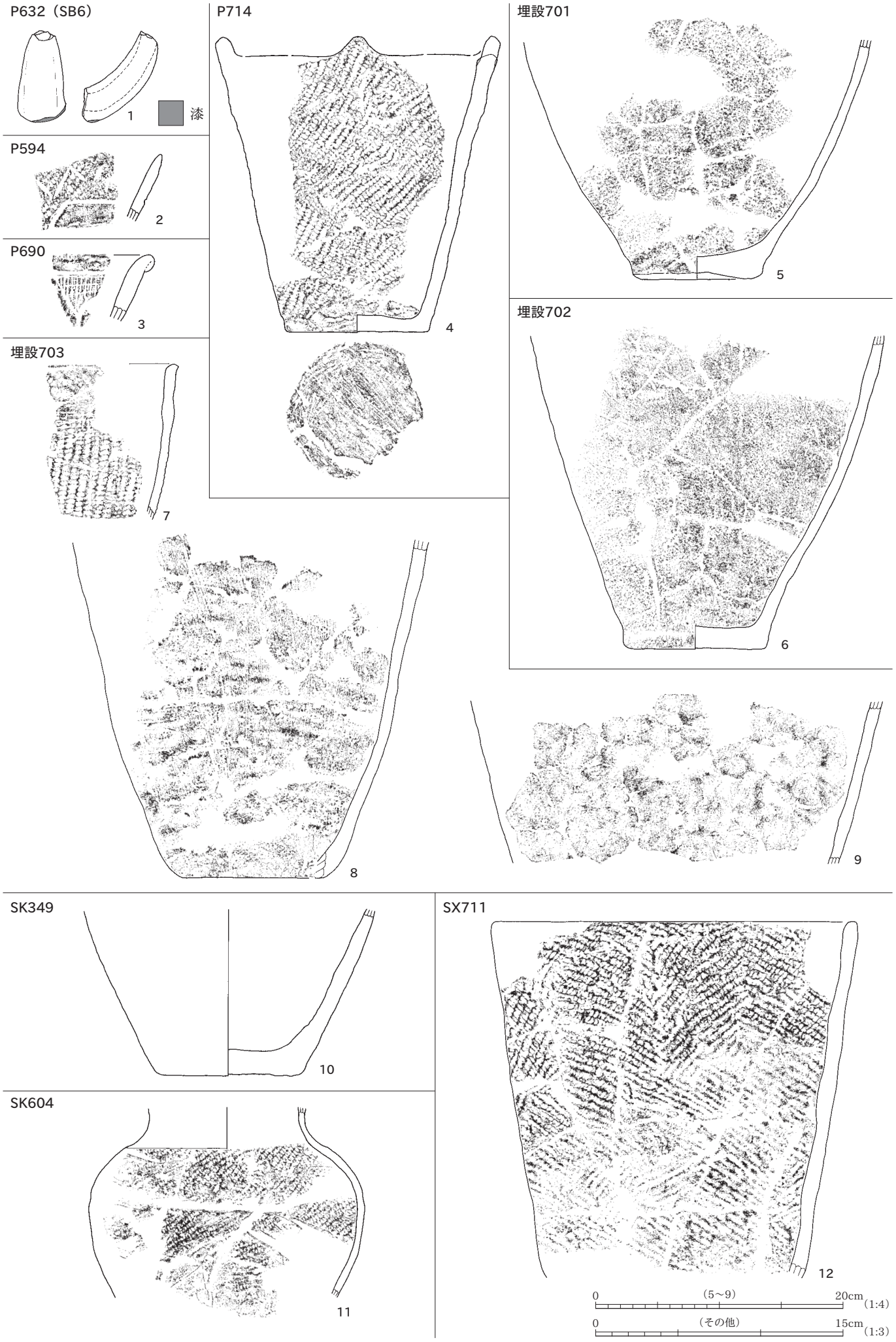

196
197
198
199
0 (196～199) 15cm (1:3)
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
漆？
炭 化
0 (203) 30cm (1:6)
0 (206・207・213～218) 10cm (1:2)
0 (その他) 20cm (1:4)

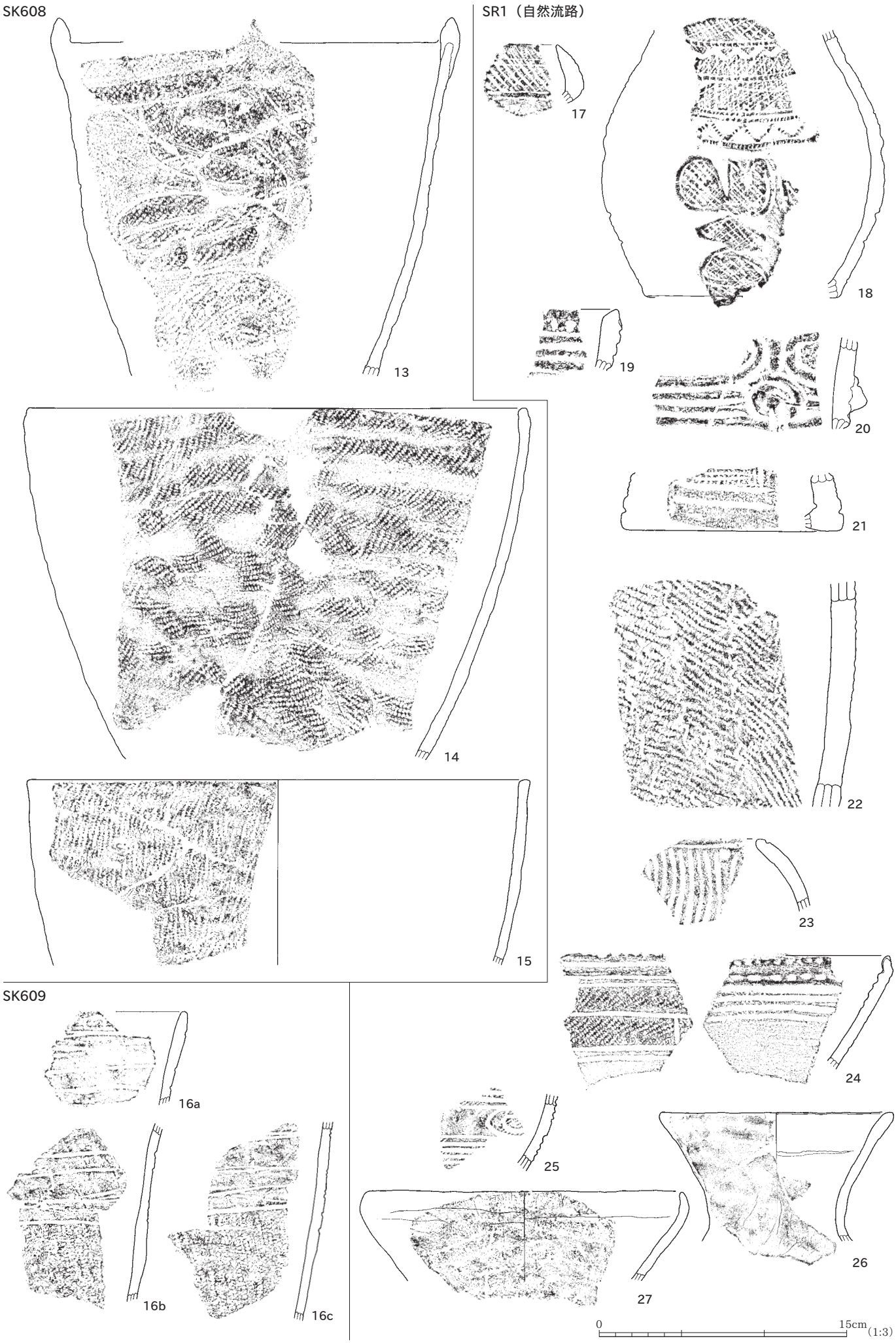

219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
0 (219・235～243) 15cm (1:3)
0 (221～234) 20cm (1:4)
0 (220) 30cm (1:6)

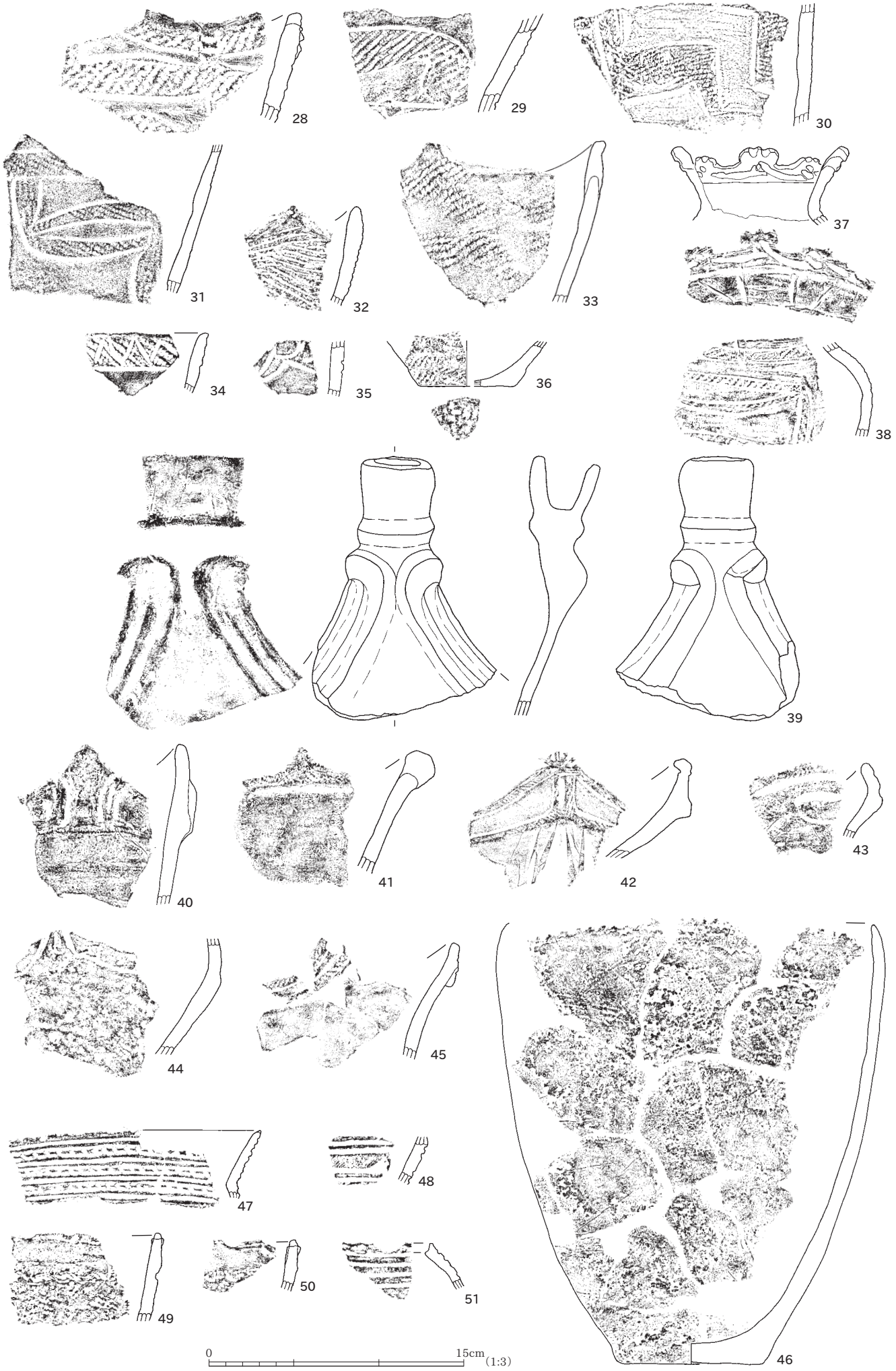


0　(244～251)　15cm (1:3)

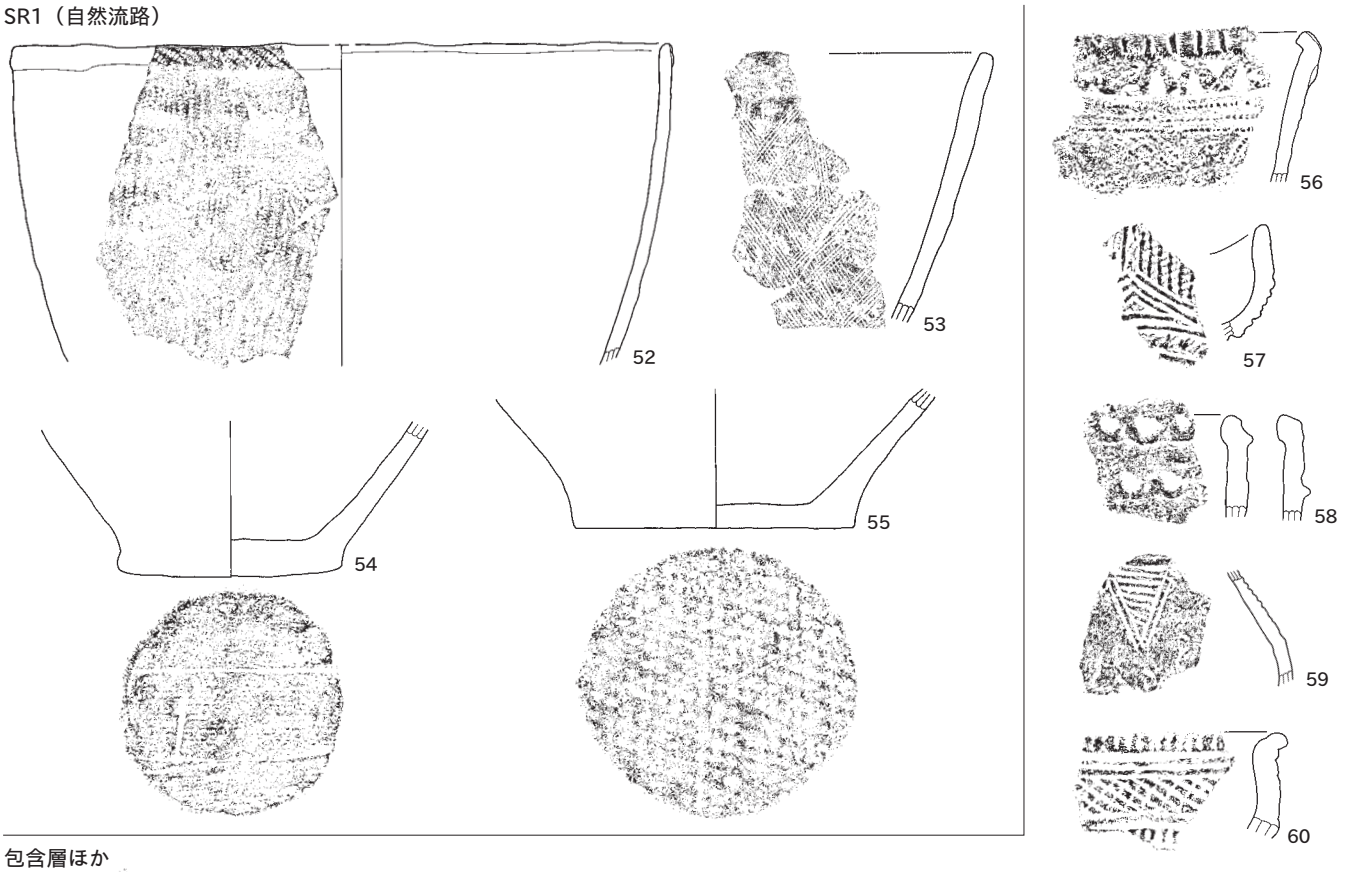
0　(252～265)　6cm (2:3)


P632（SB6）
1
漆
P594
2
P690
3
埋設703
7
P714
4
埋設701
5
埋設702
6
8
9
SK349
10
SK604
11
SX711
12
0
（5～9）
20cm
(1:4)
0
（その他）
15cm
(1:3)


SK608
SR1（自然流路）
SK609
13
14
15
16a
16b
16c
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
0
15cm
(1:3)

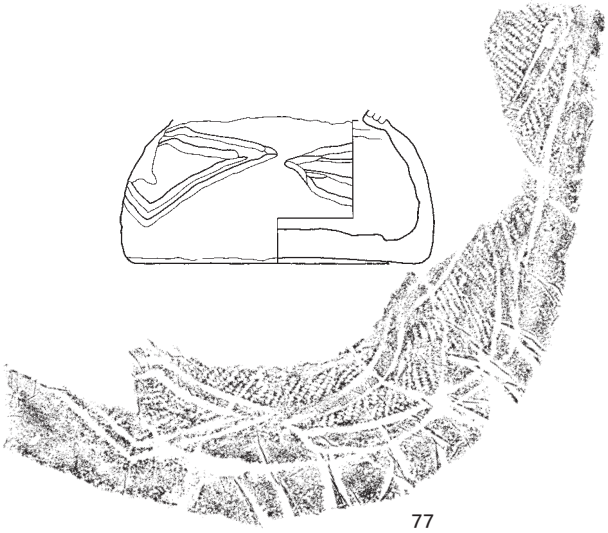

28
29
30
31
32
33
37
34
35
36
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
0
15cm
(1:3)

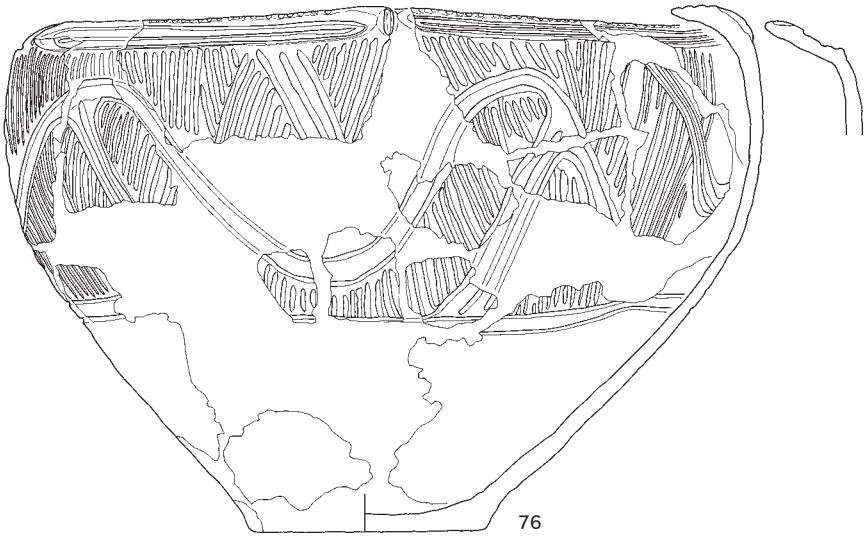
SR1（自然流路）

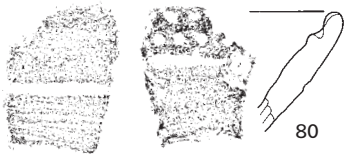


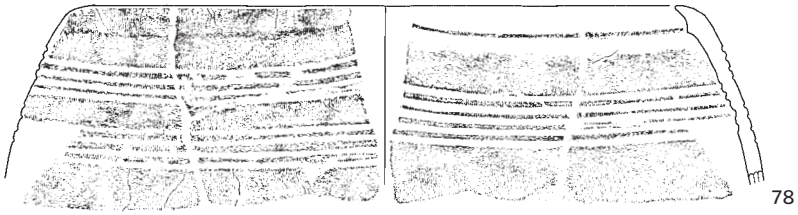
包含層ほか

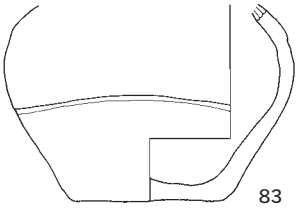
0　（52・70）　20cm（1:4）　0　（その他）　15cm（1:3）

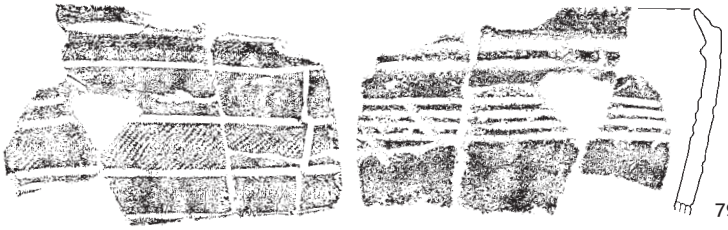












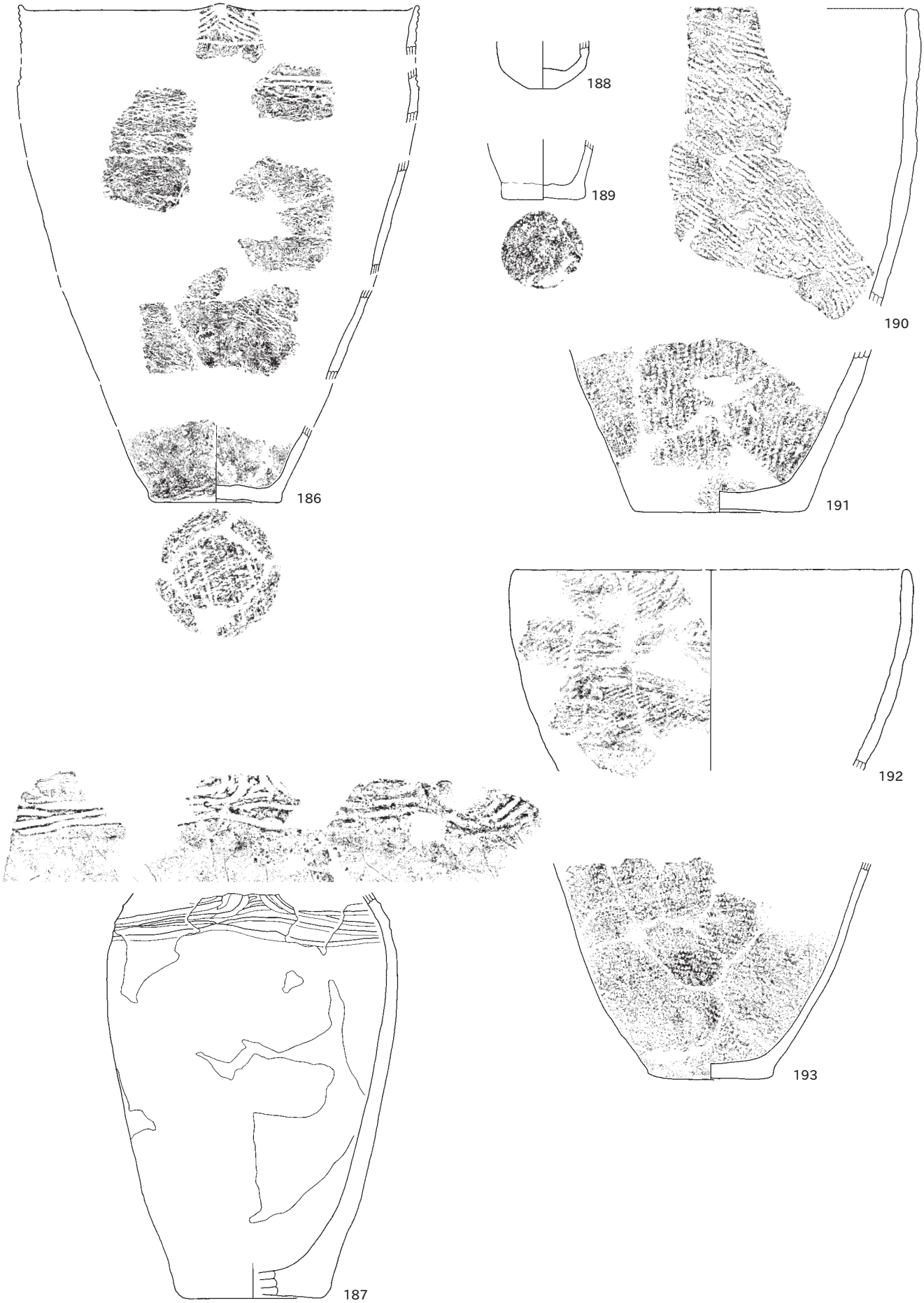
0 (74) 20cm (1:4)

0 (その他) 15cm (1:3)

84
85
86
87
88
89
90a
90b
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
0 (84・91) 20cm (1:4)
0 (その他) 15cm (1:3)

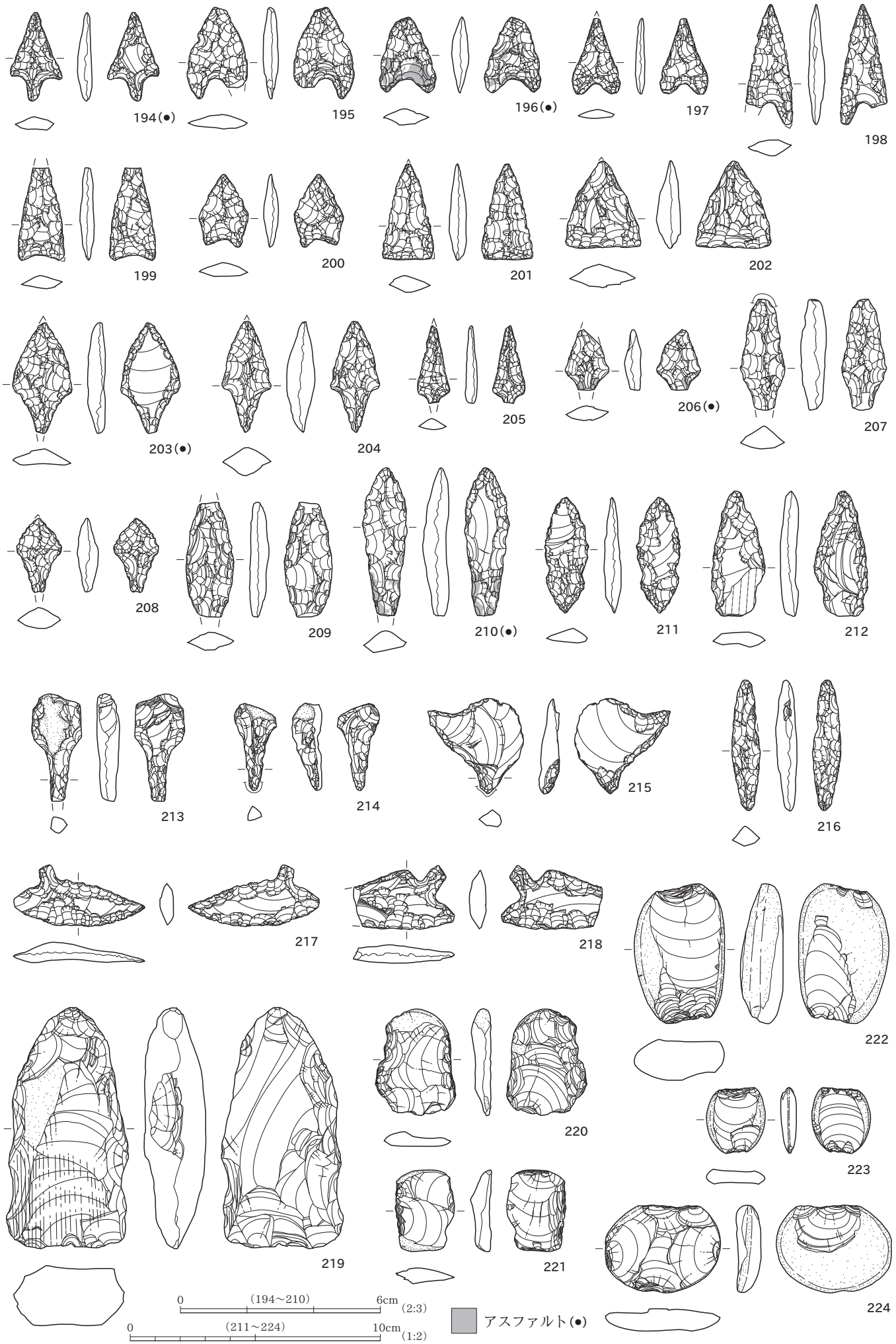
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
漆
0
（全て）
15cm
(1:3)

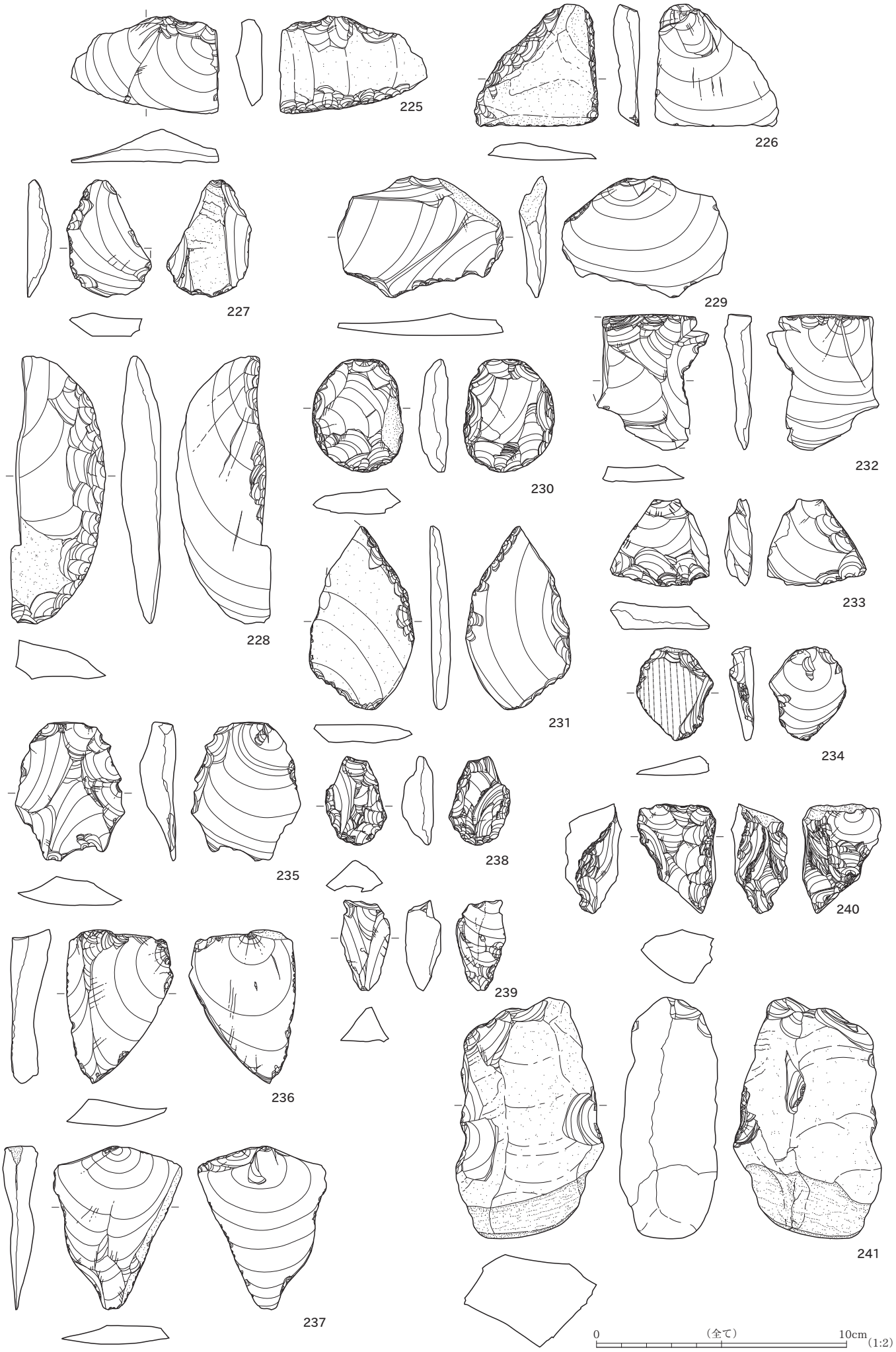
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
0
（全て）
15cm
(1:3)

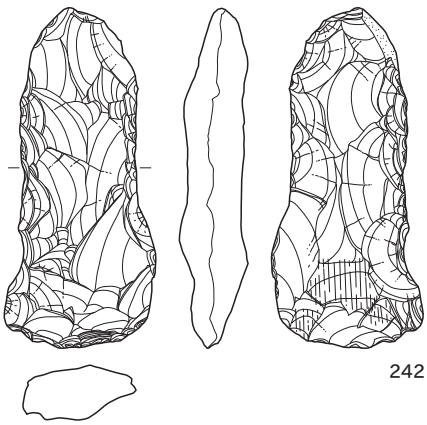


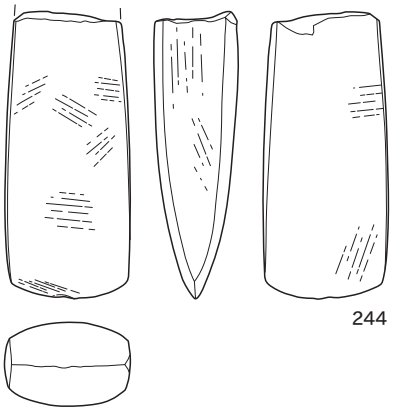
0　（186・191～193）　20cm（1:4）

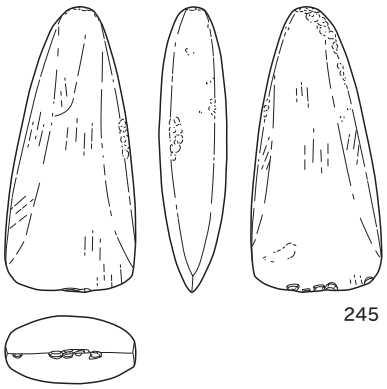
0　（その他）　15cm（1:3）

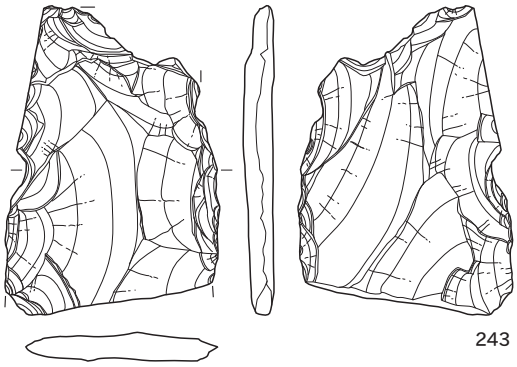

194(●)
195
196(●)
197
198
199
200
201
202
203(●)
204
205
206(●)
207
208
209
210(●)
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
0 (194～210) 6cm (2:3)
0 (211～224) 10cm (1:2)
アスファルト(●)

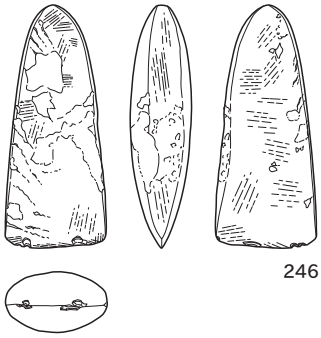

225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
0
（全て）
10cm
（1:2）

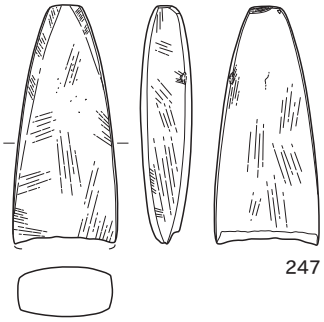


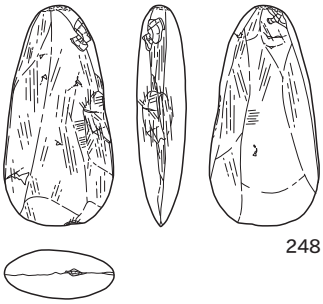


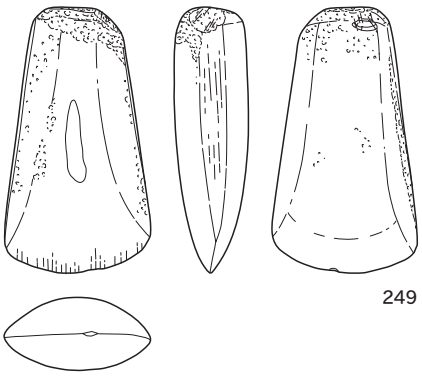


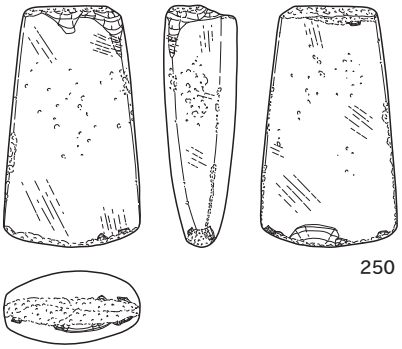


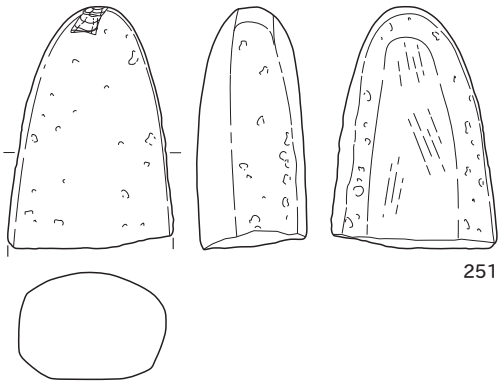


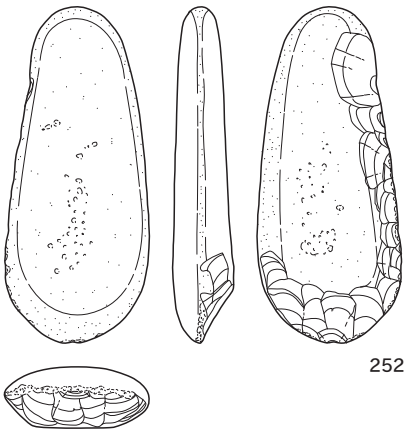


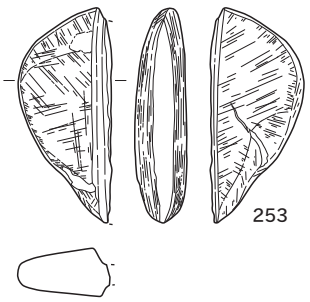


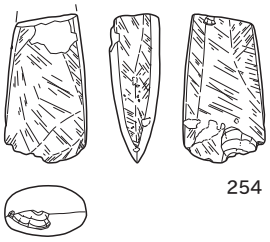


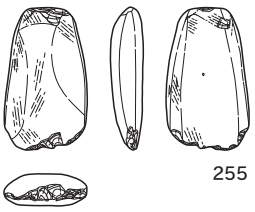


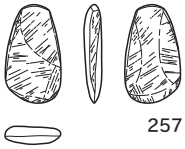




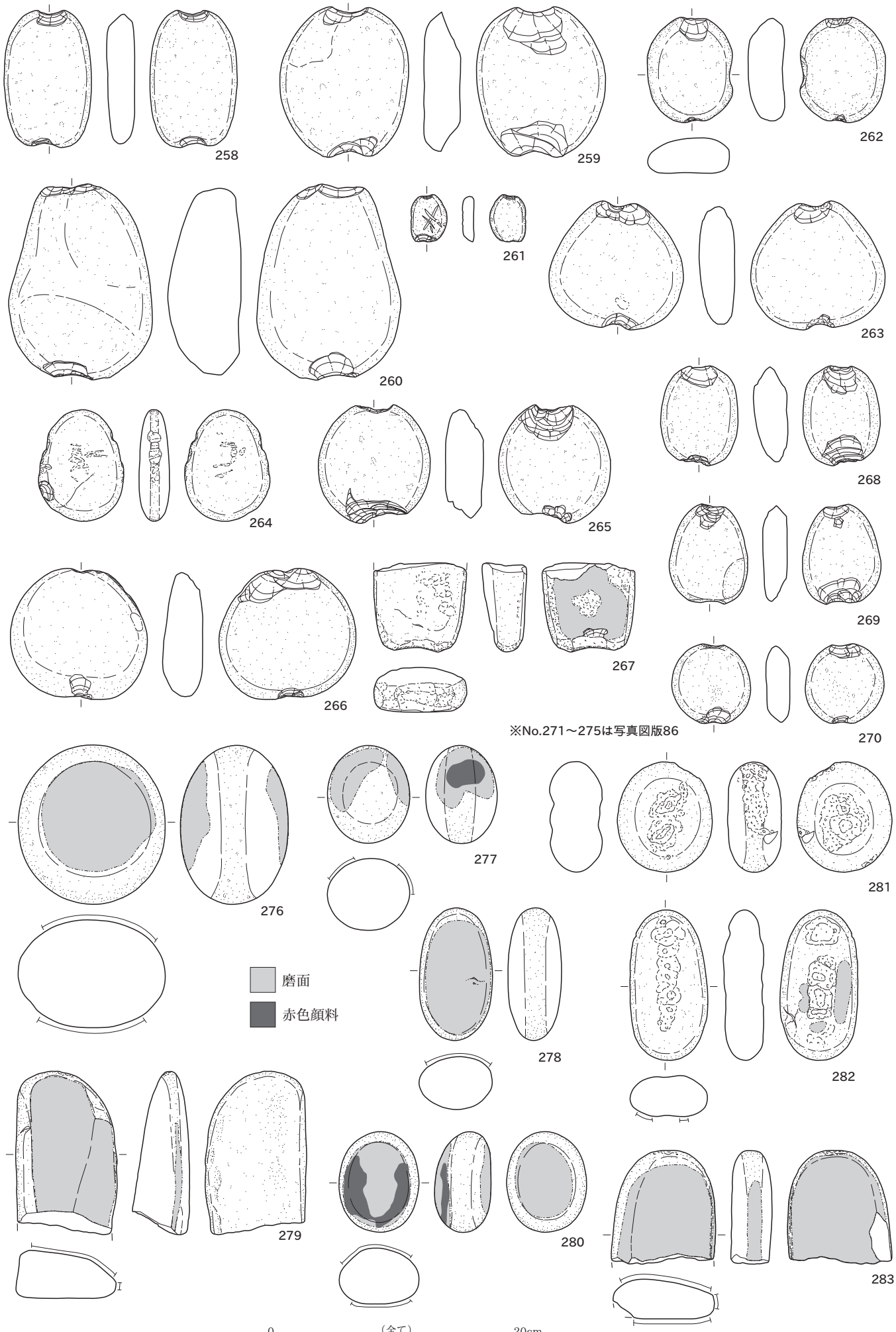


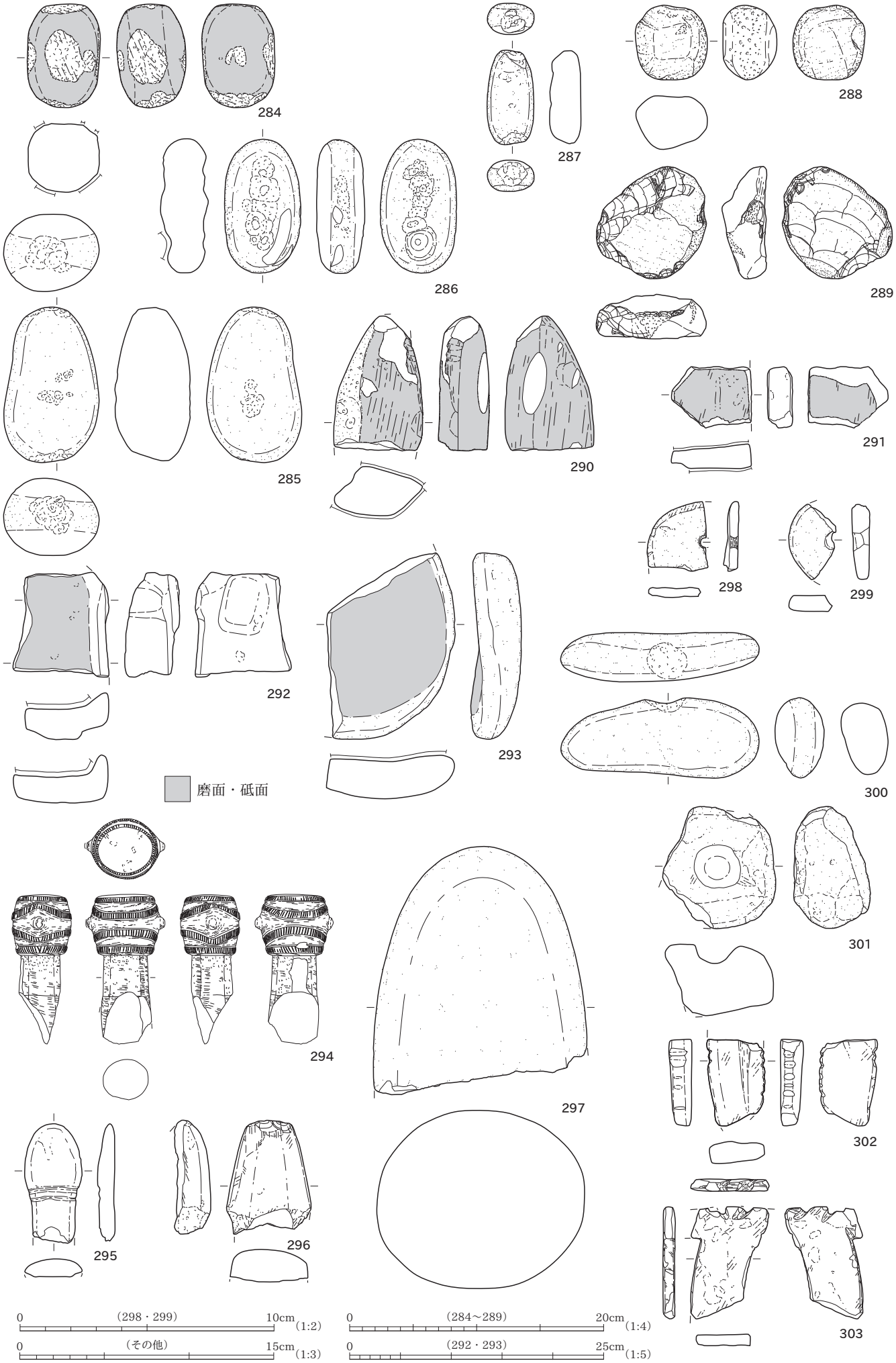


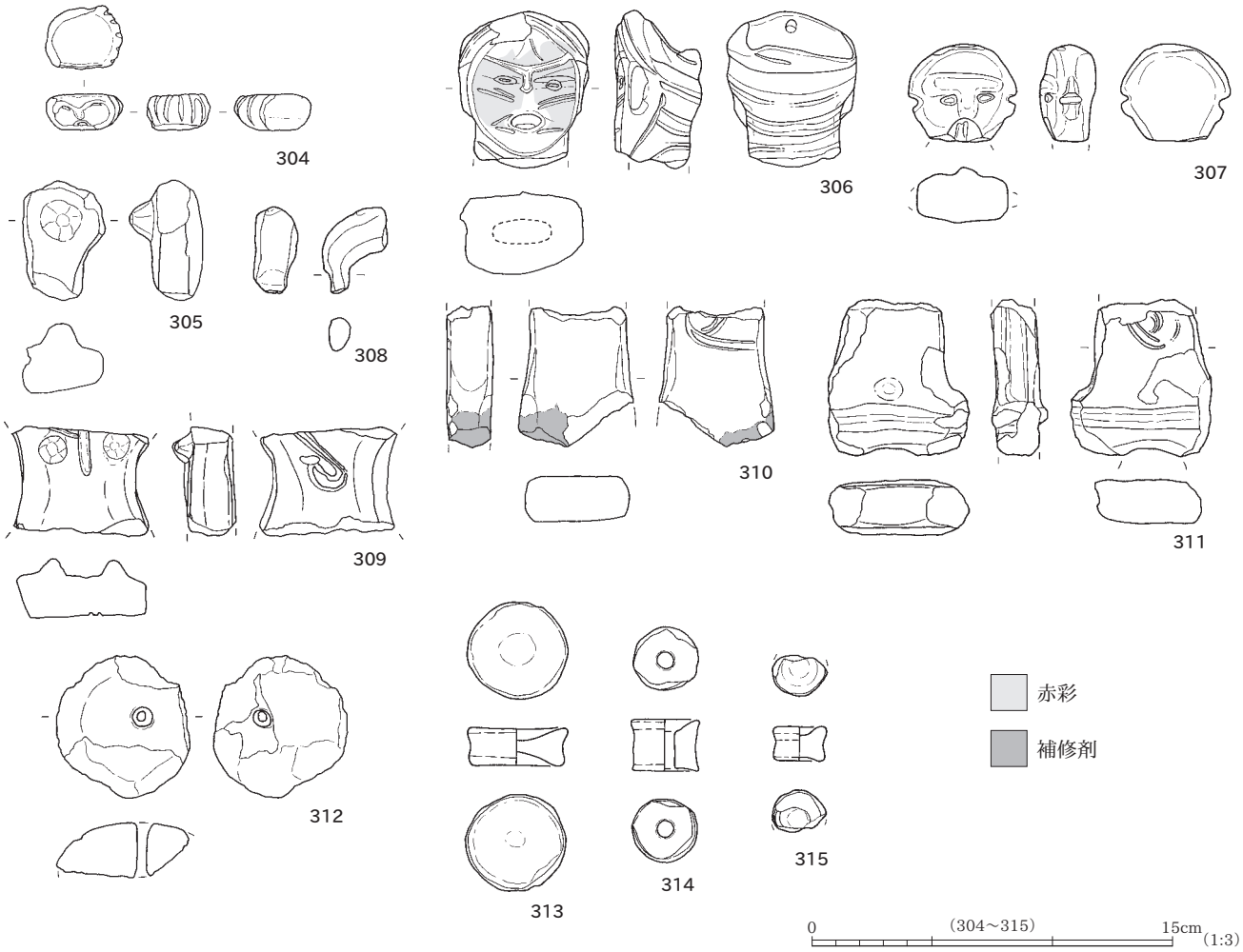


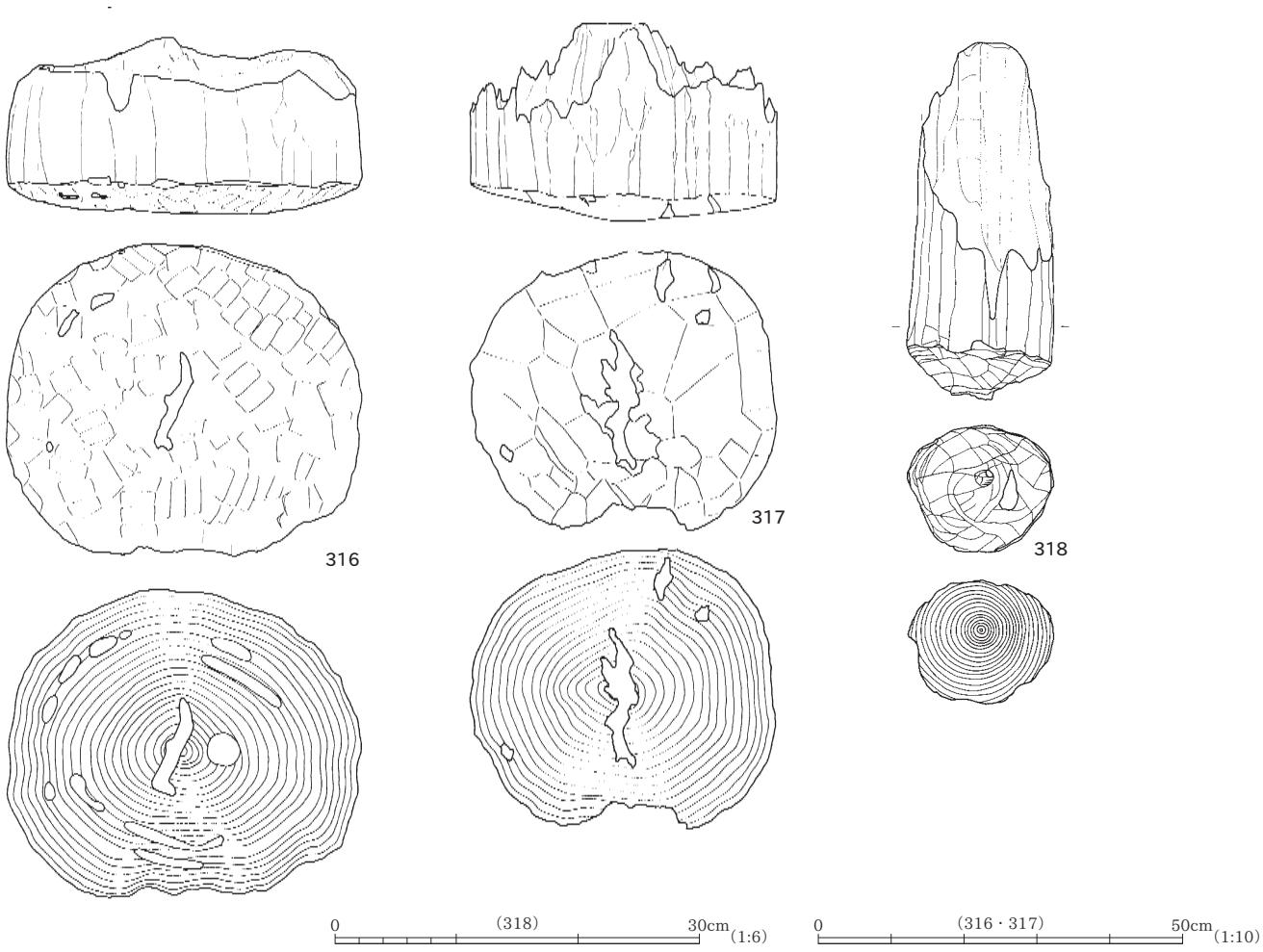


0　（全て）　15cm（1:3）


258
259
262
261
260
263
264
265
268
269
266
267
270
※No.271～275は写真図版86
276
277
281
磨面
赤色顔料
278
282
279
280
283
0
（全て）
20cm
(1:4)


284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
磨面・砥面
0 (298・299) 10cm (1:2)
0 (その他) 15cm (1:3)
0 (284～289) 20cm (1:4)
0 (292・293) 25cm (1:5)


304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
赤彩
補修剤
0
(304～315)
15cm
(1:3)


316
317
318
0
(318)
30cm
(1:6)
0
(316・317)
50cm
(1:10)

剣野沢遺跡遠景（右手の丘陵上が剣野 B 遺跡）（南から）

剣野沢遺跡遠景（右手の沢が香積寺沢）（北東から）

上層東側　完掘（西上から）

上層　遺構集中区　完掘（西上から）

上層　遺構集中区　完掘（南から）

上層　遺構集中区　完掘（南から）

上層　遺構集中区　完掘（南東から）

25 ラインベルト　SD1 付近　断面（北から）

25 ラインベルト　SD1　断面（北西から）

下層　東側　完掘（西から）

下層　東側　完掘（南から）

下層　遺構集中区　完掘（北から）

下層　遺構集中区　完掘（南から）

下層　SB7　検出状況（南西から）

下層　P706（SB7）　断面（南から）

下層　P707（SB7）　断面（南から）

下層　P710（SB7）　検出状況（東から）

下層　埋設 701　断面（南から）

下層　埋設 701　断面（南から）

下層　埋設 702　断面（東から）

下層　埋設 702　断面（東から）

下層　埋設 703　断面（東から）

下層　埋設 703　断面（東から）

下層　SK608　検出状況（北から）

下層　SK609　検出状況（北西から）

下層　22W7 区　出土状況（東から）

下層　22W14 区　出土状況（東から）

下層　22Z1・2 区　出土状況（東から）

下層　22X14 区　石錘出土状況（北から）

下層　SR1　北側完掘（北から）

下層　SR1　北側完掘（西から）

下層　SR1　南側完掘（西から）

下層　SR1　南側完掘（北東から）

25 ラインベルト　SR1　断面（北西から）

25 ラインベルト 24Z21 区　断面（北から）

25 ラインベルト 24A21 区　断面（北西から）

23 ラインベルト　SR1　断面（北から）

23 ラインベルト　22Y24 区　断面（北から）

23 ラインベルト　23Z25 区　断面（北東から）

23Z20 区　基本層序（西から）

26Z5 区　基本層序（西から）

21X25 区　基本層序（西から）

24X10・15 区　基本層序（西から）

26X5 区　基本層序（西から）

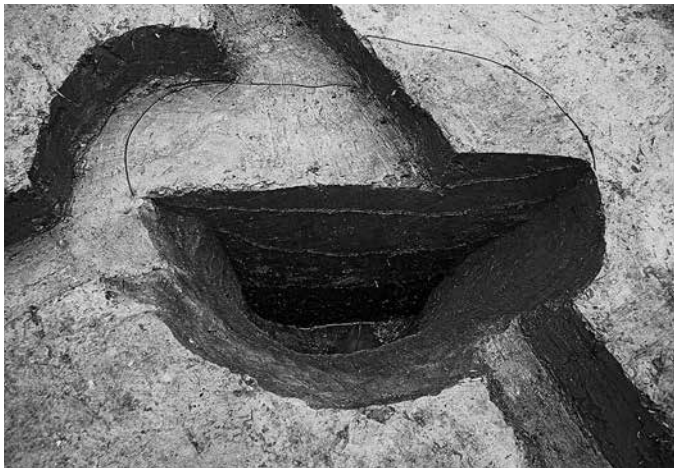
21Y19 区　分析試料採取地点（南から）

23X12 区　分析試料採取地点（東から）

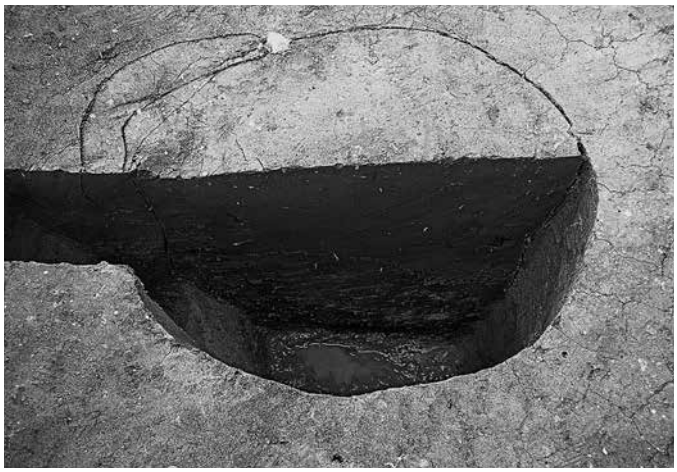
26Z6 区　分析試料採取地点（北から）

剣野沢遺跡　調査地点　　1948 年 8 月 17 日　米軍撮影（1：5,000）

SE2　断面（西から）



SE53　断面（西から）



SE71　断面（南から）

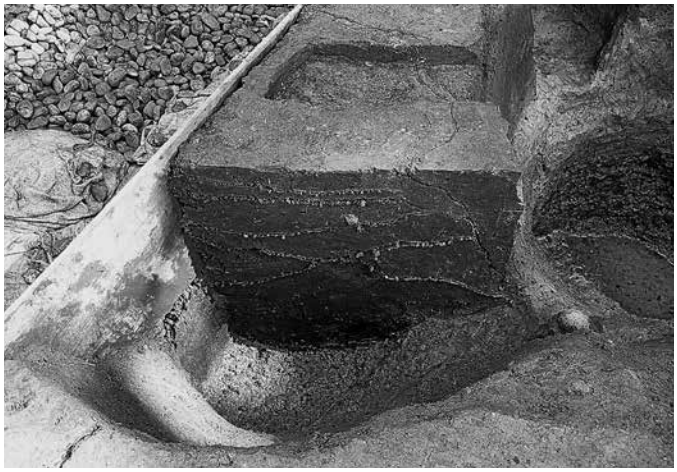
SE75　断面（西から）

SE81　断面（西から）

SE98　断面（西から）

SE139　断面（西から）

SE156A　断面（南から）



SE156B　断面（西から）

SE156A・B　断面（南から）

SE233　断面（南から）

SE233　断面（南西から）

SE244　断面（西から）

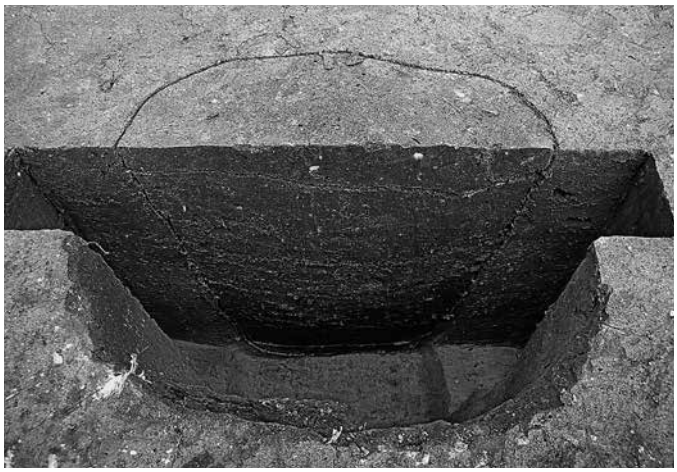
SE244　出土状況①（西から）

SE244　出土状況②（西から）

SE244　出土状況③（西から）

SE249　断面（北から）

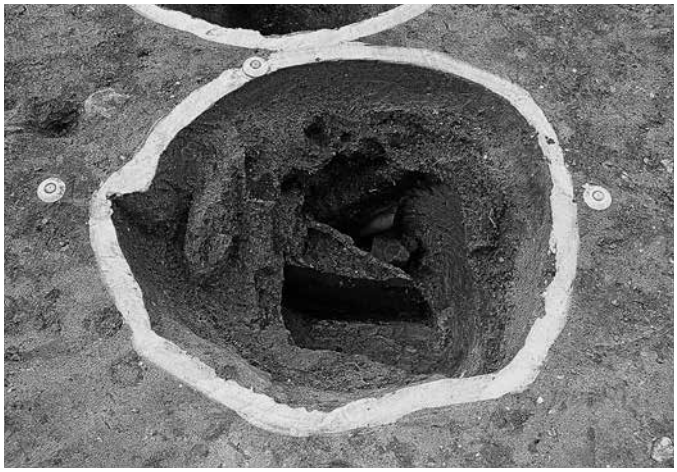
SE360　断面（南から）



SK13　断面（西から）

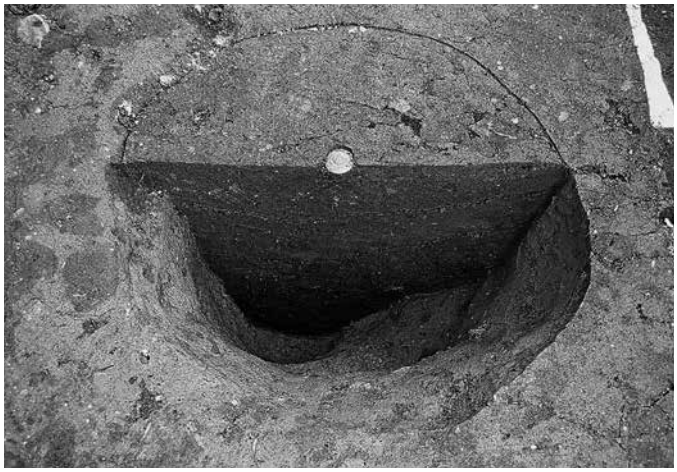
SK128　略完掘（西から）

SK51　断面（東から）

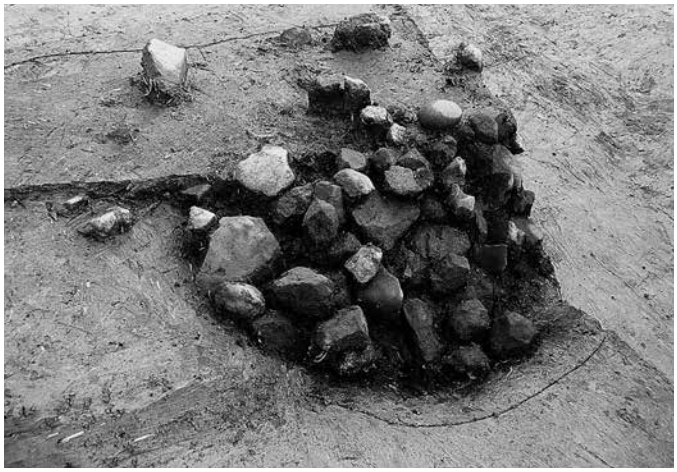


SK51　炭化物検出状況（東から）

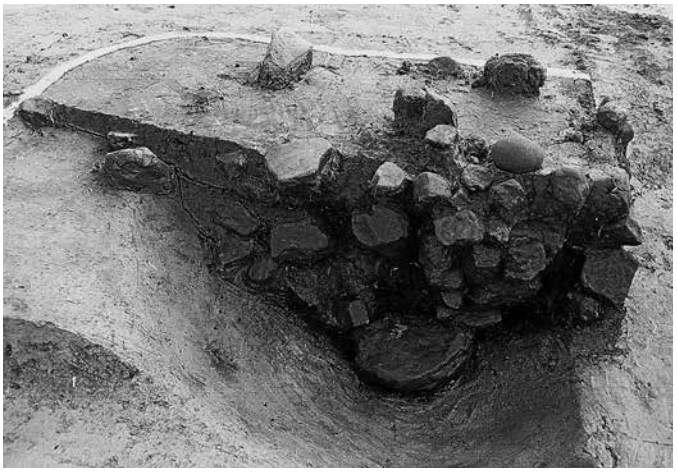
SK135　断面（西から）



SK253　断面（北から）



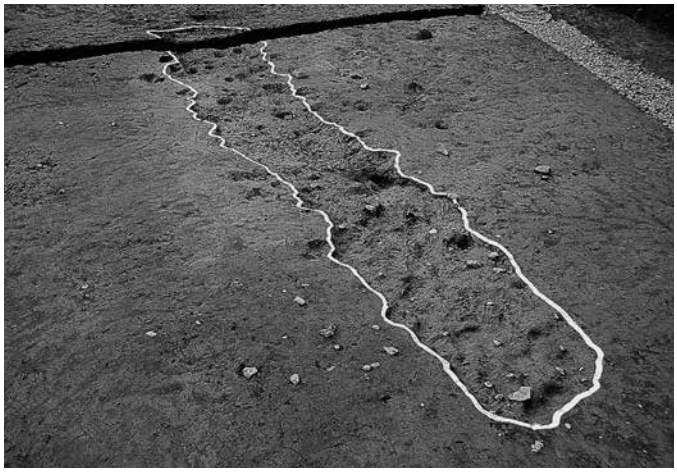
SK692　礫検出状況（西から）



SK692　断面（西から）

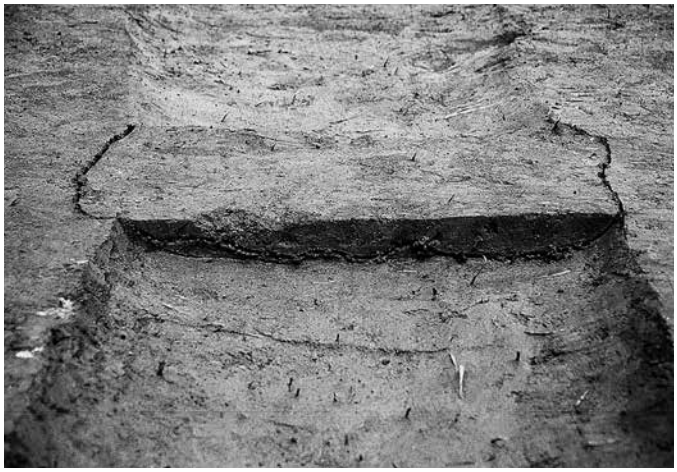
P512　断面（西から）

SD140　完掘（南から）



SD305　完掘（東から）

SD313　断面（南から）



SD314　断面（南から）

SD628　完掘（西から）

SD1　A・B 断面（南から）

SD1　C 断面（南東から）

SD1　D 断面（南から）

SD1　E 断面（南から）

SD1　F 断面（南東から）

SD1　完掘（北から）

SD1　完掘（南から）

SD1　杭検出状況（南から）

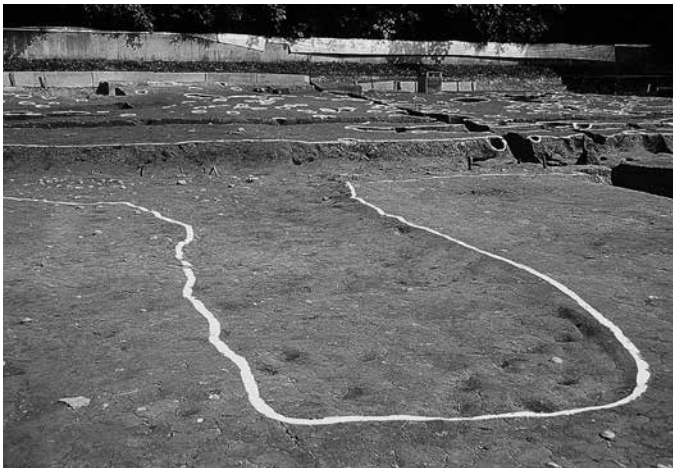
SD1 内の杭　b 断面（西から）

SD1 内の杭　d・f 断面（西から）

SD1 内の杭　j・i 断面（南東から）

SD1 内の杭　k 断面（北西から）

SX147　完掘（西から）



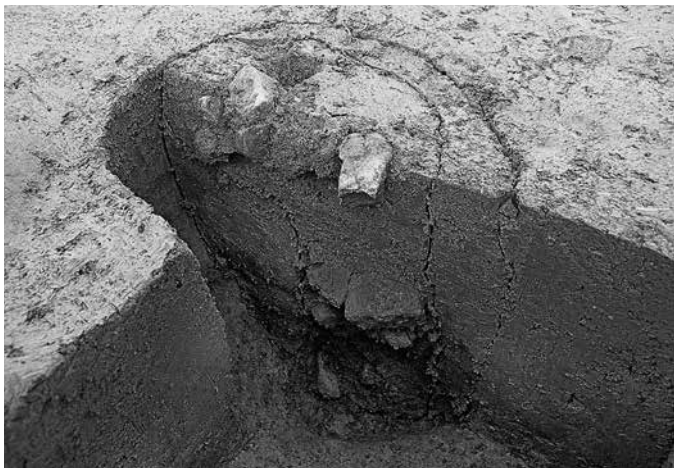
SX250　完掘（西から）

SX252　完掘（西から）

SX265　完掘（東から）

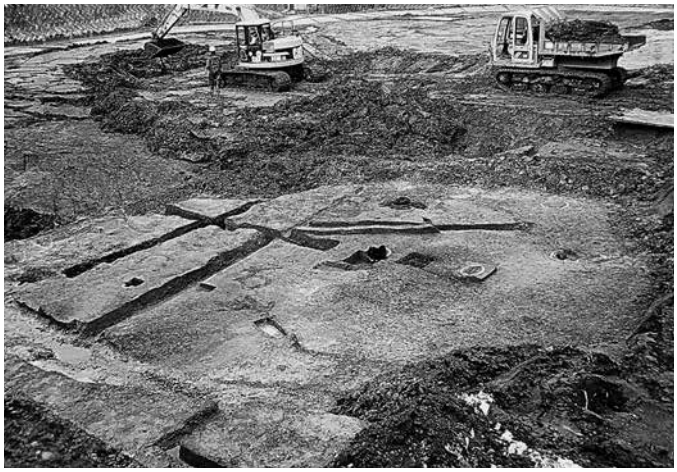
SB6　完掘（南西から）

SB6（P585）　断面（西から）



SB6（P588）　断面（東から）

SB6（P634）　断面（北から）



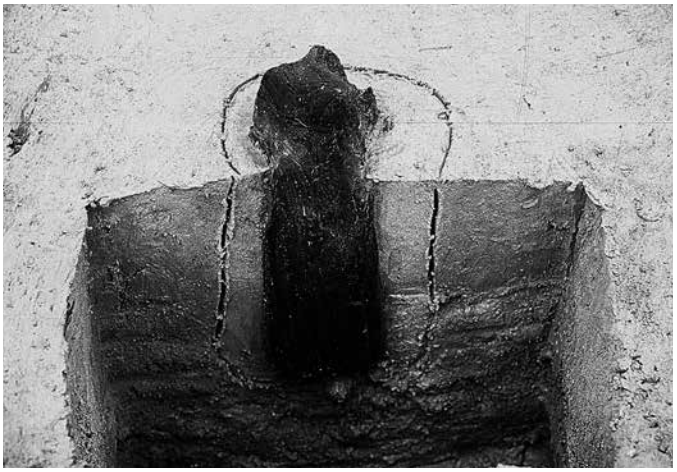
SB7　検出位置（南から）

SB7　検出状況（南から）

SB7（P706）　底面礫検出状況（南から）

SB7（P708）　断面（南から）

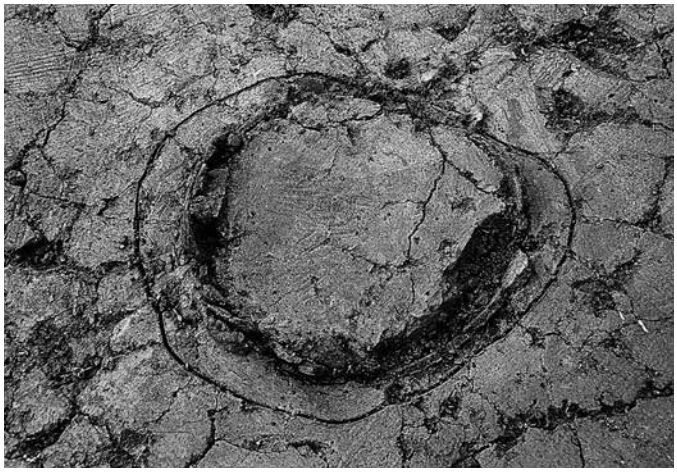
SB7（P709） 断面（南から）



P704　断面（北から）

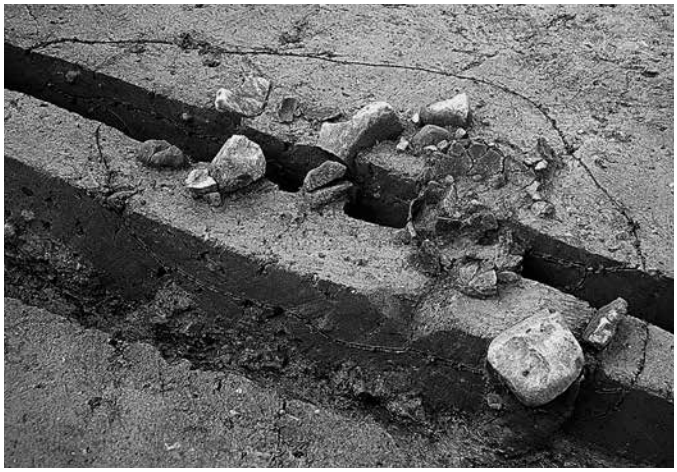
P705　断面（北から）

埋設 701　検出状況（北から）



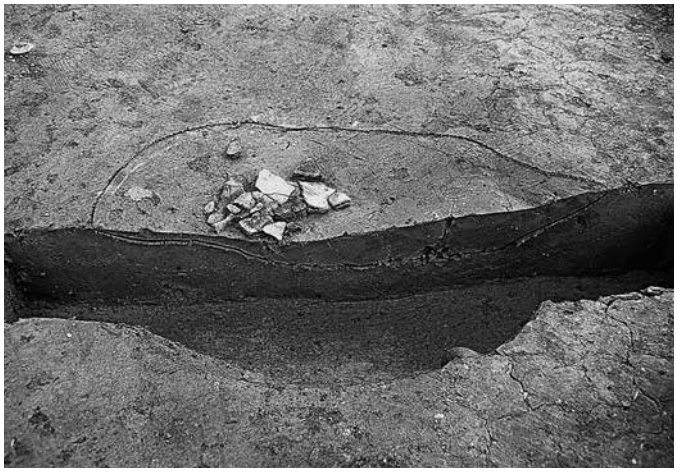
埋設 702　検出状況（南から）

埋設 702　断面（南西から）

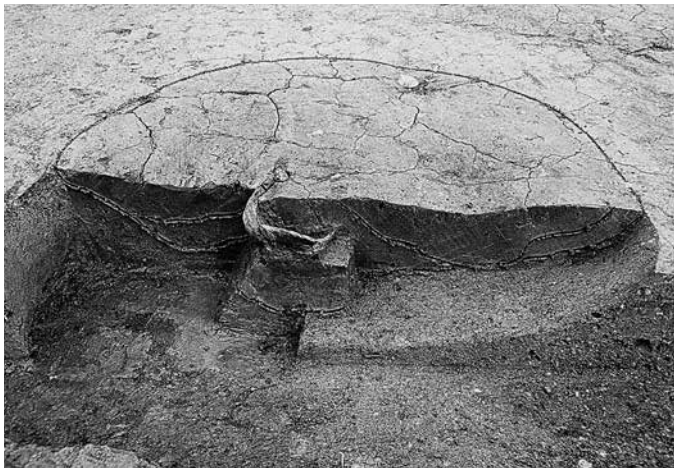


埋設 703　検出状況（北東から）

埋設 703　完掘（北東から）

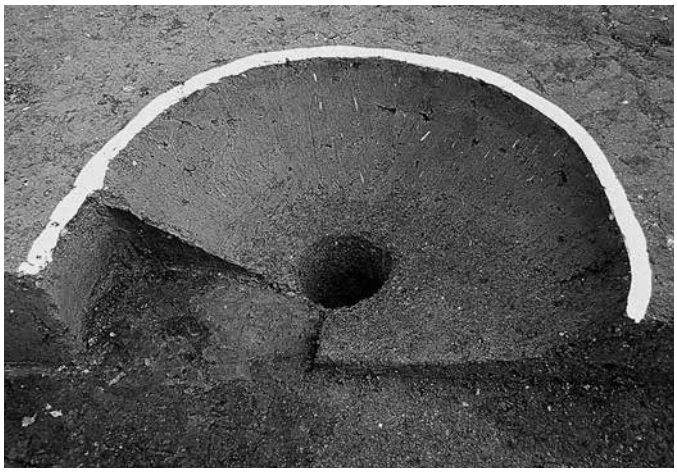


SK348　断面（北から）



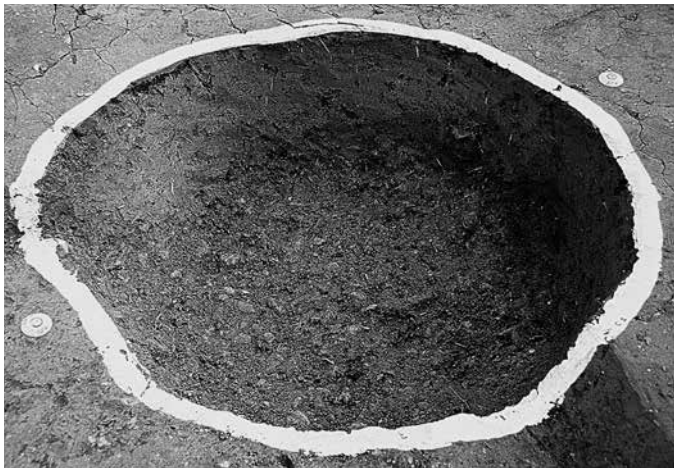
SK349　断面（西から）

SK349　土器出土状況（西から）

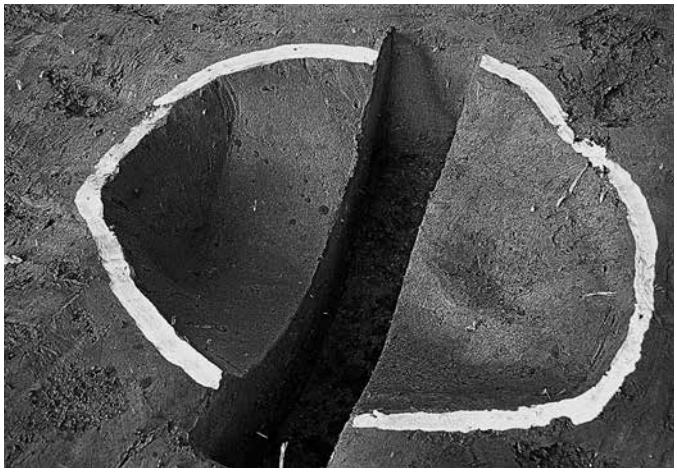


SK349　完掘（西から）

SK350　断面（西から）



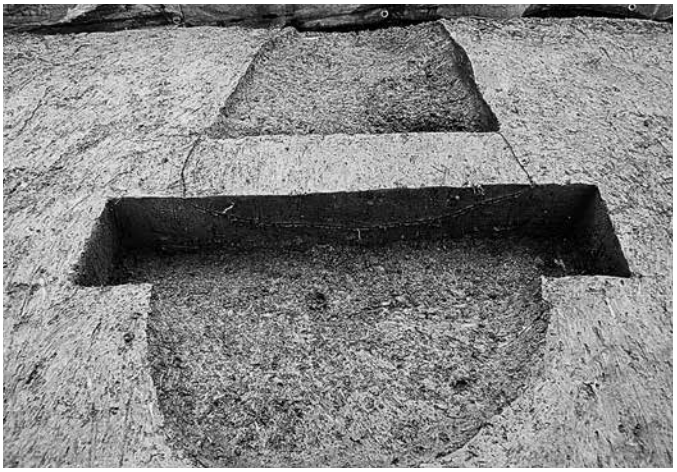
SK350　完掘（西から）



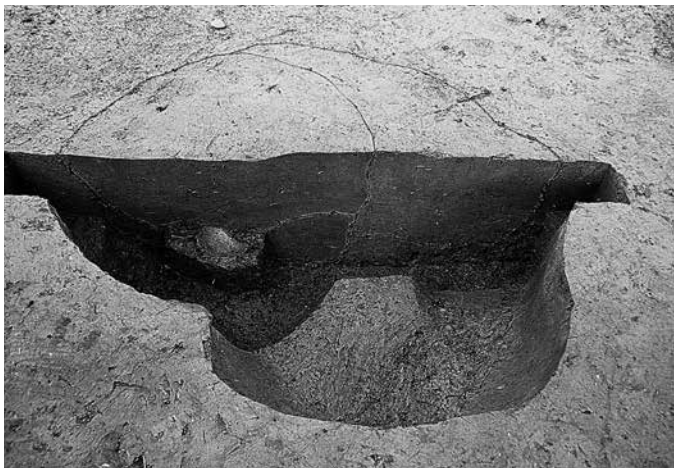
SK539　完掘（南から）

SK575　断面（北から）

SK578　断面（南から）

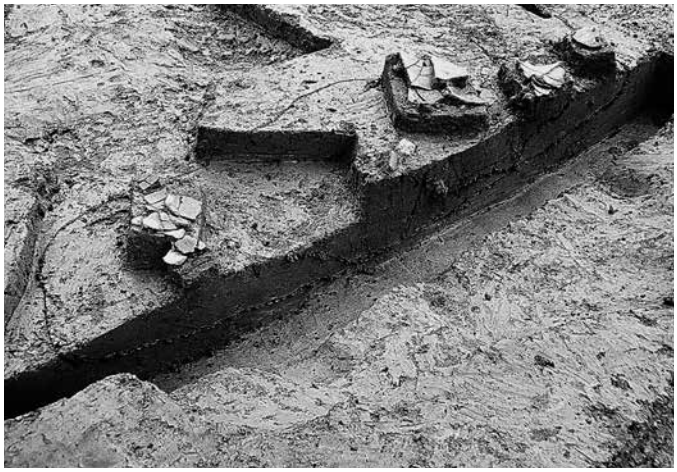


SK579　断面（北から）



SK604・605　断面（南西から）

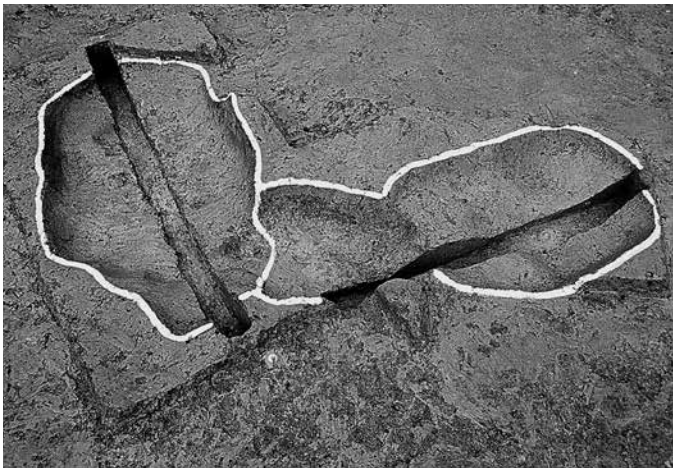
SK604・605　略完掘（南西から）



SK608　断面（北から）

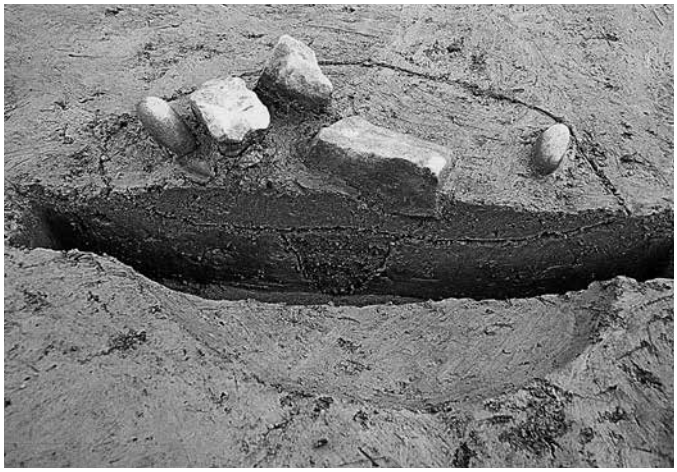
SK609A　断面（西から）

SK609B　断面（西から）

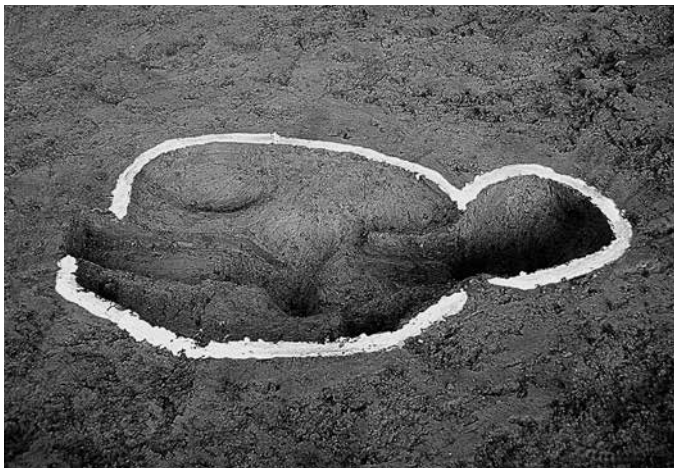


SK608・609　完掘（北西から）

SK622　断面（南から）



SK625　断面（西から）



SK641　完掘（西から）

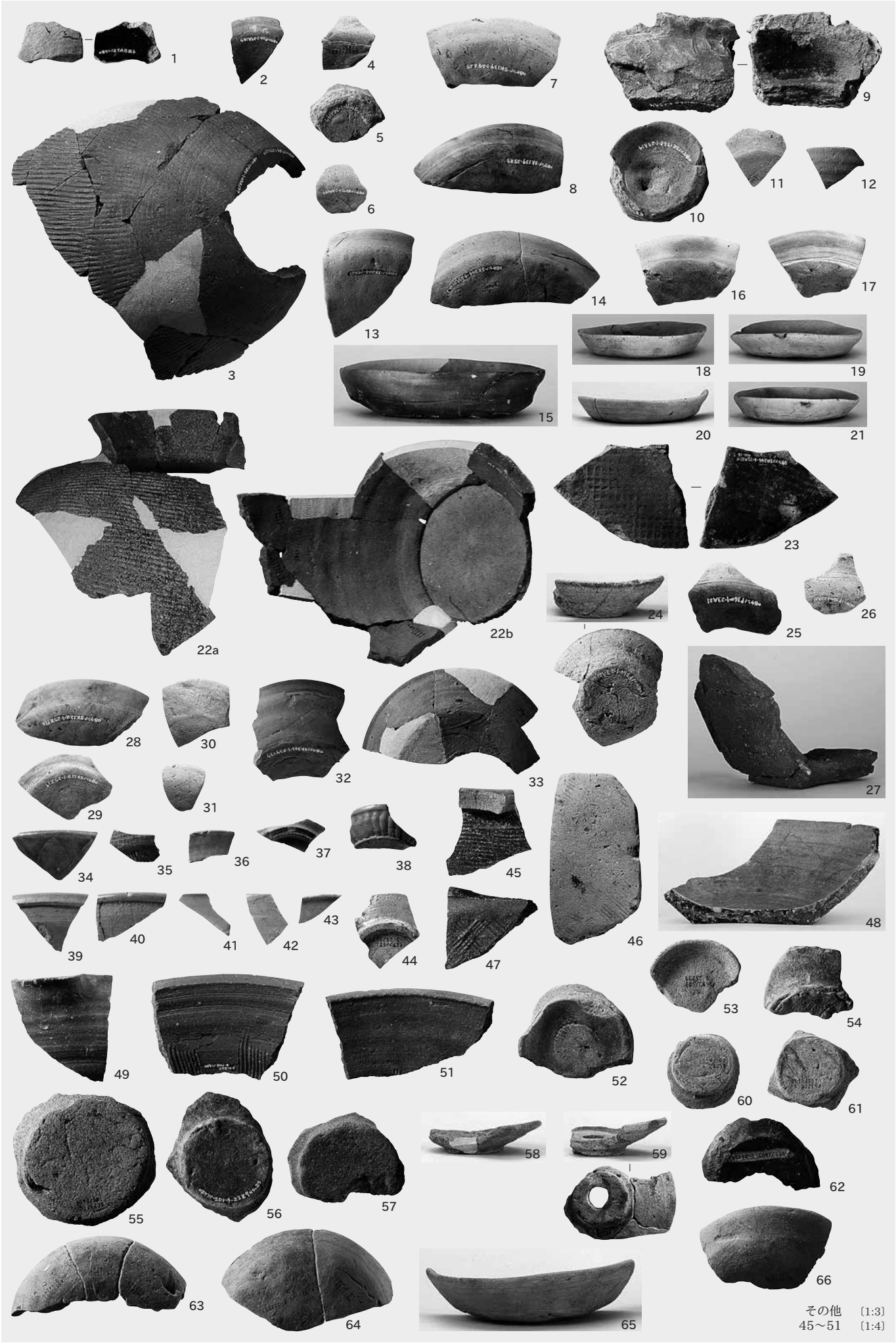
SD716　断面（南から）

SX711　土器出土状況（北から）

22Y11 区　石棒検出状況（北から）

23Y・23Z 区　出土状況（南東から）

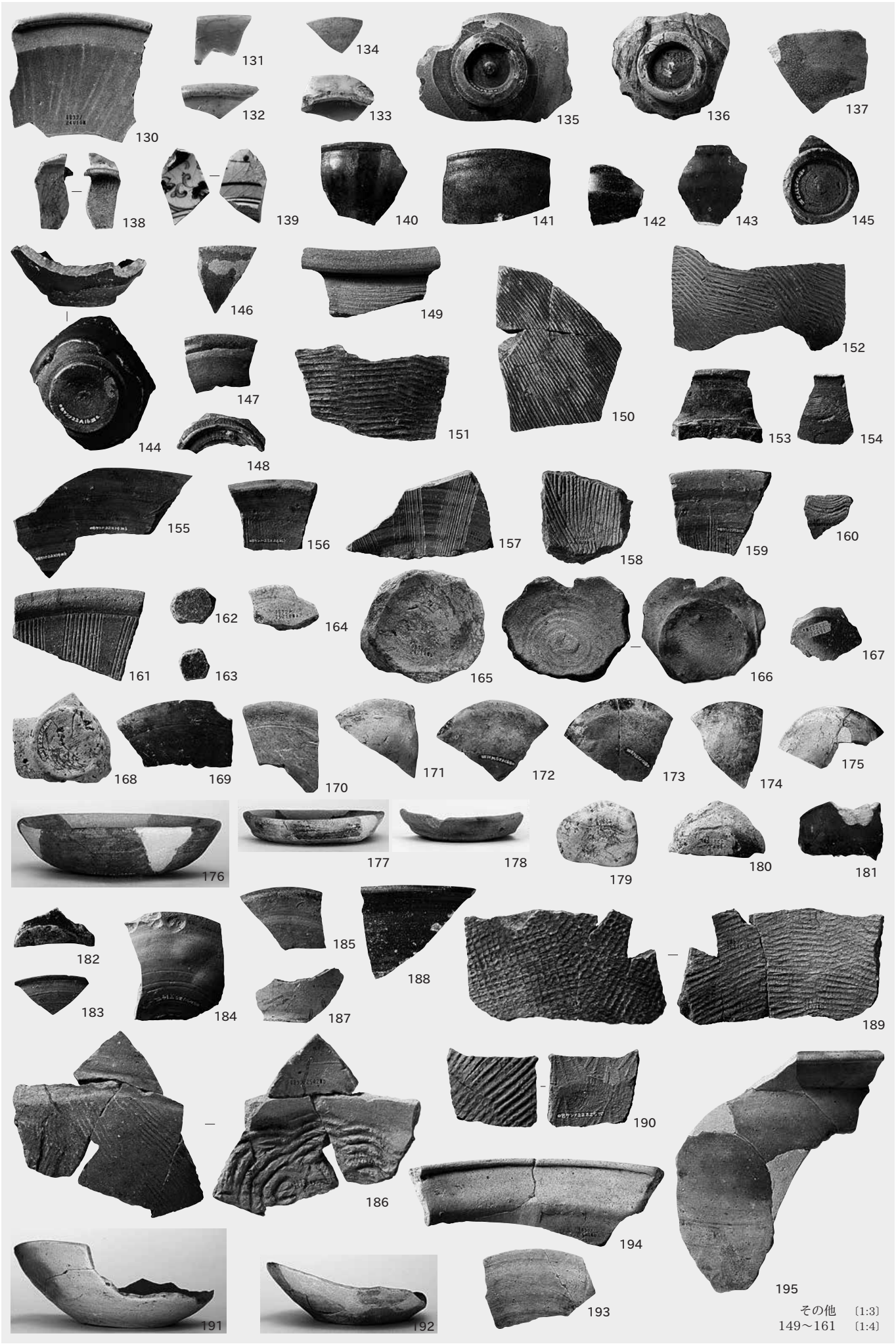
23Y・23Z 区　出土状況（北東から）



その他　〔1:3〕
45～51　〔1:4〕

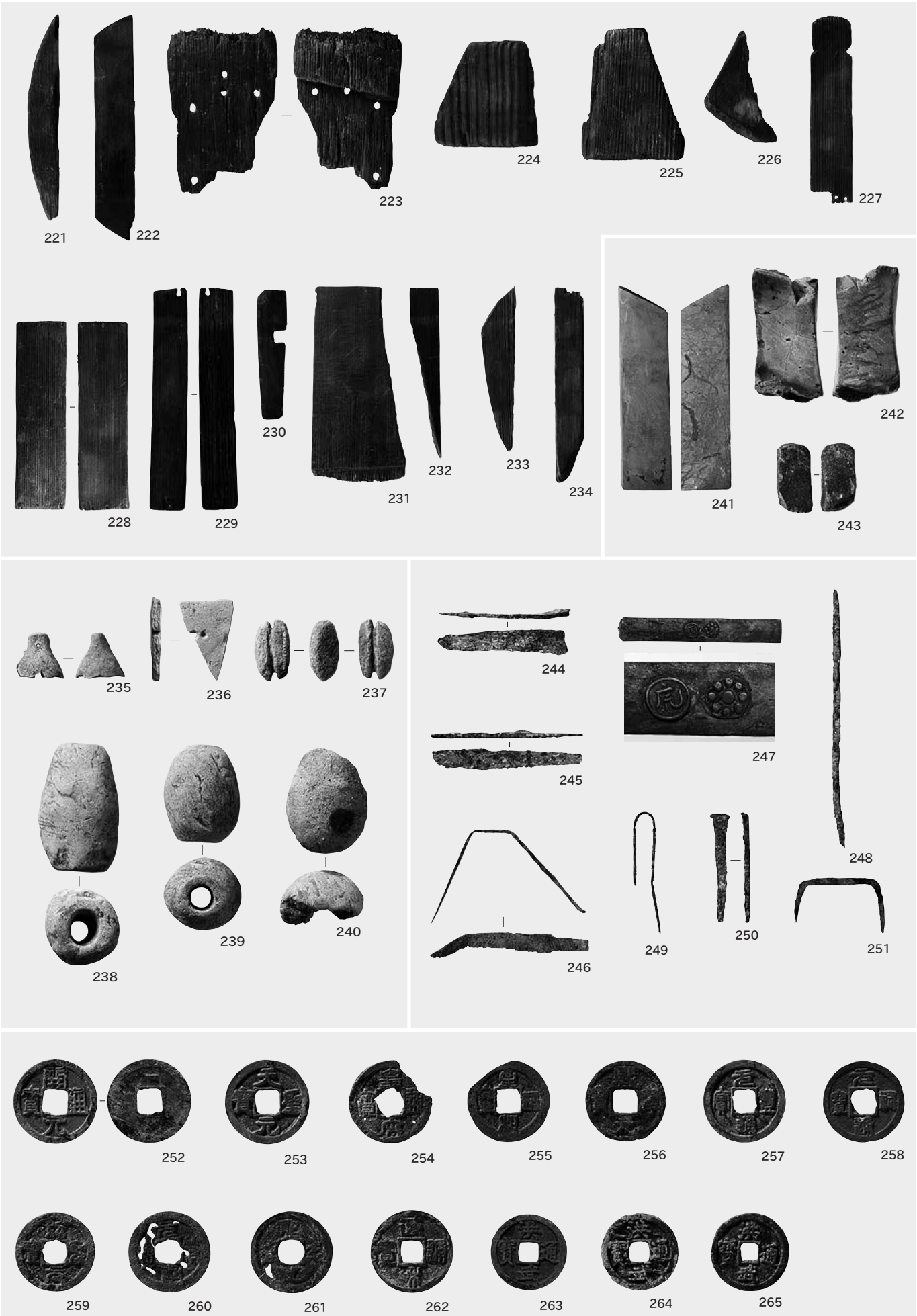
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
82
81
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
118
119
120
115
116
117
121
122
123
124
125
126
127
128
129

全て　〔1:3〕



その他　〔1:3〕
149～161　〔1:4〕

203・220　〔1:6〕
200～202・204・205・208～212　〔1:4〕
196～199・219　〔1:3〕
206・207・213～218　〔1:2〕



221～234　〔1:4〕
235～251　〔1:3〕
252～265　〔2:3〕

1

2

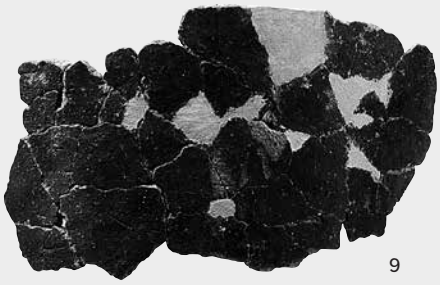
3

5

6

7

4


9

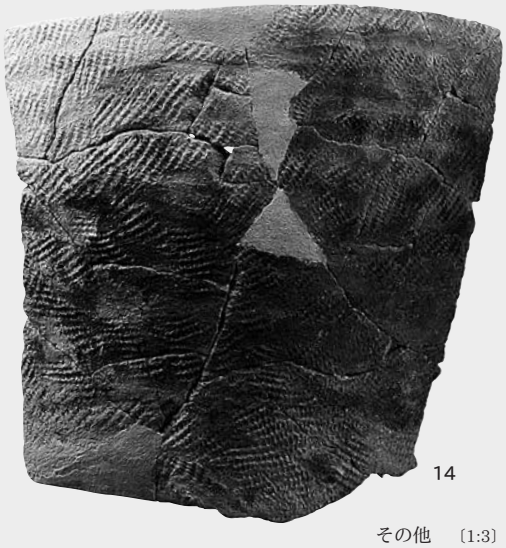
8

10

11

12

13


14

その他　〔1:3〕
5～9　〔1:4〕

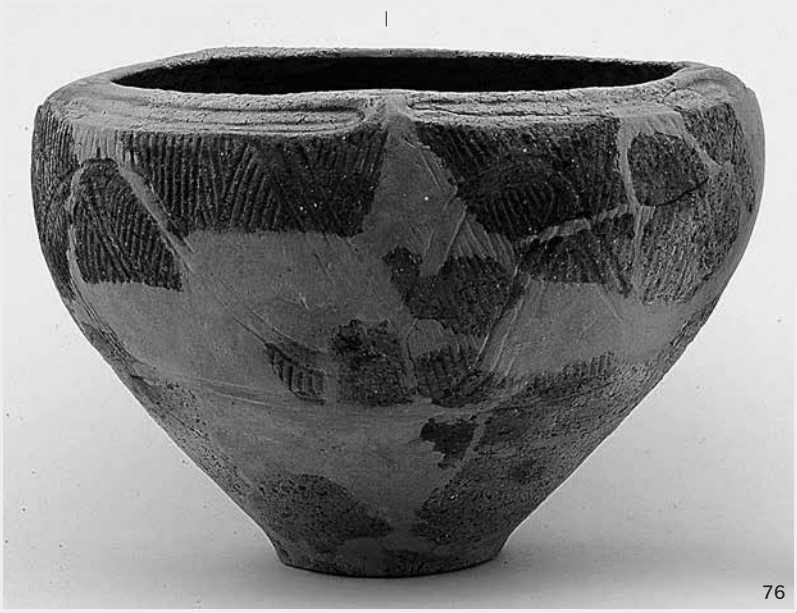
15
16a
16b
16c
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
全て　〔1:3〕

その他　〔1:3〕
52・70・74　〔1:4〕

84

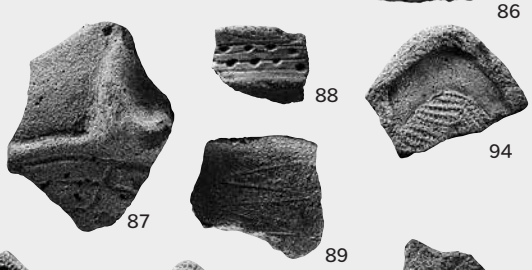
80 82 81

83


76

85

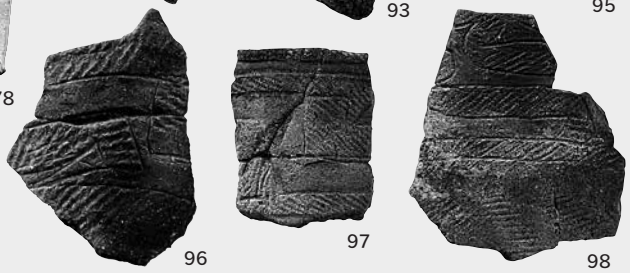
86


87 88 89 94

78

92 93 95

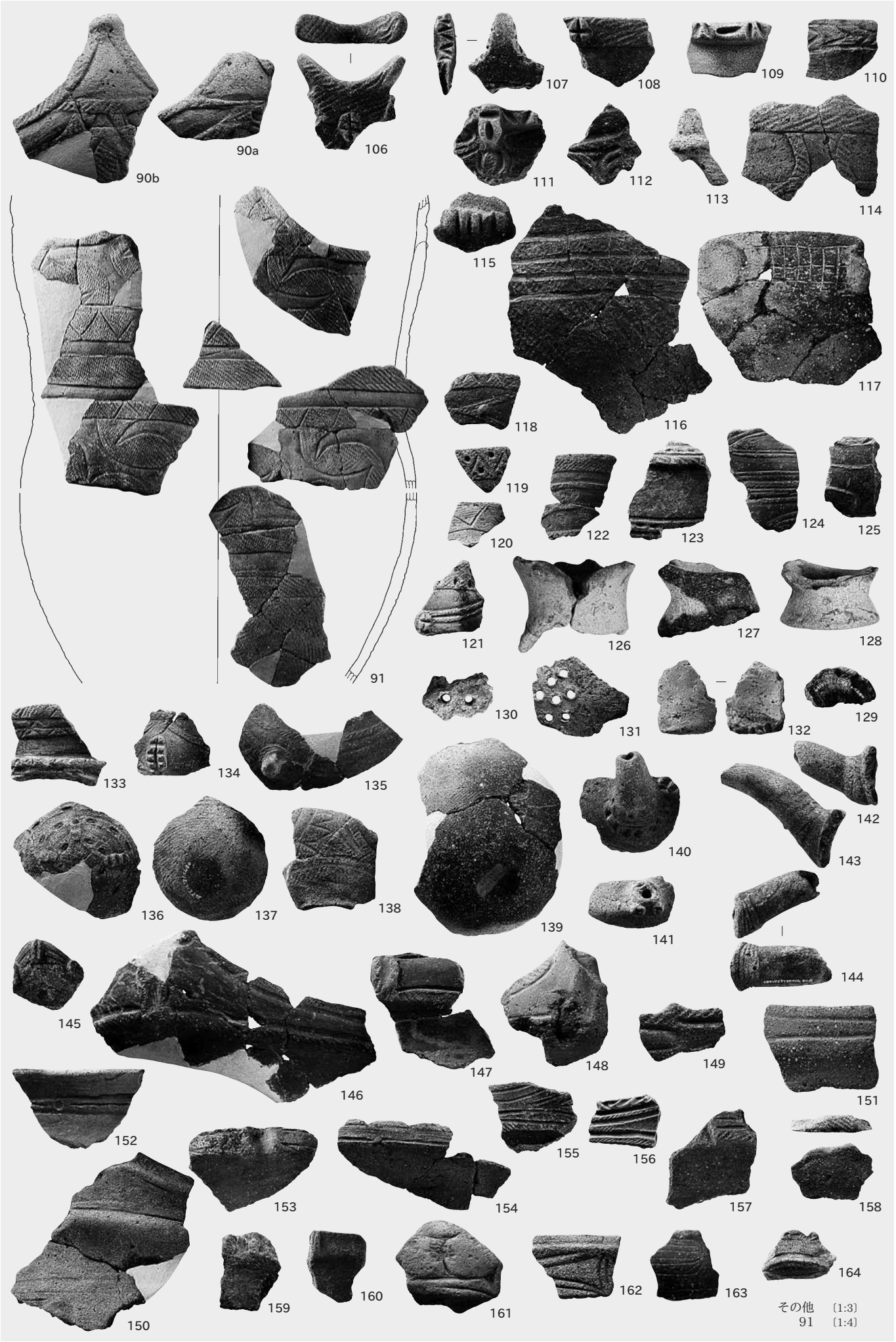
79

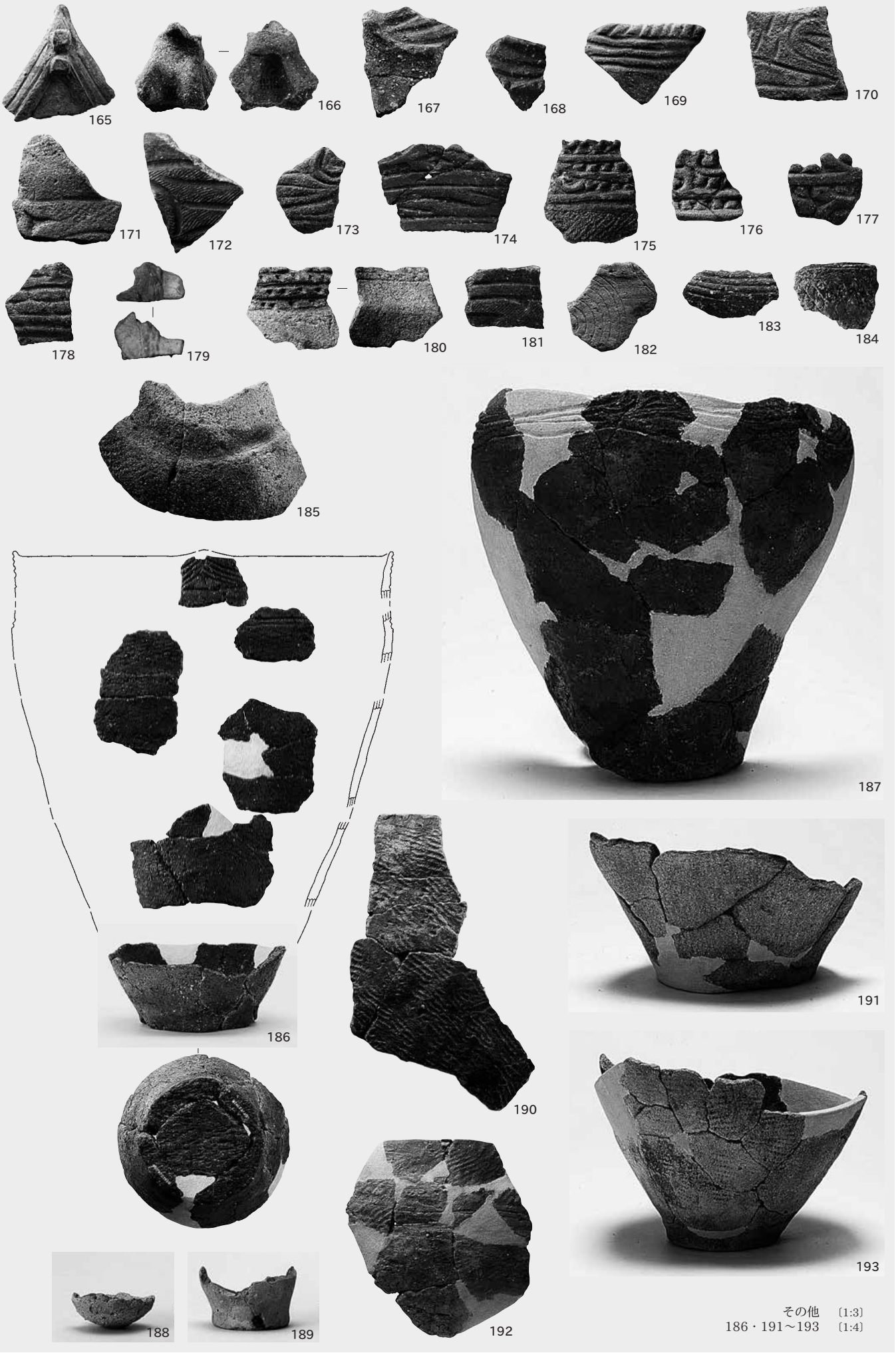

96 97 98

99 100 101 102

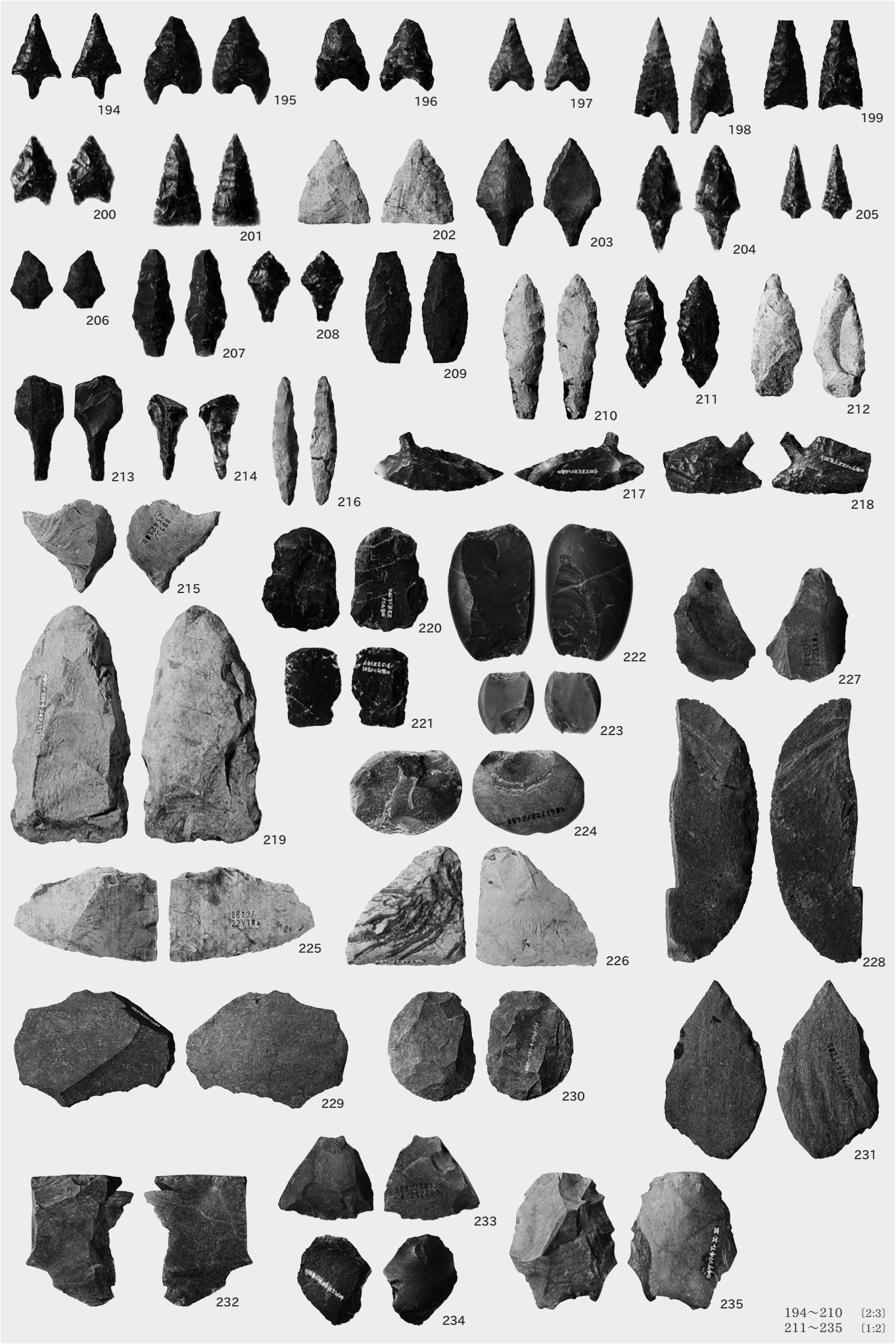
103 104 105

その他　〔1:3〕
84　〔1:4〕

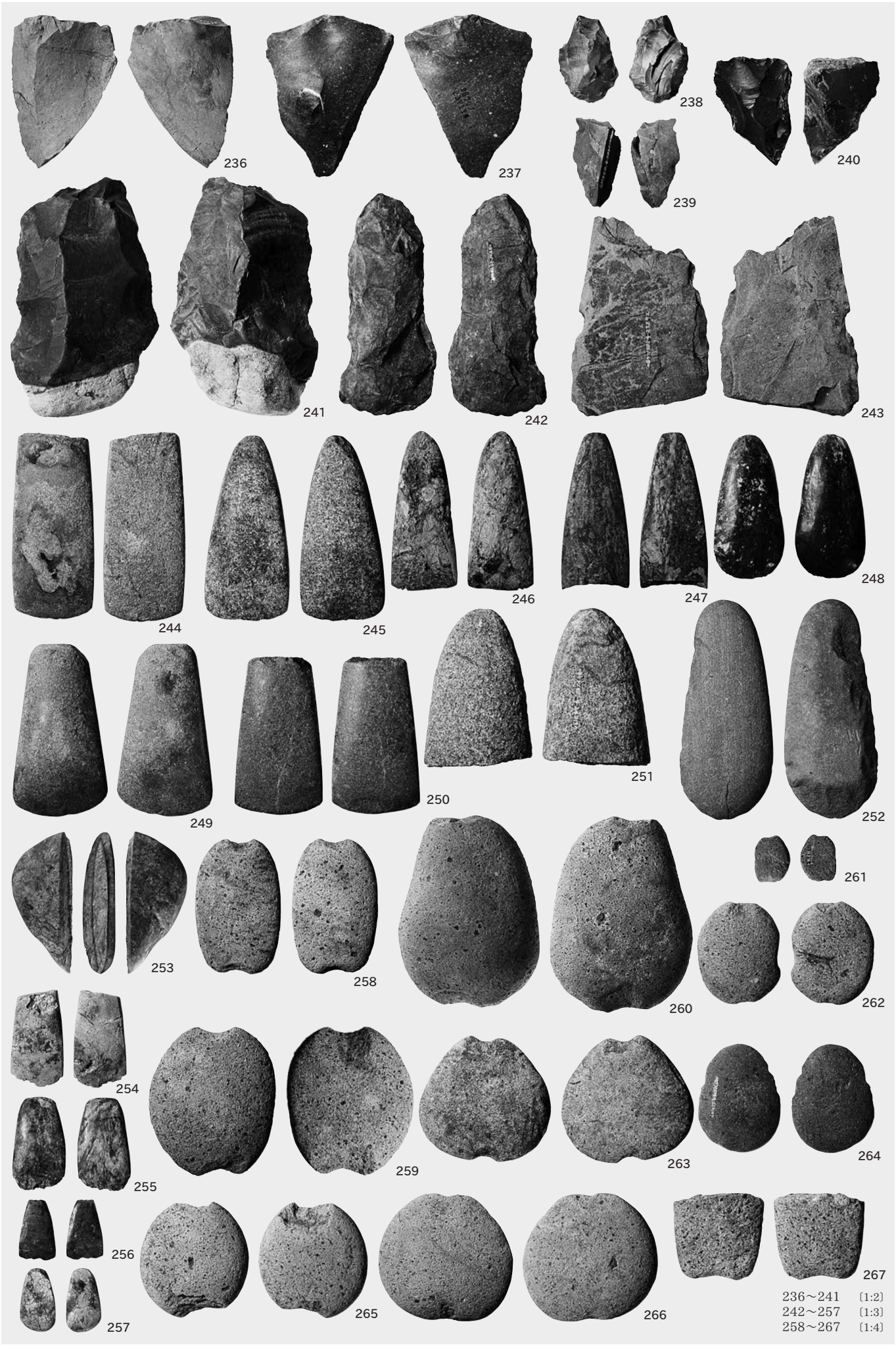

90b
90a
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
91
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
その他 〔1:3〕
91 〔1:4〕



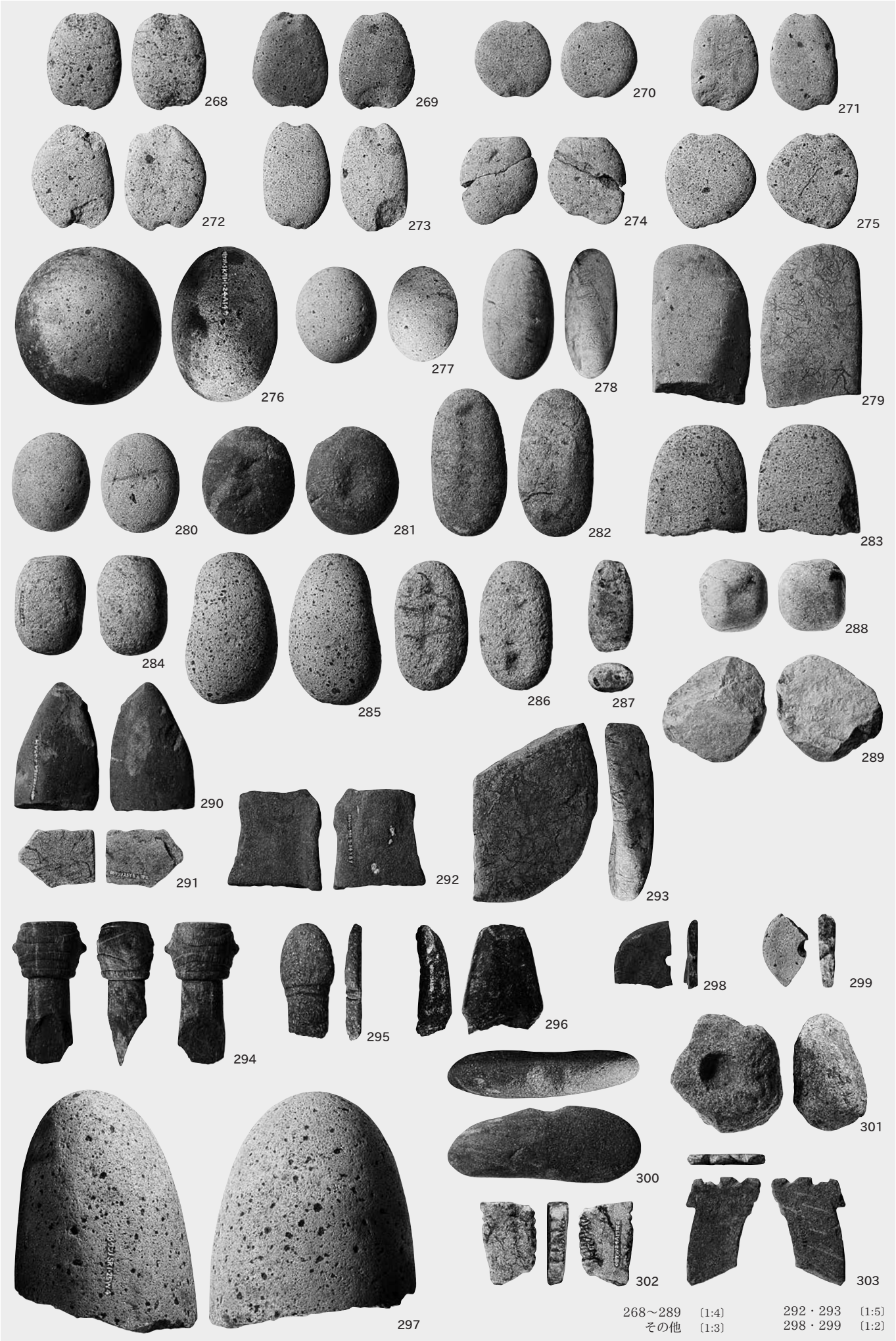
その他　〔1:3〕
186・191～193　〔1:4〕



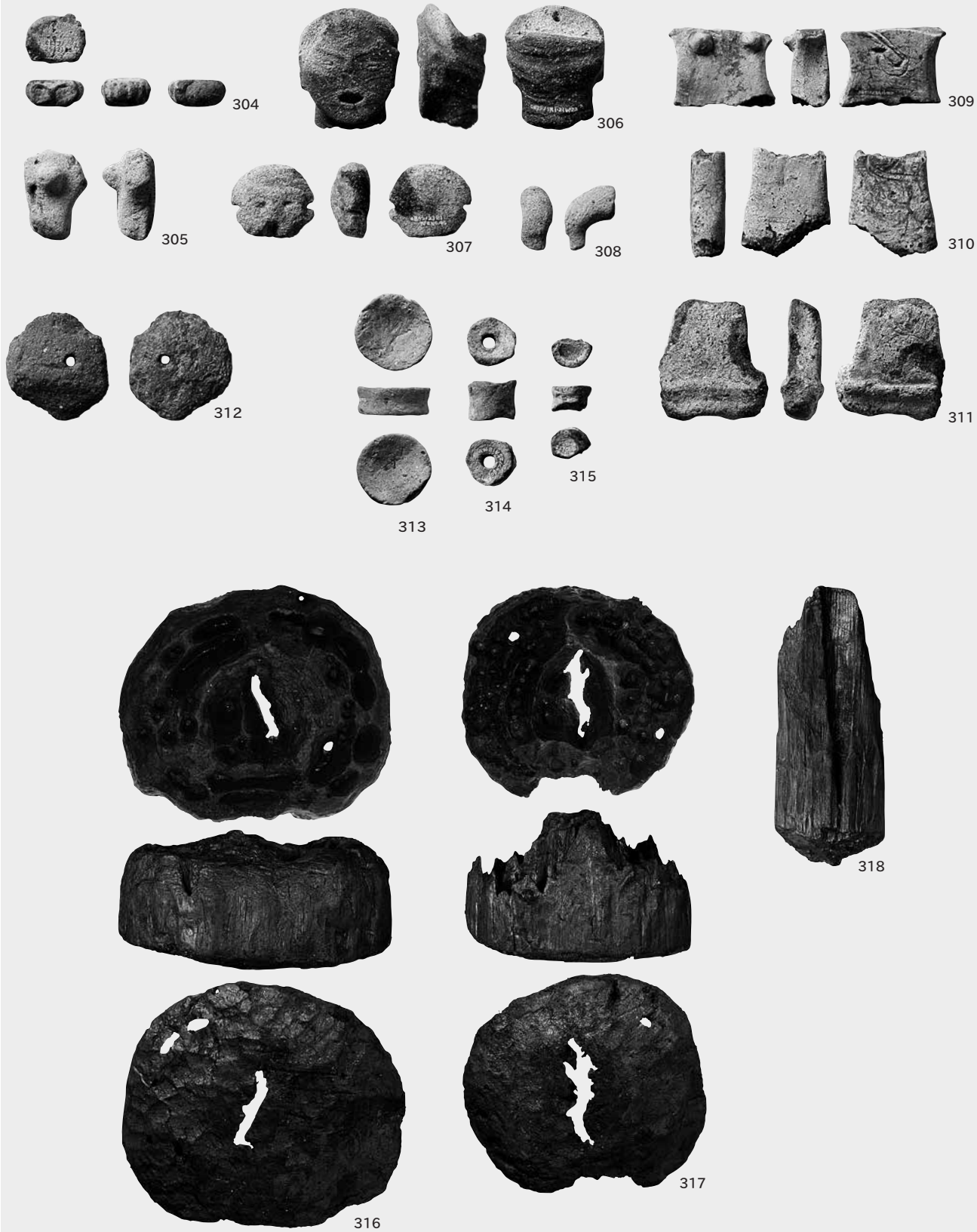
194～210　〔2:3〕
211～235　〔1:2〕



236～241　〔1:2〕
242～257　〔1:3〕
258～267　〔1:4〕



268～289　〔1:4〕　292・293　〔1:5〕
その他　〔1:3〕　298・299　〔1:2〕



304～315　〔1:3〕
318　〔1:6〕
316・317　〔1:10〕

報告書抄録

ふりがな	けんのさわいせき
書名	剣野沢遺跡
副書名	一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅶ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 246 集
編著者名	石川智紀（新潟県埋蔵文化財調査事業団）、實川順一・長澤展生（以上、株式会社イビソク）、 鹿又喜隆（株式会社加速器分析研究所）、斉藤崇人・高橋　敦・馬場健司（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒 956－0845　新潟県新潟市秋葉区金津 93 番地１　　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2014（平成 26）年３月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
剣野沢遺跡（けんのさわいせき）	新潟県柏崎市剣野字鎌田（にいがたけんかしわざきしけんのあざかまた）998-1 ほか	15205	358	37° 20′ 50″	138° 32′ 52″	20080711 ～ 20090121	6,060	一般国道８号 柏崎バイパス 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
剣野沢遺跡	集落跡	縄文 （中期～晩期）	掘立柱建物・土坑・埋設土器・溝	縄文土器・土偶・耳飾り・石器（打製石斧・磨製石斧・石鏃・磨石類・石皿）	
	集落跡	中世 （11～16世紀）	掘立柱建物・井戸・土坑・溝	青磁、白磁、天目茶碗、青花、瀬戸美濃焼、珠洲焼、土師質土器、石製品（砥石）、木製品（椀・曲物・祭祀具・塔婆・木簡・将棋駒等）、金属製品（銭貨・刀子）	
	遺物包含地	古代		須恵器・土師器・緑釉・灰釉	

要約

剣野沢遺跡は、鵜川下流域の右岸、米山丘陵と剣野丘陵に挟まれた南北に開析された沖積地谷筋に立地する。東側剣野丘陵上には縄文時代中期から晩期に至る大集落剣野Ｂ遺跡があり、西側には中世の香積寺沢遺跡がある。遺跡では縄文時代中期から晩期の遺構、遺物を確認した。上段の剣野沢遺跡と一体として捉えられる遺跡で、彼らの活動範囲にある。３棟の掘立柱建物を検出したが、磨製石斧や磨石類が卓越することから、木材の獲得、加工及び谷水を利用した生産活動の場であったと考えられる。中世では掘立柱建物、井戸の存在から集落であったと考えられる。遺物の中には古代には緑釉、中世には威信財と考えられる青磁の盤や青白磁の合子が存在し、木製品では祭祀具や葬送に関連すると考えられる塔婆、木簡等がある。西側の谷が香積寺沢と呼ばれ、近世には存在したとされる香積寺とは直接関連しないにせよ、一般集落とは異なる性格を有していた遺跡であった可能性もある。

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第 246 集

一般国道８号柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅶ

剣野沢遺跡

2014（平成26）年３月 27 日印刷
2014（平成26）年３月 28 日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒 950－8570　新潟市中央区新光町４番地１
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒 956－0845　新潟市秋葉区金津 93 番地１
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　株式会社ハイングラフ
〒 950－2022　新潟市西区小針１丁目 11 番８号
電話　025（233）0321